
BlueRose

田中キコ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BlueRose

【Nコード】

N5295Z

【作者名】

田中キコ

【あらすじ】

夏にだけCDをリリースするバンド、B・R。CD以外のメディアには一切姿を現さず、正体は何者なのかと世間を騒がせている。その正体は…。

サイトからの転載です。 筆：19991229 - 2000123

1話

東京都A区

「ねえ。そろそろじゃない？」

昼休みの読書中。唐突に、前の席に座る女子生徒の声が耳に入ってきた。

集中して読んでいたはずの文字を見失い、叶^{かのう}みゆきは溜め息をついて本から目を離す。昼休み終了まで、あと5分。再び本の内容にのめり込むのは無理だろうと見切りをつける。ひとつ息を吐いて、湿った風しか入ってこない窓の外へと視線を移した。

「あ。そーじゃん！ あと一週間で夏休みだもん。今年も絶対、くるよネ」

「あの歌聴くとさー、夏が来たなあ、ってカンジしない？」

「するするー。既に風物詩だよー」

教室に響く無邪気な笑い声。彼女たちの会話は、周囲の大人達が言う程、決して画一的ではないけれど、それらのどの会話とも、みゆきは馴染めないでいた。会話について行けないことに落ち込むほど子供ではないし、笑顔を絶やさず聞いていられるほど大人でもない。加えて生まれながらの極度の人見知りと内向的性格と口下手と不器用さが拍車をかけて、クラスの誰とも馴染めない高校生活を送っている。

「ね、叶さんも好き？ 『B・R・（ビール）』」

「……え、な…何？ ……それ」

振り返ったかと思うと突然話し掛けられ驚いてしまって、それだけしか返せなかった。

「やだー。毎年、この時期に現れるバンドよー。知らないの？」

「メンバー全員、素性不明っていうのもそそるよね」

「ごめんなさい。…私、そういうのよく知らなくて」

「叶さんはあんまりテレビとか見ないか」

「え…ええ」

「あ、でも、見かけたら聴いてみなね。絶対、イイからね」

それだけ言うと、彼女たちは背中を見せて、また違う話題へと会話を進めた。

なに、叶さんに話かけてるのよー。小さな笑い声が、背中の向こう側から聞こえる。

ほんの少しの屈辱に耐えることも、もちろん身につけているけれど。

「でも、ほんとに、楽しみだねー。もう3度目の夏かー」

その言葉につられて、みゆきは窓の外、空を仰いだ。

スモッグで擦れても青い青い空と、白い入道雲。風はあいかわらず湿っばいだけで涼しくはないし、日差しも痛いほど眩しいけれど。

嫌いじゃない。

(……夏、かー)

群馬県B郡

「いい天気だね　　っ」

山の木々が青々と茂っているのがよく見える。その葉までも識別できそうな程に。

ジーンズを膝までめくり、形のよい足を水田に突っ込んで、片桐かた実也子ぎりみよこは両手を空へ掲げた。

水田には田植えを済ませた苗が整然と並び、ささやかな風に揺れている。遙か遠くまで続くその景色に、実也子は満足そうに微笑んだ。

「みんなー、元気に育てよぉー」

秋には黄金の稲穂になる。それを想像すると実也子は胸がドキドキして、じつとしてはいらなくなる。意味不明な叫び声をあげてみたりする。

それが聞こえたのか、水田の向こう側にいる父親が、

「うつせーぞ実也子っ。んなことしてる暇あったら、大学行けっ！」

「夏休みだもん、今」

実也子の家は専業農家である。

四方を山に囲まれた土地。主な農産物は米で、春から秋にかけては年内で一番忙しい。夏へ入るこの時期は、これからが天気との戦いになるのでその準備に追われていた。

実也子は農業が好きだ。過疎地のために、少し離れた町の大学へ通っているが、実のところ学校へ行くより家の手伝いをしていることのほうが多い。農産物の季節を通しての変化を見るのは楽しいし、成長を見るのは嬉しくもある。両親も、稼業を誇に思ってくれているのだからと、例えば大学をサボっていても強くは言えないようだ。

「おい実也子、そーいやいつも。そろそろじゃねーのか？ 東京の友達ん家、遊びに行くのって」

「あ！ うん！ 多分ねー」

一際明るい、汗が浮かぶ笑顔で実也子は言った。

その時、母屋のほうから母親がつっかけを履いてかけてくるのが見えた。

「実也子ー。電話よー」

にやり、と実也子は笑ったようだった。

「父さん、噂をすれば、だよ。近いうち一週間ほど、留守にするから」

「おー、どこへでも行ってこい」

ばしゃばしゃと泥水をはねながら水田から足をあげる。白いＴシャツが汚れるのも気にしない娘を見て、父親は苦笑混じりの溜め息をついた。

「ほら、急いで。待たせてるんだから」

「ありがとつ、母さん」

「家にかかる前は、足を洗ってねっ」

「わかってるー」

母屋までのアスファルトに、泥だらけの素足が足跡を残していた。

神奈川県Ｃ市

閑静な住宅街にたどたどしいピアノの音が響く。

速度は速くなったり遅くなったり。たまにつつかえたところで音はとまり、初めから鳴り始めたりした。

山田ピアノ教室。そう看板が出ている家から聞こえてくる。

「せんせー、これ、むずかしいよー」

「大丈夫、大丈夫。ここの左手のところ、もう一回やってみて。…

…おや、もう時間ですね。では、今日はここまで」

「ありがとうございましたー」

「はい、来週もよろしく」

「ばいばーい」

「気を付けてね」

長髪でひょろりと背の高い青年は細い目をいっそう細くさせた笑顔で少女を送り出した。

玄関の閉まる音が廊下に響くのを確認すると、山田祐輔はそそくさと抽斗の中から煙草と灰皿を取り出した。それをピアノの上に置くと、一本に火をつけ、啜え煙草のままピアノに指をかける。指の運動、というだけの名目でシヨパンを乱暴に弾き始めた。でもすぐにやめた。

ふー、と煙を吐き出して、目の前のカレンダーを見る。

（梅雨が開けますねえ……）

そろそろ呼び出しがかかるかもしれない。

そんな事を考えた矢先に、電話のベルが鳴った。

「もしもし、山田です」

「祐輔？ 俺だけど」

「なんだ。慎也ですか」

「なんだとはなんだよつ。折角帰ってきたのによー」

「あ、帰ってきてるんですか。おかえりなさい」

「向こうで他の連中にも会ったぞ。おまえのこと噂してたぜー。なんでプロの世界目指さなかったんだろうって」

「言っときますけど、ピアノ教室の講師もプロはプロですよ」

「わーってるって。でもおまえも、俺らの言いたいこと、わかってるんだろ？」

「子供、って、好きなんですよ」

「ロリコン？」

「殴りますよ」

「……………」

「可能性……、があるでしょ」

そんな会話の後、慎也はどこかで会おうと言い出した。

「近いうち、一週間程出かける用事が入る予定なんです。後で僕のほうから連絡しますよ。…ええ、じゃあ」

受話器を置くと、祐輔は2本目の煙草に手をかけた。

再び電話のベルが鳴った。

今度はすぐ取らずに、二回、煙を吐いてからゆっくりと手を伸ば

した。

「はい、山田です」

愛知県D市

「はよーっス」

始業5分前。予鈴直後が小林圭のいつもの登校時間だった。眠気が覚めてないのか大きな欠伸を一つ、開けきれない両眼でどうにか自分の席までたどり着く。

「あ、来た来たあ。小林くーん、おはよー！」

「……………」

女生徒の甲高い声が耳を直撃し、激しい頭痛に絶える暇も無く、圭は勢いよく立ち上がった。

「うつるせーなっ！ 朝からかなりたてるんじゃねーっ」

容赦のない怒声を浴びせたつもりなのに、彼女らは更なる奇声をあげた。

「きやーっ、相変わらず可愛い声ー」

「…あのなあ」

実際、小林圭の声は同級生の男子と比べ、異様に高いのだ。中学3年の7月現在も声変わりは未だなく、背丈もこうして並んだ女子よりも低い。容姿も生来女顔なのでクラスの中でも可愛がられてしまっ存在だった。

「ねえねえ、夏休みの予定決まった？ 海でも行こうよ」

「受験生の台詞じゃねーよな、それ」

「何言つてんのっ？ 何の為に花の小6時代をふいにしたと思つて
るのよっ！ 苦労してこの中学に入ったのは3年後 つまり今、
公立中の皆様が人生初の受験戦争で苦しんでいる頃、見せ付けるか
のように遊ぶ為に決まってるじゃないっ」

「そのとおりっ！ 外の友達なんて、今、すごく大変なんだから。
補習と塾で遊ぶどころかテレビを見る暇もないって。…あつ、もし
かして小林くん、高校は外に出る気だなんて言わないよねっ？」

相変わらずの女子たちの勢いには言葉を失ってしまう。ポーズま
で決めて力説する姿に呆氣にとられ、突然話を振られても圭はすぐ
に答えられなかった。

「……あ、いや。エスカレーター乗ってくつもりだけど」

学校法人鈴鹿学園。中学から大学までエスカレーター式の私立学
校である。一言でエスカレーターと言つても、高等部に進学する際、
外からの入学希望者も居るので定員数の枠から外されない為にはそ
れ相当の成績をとっていなければならない。しかしやはりそれは、
世の中の受験生に比べれば段違いに楽な努力なのだが。

「ねっ？ 海行こー」

「パス」

「どーしてよお」

「夏休みは駄目。少なくとも7月は予定があるんだ」

「じゃ、8月」

「んな残暑が厳しい時期に海なんか行ったら地獄だ」

「なによー、結局駄目なんじゃない」

「…ほら、本鈴鳴つたぜ？」

多分、結局は何かにつき合わされるのだろうけど、圭は意地悪も
含めて話を逸らす。

鐘が鳴り止むと同時に、教室のドアが開き、担任教師が入ってき
た。がたがたと慌ただしく席に戻る生徒たちで教室内の喧噪が高ま
った。

「あー、じゃあ、もうカラオケっ！！ これならいいでしょうっ！

？」

最後に誰かが言った。

圭は想像してなかった発言に一瞬視線を止めたが、次に嫌みなくらい誇らしげに口の両端をもたげた。

「ばーか。俺の超ハイクオリティな歌声をそんな場所で聞かせられるかよ」

新潟県E郡

「じゃあ、これ、配達していただけるかしら」

「毎度ありがとうございます。ここに住所とお電話番号、お願いできますか？」

おさかへ
長壁酒店の店長・長壁佐知子は今年六十歳を迎える。実年齢より十は若く見られる容姿と元気の良さは町内でもちよつと有名だった。「あ、ねえ。お宅の旦那さん、ちよつと飲み過ぎじゃない？ 気を付けたほうがいいですよー」

「やつぱり？ お互い、もう齡だし、体も丈夫とは言えないから、私も気になってたんだけど」

「流石。私が言うまでもないですね。でも本当に、お酒は程々が一番おいしいですよ。旦那さんにも言っておいて」

豪傑な笑顔を見せて、佐知子はぴつと切った伝票を客に渡した。

「本日、夕方にお届けいたします。ありがとうございますー」

深々と頭を下げる佐知子に佐川婦人も軽く会釈を返す。そして店を出ようとした、矢先。

出ようとした自動ドアの向こう側からぬつと現れた背の高い人物に驚き、佐川婦人は小さい悲鳴をあげた。

「あ、すみません」

危うくぶつかりそうに鳴り、背の高い男は咄嗟に謝った。

「知己ともみっ！ 何、お客さん驚かせてるんだいっ！」

佐知子の怒鳴り声にも、佐川婦人は驚いた。

「お袋、2丁目配達終わった」

「おう、お疲れさん」

「え…、息子さん、なの？」

二人の会話に気圧されつつも、佐川婦人は呟いた。

「ええ、そうなんですよ。三十四にもなって、ふらふらしてるバカ息子。配達やらせてるんで、あまり店には居ないんですけど。よろしくお願いしますね」

「稼業の修行中なんです」

「うるさいね。この私がお前ごときに店を譲るつもりだとも思ってるのかい？ それよりとっとと嫁さん見つけてきな、この甲斐性無しっ」

店長の喧嘩腰の言葉に佐川婦人は本当に驚いて、適当になだめると、足早に店から出ていった。

「ありがとうございましたーっ」

二人の重なった声が外まで響いていた。

「次、配達どこ？」

「ああ、それより。さっき、お隣のケン坊がお前を呼んでたよ。…

…ほら、来た」

再び自動ドアが開き、小さな男の子が半泣きで入ってきた。

「知己兄ちゃん」

「どうした？ 何かあったか？」

知己はその場に座り込んで、男の子の頭を撫でた。

「おうちのゲーム機が壊れちゃったよー」

それだけ言うとは言葉にならず、男の子は大声で泣き始めた。

「おい、泣くなよ。男だろー。俺が直してやるからさ」

「…え。ほんとに？」

「ああ」

「すぐ？　ねえ、すぐ？」

「道具持って、すぐ行くから。自分ん家で待ってる。わかったか？」
「うん！」

「それと、最近暑いから、外へ出るときは帽子かぶんなきゃだめだ。
お母さんも言ってたろ？」

「わかった！」

男の子は目を腫らしたまま笑って、回れ右をして走り出した。早く来てねー、という言葉が残った。

知己が立ち上がると一部始終を見ていた佐知子は、
「配達はいいいから、とつと行行ってやんな」

と言った。

「わかってる」

工具を取りに二階へと向かう知己に、佐知子はもう一つ言葉を投げた。

「そういえば、さっきお前に電話があったよ。東京のなにがし…って言ってたけど」

「……お袋ー」

「なんだい」

「近いうち一週間程出てくるけど」

「はいはい。毎年何やってんだか知らないけど、お気をつけて」

東京都F区

「あれー。浩太、珍しいじゃん。こんな日に学校来るなんて」

意外な人物を教室に見付け、大場は驚嘆の声をあげた。

「どーゆう意味だ」

3年7組の教室の中、中野浩太は刺々しい声を大場へ返した。なかのこつた

都立三上高校では今日、終業式が行われる。別の言い方をすると一学期最後の日で、更に今の大場の心境的に言うところと授業の無い、多くの意味であまり内容のない日なのだ。

「だって浩太、学校の行事ってほとんどサボってるじゃん。イベントや始業式・終業式はおるか入学卒業式も。お前、態度でかくて悪くて、団結力皆無の優等生だからなー」

ギリギリ二枚目と表現していい顔だが、ぶつちよう面。生活態度は最悪。しかし成績は常に上位。中野浩太はそんな生徒だった。

「……たたみかけるように言うな」

大場の言に心当たりがあるところか、そのまま全て事実なので否定する余地もなかった。

では何故今日、学校に来ているのか。

4日前、電話がかかってきた。

7月××日。午前十時。東京駅丸の内口集合。

（かつたりー。今日は顔合わせだけだろうし……。かまやしねーだろ）
そんな風に自分を納得させても、電話の指示通り集合したくないのは、普段は休む日に学校へ来ることの理由にはならない。家で寝ているという選択肢ももちろんあるのだ。が、浩太のなかでそれを深く考える習慣はなかった。

浩太は机に頭を伏せた。寝不足が祟っているようだ。

「B・R・が騒がれ始めてるぜ」

「……はあ？」

大場の発した話題に気合の無い声を返す。

「例のバンドだよ。夏恒例の。オレはそろそろ自然消滅してるんじ

やないかとか思っただけどねえ」

「…へえ」

「年一しか現れないのに、3年も人氣が保てば立派なほうだよ。そろそろ廃れるんじゃないかな」

「今年もB・Rが出てくるか賭ける？」

「んじゃ。出てこないほうに五百円」

大場は慎重な賭け方をする。一方、浩太は顔を上げたかと思うと、真顔で、

「出てくるほうに五千円」

と、言った。

「えっ。あ…おいっ！」

大場が大声を出したのは、浩太の賭け金に驚いたわけではなく、浩太が突然立ち上がり帰り支度を始めたからだ。

「わりの、俺帰る」

「来たばっかじゃん」

「気が変わった。それより大場、さっきの賭け、忘れんなよ」

じゃーな、と言って浩太は朝の教室を飛び出した。

（東京駅に十時…、間に合うか）

別に、今日自分が行かなくても大場の賭けに負けるわけではないのだ。どうせ明日には合流するつもりだったし。

そう、ただ。体育館でマイクを通しての教師陣のつまらない話を聞いているよりは、あいつらの音を聞いていたほうがマシだと思ったのだ。

東京駅

朝の通勤ラッシュも一段落。無機的な駅の通路には疎らに人が歩いて行く。疎らと言ってもそれは、片桐実也子が地元で経験するより数倍の人口密度ではある。

そして、皆、歩く速度はかなり速い。それは実也子自身、例外ではなかった。ほとんど走っていると言っている。息をあげて、シヨルダーバッグ一つで通路を駆ける。

早く会いたいのだ。彼らと。

「はあ……はあ……。あれー、皆まだかー」

目的の改札をくぐって辺りを見渡すが、それらしき人物は居ない。少なからず拍子抜けして、実也子は改札前の空間で邪魔にならないよう壁際に寄った。

駅構内の時計で時間は九時四十分。

（ちよつと早すぎたかなー）

あと十分も待てば誰か来るのは分かっているが、それでもそわそわ落ち着かない。他の皆も、こんな気持ちじゃないのかな。そんな風に思ってみるが、例え同じように思っている、それを素直に表現する奴等ではないことは知ってる。何故か損した気分になりつつも、思わず口元が緩んでしまうのはどうしようもなかった。

三十秒に一回、右手の腕時計に目を落としただろうか。五回目のそれで、

「実也子」

頭上から名前を呼ばれた。

「長さんっ！」

勢いよく顔を上げると、そこには長壁知己の顔があることは声だけでわかっていた。背が高く日除け用のレイバンをかけた顔が目の前にあった。背中には決して少なくない一週間ぶんの荷物があり、それを軽々と抱えている。

「やー、久しぶりっ」

パン、とお互いの手が鳴った。

「早かったな。てつきり同じ新幹線に乗ってると思ってたけど」

「楽器があるんで、知り合いの運送屋さんに車で乗せてきてもらったの。荷物はホテルに預けて、そこから電車で来た」

「そか。ま、とりあえず今年もよろしく」

「よろしく」

「他の奴らは？」

「まだだよー。早く会いたいのにさ」

「そうむくれるなって。すぐ来るだろ。特に西側連中はそろそろじゃないのか？」

「早く来ーい」

恨みがましい声を出す実也子の横顔を見て、知己は苦笑した。

長壁知己は現在三十四歳。片桐実也子は二十一歳である。これからやって来るであろう他の面々も、住んでいる場所や年齢は皆ばらばらで、こうして付き合っていることが不思議に思えてくる。

「あ、見てみて、電車の中で読んでただんだけど、この週刊誌。特集で『B・R・』やってるの」

実也子は傍らにあった雑誌を差し出す。

「何だ。実也子『B・R・』好きなのか？」

煙草に火をつけながら、知己はそっけなく言った。

『B・R・』とは3年前の夏に突然現れたメジャーバンドの名前である。デビュー曲はその年の終わりまでヒットチャートに名を列ねていた。その後なかなか次の曲を出してこないで、俗に言う一発屋とも言われていたが、その次の年の夏。思い出させるかのようにセカンド・シングルを発表。これも前作を超えるヒット曲となった。いつしか、夏にしか曲を出さない、という噂が広まり、3度目の夏の今、話題が高まっているのだ。

特筆すべき点は『B・R・』はどのメディアにも顔を出していないということである。テレビ・ラジオ・雑誌・ライブ……。その他を含む全て、『B・R・』は姿を現さない。それどころか、メンバー

も公表しておらず、その謎めいたところが人気に拍車をかけていた。ただ一つだけ、作詞作曲者はクレジットによると「K a n o n」ということになっている。ボーカルの声は男声とも女声とも言えず、ただその歌唱力は芸能関係者も絶賛していた。レコード会社は事務所の名前を黙秘しており、噂では個人による持ち込みでインディーズ上がりかもしれないという意見もあるが定かではない。

『B・R・』好きなのか？ という知己の疑問に、実也子は笑って答えた。

「そう。特にドラムの人なんて好きだなー」

「言ってる。…記事、なんだって？」

「えーとね……、あ。『今年こそ公開！ B・R・の素顔！』だって。あとはー…『B・R・、評論家に聞く』とか…」

「B・R・の素顔…ねえ」

「見せる程のものじゃないのにね」

ぶはつ、と今度は声をあげて知己は笑った。落ちそうになった煙草を慌てて支える。それでもすぐには収まらず、しばらく肩を震わせていた。

ふと、改札のほうへ目を移したとき、知己は言った。

「その意見、少なくともあの自信家の坊やは反対するだろうな」

「え…？ ……あつ！」

実也子は知己の視線を辿ると、改札を出たばかりの見知った人影を見止めた。

「圭ちゃん！ 祐輔！」

場所も憚らず大声で叫ぶ。

名を呼ばれた二人もこちらに気付いたらしく軽く手を振った。

「おおー、ミヤ。ひっさしぶりい」

まだ「少年」と呼ぶしかない容姿と体型の小林圭、十五歳。

「お久しぶりです。実也子さん、長さん」

長髪で細目、背の高いほうが二十四歳の山田祐輔だ。

「二人とも、同じ新幹線で来たのか？」

「そう。僕が途中で便乗したかたちですね」

知己の問いに祐輔が穏やかに答えた。そして含み笑いをもたせて続ける。

「今年もよろしく、と、特に長さんには言っておきますよ」

「どーという意味だよ」

「いつものことじゃないですか。このメンバーをまとめるのは、かのんさんじゃ少々荷が重いでしょうし、適任は長さんしかいないでしょ？」

くすくすと笑う祐輔に、知己はささやかな反撃を言葉にしようとした。

「他人ごとじゃ……」

「あーっ！ 圭ちゃんたら、背え伸びてるっ」

実也子の決して小さくない声が響く。

「当たり前だつ。……けど、これだけ伸びてもクラスで一番低いんだよっ」

「来年は私より高くなってるんじゃないの？ もー、これだから年頃の男の子は」

年長組の会話を無視して二人は騒ぎ立てていた。知己は何か言いかけが、知己が声を発するより先に、同等の意味を持つ言葉が背後から投げかけられた。

「公共の場で騒いでんじゃないよ。他人のふりしたくなるだろうが」

苦々しい声と共に最後に現れたのは中野浩太だ。背中には一本のエレキ・ギター。

「浩太。おひさしぶりです」

「ああ」

「中野っ、遅いじゃないっ」

「何言っただ。時間ちようどだろ。ほら、10時ジャスト」

「相変わらずだねー。浩太のその性格も」

「圭……おまえ年上に対する態度がまーだわかんねえようだな」

「あた、いたた」

圭の頭を抱え、腕に少し力を加えると圭はあっさりと投降した。
二人を宥めるつもりではなかったが、知己は間に割って入る。
「おい、全員揃ったことだし、早く行こーぜ。かのんが待ちくたび
れてるぞ」

それから三十分後。都内某所。
noa音楽企画本社前。
彼らは再会することになる。

「B・R・プロジェクト」の要、発案者にして責任者、「Kan
on」に。

「あ。おい、かのんちゃん！」

実也子の声に、エントランスに背をもたせていた人物が振り返っ
た。

「…皆、お久しぶりです」

少しぎこちない笑顔で、叶みゆきは彼ら5人を迎えた。

また、夏が始まろうとしている。

1
話
E
N
D

2話

7月××（-5）日。

都内某所。

noa音楽企画本社3階、第34会議室。

『極秘会議中』。

広さは十二畳程。その中央には円を描く机と椅子、ホワイトボードがある。色調は淡いグレーで統一されており、机・椅子は黒。モダンではあるが、ある種の硬質感が残るのは設計者の狙いであるとか。会議室として決して広いとは言えない。それでも今その狭さを感じさせないのは、いや、逆に室内を広く感じさせるのは、行われている会議の出席者が二人しかいないからだろう。円を描く机の端に、二人は並んで座り、机の上に書類を広げていた。

noa音楽企画社長、あのかねえ安納鼎。

そしてもう一人は叶みゆき。

安納鼎は現在四十七歳。ダークブラウンの背広をぴっちりと着こなして風格を漂わせている。十年程前に立ち上げた芸能プロダクションはそこそこに業績を伸ばし、今は大手の一つとして、業界に幅を利かせていた。タレントの育成、イベント企画、音楽CD企画等、どの分野でも斬新なアイデアをもってプロジェクトを成功させている。優秀なスタッフを揃え、そしてかなりシビアなやり手であることでも有名だった。

一線を退き、既に半隠居に入っている彼だが、年に一度、彼自身が直接手掛けるプロジェクトがあった。

「B・R・プロジェクト」。そう呼ばれている。しかしそう呼ばれてはいても、プロジェクト自体を知る者は殆どいない。事務所のスタッフさえも知らない。その特異さ故にプロジェクトは極少数の

関係者にしか知らされておらず、さらにこのプロジェクトは社長自ら手を付け、かなりワンマンで行われていることも事実だった。

だから現在この会議に参加しているのは二人。それが定員で、全員なのである。

「……叶」

不機嫌さを声色に含めて、安納は呟いた。

「あ、はいっ。あの、え…っと、ではもう一度、説明致します」

叶みゆき。あまり手を入れてないような無造作なロングヘアに眼鏡面、これでも現役女子高生で十七歳。その、あまり要領の得ない喋り方は、少なからず安納の癪に障ったが、特にそれを注意するようなことはなかった。それはある意味諦めに近い。注意して治るものなら三年前に治っているだろう。

「B・Rのサードシングルの曲目は、…あ、この三曲です。オン・エアは八月十日頃。CDリリース予定日は八月二十五日です。例年通りカラオケは入れません。…えっと、スタジオのほうの都合がよろしければ、来週からにも撮り始めたいと思います」

「……そうだな。スタジオと、レコード会社のほうへは私が手を回しておく。CDジャケットのことも、そろそろ決定しなければならないだろう。オン・エアが十日だとすると…、宣伝や広告のほうも迅速に行動しなければなるまい」

「………」

「まあいい。雑務はこちらに任せて、叶は早速メンバー招集にかかってくれ。以上だ」

「わ…わかりました」

勢いに押されたかたちで、みゆきは頷いた。安納はそのまま何も言わずに立ち上がり、何の挨拶もせず、部屋から出ていった。

みゆきはぶつと緊張の糸が途切れ、書類が散乱している机に伏し、大きな大きな溜め息をついた。

7月××日。

「相変わらず社長ってば、かつこいいおじ様だよね。穏やかで、優しいそうだし」

「ばつかじゃねーの。業界でトップクラスの事務所の社長だぜ？」

単に穏やかで優しいわけないだろ。営業用だよ」

「なによー。わかんないわよー？」

事務所で社長との顔合わせが済むと、一行は揃って移動を始める。その途中の車の中で、片桐実也子には中野浩太の言葉に頬をふくらませていた。8人乗りの中型のバンは事務所のもので、長壁知己が運転している。これから郊外にある馴染みのスタジオに向かうのだ。

メンバーやスタッフ、所属事務所さえ公表されていないメジャーバンド『B・R・(ビーアール)』。夏にしか出さない曲の数々だけは、チャートやCD売り上げランキングに名を列ねている。世間の噂では色々とい憶測が飛び交っているようだが、その実、年に一度招集されるだけの、地方の一般人であることは極秘事項だった。

「俺は反って、あの社長は俺達個人には何の興味も持っていないように思えるね」

「なに、浩太。『B・R・』ってゆー商品として以上の興味を持たれたいわけ？」

辛口で乾いた意見をさらりと口にしたのは、最年少の小林圭だ。

「論旨が違っただろ」

「中学生にしてはスレた意見ですねえ」

山田祐輔は圭の言葉に苦笑をもらす。

「フツーだよ、これくらい。祐輔は？」

「僕…ですか？ そうですね、僕自身、あの社長に興味は無いので、深く考えたことはないです」

涼しい顔で切り捨てられて、圭、浩太、実也子は顔をひきつらせた。

「えーと、……あー、かのんちゃんはどう思う？」

「えっ？」

助手席で知己のナビをしていたみゆきは、突然話を振られて驚いたようだった。運転席と助手席の間から顔をのぞかせる。

「はい、何ですか？」

「安納社長ってどんな人？ かのんちゃんなら詳しいんじゃない？」

「…そ、そんなことはありません。他の仕事のことは全然知らないし…」

もう少し何か続きそうだったが、うまくまとまらないのかそれ以上は言葉にならなかった。大袈裟な程に否定するみゆきの姿は逆に怪しくも見える。しかし器用にごまかせる性格でないことは周知であるので疑う者はいない。

みゆきの隣の運転席から声がかかった。

「おい。それより実也子、楽器、ホテルに置いてあるんだろ？ 寄るから持ってこい」

「あ、はい」

ボーカル、小林圭、十五歳。

ギター、中野浩太、十八歳。

ベース、片桐実也子、二十一歳。

キーボード、山田祐輔、二十四歳。

ドラム、長壁知己、三十四歳。

そして『B・R・』のプロジェクト発案者であり、責任者であり、作詞作曲とディレクターを担当する叶みゆき、十七歳。

彼ら6人が『B・R・』のメンバーである。

特記すべきことは、ボーカルの圭は変声期前のボーイ・ソプラノで、世間からは性別も判別できず、正体不明という点に一役かっている。ベースパート担当の実也子は、一般に使用されるエレキ・ベース・ギターではなく、オーケストラでも使われるコントラバス（弦バスともいう）を用いている。これは実也子の背丈以上に大きく持ち歩きが困難な為、ホテルに預けていたのだ。

「…なあ、かのん。俺らが泊まるのもそのホテルなんだろう？」

窓から目を放し、浩太はみゆきに声をかけた。

「ええ。…社長の言い付けで、例年通り一週間程３部屋を予約しました」

「何か…、むちゃくちゃ不毛だと思わん？ 毎年、ホテルで寝れるのって初日だけじゃん。あとは連日スタジオでカンヅメ。わかってんなら予約なんて無駄だと思うけどな、俺は」

「え、…はあ」

「中野！ かのんちゃん困らせるのやめなよー。それに本当はカンヅメなんかしないほうがいいんだから。ホテルで休んだほうが疲れもとれるし。そういうところ、氣い利かしてくれてるのよ」

車の後部席前方に座っている実也子が振り返り、あからさまな睨みを浩太に向けた。対する浩太にはそれについて激しい異論がある。

「……てめえが率先してカンヅメ楽しんでるんだろぅが」

「ぎく」

「いい齡してお泊りごっこではしゃいでんじゃねーよ。それに、カンヅメにまで追い込まれるのは誰かさんのNGが多いからじゃないのか？」

「誰かさんって、誰のことよっ」

「自覚がある奴。無いなら救いようがないな」

「中野っ！ あんた圭ちゃんに年上に対する態度云々言うくらいなら、私に対する態度も改善しなさいよっ。私のほうが年上なんだからねっ」

「そー言うなら、おまえだって祐輔のこと呼び付けじゃねーかつ」

「お互いさまでしょっ！」

二人の刺のある会話をどう宥めようとオロオロしているみゆきに、すぐ隣から声がかかった。

「あの二人は大丈夫。喧嘩を楽しめる奴等だから。…浩太のは悪気はないんだ。気にすんなよ」

「……はあ」

笑いながらの知己のフォローに、みゆきははつきりしない言葉しか返せなかった。

(……………)

知己はそう言うけれど、浩太の言葉の一つ一つはみゆきの胸を刺す。

ちよつと苦手。

気の良い仲間の中でも、みゆきにとって中野浩太はそんな存在だった。

7月××(±0)日。

毎年レコーディングを行うスタジオはこじんまりとした一軒家で、これはnoa音楽企画の所有物だった。

全板張り・防音の「スタジオ」は、音響器材やコンソールのあるPA室と、ガラスで隔てられた、スピーカーとマイクが並ぶ録音室から成る。建物の中には他に給湯室と座敷が2部屋。先ほど浩太が言ったように合宿中カンヅメになると、座敷は仮眠室と呼ばれるよ

うになるのだ。

「じゃあ、3時から音合わせ始めますので、よろしくお願いします」

「おっけー」

「了解」

「はい」

みゆきが指示を出すと、それぞれは準備にかかる。

「あ、かのんさん。器材の電源入れておいてくれます？」

「そうそう。早くねー」

準備と言っても、バンドメンバー全員は座敷に荷物を放り出すと、競うかのように録音室に駆け込み、それぞれ音出しを始めた。

板張りの壁、床、天井は伊達ではなく、勿論、音を響かせる為のものだ。窓もなく閉塞感は拭えないが空調は整えられている。

「わーい、圭ちゃんの歌、久しぶりだよー」

実也子は自分の楽器の弓を整えながら嬉しそうな声を出した。発声練習を始めていた圭は少し照れた顔で、

「何だよ。CD持ってたんだろ？」

と、マイクに向けて言う。みゆきが器材の電源を入れておいてくれたらしく、その声はスピーカーから響いた。

「生とは全然違うもん」

「浩太、お前、いつ練習してんの？」

ギターのチューニングが始まる。知己もドラムを叩き始めると、室内は一気に音でいっぱいになった。

「んー。たまに、バンドの助っ人したり、部屋で鳴らしたりする程度だよ」

「いい加減、直んないのな。そのカッティングのときのクセ」

「個性がある、って言ってもらいたいね」

「あー、そうそう。そういうえば、この間、うちの教室に高校生の女の子が入ってきましたね」

一斉に音がやんだ。これは祐輔の口から女子高生の話題が出るなんて、という少々悪いほうの興味が全員に働いた為と思われる。

「うちの教室」というのは、祐輔が地元で開いているピアノ教室のことだ。

「好みだったとか？」

「違いますっ」

圭のとぼけた言葉に笑いが生じる。気を取り直して祐輔は話し始めた。

「小さい子ならともかく、ある程度大きくなってからそういう事を始めるのって、やっぱり理由があるんですよ。それでピアノを始める動機を尋ねたら、何て答えたと思います？　僕、すごく驚いて危うく教本を落とすところでしたよ」

「さあ」

「見当つかないよー」

くすくす笑いながら、祐輔は答えた。

“『B・R・』の曲を演奏したい”だったんです」

は？　と、誰かが口にした。

「誰に頼んだのか、耳コピの楽譜まで持参してましたよ。確か、出版社からは出てませんでしたよね」

正体不明と言っても、『B・R・』の曲はもちろん、著作権登録されている。しかし社長はがんとして版權を手放さず、CDの他は、謎解き本、特集本、そして楽譜も、法的に製作は許されていない。自分で作るしかないのだ。

「あつはつは、そりゃ、驚くわ」

「本人が目の前にいるのに」

「楽譜はこいつに頼んだほうが早かったな」

「いえいえ、本当にあの時は驚いて、もしかしてバレてるのかとか深読みしちゃったんですから」

祐輔のその場面を想像して、他の面々はやはり笑うしかない。

『B・R・』は絶対何があっても正体を明かしてはいけない。

それでもそんな一場面を、楽しめるくらいはするのだ。

みゆきはPA室のドアを開けた。

「あ……」

録音室で5人が楽しそうに喋っているのに気付き、気が引けて、声をかけることに一瞬ためらう。しかし既に、自分が入室したことに気付いたメンバー達はそれぞれの立ち位置に戻り、楽器の音を止め、みゆきの指示を待っていた。

「……」

何となく、溜め息をついてしまう。

彼女は未だ、自分の立場で、うまく立ち回ることができないのだ。仲間たちは、こんなにも協力してくれているのに。

「えー……と。音合わせ、始めてもよろしいでしょうか？」

『はい』

『よろしく願いします』

向こうの部屋とのやりとりは全てマイク越し、スピーカー越しで行われる。

みゆきは気を引き締めるように一度深呼吸をする。

ヘッドフォンをつけ、コンソールの前に座った。

「では、長壁さんのバスドラからお願いします」

指示通り知己が音を出すと、みゆきは手元のミキサーで調節を始めた。

7月××(＋1)日。

「おつかれー」

外に出ると、空はもう真っ暗だった。この季節でも時間が午後8時では無理もない。

「お疲れ様っ」

「腹減ったー。何か食ってこーよ」

「ホテルのは嫌だ。高いから」

「事務所のお金なんですけど……。ま、気持ちはわかりますよ」

百メートルも歩けば、賑やかな通りに出る。6人はそこでささやかな夜遊びの計画を立てているところだった。

「かのんちゃんは？」

実也子が声をかけると、みゆきは申し訳なさそうに苦笑した。

「あ……。すみません、私は用事があるので」

「え。ホテルの鍵、どーする？ 私、先に寝ちゃうかもしれないし」

この合宿期間の間、みゆきと実也子は同じ部屋に宿泊しているのだ。

「十一時までには帰ります。その頃に、連絡入れますね」

「うん。わかったー。今度は付き合ってよね」

「はい。すみません」

何度も振り返りながら、みゆきは駅の方角へ消えた。実也子もまた、大きく手を振ってみゆきを見送った。見えなくなるまで実也子はその場を離れなかった。

「ねえ」

後ろの4人に話かける。

「どした？」

神妙な顔で振り返り、声色を改めて言う。

「今日、3曲合わせたじゃない？ どう思った？」

「どういう意味で？」

「Kannonの曲」

「おい」

「あ……。ごめん、気をつける」

知己が割り込ませた厳しい声に、はっと目をみはり実也子は気まずそうに肩を竦めた。『B・R・』プロジェクトで、ただ一人公表されている名前、"kannon"。不用意に口にして誰に聞かれるとも限らない。

『B・R・』のCDは、レコード会社名以外のスタッフは無記名となっている。演奏楽器やプロデューサー、エディター、ジャケットデザイナーなど、役職名は書かれているが、その右側は空欄になっているのだ。こうすることで、聴衆の興味を引かせるのだと、安納社長は言っていた。その空欄に当てはまる名前を探すようになる、と。

明らかにされている名前が一つだけ。

"All songs composed and arranged by ; Kannon"

『B・R・』が実力派と言われられている理由の一つは、曲。

その作詞作曲家の名前である。

「彼女の曲。やっぱりすごいと思って」

実也子が真摯な顔でそう言うと、メンバー全員黙って目を合わせた。

今日の練習で、今回リリースさせるシングルの3曲を合わせ、おまかな打ち合わせをした。打ち込みのデモテープを聞かせられたときの感銘は3年目にしても変わらなかった。

「独特なリズムがあるよね、でもちゃんとJ・POPというジャンルに収まっている。どっちかっていうと玄人受けする音楽だと思うんだけど、これだけヒットするのはちょっと不思議」

「意外と理屈っぽい考え方するんだな」

嫌味をこめて浩太は実也子に言った。

「悪かったわね」

「やっぱり営業の力なんじゃない？」

「うちの社長は、決して売り方が巧いわけじゃない。ウチのバンドの秘密主義な点を除けば、あとはスタンダードなCMだけだからな」

「でもそれはしょうがないことですよ。巧い売り方なんて、所詮は人脈とアイディアと行動力、それとお金でしょ？ アイディアとお金はあっても、その他は秘密主義とは相容れないものですから」

安納社長には勿論人脈と行動力は備わっている。例外もあるだろうが社長とはそういう生き物だ。しかし『B・R・』の所属事務所も公表されていないのに、安納が派手に動けるはずもない。

「けど何故か、売れてるんだよね」

「いいものは受け入れられる……ってことかな」

Kanonの曲を演奏する彼らではあるが、同時にKanonのファンでもある。『B・R・』はKanonと同じプロジェクトに籍を置くアーティストであり、同時に唯一存在する”Kanon”のファンクラブでもあった。

「当ののんだけど、用事って言うてたじゃん？ さっき。男かな？」

雰囲気を一変。圭は浩太のほうを見てひやかすように言った。

「中野ってば、駅まで送ってくくらいしたほうがよかったんじゃない？ 株があがったかも」

「……どーという意味だよ」

圭と実也子の何か言いたそうな視線に、浩太は無愛想な声で、軽く二人を睨み付けた。

「えー。浩太って、かのんのこと好きなんだろー？」

「……なんでそーなるんだっ！」

浩太はとても分かりやすく真っ赤になって、圭の襟を掴んだ。

「あれ？ 違うの？」

声を出せない圭の代わりに実也子が言った。

「違うっ！」

そういうけれど、咄嗟の場面で嘘をつけないのが中野浩太という人間だ。もう誰が見てもわかるほどの狼狽ぶりを見せ、それでも否定し続ける姿は、よいからかいの的でしかない。

「おまえらー」

(……)

浩太がみゆきに向ける感情は、他のメンバーと同じもののはずだ。決して特別なものじゃない。

Kanonの曲の音楽性。あの曲、歌を創り出す人間に、

興味がないはずは無いではないか。それを棚にあげて浩太だけが特別視されるのは筋違いというものである。浩太はそう思っている。

「二人とも。それ以上苛めるのは可哀相ですよ」

「祐輔っ！ お前もかっ」

「おや、この話題、ひっぱるんですか」

「……っ」

祐輔の一言で、浩太は口を閉ざした。こうなると、圭と実也子は浩太に同情してしまい、黙るしかなくなる。一応これでも、祐輔は浩太の助け船を出したつもりなのだ。

7月××(+2)日。

『OKです。お疲れさまでした』

スピーカーから響くみゆきの声に場の空気は緊張を解き、一同は疲労の為か溜め息をついた。

「はー」

「やっぱり、こうなっただか」

こうなっただか、というのは、すでに時間は夜中の1時を過ぎ、スタジオに泊まり込むことが決定したということである。

「かのんも、はまると長いから」

マイクが会話を拾ったのか、みゆきは体を小さくさせた。

『ごめんなさい』

「褒めてんだよー」

「ま。早く寝て、明日もがんばりましょう」

そんな言葉で締めくくる。さすがに3年目で慣れているのかそれそれは録音室を引き上げ寝床の準備にかかった。

その日の夜、女性陣の部屋ではこんな話題になっていた。

「えーっ！ かのんちゃん、好きな人いるのおっ？」

大声を出したのは勿論実也子だった。

もう夜遅くて、明日（今日？）もあるのに二人は寝付けず、いくつか言葉を交わしている間に盛り上がっていた。

「実也子さん…っ、声、大きいっ」

眼鏡を外し、いつもと印象が違ふみゆきは珍しく声を高めた。

「え、あ…ごめん」

隣の部屋には男連中が寝ているのだ。

実也子とみゆきは頭を寄せ合うかたちで備え付けの布団を敷いて、広い座敷を贅沢に使っていた。

「何？ 付き合ってるの？」

「違いますっ！ ……片思いです」

「どんな人なの？」

「…どんなって言われても」

「かのんちゃんは、その人のことどう思ってる？」

容赦のない実也子の問答に押し切られ、みゆきは真剣に考え込んでしまう。適当にごまかすことを知らない真面目肌。それを知っている実也子は急かさずに待った。

しばらく悩んでから、みゆきは無意識に声を発した。

「……“昔からの夢を叶える為に努力して、実現させてる人”かな」
私も、その夢を少しだけ手伝わせてもらってるんですよ、と付け足す。

「……」

「あ、ごめんなさいっ。変なこと言って」

「変なことじゃないよっ！　すっごく素敵じゃない。かのんちゃん
の好きな人かー。会ってみたいな」

「……そうですね。機会があつたら、紹介したいです」

「すごく身近な人？」

「ええ。長い付き合いではありません」

「その人の夢って何なの？」

「……ごめんなさい、秘密です」

申し訳なさが混じった笑みのみゆきを見て、実也子は微笑ましく
思いながらも頭の片隅で、中野浩太に合掌していた。

7月××（+3）日。

この日も音撮りが終わったのは日付が変わってからで、前日同様、
皆、ほとんど倒れ込むようにその場は解散になった。はずだった。

「きやつ」

PA室のミキサーの前に座っていたみゆきは、突然背後から肩を
叩かれ短い悲鳴をあげた。咄嗟にヘッドフォンをはずし振り返ると、
そこには浩太が立っていた。

「おい、まだやってんのか」

「……びっ、お、驚かせないでくださいよ……」

みゆきは必要以上に大きく響く自分の心音を静めようと大きく息

を吐いた。だいたい浩太たちは寝たはずではなかったか。

「どうしたんですか？ 浩太さん」

「それはこっちの台詞だ。もう2時だぜ」

「ええ」

そうですね、とみゆきは付け足す。察しの悪さは知ってはいたが、例えそれを知っていても浩太をイライラさせた。

「早く寝ろって言うてんだよ」

低く響く声に気圧されながらも、ようやくみゆきは浩太の気遣いに気付いた。

「え？ あ、はい。……ありがとうございます。でも、もう少し」

「まだ時間はあるだろ」

「作業遅れてるので」

「別に、待ってるよ、俺達は」

「そんな、迷惑かけます」

「」

遠慮がちに苦笑するみゆきに、浩太は一段と厳しい視線を返す。

が、みゆきは違う方へ目を向けていたので、それには気付かなかった。どうも噛み合わない会話に浩太は溜め息をつき、口を開いた。

「あのさあ」

「はい？」

「前から思ってたんだけど」

「？ ……ええ」

「あんた、俺達と同じ、『B・R』のメンバーの一人だっていう自覚、足りないんじゃないか？」

え？ とみゆきの口が動いたが声にはならなかった。

「俺がギターでトチっても、かのんが編集作業遅れても、みんな俺たちの仕事だ。それを一人、無理してる、ってのはおかしいだろ」

「……考えたことも、ありませんでした」

消え入りそうな声、しかし目線はしっかりと、浩太の目を見つめていた。

「だと思ったよ」

「…」

「いいから、今日はもう寝ろよ。あんまり遅いと、今度はミヤが呼びにくるぞ」

「あ、はいっ。……ありがとうございます」

ちょこん、とみゆきは頭を下げた。

(……何、やってんだか。俺)

薄暗い廊下を歩きながら、浩太は自己嫌悪にも似た思いに駆られていた。

先程の自分の発言を思い出すと、何やら自分がみゆきのことを心配しているように見えるではないか。

もし圭や実也子に見られていたら、また勘違いされるようなことになっていただろう。

みゆきが心配？ それは違う。

(違う。…ただ、イライラさせられるんだ)

あの性格、あの言動に。

はつきりしない物言い、いつもおどおどした挙動不審さ、そうだそれに。

(イメージが合わないんだ)

考え込みながら、廊下の角を曲がった。

「相変わらず、不器用な奴」

「うわっ」

暗闇の中からの声に、浩太は飛び上がった。

「言いたいことは分かるんだけどねー」

圭に実也子、それに祐輔と知己。そこには寝ていたはずのメンバーが全員揃っていた。

「お前ら…、いつからっ」

「いつからでしたっけ？」

「浩太が部屋出たところから、だな」

「……っ」

憤り、というより先程の会話を聞かれたことの恥ずかしさが浩太から言葉を奪った。ぱくぱく動く口から声が出るより先に実也子が言った。

「中野のさ、言いたいことはわかるの。かのんちゃん、無理してるし、あんまり

自分のこと考えてないしね。始末悪いことに、鈍感なところもあるし……」

「実也子さん…そこまで言わなくても」

「えー、でもミヤの言ってることは正しいよ。かのんが鈍感だからはっきり言わないと伝わらないってことだろ？」

「圭ははっきり言いすぎ」

こっん、と知己は圭の頭を小突く。

「お前らな」

「とりあえずもう寝ましょう。明日…もう今日ですが、休日なんですから。寝過ごしたらもつたいたいですよ」

「ねーねー、私もそっちで寝ていい？」

実也子の発言に男性陣はひいた。呆れた声が返る。

「何考えてんだっ、おまえは」

「実也子さん……」

「だってー、絶対おもしろそうなんだもん」

拗ねる実也子にダメ押したのは知己だった。

「駄目だ」

「うー。つまんなーい」

約一名、不満を洩らしながらも本当の本当の本当に、この夜は解散になった。

7月××(+4)日。

広めの給湯室にはテーブルが置いてあり、メンバーたちはそこで食事をするにしている。

「おっはよー」

練習がない、中休みの今日。寝過ごした圭が給湯室のドアを開けると、そこには祐輔が新聞を広げていた。

「おはようございます。圭」

「あれ？ 他の皆は？」

「浩太は学校の部活に顔を出さなきゃならないとかで朝早くに。かのんさんは何やらバタバタしてて、ついさっき出かけました。長さんと実也子さんはデートらしいですよ」

「あ。やっぱあの二人ってそーいう仲なんだ」

分かりきっていた答えを聞かされたように、そっけなく言いながらテーブルにつく。手を合わせて「いただきます」と言うと、圭は用意してある朝食に手を付け始めた。

「どうでしょうね。実也子さんが無理矢理連れ出したという感もありますけど」

「またまた。祐輔もわかってるくせに」

「黙ってたほうが面白いこともあります」

薄笑いを浮かべ新聞をめくる祐輔を横目で見やり、圭は食パンをくわえながら軽い溜め息をついた。こんな性格を隠そうとしない彼なので、きっと知己や実也子も自分たちがネタにされていることに気付いているのだろう。

「祐輔は？ でかけないの？」

「大学時代の友人に会ってこようと思います。圭は？」

「俺はじーちゃん家に顔出さないと。一応、それを理由に家出させ

てもらってるから」

夏休みといえど一週間も家を空けるには、中学生にはそれなりの理由が必要なのだ。孫に甘い祖父母に協力してもらい圭は東京に来ている。

「未成年も大変ですね」

「大変ていうか…。まあ、『B・R・』に居るのはいい勉強になるよ。反面教師がいっぱい居るし」

圭の言葉を聞いて祐輔は新聞の向こうで吹き出した。

「今の台詞は聞かなかったことにしてあげますよ」

数えられない程の足音と、ぬるく浸かれるような喧燥。

中野浩太は久しぶりに出会う不特定多数の人々に戸惑いながら、見慣れた通学路を歩いていた。久しぶりというのはここ数日は決まった顔しか目に入らなかったからだ。ついでにここ数日冷房の効いた室内にしかいなかったのも、真夏の日差しは耐え難いものがある。制服であるワイシャツの背中はあるという間に汗だくなり、不快指数を上昇させていた。効果がないと分かっているけど、つい学生鞆で顔を扇いでしまう。皮製の鞆の匂いを受けながら、浩太は考え事をしていた。

（かのんと、kanonの曲はどうもイメージが合わない）

浩太は常々そう思っているが、それを口にしたことはない。

叶みゆきが『B・R・』の曲を創っている。それは知っているが、どうもピンとこない。何よりも圭が歌うあの詞をみゆきが書いたとは、浩太は思えないでいた。

下手に口にしても、実也子あたりに怒られるだけだろうし、別にイメージに合わないからどうしようと思うわけでもない。Kanonとの違和感が拭えず、叶みゆきがどんな人間なのかつい口を出し

てみたり観察したりしてしまうわけだが、それは周囲にあらぬ誤解を招いているようだ。

（じょーだんじゃねーっつーの）

声には出さず、そう呟いた。

「……？」

おや、と浩太が目にしたものがあつた。

二〇メートル先、歩道の車道側、ガードレールに手をかけて道端に座り込んでいる人影がある。胸に手を当てて、肩が大きく揺れている。もちろん寝ているわけではない、それにホームレスにも見えない。

道端にいたため、周囲の迷惑になることもなかったが、行き交う人々はその人影を目に止めても立ち止まることはしなかった。

浩太はその人影に駆け寄った。

「おい、具合でも悪いのか？」

とりあえず声をかけてみる。額を抑えうずくまっている人物からは返答がない。性別は男性。子供ではないようだ。

「おい」

本格的に心配になって語調を強めると、男は上体を起こし顔を上げた。

「あ、すみません」

微かに笑い、思いのほかしっかりした声を返す。

「大丈夫です」

血の気が失せた顔。本当に大丈夫なのか浩太は疑ったが、浩太の手を借りて危なげながらも立ち上がったところを見ると、全くだめだというわけでもないのだろう。

十六：十七歳くらいだろうか。多分、自分と年齢は近いんだろうな、と浩太は思う。

背丈は並みだが浩太よりは低かった。人懐っこい性分なのか、浩太と目が合うとにっこり笑った。

「ありがとう」

その言葉が手を貸した自分に対するものだと思付くと、浩太は真正面に礼を言われたことに照れた。

「いや…、あ、誰かに連絡取るとか、病院行ったりしたほうが」

「あ、平気、気にしないで。だいぶ楽になったし」

「でも」

「本当に大丈夫。…実を言うとしたらの寝不足なんだ」

気恥ずかしそうに頭を掻いて笑う。あ、そう、と浩太は気が抜けるのと同時に安心感を覚えた。

「いくら寝不足だからって、こんなところで倒れてると踏まれるぞ」
相手の話しやすい人柄も手伝って、浩太は冗談半分に言う。

「あはは、ほんとにね」

「大人しく家で寝てれば？」

「そういうわけにも…　って、わっ、今何時っ？」

突然、大声を出し、時計を探しているのか鞆やポケットを荒らし始めた男に、浩太は手首を向け時計を見せた。

「十時十五分」

「やばいつ、先生、時間に煩いのにつ。ごめん、僕、電車の時間があるんでっ」

慌ただしく去ろうとする男に、浩太は気を付けろよ、と声をかけた。

すると男は満面の笑みを浮かべて大袈裟なほどに手を振る。

「うん、ありがとう。じゃあっ」

名前くらい聞いておけばよかったな、と、走り去る背中を見ながら浩太は思った。

* * *

浩太と別れた後も、所々で休みながら彼はどうにか目的の場所へ

とたどり着いた。

神経研究所附属理和病院。

赤煉瓦の仰々しい門構えで、その向こう側には緑の葉が茂った並木が続いている。そして青い空。それらの色の対比を、彼は気に入っていた。

その門柱から上体を起こした人影があった。

「希玖きくっ！」

長い髪を揺らし、眼鏡をかけた少女が駆け寄る、……叶みゆきだ。
「あれー。みゆきちゃん、どうしたの？ 確か、今、合宿の最中じやなかった？」

「……」

息を上げてうまく声にならない言葉を、息継ぎの間にどうにか押し出そうとする。元々、彼女は言葉でものを伝えるのは上手くない。それを承知している彼はにこやかに微笑みながら待った。

「……どうしたのじゃないよ。家に行ったら病院へ行っただけで、途中で発作起こしてるんじゃないかって、すごく心配したんだよ？」

体調を気遣うように顔を覗き込むみゆきに、希玖はにっこり笑って返した。

「あはは、ごめんごめん。駅で休んでたら時間くっちゃって」

「大丈夫なの？」

「ああ。……途中で眠りこけるところだったけど、親切な人が手を貸してくれたからね」

「あんまり無理しないで……ね」

二人は揃って歩き始めた。

「みゆきちゃん。僕、さつき、中野浩太に会った」

「えっ？」

「駅の近くでね。そういえば彼は東京の人間だったよね」

「希玖……」

「あんまり話できなかったんだけど、挨拶くらいしておけばよかった」

た？」

心配そうな視線を向けるみゆきに、希玖は笑って返した。
この、理和病院のN2棟に週1回、安納希玖は通っている。

7月××(+6)日。

朝十時。スタジオの仮眠室からそれぞれが這い出てくると、PA室には安納鼎が来ていた。みゆきも先に来ていて、安納にコーヒークップを手渡すところだった。

「あれー、社長だー」

眠気がさめきつてないのか、圭が敬語も忘れて声を上げる。

なだれ込むように入室してきた5人に動じもせず、安納は穏やかに言った。

「一週間ご苦労様。叶から、無事音撮りが終わったと聞いてね。後は叶とこちらの仕事だ。まかせてくれ」

「かのんちゃんのか？」

終わったのではないかと首をひねる実也子に、みゆきは苦笑して返した。

「…編集サイドの仕事はこれからですよ。あと2、3日はかかります」

「えっ？　もしかして、毎回そうなの？」

「仕方ないよ、片桐さん。叶の仕事は、この一週間でどれだけ君らの音を撮れるかだからね」

それにしても、今年は例年より早かったな、と安納は苦笑混じり

に付け足した。一週間という期限、余裕をもって終了できたのは初めてなのだ。ついでに言うなら、毎年締め切り間際のドタバタ劇はかなりのもので、安納がスタジオを訪れた時、5人はスタジオで寝こけていたこともあった。それを思い出して安納は苦笑したのだ。

「これからの予定ってどうなってるんですか？」

実也子が尋ねた。

「そうだな。来週には有線で流すよ」

「もちろん、他のアーティストではこうはいかないさ。『B・R・』はいつもタイアップ無しだから、事前に発表しておくべきスポンサーやお偉方がいないし、特別なお披露目もないし、派手な商戦もない。そういうところで機動力があると言える。…ああ、あと有線とほぼ同時にテレビCMもやるよ。でもこれは私が一ヶ月前から動いているので、早いとは言えないかな」

経営者らしい一面を見せて安納は答えた。

この一週間で創られた音楽は、一旦完成してしまえば後は営業サイドに引き継がれる。秘密を守る為、できうる限り小人数のスタッフで製作されている『B・R・』のCDだが、それでも十数人もの人間が関わっている。出来上がってきたCDを手にとると、やはり会ったこともないその存在を感じずにはいられない。

自分たちは形のない音しか提供できない。

それが銀色の円盤になり、ジャケットがつき、ケースに収められ店頭に並べられる。

「CDは八月二十五日発売予定だ」

「あ、予約しとこ」

「毎度のことだが、よければプレス後に送るよ？」

「なんかありがたみが薄れる」

安納の問いにそう言ったのは圭だが、全員、同じ気持ちだった。

「そうそう。私たち、この合宿を終えたら単なる『B・R・』のファンなんです。聞きたいものは自分で手に入れなきゃ」

「そーいうこと」

小林圭、中野浩太、片桐実也子、山田祐輔、長壁知己。

5人は揃って同じ笑顔を見せた。

安納は複雑な表情で苦笑した。

「君達のいいところは、その自己顕示欲の稀薄さと自分達の音に必要以上のプライドを持っていないところだな」

「……誉められてると受け取ってもいいんですか？ それ」

知己が訝しそうに、しかし控えめに安納に尋ねた。

「勿論。そうじゃなければ、このプロジェクトは成立しないよ」

「そりゃまあ、目立ちがり屋にはこのバンドは務まらないでしょうね」

祐輔の言葉に笑いが生じた。

三年前、『B・R・』結成直後。この5人は「バンドはやりたいけど、顔は出したくない」という点で意見が一致していた。理由は聞いていないが、それぞれ思うところがあるのだろう。その希望を吸収し、今の『B・R・』のかたちにまとめたのが安納鼎、そして叶みゆきだった。

「今年もおつかれさま。来年も頼むよ」

じゃあ、私は仕事があるから。そう言って安納は部屋を出て行く。メンバーがそれぞれの会話を始めるなか、安納はドアにたどり着く手前、みゆきの前で足を止めた。

「叶」

「…はいっ」

安納の抑えた低い声に、返すみゆきの声も自然に小さくなってしまう。

「お前にはCD制作の会議に出てもらっ」

「分かりました…」

「あいつにも企画書は渡してある。回収しておいてくれ」

「はい」

用件だけ言って、安納は背中を見せた。歩き去る姿に、みゆきは

複雑な思いを感じていた。

* * *

「今年の夏も終わってしまいましたね」

来たときと同様、5人は東京駅に集まっていた。

祐輔が言ったのは、もちろん季節としての夏ではなく、『B・R・』の活動期間についてである。

『B・R・』のメンバーはそれぞれの連絡先を知らされていない。お互い、教えあってもいけない。このプロジェクトが始まったとき、そう、言いつけられていた。

理由はやはり秘密保持。このメンバーの付き合いがどんな偶然であれ、ばれては困るからだ。だから会うのは勿論、話をするのもこの期間に限られる。

唯一、全員の連絡先を知るのは叶みゆきただ一人だった。

「もーっ、毎年、このときだけは淋しいっ」

「でも、一年って結構短いじゃん」

「来年はもう少し、腕あげておく」

「とりあえず、正体バレないように気を付けます」

「おつかれ。来年もよろしく」

「じゃあ、またっ。1年後に!」

そう言って、3度目の夏は終わった。

3話

それはまだ七月の頭、梅雨も開けきれてない夏のはじめの頃。

雲は気まぐれに雨を降らすことを休み、街を歩く人の手にただ荷物になるだけの傘を持たせていた。

そんな季節にだけ現れる、ただ耳に触れる音だけのその存在を、いつのまにか待ち遠しく思ってしまったている人は一体何人居るだろうか。

1

バンッ

ドアを乱暴に開けて来店した客に驚き、従業員は不覚にもトレーを落としてしまった。幸運にもトレーには何も乗っていないかったので惨事は免れた。

現れた客はショートカットがよく似合うスーツ姿の女性で、年齢は二十代半ば。毅然とした整った顔に従業員は見とれたがそれは本当に一瞬で、女性の明らかに怒りをたたえている表情とヒールを吐いた仁王立ちに自然と腰がひけてしまう。

「い、いらっしやいませ。…お一人様ですか？」

型通りの言葉を何とか口にする、女性客はズイと歩み寄り低い声で言った。

「喫煙席に目つきの悪い男、居るでしょ？」

さつさと案内しなさいよ、とスゴんでいるようにも取れた。被害妄想かもしれない。従業員は逃げ腰になりつつも女性を案内する。

「目つきの悪い男」と断定したわけではないが、幸運なことに喫煙席に男性は一人しかいなかったのだ。

「ちよつとっ！ 何、のんきに本なんか読んでんのよっ」

日差しがよく当たるフロア、全体的に木目調で観葉植物が多く置いてある店内に大声が響いた。

テラスに続く窓際の席で、その言葉通りテーブルに片肘をつき文庫本を読んでいた男は視線だけを上げた。

「……よー、篠歩^{しのぶ}」

不精で伸びた髪、Ｔシャツにスラックスという格好の男は抑揚のない声で言う。髭を伸ばすことを嫌い、どんなときでも髭を剃って家を出るのは、この男の長所といえば長所だ。

突然現れた女性に怒鳴られてもさほど気にもせず、ふわああと大きい欠伸をした。

「わっ、灰皿山盛り。一体、何箱開けたのっ」

それは疑問ではなく非難だった。気遣いも少しばかりはあった。

男はわざとらしくない程度の溜め息をついて、

「それはだなー」

パターンと本を閉じる。

「徹夜明けだった俺は今朝八時の電話で十時に呼び出されて、その当人が一時間遅刻した間、ずっと吸ってたもんだから、何箱開けたかなんて俺にもよくわからん」

「……尋人^{ひんご}」

「こんな小奇麗な喫茶店で居眠りしてたら追い出されるだろうし、眠気覚ましに、のんきにミステリーなんか読んでたんだが……。……お、もう十一時か、……それでだな、その待ち合わせで待ちぼうけ食わされてる途中に、お前がやってきたんだ」

本当に眠いのか？ とツつこみたくなる雄弁さで語る。女はさすがにバツが悪い表情を表し、声のトーンを下げた。

「……わざわざ遠まわしに責めなくても、素直に怒れば？」

「お前こそ、素直に“遅れてゴメンナサイ”くらい、言えないのかよ」

女の名は日辻篠歩^{ひつじのぶ}、男は八木尋人^{やぎひろと}という。

二人は大学のときの同級生で、腐れ縁も手伝って卒業後もこうして顔を合わせることがよくあった。

「で？ 何むしゃくしゃしてんだ？」

結局謝らなかつた篠歩に席をすすめる。尋人は自分の心の広さに拍手を送りたい気分だ。合い向かいに座つた篠歩は図星を当てられて、

「えっ、何でわかつたの？」

と、目を大きくさせた。

「おまえなあ、八つ当たりされてる俺の身にもなれよ」

長い付き合いだ、とは言いたくない。それ以前に態度と言葉でこれだけ当てられれば十分だ。

「…会社で上司に説教されたのよ。…まあ、仕事中華一としてた私が悪いんだけどっ」

「珍しいな、仕事虫のお前が」

驚いたのは、上司に説教されたことよりも仕事中に惚けていた、その事だ。尋人は意外に思ったわけではなく、興味が湧いた。故にそのことについて尋ねると、

「それなのよおっ！」

「うわっ」

だんっ、とテーブルに体を乗り出した篠歩に尋人は驚いた。周囲の席の非難の視線も気付かないまま、篠歩は一気にまくしたてた。

「もーだめっ！ 気になってしょうがないのっ。いつか誰かが思ってたんだけど、もう駄目、もう限界っ。もう他人に任せてらんないわっ、私がやるっ！」

「……なんだよ、一体」

そこまでの興奮の為にすっかり取り乱していた篠歩の目が、突然すっと冷める。

真顔で、真摯に、篠歩は尋人を見据えた。
「『B・R・』が何者か知りたいの」

* * *

『B・R・（ビーアール）』。その単語には大半の日本人が応ずるのではないだろうか。

「は？」

八木尋人もそのうちの一人。しかしこれは友人の口から出た突飛な言葉に驚いたものだ。

「『B・R・』よつ、知ってるでしょ？」

有無を云わせない口調で日辻篠歩は堅い口調で言う。その迫力に圧されて尋人は頷いた。

「そりゃ、まあ」

『B・R・』とは、ここ数年の間、世間様を騒がせているバンドの名前だ。

三年程前になるだろうか。はじまりは多分有線放送だったと思う。街中を歩くといつのまにか耳にしていた。喫茶店に入れば気付くと耳を傾けてしまう。誰かと会っているとき、買い物の途中、食事、散歩、いつもの日常のなかで。

気付くと耳を傾けていることに気付く、そんな歌があった。

初めは何件かの問い合わせの電話。少しずつ噂が広まり、話題が話題を呼んで、その歌がチャートに名を列ねる頃。誰もが、誰もその姿を知らないことを知る。

『B・R・』は正体不明。どのメディアにも姿を現さず、音だけの存在なのだ。

演奏形態はロックバンドの基本、ボーカルとギター、その他からなる5人（推定）で、ボーカルの声は男声とも女声ともつかず、性別すら分らない。

デビューから三年。これだけ時間が経つと、レコードをリリースする周期が読めてきて、『B・R・』は夏にだけ曲を出すことに気付く。

その秘匿さは世間の好奇心を掻き立てていた。

マスコミは競って正体を暴こうとし、夏が近づくとテレビで名前を聞くようにもなる。

でも、やはり聞くのは名前とその歌だけで、誰もその姿は見つけられないまま、三年目を迎えた。

「もう、三年よ。出てきてもいい頃合いじゃない。週刊誌はガセばっかだし、ウチの業界なんて本当に目の色変えて人と金使って探してるのよっ？ それこそ表沙汰にできないような手段も使ってるの。これだけ手を回しても見つからないなんてありえないわっ」

「だから、『Blue Rose』、なんだろ」

殆ど呆れて口も挟めなかった尋人は、気分直しに冷めたカップを口につけた。

『Blue Rose』とは、『B・R・』のデビュー曲のタイトルである。

「落ち着いてないでよーっ」

泣きそうな声を出されてもどうしようもない。篠歩の野望には呆れるしかないだろう。

「篠歩……」

「お願いっ。協力してよ、尋人」

「何考えてんだ」

「だって尋人、昔から妙なところで頭キレるし、要領いいし……」

「俺はフリーのライターで、お前はさっき言ったガセばっかの記事書いてる記者だ。一体何の……」

「ガセばっか書いてるのは週刊誌！ 私は新聞記者よっ」

「社会部のな」

「……そうだけど」

途端に声が小さくなる篠歩に、尋人は何度目かの溜め息を深々とつく。

「まあ、仕事じゃないのは分かったよ」

社会部の記者に芸能欄を埋める仕事が来るとは思えない。それにこの女は仕事よりも自分の純粋な好奇心のほうに熱を向ける性格なのだ。

「そうよ」

力強い声。

「ただ、知りたいの」

真っ直ぐな瞳。

「……」

そんな気性を、尋人は昔から知っていた。

2

ただ、知りたい。篠歩はそう言った。

「……そんなこと言っても、どーせ記事にするつもりなんだろう?」

あれから四ヶ月。季節は変わっている。

四ヶ月前と同じ店の中で、八木尋人はコーヒーをすすっていた。同じく、合い向かいには日辻篠歩が座っている。

「当たり前じゃないっ、同じように思ってる人は沢山いるのよっ。知りたいと思うことを伝えるのが新聞屋の仕事よっ」

あの日と同じく力強く言う篠歩。だが。

「まあ、それもこれも……。……見つけてから、だよな」

「だね…」

はあ、と篠歩も複雑な表情で溜め息をつく。

四カ月。とうに夏は過ぎ、『B・R・』の三枚目のシングルも発表され相変わらずチャートを賑わせていた。『B・R・』の正体を掴むべく四方八方してきた二人だが、その尻尾さえも見つけられないまま……。

季節はもう冬だった。

「インディーズがメジャー狙いでレコ社へ売り込んだんじゃないかって噂があるけど、あれはシロだな」

啞え煙草で手帳をめくりながら尋人は言った。

「根拠は？」

「動いてる金だよ」

「お金？」

「そ。金。…2年目以降は前回に稼いだ金があるからわかるけど、1年目のCD製作費、CM代はまとまった金がないと無理だ。それに有線への直接売り込みはその道のプロじゃないと難しい」

そういうもん？ と篠歩は首を傾げる。まあでも、某新聞社社会部に属する篠歩には畑違いな分野だ。一方、学生時代からフリーのライターとして数々の業界を見てきた尋人としては知識の違いが出るのは当然かもしれない。

「あとこれは重要。篠歩も覚えとけよ。ある程度大きな秘密を抱え、それを守るには金が必要だ。用途は主に口止め。『B・R・』はデビュー当時からその資本があつたんだ。…結論、『B・R・』はどこかに所属している。あまり弱小じゃない、かなりの金を持つてるところにな」

「お金…っていう話なら、どこかのスポンサーがついてる、とかは？」

「スポンサーなんてものは、宣伝媒体に出資するもんだ。正体不明、ノタイアップの『B・R・』に宣伝費なんか出すもんか」

「……納得」

「レコ社の振込み口座から探すっていうのは？　どうなった？」

これは以前尋人が発案したもので、篠歩が担当していた。

『B・R・』のCDの発売元は公になっているので、その発売元との取引相手を探ろうというのだ。

探偵、興信所、そんな名前がつくところに依頼していた。

一応断わっておくと、真つ当な興信所は銀行の裏情報なんかには出さない。それに個人を調べる場合は身内に限られるものだ。…あくまでも真つ当な興信所は、だが。

「だめ。振込み相手の社名はヒットできたらしいけどその会社がゴーストだったの。それから先は手詰まり。それにねえ、同じ依頼が6件来たって。皆考えることは同じなのね」

四カ月、何もしてこなかったわけじゃない。手足、頭をフルに動かして走り回っていたのだ。

不思議なもので情報化社会と言える昨今でも、本当に本当に誰も知らない情報というのはネット上で探すことはできない。もしそんなところに存在するのなら、誰かがとうに暴露しているからだ。

人と人の繋がり、身近な情報通、プロの情報屋、利用できるものは全て利用した。

それでも、手がかり一つ出てこない。

「やっぱ無理なのかな。『B・R・』の尻尾を掴むなんて」

「泣き言いうな」

「だってー」

「…でも確かに、何らかの偶然を期待しないとこれ以上先に進めそうにないな」

『B・R・』を探しているのは自分達だけじゃない。もっと大きな、組織立った何かも動いているはずなのに。

世間の噂というのは本当にいい加減で、それでいて信憑性のあるものもいくつかはでている。一番有力なのは、話題にもでたインディーズ上がりではないか、ということ。実は大物ミュージシャンがお遊びで仲間内で演っているのではないか、テレビ番組の企画で後

に大々的に発表しようとしているのでは、とか。ネタは尽きない。

(……………)

何かを見落としていないだろうか。

探してもいいんだよね。

篠歩は心のなかで、確認してしまう。

出てこないのは知られたくないから。では、隠れているのは何故か。

偶に、ふと不安になるときがある。

追ってもいいんだよね？

好きなものを、興味のあるものを、もっと知りたい。

多分、それは、望んでもいいと……思う。

3

「あれー。ヤギじゃーん」

自分が呼ばれたのだ、ということは、八木尋人はすぐに気付いていた。それでも無視したい気持ちになることには、誰も責めないで欲しい。

尋人は駅から歩いて5分のレコード屋に居た。新譜を物色しているときに背後から呼ばれたのだ。うんざりしながらも、このレコード屋が大学時代の行動範囲内であったことを思い出す。そして、背後から現れた二人組みは大学時代の同級生なのだ。こんな偶然もある。

「いい加減、その呼び方やめろ」

「久々に会ったのに、何よその言い草は」

頬をふくらませて不満を言ったのは塩谷茅名、そして、
「珍しいな、ヤギが真っ昼間から活動してるなんて」

対照的におつとり笑いかける佐藤順がそこには居た。

「何やってんの？」

「レコード屋でCD見てるのがそんなに珍しいか？」

「ヤギーっ、あんた、その性格、ぜんっぜん変わってないのねえっ」

「おまえもな」

全く意味のない尋人と塩谷の問答を、面白そうに見ていた佐藤は尋人の手元を覗き込んで言った。

「何、見てんだ？ …『B・R』？ ヤギーってこういうのも聞くんだ」

尋人の手元には、『B・R』の三枚目のシングルがあつた。意外そうな声を返す佐藤の手に、尋人はそのCDをポイと渡す。

「まーな。 ……でも、どっちかっていうとこれは、今、入ってきた奴の趣味」

「え？」

尋人が指差す先、店の出入り口に目をやる。ちょうど、スーツ姿の女性が当たりを見回しながら自動ドアをくぐったところだった。

待ち合わせなのかキョロキョロ視線を巡らすと、やがて目的のものを見つけたのかホッとした表情を見せ早足で歩き出した。

「尋人、お待たせ」

遅れてごめん、と日辻篠歩は頭を下げた。

「おまえ、時間通りに来たことないからな。 もう慣れたよ」

「ちよつとお、それって酷い……、って、あれ？」

ふと、尋人の隣に立つ人物と目が合う。

「あれ……」

何やら懐かしさを感じたのは相手も同じようで、しばらくの沈黙の後、一番先に口を開いたのはカップルの男のほうだった。

「……ヒツジ？」

それにつられて女のほうも、あっ、という表情を見せる。

「あー、ヒツジだーっ。やだあ、ひつさしぶりい！」

抱き付かんばかりの勢いで名前を呼ばれると、さすがに篠歩のほうも二人の名前を思い出した。

「佐藤くん？ ……それに塩谷っ」

大学時代の同級生。篠歩自身、二人に会うのは数年ぶりだ。

「ちがいまーす。籍入れたんだよーあたしたち。あたしも佐藤だよん」

手を頬に当てて、わざとらしく科をつくりポーズを取って見せる。

「うそっ、聞いてないよっ」

「ごめーん、ハガキ出そうと思ってたんだよ」

「遅いよ、もおーっ。でもおめでとーっ」

場所もわきまえず大騒ぎしている女性陣を横目に、尋人は佐藤に話し掛けた。

「よく覚悟したなー」

「おかげさまで」

「ま。おめでと」

「ありがと」

尋人の素直じゃない祝辞に笑いながら、佐藤はそれにしても、と続ける。

「まだヒツジとつるんでるなんて、この間会ったとき言ってなかったじゃん」

「腐れ縁だよ」

「…それって、今の質問の答えになるわけ？」

「うるせー。俺だって分かんねーんだから、ツっこむな」

ぶはっ、と佐藤は吹き出し、その余波でくすくす笑いが込み上げてきた。しかしそれも尋人の厳しい視線に抑えられ、佐藤はさらに次の話題でごまかした。

「あー、そうそう。ヤギ、お前、最近店に来ないじゃん。リクたちがぼやいてたぞ」

「暇なくてな。…あいつらちょっとは巧くなったのかよ。この俺が

実力無いヤツを記事にするわけねーだろって言っとけ」

実はこの二人はとある店の常連で、佐藤とはそこで何回か顔を合わせていた。

「リクのととは別の日だけど、来週土曜のチケット余ってるよ。ヒツジと来れば？」

「え？ なになに？」

自分の名前が出たことに反応し篠歩が顔を出す。

「ライブハウスのチケット。ヒツジもたまにはこーいう所に顔だしなよ」

「ライブハウス？」

「まああえて言うなら、席料払うだけで飲み放題、生演奏付きの喫茶店ってところ」

「…かなり違うと思うぞ」

「まあまあ、忙しいなら気分直しにでも、どう？」

* * *

結局、2枚分の料金と引き換えにチケットを置いて二人は去っていった。

「うまく買わされたっていう気もするけど…篠歩はよかったのか？」

「ご祝儀代わり、なんてセコいことは言わないけど。…『B・R』

のほうも煮詰まってたところだし、丁度いいんじゃない？ 気分転換にはさ」

「あれから何か分かったか？」

「全然。いろいろ職権乱用もしてるんだけどね。尋人のほうは？」

「同じく、進展無し。……」

尋人はふと思いついたことがあり、棚から『B・R』のCDを取り出した。顔に近づけてそのジャケットを見入る。

「なに？ どうしたの？」

篠歩も後ろから覗き込み、尋人の意図を探ろうとする。

「カノン……」

そんな呟きが返ってきた。それなら篠歩も知っている。

『B・R・』のジャケツトにも書かれている、『B・R・』に関わる人物で唯一公開されている名だ。

「『B・R・』の作詞作曲家の名前でしょ？」

「いや、？Kanon？って、どういう意味なんだろうと思って」「音楽用語じゃなかった？」

音楽方面の知識にはあまり明るくないけど、そんな曲名を聞いたことがあるような気がする。

「なじみがあるのは英語表記のCだ。Kじゃない。ま、どっちにする意味はわからんけど」

「Kは何語なの？」

「ドイツ語」

「なんだ。音楽用語って、確か、ほとんどはドイツ語でしょ？ 気にするところが違うと思うけど」

4

「意外。あんた、こういう所、よく来るの？」

店内の騒音は、すぐ隣にいる尋人にも大声を出さなければ声は届かなかった。

先日もらったチケットの半券を片手に、篠歩は今自分がある場所にカルチャーショックを受けていた。

「まーな。たまに知り合いが出るし。ここは結構レベルが高いから」「へー」

池袋駅近くで店の名は「rossi」。店内は薄暗く、対照的にステージのライトは痛いほど眩しい。一方にはバー・カウンターがある。人口密度がものすごく高くて、篠歩は息苦しさを感じた。派手に着飾った人もいれば、一人飲みに来ている人もいる。色々な種類の人間が混在する場所だということはわかった。

演奏の音が止んだ。

久しぶりに訪れた耳の安静に篠歩は心からほっとした。ステージの上は三人組のバンドが舞台から降りるところで、花束やプレゼントを持った女の子たちに囲まれている。

「そんなに上手だった？ 今のバンド」

「ま、所詮、前座。あんなもんだろ」

煙草に火をつける。

こういう店の風景に自然と馴染んでいる尋人の姿を横目に、篠歩は自分の場違いさを少しだけ窮屈に感じた。二人はもう5年の付き合いになるが、篠歩は尋人がこういう店に出入りしていることを知らなかった。複雑な心境になる。

『お待たせ致しましたーっ、本日の主役、？ Missing Kisses？ ですっ！』

司会進行役なのか、派手な衣装の女性がマイクを片手に高い声で言った。それと同時に舞台袖から楽器を抱えた面々が登場する。ベース、ギター、バチを持っている人はドラム、手ぶらはボーカルだろうか。四人構成らしい。全員ラフな格好で、あまり気取った雰囲気はない。

「知ってるバンド？」

バンド演奏が始まらなくても周囲の喧噪は相変わらず。それに負けない音量で、篠歩は隣を見上げて尋ねた。

「ああ、たまに出るよ。全員高校生だったな、確か」

「うまいの？」

「まあまあ」

「って、ちょっと待ってよ。高校生がこういう店に出入りするのっ

てヤバいんじゃない」

真面目くさった性格も篠歩の長所だ。それをあえて指摘せず、尋人はふはーと煙を吐いてから言う。

「まあ、少なからずのリスクを覚悟してでも、自己実現したい輩は居るってことさ」

一曲目の始まりはギターのソロだった。

篠歩の左肩に鈍痛が走ったのは、一曲目が終わろうとしている時だった。

「っ痛…」

歌に聞き入っていたので、突然のその痛みはちょっとしたショックだった。

（なに…？）

痛みの根元に目をやる。

尋人の右手が、篠歩の左肩を掴んでいた。

「……尋人？」

呼びかけのつもりで、呟いてみる。

しかし尋人の視線はステージに固定されていた。その横顔は、…彼にしては珍しいかもしれない、驚愕にも似た表情で、目を見開いて、ステージに見入っていた。

「篠歩」

やはり視線は動かさないまま呟く。

「え？ ……なに？ 煩くて聞こえない」

周囲の歓声と、それ以上に演奏が鳴り響いているからだ。

尋人は初めて視線を動かした。篠歩の目を見て、真顔で言う。

「……おまえ、耳悪いのか？」

「え？」

これは聞こえた。でも意味が理解できなかった。

「ギターだよ」

「ギター……が、どうかした？」

「いつものメンバーと違う。……助っ人だ」

そんなこと、初めてこのバンドを見た篠歩にわかるはずがない。

尋人がこのバンドに対して何か思うところがあつたのだ、とは気付いても、それが何なのか、篠歩には計りかねていた。大体、尋人の一連の発言には脈略が無い。

「……それが、なに？ ……あつ、ちょっと！ どこ行くのよっ」

突然、尋人は背を向けた。人込みを分け入って、出入り口へと向かう。

「ちょっと待ってる」

そんな風に言われた気がした。やはり、周囲の騒音のせいで絶対とは言いい切れないけれど。

（ギター……の人が、なに？）

尋人の姿を追うのを諦めた篠歩はステージを振り返る。ちょうど一曲目が終わったところだった。

観客ににこやかに手を振るボーカル、他の三人は次の曲の準備をしている。ギター担当だけ楽譜を立てているのは、なるほど助っ人だからだろう。尋人は一体、何に驚いていたのか。

「何なのよ……、一体」

左肩が、まだ痛んでいた。

「おい、今日一日ちよつと付き合え」

「……は？」

その日。平日の朝七時の電話は開口一番にそう告げた。

篠歩は咄嗟にその内容を掴めず、電話口で沈黙してしまふ。声の主は分かっていたが、あいつがこの時間に起きているというのは、どうにも信じがたい。そしてその内容。とりあえず、何を言われたのか理解すると、

「尋人？ あんた、この一週間連絡無しで一体何やってたのよ。こっちから携帯はつながらないし、この間のライブのときも一人でとつと帰っちゃうし……聞いてる？」

積もり積もっていた愚痴を吐いてみる。

そもそも一週間前のライブ。あのとき尋人は、一度戻ってきたが、その後篠歩を残して帰ってしまったのだ。それ以降、連絡もつかず篠歩はイライラしていた。突然、連絡があったかと思えば早朝で、しかも内容がこれだ。愚痴を言いたくなるのも当たり前だろう。

「それらについては後で謝るよ。それよりどうなんだ、今日、出られるか？」

「わかんないわよ、そんなの」

「早く決めてくれ。今、お前のアパートの前に居る。さつさと用意しろ、すぐ出るぞ」

は？ と、今度こそ篠歩は言葉を失った。

「……一体何なの？ 説明してよ」

「それも後でな。五分で支度しろ。いいな」

ぶつん。一方的に、電話は途絶えた。

篠歩は受話器を握る手が震えているのを自覚する。そしてその意味も、尋人に対する憤りからであることを理解する。

「がちゃんっ！ と、かなりの破壊音をたてて、受話器は下ろされた。」

「この……っ、マイペース男があっ！」

大声を出すことで怒りを発散する。自分勝手にマイペースで無神

経。そんな男だと知っているけれど、結局は付き合ってしまう自分を篠歩はわかつている。何より、そんな男だと知っていても、大抵、突き合わせているのは自分のほうだ。それから今回のような電話。

（…何かあったんだわ）

何についてかは分からないけど、多分、そう。

篠歩は受話器をあげ短縮ナンバーを押すと、コール三回で出た応答に、有給願いを申し出た。

一時間後。

「寒いよ」。何で朝っぱらから、こんな所に突っ立ってなきゃならないわけ？」

篠歩の住む町から電車で五〇分。ローカル線に乗り換えて三つ目の駅前。

尋人に連れられてこんな所まで来てしまった。そしてこの場所に立ち始めてさらに一〇分。それだけで凍えてしまう季節なのに。

学校が近くにあるのだろうか。駅からは学生服の若者が多く降りてきていた。

「……尋人」

低い声で名前を呟く。説明を求めての呼びかけだったが、それは尋人にも伝わったらしい。

「ライブの日は悪かったな。先に帰ったのは、ちょっと調べたいことがあったんだ」

意外にも素直に謝ったことに驚いて、篠歩はその横顔を見つめた。

「調べたいこと？」

「まあ、それはまた後で。それより篠歩」

「…何よ」

また、一つ逸らかされている。そのことを肝に命じつつ、尋人の発言に慎重な受け答えをした。

「一つ、確認していいか？」

「？」

尋人は正面に立つと、いつになく真面目な顔で篠歩の目を見据える。

「俺はただお前に付き合ってきたけど、お前は『B・R』の正体を知りたいんだよね？　ただ、追いかけていただけじゃないんだよね？」

「尋人……？」

「それでいいんだよね」

……すごく、突き放されたような気がした。

でも、そう。間違っていない。尋人を付き合わせていたのは私だし、『B・R』の正体を知りたいと言ったのも私。尋人の問い掛けの判断を迫られて然るべきなのも、私。

「……………」

後から思えば、ほとんど売り言葉に買い言葉で私は答えてしまったと思う。

尋人はわざわざ、目的を見失わないよう、忠告してくれていたのに。

「……………そうよ」

握り締めた手のひらに爪が食い込んだ。

「初めに言ったわ。『B・R』が何者か、知りたいの」

繰り返し尋ねてはくれなかった。

それは、たった一言の重みの証。

「よし」

尋人は篠歩の頭に手をやって、くしゃりと髪をかきまげた。

「……………」

言葉を返すのも忘れ、篠歩は尋人の言葉の意味を反芻する。

「……………『B・R』ね？　何か見つけたの？　今日、連れ出したのもその関係なんでしょう？」

「お前にしては鋭いな」

「尋人っ」

「慌てるなって……おっと」

ごまかそうと目を逸らした尋人は、駅前の人波に視線を止めた。何かを見つけたのだ。

「……篠歩、付いてこい。いいな、何も喋るなよ」

尋人は自分のバッグから道路地図を取り出し、前を歩き始めた。しょうがないので篠歩も渋々その後続く。

駅の周辺は学生の通学ラッシュ真つ最中だった。尋人は慎重な足取りで人込みに混じり、その流れに同化した。篠歩はどうか、その背中を見失わないように付いて行く。

（『B・R』……。何か見つけたの？）

今日、尋人が呼び出した理由はこれだ。一体、何を……。

尋人は、学生服を着た一団の一人、男子高校生に近づいた。

篠歩は自分の心音が煩いほど響いているのを感じる。

（この男の子が……？）

その男子高校生が何なのか、想像できるほど篠歩の胸中は落ち着いているわけではなかった。

「すみませーん。ちよつと聞きたいんだけど」

がくつ、と篠歩は肩を落とした。地図を片手に申し訳なさそうに尋人は言ったのだ。

（……何だ。結局、道を尋ねただけか）

一瞬だけ、ものすごく期待してしまつた篠歩は尋人の背中を睨み付けた。尋人はそんなことは意に介せず、男子高校生の反応を待つ。呼び止められた高校生はわざわざ立ち止まって振り返ってくれた。「何？」

かなり無愛想だが、どこへ行きたいの？ と前向きに教えてくれる態度。いい人なのかもしれない。

尋人は振り返った高校生の顔をじろじろ観察した。しつこいほど。（尋人……？）

その理解不能な態度には高校生も眉をしかめる。

「……？」

尋人は確認していたのだ。

そして、確信する。

微かな笑みを浮かべると、ゆっくり、はっきりと、その台詞を口にした。

「君は『B・R』のギタリストだ。間違いないね？ 中野浩太くん」

咄嗟のときに嘘が付けない。中野浩太はそんな人間だった。

4話

東京都A区。十二月二日、午前四時二三分

はじめ、叶みゆきはそれが何の音か分からなかった。

しつこい程、鳴り続けるベル。

毎朝耳にする目覚まし時計の音とは違うし、廊下にある家の電話の音とも違う。

いつもと同じシーツの上で目を開ける。

(……………)

部屋は真つ暗。朝でないことは確かだ。

起ききらない頭は回転を始めてくれない。取るべき行動を考えられない。

音は鳴り続けている。

どうやら自分の部屋の中から音がしているらしい。もう何分経っただろう。

実際は1分も無かっただろうが、みゆきには数十分にも感じられた。

(……………早く止めないと、お父さん達、起きてくるなあ……………)

そんな風に考えられるくらいには、頭が動き出したということだろうか。

音は鳴り続けている。

(…ああ、そうか)

携帯電話が鳴ってる。

ようやく、それを理解した。

みゆきの携帯電話はあまり鳴ることがない。

とくに冬は。というより夏以外には。

『仕事用』にと、持たせられているものだった。

「…………誰？」

目をこすりながら布団をはぐ。

「寒……っ」

体が震えた。季節は冬。しかも朝方。当然の反応である。

みゆきは机の上の点滅する光に手を伸ばした。

「はい、……………もしもし？」

「安納だ」

間を置かずに答えが返ってきた。

「……………希玖？」

間をあけても深く考えずにみゆきは尋ねる。

「違う」

「…えっ、あつ！……………おじさんっ？」

眠気がいつぺんに吹っ飛んだ。電話の相手はnoa音楽企画事務所
の社長、安納鼎だ。

慌てて混乱し続いているみゆきを見捨て、安納は耳を疑うような
こと言った。

「仕事だ。至急、事務所まで来い。二時間以内にだ、わかったな」

「え…………？」

部屋の時計を見ると、時刻は四時半。勿論、新聞も来てないよう
な早朝である。

「仕事……………って、『B・R』の？ だって……………。…何かあったん
ですか？」

「朝のニュースには出る」

「…ニュース？」

「とにかく早く来い。連中を集めなきゃならん」

「連中って……………」

オウム返しになってしまつのは、眠りから覚めきつてないせいだ
けじゃない。安納は一体何を言っているのか。

みゆきが事態を把握するには三十分の時間が必要だった。

群馬県B郡。同日、午前六時三分

「たっただいまー」

玄関が開く音と同時に、元気の良い声が家中に響いた。

毎朝、父親の手伝いで畑に出ている片桐家の長女が帰ってきた声である。

古い家の長い廊下の奥から母親の声がした。

「お疲れ様。朝ご飯できてるよ」

「わーい。着替えてくるね」

靴を放り投げて片桐実也子は自室へとかける。どこかという騒々しい足音が遠ざかるのを聞いて、年頃の娘に母親は何か言いかけたが結局言葉をしまいこんだ。

「実也子、お父さんは？」

「カズおじさんと喋りこんでたよー。お酒の約束でもしてるんじゃない？ あ、母さん。今日、霜降りてたよ。寒いはずだね」

「あら、本当？ もう十二月だしねえ」

そんな風に言っても、実は実也子は自宅の冷えた廊下が嫌いでなかったりする。真冬でも裸足でうろつくのはひんやりとした床が気持ちよいからだ。

「姉ちゃん！」

居間から実也子を呼ぶ声がした。狭くない家と言っても、それに大声を出せば家中に聞こえる。

「俊哉？ あんた母さんの手伝いちゃんとやってるの？」

姉貴風を吹かしてしまうのは、実也子が姉だから、としか言いようがない。片桐家では朝の仕事の分担が自然と決まっていて、実也子は父親の畑仕事を手伝い、俊哉は母親の家事を手伝うことになっ

ていた。

「それどころじゃないって。ちょっと、こつち来てよ!」

「……?」

呼ばれるままに居間に入ると、俊哉はその場に立ったままテレビを凝視していた。その両手には料理が乗った皿があり、テーブルに運んでいる最中だったのだと分かる。

「……どうしたの?」

「姉ちゃん、『B・R』のファンだつて言つてなかった?」

テレビから視線を逸らさずに、俊哉は言う。

「そーよ。あんたもCD持ってるじゃない」

「ギターが見つかったって……テレビ出てるぜ」

テレビは朝のニュースを映し出していた。芸能ネタ? 週刊誌に載っている写真を背景に、キャスターは興奮気味にがりたてている。

「……え?」

大抵の現実には前向きに対処する彼女でも、このときばかりは自分の目を疑い、夢かもしれない、と一瞬だけ思ってしまった。

「へー。この男、高校生だつて。他のメンバーのこの後出てくるかな」

そんな弟の言葉も、耳に入ってこなかった。

神奈川県C市。同日、午前七時四十一分

「わかりました。すぐそちらへ向かいます。かのんさんは圭に連絡を取って下さい」

この電話に出たときの山田祐輔はコール一回をも許さなかった。

電話がくるだろうと思っていた相手からの電話だった。

のちに叶みゆきが言うには、四人のなかで一番説明が短くて済んだのは祐輔だという。テレビのニュースから得られる情報を整理し、状況を把握していたのだ。

「お母さん、出かけてきます。今日は帰らないと思います」

朝食もそこそこに電話をしたり、テレビに見入ったり、息子のらしくない行儀の悪さの後の結論的発言だ。母親の反応は淡白だった。「教室のほうは？」

「臨時休業にでもしておいてください」

「無責任ねえ」

「返す言葉ありません」

出かける準備をしながらの返す言葉は至って義務的である。急いでいるのだろうが慌てた素振りを見せないのは憎たらしくもある。母親は義務的に返される言葉を、無視されたのだと歪曲解釈した。少しの報復を試みる。その効果を期待できるだけの駒は持っていた。「今日、沙耶ちゃんが来るって言ってなかった？」

「……」

ピタっ、と祐輔の動きが止まった。背中を見せているが、これだけでも明らかな反応を示したことになる。

「忘れてた？」

ふふん、と勝ち誇った笑み。

しかし振り返った祐輔は冷静そのもの。誰に似たのかしら、と、母親は自分の伴侶を恨んだ。

「適当に言っておいてください。沙耶には後で僕のほうから連絡を入れます」

「フラれるわよ、そのうち」

母親の言葉に、祐輔は表情を崩し、苦笑した。

「それは困りますね」

彼にしては、自信のなさそうなことを言う。

「彼女より大事なこと？」

玄関を出る息子にしつこく声をかける。すでにノブを回したところだったので、返事はないかもしれない思ったが、祐輔はわざわざ振り返って答えた。

思わせぶりな捨て台詞ではある。

「同じくらいには、大切ですよ」

愛知県D市。午前八時四五分

バンッ

「親父っ！」

「おわっ」

突然の来客に驚き、小林レコード店の店員・佐川省吾は入荷したばかりのCDを床にぶちまけてしまった。時間は九時前、もちろん店は準備中である。

「なんだ、圭くんかぁ。驚かせないでくれよ」

「悪い、省吾。急いでるんだ、親父どこっ？」

「店長なら奥に……」

「さんきゅー！」

最後まで聞かずに小林圭は店の奥へと走っていった。

名古屋市内の片隅に、その小さなレコード屋はある。

「親父っ、金貸せっ」

ゴッッ

ぎゃっ、と悲鳴をあげ、圭はその場に伏した。間髪入れずに殴ら

れたからだ。

「……っ」

頭をさすりながら上体を上げると、そこには穏やかな笑顔の年配男性がエプロン姿で立っている。両手には棚卸しのレコードが抱えられていた。

「それが人にものを頼む態度か、圭」

笑顔で言う。小林修、四八歳。圭の父親である。

「急いでんだよっ」

「…おまえ、朝、俺より先に家を出たよな。遅刻ギリギリで、朝メシも食わずに」

「朝、ニュースを見る暇があつたら、その場で同じこと言ったよ」

「この間、携帯電話買い換えると言つんで、まとまった金やつたろう」

「……」

それが問題だった。

圭は朝、学校に着いてからクラスの女子が今朝のトップニュースを話題にしているのを耳にした。担任教師と入れ違いに教室を飛び出してきたのだ。

多分、東京の叶みゆきは圭の携帯電話に連絡しただろう。しかしつい半月前、圭は携帯電話を買い換え、そのナンバーは変更されていた。みゆきの慌てふためく姿が目に見えるようだ。

「で？ 何に急いでるんだ？」

「東京…の、じーちゃんの所、行ってくる」

思わず目を逸らしてしまった。嘘ではないかもしれないが、この辺り、圭も悪党にはなれない。

「何しに？」

「急用なんだよっ」

「理由になつてない」

「金は後で返すってっ！」

「論点がずれてる」

「親父いゝ」

「泣き落としもだめ」

「お金ください」

「開き直りもだめ」

「……」

素気無い父親の対応に苛立ちが爆発した。

「仲間が困ってんの放っておけるかっ！」

店中に響く大声だった。

佐川省吾にもきつと聞えただろう。

圭は父親を睨み付けていた。すると父親はポケットから財布を取り出し、半ば投げ出すように圭に現金を手渡した。

「ほれ、とりあえず五万。無駄遣いするなよ」

「さんきゅーっ、向こう着いたら連絡するからっ」

手の平返したような息子の態度に呆れつつも、修は手を振って見送った。

静かになった室内を奥に進み、修はテレビをつけた。いくつかチヤンネルを回して、ニュース番組のところでもコンを置いた。

「……。ふーん、仲間ねえ」

窓の向こう側を、圭が走っていくところだった。

新潟県E郡。午前九時五分

「長壁っ」

新潟市内、駅前のコンビニ入り口で自分の名を呼ぶ声があった。通勤通学ラッシュも終えての駅周辺。人波は落ち着きを取り戻したと言っても地方都市であるのだから侮ってはいけない。

「ここ、ここ。ご無沙汰あ」

スーツ姿で大きく手を振る人影が近寄る。長壁知己はその人物を認識すると、表情が緩み手を振り返した。

「よ。久しぶり」

横田悟は大学時代の同級生。特に仲が良かったわけでもないが、今でも挨拶を交わすのは彼くらいのものだ。何せ、知己は大学をたった一年で退学し、この土地を離れていたので知り合いが極端に少ない。

横田はスーツ姿が板についており、社会人としての年季が感じられた。

「これから会社か？」

「うち、フレックスだから。そういうお前は相変わらず根無し草生活か」

「そういうこと」

知己は今年三十四歳になるが、結婚もしてなければ定職にも就いていない。そのことについて本人も深く考えることがあるが、特に解決案は出されていないかった。幸いにも雑学と器用さは並以上有り、特技はその日暮らして食うには困らなかった。

「おまえん家の母ちゃん、元気か？ 俺、たまに店に行くんだぜ」

「元気も元気。今朝も俺がこれから東京へ行くって言ったら、”クビだ”って息巻いてた」

知己の家は酒屋を営んでいるのだが、どうやら店長である母親は、どうしても知己に後を継がせたくないらしい。しかも、この歳になっても落ち着かずにいる知己を家から追い出したいようなのだ。今朝、仕事を休むなんて言ったものだから、ここぞとばかりにクビだ、なんて言い出したのだろう。

横田はからからと笑った。

「でも、東京行くって？ あれ？ まだやってるんだっけ？」

「……何年前の話してるんだよ。確か、こっちに帰ってきたとき、挨拶に行ったよな？ 七年前の話だけど」

かなり記憶力を疑う声で言う。

「悪い、悪い。だって、長壁がこっちに帰ってきたことより、学校をやめていったことのほうが印象が強いんだよ。あの時の教授との会話、一部で語り種になってるんだぜ？ 大学辞めてまで始めたことを、簡単にやめた、って言われてもさー」

「……」

懐かしい話を持ち出され、知己は感情を表さないためには黙るしかなかった。

長壁知己はかなり小器用な人間で、運動や勉強もそれなりの成績を収めたし、人付き合いも良く、何が起っても結構簡単に解決してきた。中学、高校時代は大したつまづきもなく過ごしてきた。

そして気が付けば幼いころからの夢を、二十代前半で叶えてしまっていた。その後七年間、その夢を満喫して、やめた。その後は今に至る。

早くに夢を叶えてしまったら、その後は何をして生きるといふのだろう。

「で？ 東京へは何しにいくわけ？」

「『B・R・』のおっかけ、って言ったら笑うか？」

真顔で、知己は言った。

「ああ、今、ニュースになってるヤツね。俺も『B・R・』好きだよ。家のやつもファンだしさ。…あれ？ おまえって、そーいう音楽聴くやつだったっけ？」

確かに、昔から知己は音楽好きな人間としても知られていたが、極端にジャンルが偏っていたはずだが。

「宗旨変えしたんだよ」

そう言って、複雑な表情で笑った。

東京都F区

「わりい、バレちゃった」

テレビカメラの前で、中野浩太は言った。

昨日の夜遅く、一本の電話があった。今日発売の週刊誌にスクープが載る、という内容である。

電話の相手は最近知り合ったフリーライター。今のうちに隠れるなりして騒動に巻き込まれると言ったが、既に手後れであることを、自宅前に停まった車を見て浩太は悟っていた。

その夜のうちに浩太がとった行動は、家族に事情を話し、安納鼎に連絡する、それだけだった。

『B・R・』姿現す。

そんな見出しの記事が発表され、テレビでも紹介されている。

『B・R・』の概略（人気の程が少々誇張して書かれているようにも思える）、そして今まで明かされなかったメンバーの一人、中野浩太について。

ただ、これは確証めいたものがまるで無く、週刊誌にありがちな「決め付け記事」であり、「『B・R・』のギターは中野浩太^{かもしれない}」という内容でしかなかった。それでも、世間を騒がせるには十分なものである。

どこから調べたのか浩太の学校や年齢、生年月日、ライブハウスで助っ人として演奏したバンド名まで書かれていた。ご丁寧に写真まで。一体、どこから入手したのだろう。

特に取り上げられていた点は、浩太が普通の高校生であることだった。

今までも『B・R・』について信憑性があるものもないもの、数々の噂が世間に流れていた。マイナーインディーズあがりではないか、大御所がおふざけでやっているのではないか、TVの企画モノ、等

など。中には突拍子もないものもあったが、それでも、普通の高校生が…、という意見は無かったのである。

日も明ける頃になると、浩太の家の前には報道陣が集まり始めた。一人、二人と数は増え、七時にもなると十人を超す人垣ができていた。寒いのにご苦労なことだ。その様子はテレビでも映された。

ちなみに浩太の家はオートロック式のマンション六階で、報道陣は上がってこれない。何回かインターフォンが鳴ったが、家族の協力により居留守を使っていた。もっとも、当然のようにバレているのだろうけど。マスコミ陣は降りてくるマンションの住人を捕まえては中野浩太について尋ねていた。大した近所付き合いもないのに、それっぽく答えられているあたりは笑ってしまう。

浩太の家族は意外と冷静で、特に兄は近所が映っているテレビを面白そうに見ていた。

「学校サボって何やってるかと思えば、コートもやるのがでかいねえ」

「サボりは関係無いって。夏休み中しかやってないんだから」
そっけなく答えておいて、浩太は腕の時計に目を落とした。

(……)

約束の時間にはかなり早いが、マスコミを撒く逃走経路を考えると、そろそろ家を出たほうがいいかもしれない。

「兄貴、俺、出かけてくるから」

「どこ？」

あの中、かいくぐるのか？ と付け足された。

「学校じゃないことは確かだよ」

コートを羽織って家を出る。

人影のないマンションの廊下を歩く。いつも通りの景色。いつも通りの生活。

いつもの生活が崩れてしまったとは思わない。まだ、自分の周囲には何の変化もないから。どう崩れるのだろう。何が変わってしまうんだろう。自分たちはどう変わっていくのだろう。

それは恐怖でもある。

『B・R・』としてギターをやると決めた。もう二年半前のことだ。

当時、浩太は高校一年生だった。その頃にはすでに友達とバンド活動をしていて、表現の場に不自由はなかったはずなのに、『B・R・』に参加した。

（まあ、俺らがあの日集められたのはサギに近かったけど）

年齢差を感じさせない長壁知己。小生意気な小林圭。初対面から馴れ馴れしかった片桐実也子。笑顔がくえない山田祐輔。

変な奴らだと思った。年齢もばらばら、住んでいる所もまるで違う。

Kanonの曲に集った自分達。

その上、彼らの音は驚くほど心地よくて。

すぐに意気投合して、部屋を借りて夜通しセッションしていた。ボーカルの圭が、喉の疲労を訴えるまで。

『『B・R・』のこと、引き受けてもらえるかい？』

『やるっ！』

全員、一緒に答えていた。

安納の行動は素早く、その夏の間に『B・R・』のデビュー・シングルを発表するまでに漕ぎ着けた。

自分たちの音楽を数々のメディアで聴く、というのは不思議な体験だった。

一年に一度、それだけの活動。皆とうまく付き合っているのは、たまに会っただけの自分たちはお互いの悪いところが見えないからだと思うこともある。『B・R・』の歌が世間で騒がれているのも、正直、悪い気はしない。

それらのこと、良くも悪くもも含めて、楽しいからやってる。浩太はそう思う。

ご大層な理由なんかない。

ただ、それだけのことなんだ。

歩く速度が落ちないように意識して、浩太はマンションを出た。

予想通り、浩太の姿を見つけた報道陣が駆け寄ってくる。その勢いは予想以上のもので、人垣に阻まれた浩太が前に進むためには根性が必要になった。

「中野くんっ、他のメンバーは誰なのっ？」

「ご家族の方にも秘密だったんですか？」

フラッシュが四方でたかれた。

「どこかに所属してるの？」

「お友達は何てっ？」

「発起人は誰なんですか？」

個性の無い質問。それは仕方の無いことかもしれない。十を知りたいのに一も知らない者は一から尋ねるものだ。

一般人の中野浩太であるが、このような質問に返すべき言葉は安納鼎から教えられていた。

「ノーコメントです」

通りにはあらかじめ呼んでおいたタクシーが停まっていた。報道陣に揉まれながらも浩太はそれに乗り込んだ。それでもマイクを向けてくるつわものも居る。いくつも質問が投げられている。一緒にタクシーに乗り込んでくるんじゃないかと思われるほどの勢いだ。た。「いい加減にしろっ」とキレそうになったが、そうしたらそれで今度は何をニュースのネタにされるか分からない。その辺りのことも安納から教わっていたので浩太は耐えた。

運転手に「締めてください」と言う。

「中野くんっ」

しつこい。

「3年もの間、世間を騙してきたことについてはどう思いますか？」

ボタン、とドアがしまった。

タクシーは走り出す。

もう安心だ。しかし。

浩太は運転手に行き先を告げるのも忘れた。ただ、その、最後の言葉が耳を離れなかった。

「……………は？」

浩太は自問する。

世間を騙してきたことについてはどう思いますか？

「……………なんだよ、それ」

* * *

二年半前

『契約書は必要ないだろう？ どの書類にも君達の名前が残ることはない』

あの日、ブラインドが掛かる窓を背に、安納鼎はそう言った。

中野浩太、小林圭、片桐実也子、山田祐輔、長壁知己。五人が三度目に集まった日、そこから全ては始まる。

叶みゆき。彼女は企画側の人間だ。安納の右側に控え、何故か気まずい表情で視線を伏せていた。

安納が言う通り、noa音楽企画のどの書類にも、五人の名前は記されていない。それぞれの連絡先は叶みゆきしか知らないし、事務所側が知っていることと言えば五人の本名くらいだ。

『"K a n o n"の曲をヒットさせる自信はある。それを損なわない腕を持つ演奏者を集めたつもりだ。宜しく頼むよ』

この時点で”Kanon”の曲はいくつか聴かされていた。そしてお互いの音も聴きあっていた。

『一年に一度、正体不明、全てのプロフィールを隠したアーティスト。その隠れた部分を人は知りたくなる』

『あの…っ』

片桐実也子だった。

『…絶対、私たちのことがバレるっていうこと、ないんですよ？本当に正体不明のまま、カノンの曲を演らせてもらえるんですね？』

『素性を明かしたくないのか？』

『……』

肯定の沈黙だった。

『僕も、名前や顔が出るようなことがあるのは困ります』

『同じく』

山田祐輔、長壁知己も実也子の意見に同意する。実也子のフォロ―に聞こえなくもなかった。

不安がる実也子に安納は言葉を添えた。

『そのことについてはこちらが言い出したことだし、君らの意見を尊重するつもりだ。それを覆すことはない』

そう、あの時は。

近い将来何が起るかなんて想像できなかった。

こんなことが起るなんて、安納だって考えていなかったはずだ。

『年寄りには心配性だね。なっ？ 浩太』

『呼び付けにすんなっ』

『年寄り…って、私、まだ十代なんだけどなあ』

『片桐さん…、それ言ったらこっちの立つ瀬がないですよ』

『俺は年寄り組でいいよ。事実、そーだし』

『んじゃ、年上三人組。そんなに気にすることー？』

安納との契約内容は納得済みだったはずだ。なのにしつこく確認するなんて。

『…えーと』

実也子は言葉に詰まる。

『変に目立つのは柄じゃないんですよ。小林くん』
『そーいうこと』

そう言って、笑っていた。

* * *

(……怒ってるだろうな…あいつら)

はあ、と大きな溜め息をついても、息苦しい嫌悪感は少しも軽くならない。

胸を締め付ける感情がある。苦い。すごく不安になる。思わず腕を壁に叩きつけたくなる。

不安に駆られる。

中野浩太は品川の某ホテルの廊下を歩いていた。変装用の眼鏡と帽子は、似合っていない、という域を超えて怪しい人にしか見えなかった。

浩太は何度目かの溜め息をついた。

二年半前。『B・R・』結成当時、『B・R・』という名と共に自らの名前も知名度が上がってしまったのを恐れたのは実也子だ。そして祐輔と知己。当時、浩太は高校一年だったが、何か事情があるのだろうと推測するくらいはできた。事情を尋ねるとなかったのも知られたくなさそうだったからだ。特に実也子は顕著で、事務所やスタジオに出入りする際に、『B・R・』の内部情報が漏れないよう人一倍気を遣っていた。

今回、不本意とはいえ自分の不注意で『B・R・』がこんな風に

世間で騒がれることになってしまった。

浩太は駄目押しの溜め息をつく。

「……………。怒ってるだろーな、あいつら」

小さく、呟いた。

コンコン。

1002室のドアを叩いた。

「どちらさまですか」

内側から叶みゆきの緊張が伝わる声がした。

（あいつも来てるんだな。…………当然だけど）

「俺。中野」

答えてからしばらくしてドアが開かれた。

「浩太さん……」

「よお」

心配そうな顔をするみゆきにいつも通りの言葉をかけた。いつも通りと言っても彼女と会うのも五カ月ぶりだ。

マスコミが中野浩太について騒ぎ始めてから、初めて安納たちと顔を合わせることになる。マスコミはまだ、『B・R』のバックにnoa音楽企画が絡んでいることを知らないので、こうしてひっそりとホテルの会議室で落ち合うことになったのだ。

「中野っ！」

（えっ？）

予想外の人物の声に浩太は眼を見開いた。走り寄る人物はそのまま浩太の腕にしがみつく。その勢いで浩太は背後の壁に押し付けられた。

「な…………っ、ミヤ？ どうしてここにっ」

予想に反して、安納鼎はそこには居なかった。体当たりしてきたのは片桐美也子だ。しかも室内には山田祐輔と長壁知己まで居た。いつも一年ぶりに夏に会うときと同じ、その姿に少しの違和感を覚

えるのは五ヶ月という時の流れのせいだろう。

でも、性格はそう簡単には変わらない。

「馬鹿言わないでっ！ 朝っぱらから、あんなニュース見てじっとしてられるわけないでしょおっ！」

「実也子…、落ち着けて」

「ここに来てからずっとこんな調子なんですよ」

知己は実也子をなだめ、祐輔は浩太に苦笑を見せた。実也子はそんな祐輔に抗議する。

「だってっ！ あのリポーターの人、中野にあんなこと言うなんて許せないよっ。あっちは騙されて楽しんでるくせにさっ」

「実也子さんにしては俗世間的な意見ですね」

「ちよつと祐輔っ、それ失礼だよ」

「だから落ち着けっっの」

世間を騙してきたことについてはどう思いますか？

些細な、一言ではある。

しかし浩太を悩ませるのには十分な一言だった。

「」

浩太は咄嗟に、実也子に尋ねようとした疑問を飲み込んだ。口に
出さなかった。

子供っぽい質問だと思ったから。

「大変だったな、浩太」

「ここに来るまで大丈夫でした？」

「…あ、ああ」

知己と祐輔の労りの言葉にぎこちない返事を返す。いつも通りの
各個性の対応に少しだけ驚いたのだ。

みゆきがコーヒをいれてくれて、浩太は一息つくことができた。

「…圭は？」

「こちらに向かつてる途中です」

祐輔が答える。

「かのん、社長は？」

「えっ、あ…朝はこちらに居ましたけど…、仕事があるとかで外出しています。…そろそろ戻って来ると思います」

「そっか…」

浩太は目を伏せて少しだけ沈黙したが、やがて意を決したように顔を上げた。

「ごめん。迷惑かけて」

とりあえず、言いたかったこと。

「おまえのせいじゃないだろ」

知己は言う。他の二人も同じ思いのようだ。

しかし浩太はすぐ反論した。

「俺のせいだよ。簡単に否定するな。…今回のことは、謝らせてくれ」

ゆっくりと、頭を下げた。

実也子は何か言おうとしたが祐輔に遮られた。

(…多分、このままでは騒ぎは収まらない)

それは浩太の見解でもある。自分だけでなく皆、そしてその周囲の人にも、迷惑がかかるのは免れないことだ。それが全て自分のせいであることもわかつている。

「じゃ、言い方を変えましょうか」

笑みを含んだ声で祐輔が人差し指を出して提案した。

「浩太、”気にしないでください”」

「え？」

「僕達の誰でも、同じことを巻き起こす可能性はあったわけですから」

「そ、だな」

「そーよっ！ それより今後のことを考えなきゃ」

知己と実也子も賛同して、場の雰囲気盛り上がる。

さらに。

「わるーい、遅れたー」

いつのまにノックがあったのか、みゆきが開けたドアから六人目

の人物が表れた。

小林圭は部屋を見回しながらコートを脱ぐ。

「あれっ。俺がラスト？ 悪い。あ、かのん、連絡してくれたんだろ？ ごめんな、繋がらなくて」

「圭さん、お家のほうには何て？ 今日学校もあつたんじゃないんですか？」

企画側の人間としては黙っていられないのだろう、みゆきが心配そうに尋ねた。

「学校はともかく、家には言ってきたから大丈夫。まあ、事情説明はしてないけどさ。よお、久しぶり」

浩太たちに向かって手を振る。

「わーい、圭ちゃん、五ヶ月ぶりだねーっ」

「お久しぶりです」

「よお」

実也子、祐輔、知己ともう一人、浩太は圭に近寄り真面目な顔で、
「圭、悪かったな。今回は」
と言った。

ふと、圭は笑ったようだった。

「別にいいよ。こうなってみると、今までバレなかったのも不思議な感じもするしさ。あ、それより浩太。テレビ映りいいじゃん。実物より」

「おーまーえーはーっ」

珍しく人が殊勝な態度をとっているというのに。しかも「実物より」にアクセントを付けるものだから、その言葉は喧嘩を売っているとは思えない。圭は浩太の手が出るのを予測して逃げた。

「待てっ！ こらっ」

結局、いつもの調子の二人に皆笑い出した。知己、祐輔、実也子の三人はふと目が合って、もう一度笑った。

みゆきも、そんな五人を見て微笑んでいた。

「…あ」

突然、トーンの落ちた声を出したのは実也子だった。

「？」

「……どうしよう、すごくショックだよー」

頭を抱えてその場に座り込む。深刻というわけではないようだが、受けているショックは演技だけではないようだ。

「ミヤ？」

「…だって、圭ちゃん」

え？ 俺？ と圭は自分を指差す。

「圭ちゃん、私より背が高くなってる…」

沈黙。

実也子以外のメンバーは目を合わせた。

そして次に圭の頭部に目をやる。確かに、夏場に会ったときより背が高くなっているようだ。実也子より大きいようにも見える。

「ミヤ、あのなあ…」

「圭って十五だっけ？ そりゃ、大きくもなるだろ」

「成長期ですからね」

「それってショックなことなのか？」

座り込んでいる実也子は男どもの言葉を頭に受け、微かに笑ったようだった。

「皆には複雑な乙女心はわかんないよー、だ」

ぶん、とそっぽを向く素振りをする。

乙女心ねえ、と誰かが苦笑した。

*

*

*

ノックが鳴った。

一斉に全員が沈黙した。次に現れるべき人物はわかっているからだ。

皆の視線に促され、みゆきがドアを開けに行く。ゆっくりとドアが開かれ、その向こう側からはスーツ姿の安納鼎が現れた。

「…全員、揃ってるな」

その表情は少しだけ疲労の色が表れており、本人も機嫌が悪そうに見える。こんな事態ではそれも当たり前だろう。安納が会議机についたので、メンバーはそれぞれ近くの椅子に腰を下ろした。

マスコミが『B・R・』について騒ぎ始めたのは昨日の深夜。スクープをトップに飾った雑誌が業界に出回ったのがきっかけだ。時を同じくして浩太もそのことを知らされる。その浩太から、安納に連絡がいった。

記事が出回る前に抑えるには時が遅すぎた。

幸い、『B・R・』の裏にnoa音楽企画がいることはバレていないので安納がマスコミに曝されることは免れている。しかしそれも時間の問題でしかない。

「外は大した騒ぎだな」

溜め息とともに安納は言う。浩太はそれを嫌みと受け取ったのか、申し訳ありません、と頭を下げた。

「いや、今回のことはこちらの手落ちでもある。正体不明を装うのも潮時だった、と思うよ」

本音かどうかは計り兼ねるが、浩太個人をどうこう言うつもりはないようだ。

そんなことよりも、今考えるべきことは。

「では、これからの事だ」

安納の言葉に空気が緊張した。

「まずは事務所側から君達への要求だ。全員、マスコミの前に出て

もらっ」

「社長っ？」

それぞれが驚きの声をあげた。もちろん、それには批判的な声が含まれている。

「それ、約束が違いますよね」

すかさず祐輔が厳しい声を返した。その反応の良さはもしかしたら安納の言葉を予測していたのかもしれない。

「祐輔の言っ通りよっ。何があっても私たちの名前が出ることはな
いって、言ってたじゃないですか」

「ほとぼりが冷めるまで大人しくしていれば済むことでしょう？」

実也子、そして知己も反論を返した。

三人は初めから、自分たちの名前が出るのを嫌がっていた。だから浩太は、今回のことで三人が自分を責めないことを意外に思っただ。知己たちのなかで、その確執は消えたのかとも思っただ。しかしそれは思い違いでしかなかった。

「ここまで世間を騒がせておいて、姿を現さないというのは許してもらえない」

安納の言葉は、業界のことに疎い五人には大した理由には聞えなかった。

「でも……」

「逃がしてもらえない、というほうが正しいかな」

このまま大人しくしていて、うやむやのうちに騒ぎが収まって、このネタを追い続ける少数派は必ず存在する。彼らに見張られている中では夏に集まることもできなくなってしまう。コソコソと嗅ぎ立てられ事実を歪曲した記事が出回るよりは、というのが安納の考えだろう。

「でも社長。マスコミの前に出たら、俺らどうなるわけ？俺らはフツの一般人なわけだし。その後の一騒動は仕方ないとしても、『B・R』の活動だっ、例年通りにはいかなくなるだろ？」

一同の中で、一番落ち着いているのは圭かもしれない。穿ったこ

とを言う。

「小林くんの言う通り、君達が騒動に巻き込まれるのは避けようがないな。それぞれの地元のほうにも報道陣が押しかけるだろう」

「周囲の人にまで迷惑かけろって言うんですか？　冗談じゃないですよ」

「有名税ってやつですか？　そんなもの、払わなければならないのは、かなり不本意です」

祐輔と知己、二人は比較的落ち着いているように見えるが、不機嫌さを露にした物言いはいつもの彼らではなかった。

安納は指を組み、少しの間考える。

「……」

安納はあえて言わなかったのだが、彼ら五人は分かっていた。なかった。

自分たちのしてきたことの大きさを。

自分たちの音楽を、一体、何万人が聴いたのなんて、彼らは知らないのだろう。レコード会社に数千を超える問い合わせがあったことも。シングル一枚に億単位の売り上げがあることも。

彼らは自分たちも『B・R・』のファンだと言って笑っているが、同じように『B・R・』を好きだという熱狂的なファンが日本中にいることを、考えたことがないのだろうか。

「……どうしてもというのなら、中野くん以外は代理人を用意してもいい」

打開策とも言える案を安納は提示した。

「どういう意味？」

「顔を知られてしまった中野くん以外のメンバー、対マスコミ用の『B・R・』のメンバーはこちらで別の人間を雇ってもいい、という意味だ。もちろん、これから先の音作りに関しては、変わらず君達にもらうつもりだが」

「駄目っ！」

頭ごなしに否定した声があった。

「実也子？」

周囲が驚いて彼女を振り返る。実也子自身、自分が叫んだことに驚いているようだった。

「あ…、ごめんなさい。…あの、でも、私は嫌ですっ！ 他の人間に中野の仲間を名乗らせるのも。他の人間に『B・R・』を名乗らせるのもっ！」

勢いづいた言葉は止まらなかった。

「以前、社長は私たちのことを？ 必要以上のプライドがない？ って言っただけ、……でも、私は、これだけは譲りたくありませんっ」
「なけなしの。つまらないことかもしれないけれど、譲れないプライド。」

実也子は大声を出した反動で足の力が抜けたが、知己がその肩を支えた。

「話にならないな」

安納の厳しい声が響いた。

誰も返事を返せなかった。

「社長」

知己だ。

「なんだ？」

「今回の件は急過ぎて、俺達も意見がまとまっていません。少し考える時間をください。…多分、社長の言う通りにせざるを得ないでしょうが」

「……わかった。とりあえず明後日は世間を落ち着かせる為にも、私と中野くんで記者会見を行う。その二週間後に『B・R・』を発表させる。それが今ここにいる君達か、それとも別の人間かは君達の返答しだいだ」

ガタン、と派手な音をたてて立ち上がり、安納は部屋を立ち去るうとする。その際、みゆきに視線を投げ、付いてくるように示した。二人が退出した室内に沈黙が訪れた。

しばらく誰も、口を開こうとしなかった。

がたん、と椅子が鳴った。

「…ごめん、私もちよつと」

実也子は控えめな声を出すと、皆に顔を見せないように、逃げるようにドアから出ていった。

すると、浩太、圭、祐輔の視線が知己に集中する。無言の発言はとも分かりやすいもので、知己は、

「……わかったよ」

と言うと実也子の後を追った。

「浩太。顔が緩んでますよ」

「……っ」

意地悪い祐輔に、浩太は口元を手で隠して睨み返したが効果は薄かった。

しかし思いの外、祐輔は優しい笑顔を見せる。

「実也子さんの言葉、嬉しかったんでしょ？」

祐輔のその言葉は間違いなく図星であつたけれども悔しくはなかった。祐輔も同じように感じたのだと気付くと嬉しくなった。

「……ああ。俺は今回、皆に迷惑かけて見捨てられるのが怖かったんだ。いや、迷惑はかけてるんだけどさ」

この部屋に入ってきたとき。皆のいつも通りの態度と、自分を心配して駆けつけてくれたこと。とても嬉しかった。

怒ってないのか？ そんな疑問も、いらなくなる程に。

圭は室内の給湯所を漁って、食料を物色している。「インスタントしかねーけど、日本茶でいいかー？」と声をかけてくる。それに手を振りながら。

「……祐輔」

「？」

「俺はやっぱ、こいつらと続けていきたいと思うんだけど。…迷惑？」

「何言ってるんですか」

本気で呆れられた声が返ってきた。

「そう思っていない人が、僕たちの中に居ると思ってるんですか？」

「実也子」

ホテルの廊下の片隅で、知己は実也子を捕まえた。往生際悪く逃げようとするがそれを許す知己ではない。

先程大声を出したことで気が高ぶったのか、実也子の目には涙が浮かんでいた。知己の声にも答えない。これは気を抜くと泣き出してしまいそうだったからだ。

「実也子……」

「ごめん。あはは、…私、馬鹿なこと言っちゃったねえ。矛盾ばかりで…、社長も呆れただらうーな」

「おい」

「皆もっ！ 私一人、勝手なこと主張しちゃって。怒ってるかなあ？ 謝らなきゃ……」

混乱しつつも笑顔を見せようとする実也子の腕を、知己は強く握んだ。

「っ痛……」

「落ち着けて！ ……謝る必要はない。皆、同じこと思ってるから」

実際、先ほど実也子が社長に主張した言葉には知己も同じ思いだし、他のメンバーもそれは変わらないだろう。この程度の予測はそう難しくはない。しかし、どうも片桐実也子という人間はその辺の直感が鈍いように思える。その直感力を養う「人付き合い」というものには、誰よりも経験が有りそうに見えるのに。

「……皆？」

知己の顔を見上げて尋ねる。

「ああ」

「本当に？」

「しつこい」

どん、と実也子は知己の胸を叩いた。

「じゃあ、どうして口にしないのっ？」

「は？」

突然怒り出した実也子の感情に、知己は付いていけなかった。そう、実也子は怒っていた。

ただ我慢していた涙が溢れてきてしまい、結局実也子は視線を外して続きを口にする。

「皆、そう。圭ちゃんは変にスレてるし、浩太は柄でもないのに二枚目ぶってるし、祐輔は自分の考えてることは最後まで言わない。長さんだって、大切なことは口にしてくれないじゃないっ！　いつも、そう。……馬鹿みたいっ、私」

例えば夏に再会するときも。

実也子はいつもワクワクしながら、走って集合場所に来る。毎年、一番はじめに。その後の皆を待つ時間も楽しいし、会えたときは嬉しいものだけど、時々不安になる。

皆も同じように、楽しかったり嬉しかったり、思ってくれているんだろうか。

「私は祐輔や長さんと違って、口にしてくんなきゃ分かんないの！　強要できるわけないと知っているけれど。」

「皆が『B・R・』を続けたいのか、そうでないのかとか、ちゃんと言ってくれないと分からないよ」

実也子の言葉は知己に言わせれば、どうして分からない？　となる。祐輔も圭も浩太も同じ様に『B・R・』を楽しんでいるし、お互いの気持ちも分かっている。だから安納に対して堂々と、五人の総意として発言できるのだ。

「…あいつらの性格はわかってるじゃないか。自分の意見を暴露する奴等じゃないだろ？」

「それじゃあ、私が損するだけじゃん」

半泣き状態で知己の腕に擦り寄った。知己は溜め息を一つ。ぽんと実也子の頭に手を置いて言った。

「おまえの言葉は俺達の気持ちを確認させてくれる。…大丈夫、俺達はそれぞれ『B・R』を好きで、楽しんできたし、これからも続けていきたいと思ってるよ」

五人を置いて会議室を出た安納とみゆきは、事務所に戻る為、待たせていた車に乗り込んだところだった。

「社長…」

恐る恐る、みゆきは安納に声をかけた。

「何だ」

キツイ物言いに一瞬みゆきは言葉を飲み込んだが、手のひらを握って思い切って口を開いた。

「今回のこと……、記者会見が無事に済んだとして、そうしたらその後、どうするおつもりなんですか」

「何が」

「勿論、『B・R』についてです」

安納は窓の外に目をやり、遠くを流れる建物を目で追いかけた。

「それはあいつら次第だろう。続けるつもりなら今まで通り…まあ、

仕事量は増えるだろうがな。…万が一『B・R』が解散ということになっても、私は別の器に「Kanon」の曲をやってもらったもんだ」

「……」

みゆきは眉をしかめて、うつむいた。続けるべき言葉はなかった。

その日。

会場に集まった報道陣は約300人。

と、noa音楽企画社長・安納鼎。

ゴネていたが、結局安納に引きずられてきた中野浩太。

二人が用意された席についてからもう五分、カメラのフラッシュは光りつづけて止むことがなかった。

写真なんかこの二日で腐るほど撮っただろうが、フィルムの無駄。などと呑気にも思ってしまう。

「…随分、落ち着いてるんだな」

苦笑混じりに小声で、隣から安納が声をかけた。

「この二日で、芸能人ヅラが板に付いたんですね」

失笑混じりに言ったが安納には無視された。あっさり別の質問をしてくる。

「『B・R』の方針は決まったか？」

「…まだですよ」

本当に、最大の問題はそこだから。今日、こんなことで慌ててるわけにはいかない。

別室には叶みゆきがいて、他のメンバーは今ごろ帰りの電車の中だ。それぞれ身内に事情を話す為に家に帰る。

『B・R』のこと。今までのこと。現在のこと。これからのこと。

これからのこと。

皆の意見をまとめるには、考える材料が少なすぎる。

ただ一つ。皆との別れ際に安納が言った一言。

君達はこれからプロとしてやっていく気があるのか？

誰もが無言のまま、答えられなかった。

誰も考えたことがなかった。

それを言うなら、今の立場は何と言うのだろう。確かに、五人は『B・R・』の仕事で食べているわけではないので、プロとは言わないだろう。それ以前に五人は仕事だなんて思っていないのだ。プロとしてやっていく気があるか？

楽しい夢から現実へと、起こされた気分だった。

「この度は、世間をお騒がせしたこと、心よりお詫び申し上げます」
安納の低い声がスピーカー越しに響く。その声で浩太は思案の底から目が覚めた。

「noa音楽企画が仕掛け人だったんですね？」

「中野くんは高校生だそうです、どうやって選ばれたんですか？」

「現在の『B・R・』の人気は、予測していたんですか？」

一斉に質問が浴びせられた。

「安納社長、今回、公になったことについてどう思います？」

「中野くん以外のメンバーは誰なんですか？ 教えてくださいますか？
そこで、こほん、と、わざとらしく安納が咳をする。

静まった空間に、安納の言葉がはつきりと響いた。

「二週間後、この場所でもう一度記者会見を行います。そのときには『B・R・』を紹介できるでしょう」

その日。

世界で少なくとも五人は、眠れない夜を過ごしただろう。

P R E - D A W N

東京都A区

「じゃあ…、使うんですね？ K a n o n の曲を…本当に」

夏休みまであと二週間、自宅の電話口でそう言ったのは十五歳の叶みゆきだった。

中学三年生のみゆきは期末考査真っ只中。中休みの週末である今は数学の教科書と格闘している最中である。例え休みの日でも平日と同じ三つ編みと眼鏡。引っ込み思案で口下手なみゆきは電話で相手に伝えるということが苦手だが、今は受話器を握り締め、叔父に当たる人物の次なる詳細を待った。

「K a n o n の曲を…。いつですか？」

意外さと、純粹な驚き、そして期待が含まれる声。誰もいない廊下にながった声が響く。

「できれば夏のうちには出したい」

「…急、ですね」

叔父とは特に付き合いがあるわけではなく、最近なつて言葉を交わすようになった。その息子、つまり従兄弟とは昔馴染みで昔からよく遊んでいたが叔父とはあまり顔を合わせた記憶がない。多分それは、叔父が音楽事務所の社長という肩書きを持っているせいもあるだろう。

「すぐ動き出せる手筈は整えてある。…問題は演奏者だけだ」

「…どうするんですか？」

「それについては検討してある。叶にも協力してもらいたい」

「え……。ええっ？ 私がっ？」

すっとんきょうな声を出すと、電話口の向こうからは不機嫌な空気が伝わってきた。

「無理にとは言わんが」

「えっ、あ、……、やりたいっ！ やらせてくださいっ」

自分でも信じられない程、みゆきは大声を出していた。何故ならずっと昔からみゆきはKanonのファンで、その音楽が形になっていく様を見たくないと言ったら大嘘になる。そしてKanon自身も、自分の音楽を皆に聴かせたいというのが昔からの夢で、その手伝いができるならそれはみゆきにとって至福の喜びだろう。

しかも音楽事務所社長の叔父が絡むとなったら、ちゃんと世間に発表されて、CDになったり有線で耳にしたり、沢山の人に聴かれるようになるのだ。

「じゃあ夏休みは空けておいてくれ。叶には主に雑用をやってもらうことになる。それから……」

「え？」

「いや、後で話す。それから急で悪いが、来週の土曜日に打ち合わせをするので事務所のほうに來い、以上だ」

「あ、はい」

みゆきが返事をしている間に電話は切られた。しかしそんな事も気にならない程、みゆきは舞い上がっていた。

東京都M区

「理江さん！ 久しぶりい」

七月二十日、ランチタイムのカフェで再会した旧友に手を振ったのは十九歳の片桐実也子だった。

待ち合わせ場所を指定したのは実也子のほう。ここは七十年代風の昔気質の店。マニア的なファンも多く、十八時以降にはバーになる為幅広い年齢層が入り交じる場所だった。

店の名前は「PREDAWN」といった。

「やあ、実也。半年ぶりだっけ」

木田理江は二十二歳。数年前都内で出会ってから、気が向いては相手を呼び出してお茶する間柄だ。実也子とは年が離れているが気兼ねなく話ができる友人であり、姉のような存在でもある。

焦茶色のパンツスーツと、背中までのびる黒髪。その髪をかきあげる指先と、煙草をくわえる唇だけは赤くて艶やかさをもし出していた。実也子が「かつこいーっ」と騒いでしまうのも無理はない。「元気でやってる？ あれ？ 君ってまだ高校生？」

理江はアイスコーヒーを飲んで一息つくと実也子に尋ねた。

「うっん。この春、めでたく卒業したんだよー。誕生日もきてもう十九歳。大人になったでしょ？」

指を組んで科をつくり、ウィンクして見せた。そんな実也子を冷めた目で見て理江は呟く。

「そのわりには、ぜんっぜん、色気ないね」

「ガーンツ。ひどいよ、それー」

実也子はたははは、と苦笑する。

それに合わせて、理江も目を細めて笑った。実也子の変わらぬ様子を確認して、安心して笑った。

「…おしゃれする暇もないか。忙しいもんね。毎週毎週、週末には東京に通ってさ」

「……」

理江の言葉に実也子の表情が曇った。気付かずに理江は話を続ける。

「それとも、高校卒業したんならもうこっちに居るの？ センセイのところに住んでるとか？」

「理江さん……」

「君がこつちに通い始めたのって、十三のときだっけ？ 六年間も、ご苦労だね、ほんと。でもやっと音楽だけに打ち込む生活が始まるってことかな？」

理江の手が無意識に煙草へのび、赤い唇から白い煙が吐かれた。実也子のことを語る口調には激励と期待が含まれていて、そのことが余計に実也子の胸を痛くした。

「ごめん、理江さん。…私、やめたの」

さりげなく言おうとしたつもりなのだろうが、その表情には痛々しさが残ってしまった。

「……？」

「やめたの。先生のところ」

目を見開いて見据える理江に、実也子は苦笑してみせた。理江は、信じられない、と口の形だけで呟いた。

「なにそれ」

聞いてないわよつ、と吐き捨てる。

「あのセンセイ、君を破門させたの？ それとも他の七人が何か画策したとか？」

「違うよ。私から、やめるって言ったの」

「信じらんない」

「ホントだってば」

「それ、いつのこと？」

「二ヶ月前。五月。…だからもう、こつちにもあんまり来てないの。今回は理江さんに会う為に早起きして電車に乗ったんだよ」

知らせるのが遅くなってゴメンね、と実也子は頭を下げた。

そう言われると理江としては深くつつこめない。想像以上に動揺している自分を抑え付けるために深呼吸をして、椅子に背をかけた。

「…今は何してるの？」

「来年、地元の大学を受験しようと思ってる。現在受験浪人中。あと稼業の手伝い。…今まで全然そんなことできなかったから、散々わがまま言って困らせてきたから恩返しも含めて。両親とか、弟と

か、最近会話する機会が増えてさ、楽しいよ」

やはり痛々しさが残る表情だけど、でも、家族のことを話す実也子の笑顔はどこか吹っ切れたようにも見えた。

新しい幸せな時間を見つけた、自然に込み上げる微笑みは嘘ではない。

はーっ、と思い切り溜め息をついた後、右手を大きく広げ、その手で顔を隠し、理恵はくすくすと笑い出した。

「あんた、今までセンセイのところで音楽一筋だったもんねー」

（…二ヶ月前のことじゃ、まだ聞き出すのは無理か）

六年間続けてきたことを自らやめたというのだ。しかも半年前に会った実也子は不動の意志を持った瞳で、将来を語っていたにもかかわらず。この半年の間に、何が実也子を変えさせたのか。

「…でも、さ。実也。楽器は続けていくんでしょ？」

理江の言葉に実也子は軽く吹き出した。

「それがね、笑っちゃったよ、私。先生の所、飛び出したときは”もうやめる”とか言ってたのに一週間後にはもう弓を握ってた。日課って怖いねえ」

「あははっ、なんだそりゃ」

二人は一緒になって笑った。が。

「……」

ふいに、実也子は顔をあげた。意識の先はすでに理江との会話ではなく、別のことに向けられていた。

「実也？」

「……」

実也子は店内に視線を巡らせて、自分が何に気を止めたのかを確認する。

「理江さん」

無意識に呟く。多分、理江の返答など期待していないだろう。

それでも、尋ねてしまう。

どうして自分が、こんなにもこれを気にしているかさえも知ら

ずに。

「……この曲、何？」

東京都M区

「噂になってますよ。慎也が美人と付き合ってるって」

夏休み初日、コーヒーカップを片手にわざとさり気なく言ったのは二十二歳の山田裕輔だった。

向かいに座る日阪慎也は二十五歳。二人は某市にある音大生で同級生である。祐輔の地元は神奈川で、明日帰省予定なので顔の見納めとばかりに悪友同士グラスを傾けていたのだ。

「……………発信源は？」

かなりの沈黙の後（追いつめる為に祐輔は何も言わなかった）、慎也はトーンの低い声で尋ねた。答えは分かっていたが言わずにはいらなかった。

「もちろん、沙耶です」

「あの女……」

祐輔の回答の後、恨みがましく慎也が吐いた“あの女”とは、祐輔の彼女であり、そして慎也の妹でもあった。

沙耶も祐輔と学科は違うものの大学の同期である。そして前述した通り祐輔と慎也は同級生である。ということはつまり慎也は三歳離れた妹と同級生だということであり、それは少なからず慎也の悩みの種でもあった。

「ロリコン疑惑が晴れて一安心、とも言っていました」

「何であいつが安心するんだよ」

「いつ犯罪をおかすか、気が気じゃなかったんじゃないですか？」

「あのなあっ！」

ばんつ、とテーブルを叩いて凄んで見せても、通用させるには相手は慎也の弱みを知り過ぎていた。

「……言っとくけどなあ、あの子は当時七歳だったけど、計算すれば現在二十一歳っ。おまえらと、ひとつしか変わらないんだぞ？ 誰がロリコンだっ」

ロリコン疑惑とは。

慎也の部屋の一画には、十四年前、『天才』と騒がれたピアニストのスクラップ記事が無数、壁に貼ってある。その天才ピアニストとはわずか七歳の少女だ。慎也は十一歳のとき同じコンクールに出場したことがあり、そのときの少女の演奏にかなりのショックを受けたという。

しかしそのコンクールを境に、少女は音楽界から消えた。

そのときからずっと、慎也はその少女を探し続けているのだ。

十四年もの執着に、ロリコンというレッテルを貼られても不思議じゃない。

「で。その美人と付き合い始めて、女の子のことは吹っ切れた、と？」

次のからかいネタを捕まれたわけだ。

「言っとくけど、付き合ってるわけじゃねーぞ。別に」

「……へーえ」

にやり、と祐輔が笑うのを見て、ようやく慎也は墓穴を掘ったことに気付いた。片思いネタはさらに遊ばれやすいものだ。

「それよりっ！ おまえ、明日っから帰省すんだろ？ 休み中に沙耶に変な虫ついてても知らねーぞ」

見え見えではあるが強引に話を逸らそうとした慎也。しかし祐輔は真正面にその台詞を受け止め、

「ご心配なく」

寸分の揺るぎもない声色で言った。慎也は返す言葉がなかった。友人と妹が恋人同士、というのも複雑な心境ではあるのだ。しかもその二人が最強のコンビであるものだから慎也の立場は例え年長者であっても危ういものと言える。

妹は大人しい部類に入る性格だが気が弱いとは言えない。口数が少なく何を考えているのか分らないところがある。一方、祐輔は見ての通り意地と性格が悪く、不特定多数と付き合う人間ではないが不思議と周囲から信頼されているふしがあった。

変わり者である二人を引き合わせたのは慎也自身だが、最強コンビをつくらせてしまったことに後悔することもあるのだ。

「そーいや、進路希望調査あつたじゃん？ 祐輔、何て書いた？」

「“ぴあの教室のせんせい”」

棒読みで即答された。

「本気なのか？」

慎也は声を荒げた。否定的な声だった。

「ピアノ教室の先生」が悪いわけじゃない。立派な職業だ。ただ、山田祐輔は学部内にその名が知れ渡っている程の腕の持ち主で、今秋選考会が行われるD A A D（ドイツ学術交流会）の給費留学生の候補に挙がっている一人でもある。

惜しい、と思ってしまうのは自分の思考が俗っぽいからだろうか。慎也の言いたいことはわかっていようで、祐輔は苦笑した。

「気の乗らないことって、長くは続かないでしょう？」

「まさか、沙耶と離れるのが嫌で留学したくない、なんて言うなよ」かなり冗談で言っただけだが祐輔は肯定した。

「それもありますけど、何より”演奏家”として食べていくつもりがないだけです。…もっとも、僕が興味を持つくらい楽しませられる環境だったら話は別ですが」

「でもなあ……」

「……」

ふと、祐輔の表情が変わる。何かに気を取られたようだった。目

を見開いて、心なしか首をもたげた。

「祐輔？」

「シッ！」

黙るように右手で指示される。祐輔らしくないその勢いに慎也は沈黙を決め込み、祐輔の次の言葉を待った。

たっぷり三十秒後。

「……この曲」

「え？」

「今、流れてる曲。有線……いや、違います、よね」

どうやら祐輔は店内のBGMに気を止めたらしい。慎也はあまり気にしていなかったが、かなり小さい音で曲が流れていた。この時間は込み入り時で、人の喧燥のほうがうるさく聞えるのだ。

祐輔はその曲を聴いて、何やら考え込んでいた。

東京都M区

「よ。もう来てたのか」

七月最後の土曜日、待ち合わせに遅れたにもかかわらず悠々と現れたのは十三歳の小林圭だった。

待ち合わせは夕方六時。場所は歓楽街、の少し外れた場所。まあ健全な飲み屋街だが、夜になると決して安全とは言えない街だった。まして中学生が出歩く場所ではない。

「よーお、圭。とうとう、お互い中学生になったなー」

高居竜也、他二名は圭の登場を迎えた。

小林圭は生つ粋の名古屋市民で、毎年夏休みになると東京の祖父の家へ遊びに来ている。東京に住む竜也は五年前から夏休みの遊び友達だった。今年、二人揃って中学生になったわけだが、やはり一年ぶりに会う友人は少し変わっていた。色の薄い短髪を立てて、耳にはピアス。

久しぶりに会う友人の変貌にも圭は驚かなかった。

（待ち合わせ場所、指定されたときから予測してたからなあ）

圭の地元にも、この手の友人は結構いる。中学生になったからって、派手に遊び始める人種。そんな奴らとの付き合い方は知ってる。中学生らしからぬ冷めた瞳で”友人”を眺めてしまう。圭はそんな自分を、すっかり自覚していた。

「竜也あ、店、行こうぜー」

「おー。圭も行くだろ？」

センパイとか集まってる場所なんだ、と竜也は言った。

「…いいよ。連れてってよ」

圭は笑って答える。

適度につるんで、決して仲間意識を持たない。客観的になれる立場にすること。これが重要。

圭の前を歩く三人が、慣れた手付きで煙草を吸い始めた。

「圭は？」

一本差し出されたが圭は即答した。

「遠慮しとく」

「真面目だねー」

冷やかすように言われたが、別に圭は気にしていない。

「そういうことにしとくよ」

俺の前では吸うな。そう言えるほど親しい仲でもないし。

連れが、ふー、と吐いた煙から顔を背ける。気付かれないようにさり気なく息を止めた。息苦しさ顔に顔をしかめてしまうのは仕方のないことだ。

実は、圭自身も煙草を吸っていた時期がある。中学に入ってすぐ

の頃だった。誰かとつるんで、なんていうのは趣味じゃないし、そもそも違法行為であることはわかってる。何故吸うのか、と問われるなら圭は、好奇心、と答えるかもしれない。絶対に口にはしないけれど、ストレス解消であることも確かだ。

誰の前でも吸わなかったし、自分の部屋以外には持ち出さなかった。勿論、匂いがつかないように細心の注意を払った。

しかしバレた。

『煙草って、喉、悪くするぞ。肺活量も少なくなるしな』

流石、というか。

父親は圭の性格をよく見抜いていた。事実、その言葉だけで圭はあっさりと喫煙をやめた。

圭は自分の？声？を大切にしている。それこそ、誰にも言わないけれど。

だから、自分が大切にしているものの為なら、何かをやめるなんて、とても簡単なことなんだ。

「タツ。俺、ちよい寄り道。ケータイで連絡するから、先、行つてくれ」

「おう、たまに補導員いるからな。気を付けるよ」
「わーってる」

竜也たちから離れたのは煙草の匂いのせいだけじゃない。圭が東京へ来る度に寄っている場所がすぐ近くなので、ついで行つてみようと思つたのだ。街中の一画、素人バンドの路上演奏のメッカがこの辺りだった。しかし、その場所へ向かおうとした圭の足を止めたものがあつた。

突然、耳に入ってきた。

通り沿いの、店内に流れる曲。

（……有線？ ……じゃ、ないよな）

父親の職業柄、自宅到有線が引かれている小林宅。結構チェックしているにも関わらず、今流れているのは聞き覚えの無い曲だった。打ち込みの、…完成率が決して高いとは言えない、まるでデモの

ようなインスト曲。

(…誰だ?)

無意識に立ち止まった足はなかなか動いてはくれなかった。

東京都M区

「本当に久しぶり、キョウさん」

七月最後の日曜日。深夜のバーでグラスを鳴らした後、そんな挨拶をしたのは三十二歳の長壁知己だった。向かいに座るのは、簡単に説明すると「派手なオヤジ」であった。ちぢれた長髪を無造作に結んだ頭。ちなみに髪の色は黒のメッシュが入った金に近い茶パツ。顎を隠す髭。夜なのにサングラスをかけていて、アロハにも近い柄のシャツと膝までのズボンを履いていた。口元には常に不敵な笑みを覗かせていた。

「にしても、おまえも年とったよな」

キョウ、こと石川恭二はガハハと愉快そうに笑った後、ウィスキーグラスを口に付けた。

「お互い様だろ」

こんな風に切り替えしがうまくなったのは、恭二の言う通り年をとったせいだろうか。

すっかり相手の誕生日を覚えていた知己は「先日、五十になったばかりのくせに」と付け足した。

「やかましい」

ゴン、と容赦なく拳が飛んできた。本当に容赦がなかったので知

己は必死で避けた。

本気で当てようとしていた恭二は知己が避けたことにむくれて、バツが悪そうな顔で手を引っ込める。少し間を開けてから、からんとグラスを鳴らした。

「でもまあ、最後に会ったのは五年も前だしな」

サングラスの向こうの両眼が懐かしそうに笑う。

「…もう五年か」

恭二と違って、知己は笑うことができなかった。

まだ、笑えなかった。

「康男が死んでバンドが解散になった即座におまえは地元引っ込んで、それ以来だもんな」

「嫌味？」

「そのとおり。…でもまあ、おまえが康男に心酔していたのは分かっていたし。あのときの心痛は俺達も同じだったし、止める理由はなかったな」

バンドは事実上の解散。知己は詳しくないが、再結成を望む数多くの声があったらしい。

「キョウさん。結構派手に活躍してるみたいだな。たまにCDのコレジットで名前を見るよ。次郎さんも別のバンドでジャズやってるみたいだし」

「そうそう。省吾もプロデューサーなんてやってるしな」

くくつ、と不敵な笑みを恭二は返したが、それは途中で不自然に止まった。恭二は厳しい目つきで知己を睨み付けると、わざと低い声で言った。

「…おまえただだよ。この業界から離れていったのは責める口調だった。」

「……」

「聞いてんのか」

「………」 彼女”は、元気でいる？」

突然、話がすっとんだ。しかし知己自身に話をずらそうという意

図はなかった。

知己のあさつてな方向の会話進行に恭二は苛めるのを諦めたのか、溜め息をついて肩をすくめた。

「ああ。時々『sing』って店で歌ってる。折角、こつちに来たんだ、会って行つてやれよ。おまえのこと、気にかけてた」

「…ああ」

「今、何やってんだ？ おまえの腕は正直惜しかったから、こつちで続けて欲しかったんだがな」

「地元で適当にやってる。もうブランク五年だ。腕だつて腐つたよ」
「とにかく！ ウチの業界に入るならアイサツに來い。でないと苛めるぞ」

「…お手柔らかに」

知己には全くその気は無い。それでも穏便に交わそうと曖昧な答えを返した。

本当に、そういう気の回し方をするようになった自分は、年をとつたと思う。

「この曲、気に入ったのか？」

「え？」

「おまえの癖。気に入った曲が耳に入ると、自然に指が机叩いてる。ドラムパートだけ、妙に正確に」

尊敬を通りこして呆れるよ、と恭二は笑ったが、知己は店内に流れるBGMに気をとられていた。

「…知らない曲だけど、なんだろ」

東京都M区

「今流れてる曲、誰の何ていう曲？」

七月末日、ギターを背負ったままカウンターに突進してきたのは十六歳の中野浩太だった。

「PREDAWN」店長・寛稔は、カウンターを陣取る年配層の間から高校生が顔を覗かせたことに少なからず驚いた。そう、少なからず。

「浩太。高校生が出入りする時間じゃねーぞ」

顔見知りなのだ。店長は、浩太の割り込みに気を取られた周囲の客には苦笑してごまかした。

「コータっ！ 何、やってんだよつ。おいてくぞっ！」

背後からバンドの仲間が声をかけてきたが、浩太は素気なくそれをあしらった。

「先、行つてろ。明日の集合時間、決まったらケータイ入れてくれ」

「おまえも早く帰れっつーの」

お怒りモードに入った店長の声が頭上から響いた。その声の低さに、浩太は肩をすくめながらも頭をあげる。

「十七時以降は店出入り禁止だつて言つたろ。犯罪だぜ」

「酒なんか、飲んでないだろ」

「それでも、だ。さっさと帰んな」

そう言つて店長はカウンターの奥へ引き籠もろうとする。

「わーっ、待てっつて。この曲、誰の曲？ それくらい教えろよ、ケチっ」

すると。

店長の肩が震えた。

くるりと振り返つたその表情は不敵に笑っていた。

「まさかお前が五人目とはなあ。しかも締め切りギリギリ……」

そう言いながらも口元がほころぶ。笑いを噛み殺していた。

「なにそれ」

「浩太と同じことを尋ねてきた人間が、この三週間で五人いたつていうこと」

五人。

多分、このBGMに耳を止めた人間はもつと居ただろう。しかし何の曲かを突き止めようとした人間はたった五人だった。

その数字が多いのか少ないのか、浩太には分からない。

「浩太、おまえ、ギター始めてどれくらいだっけ？」

「え？……2年くらいだけど？」

「明日ヒマか？」

「……？まあ、夏休みだし」

意図が分からず答える浩太に、店長は一枚の名刺大の紙切れを手渡した。

「八月一日　つまり明日、午前十時にこの場所へ行ってみな。そうしたら教えてもらえるさ」

はあ？と浩太は眉をしかめた。ただ、先程流れていたBGMが何なのか尋ねただけじゃないか。それこそ、デッキからCDを取り出して、見せてくれるだけで済むことなのに。

「なんだよ、それ。店長、知ってるんじゃないの？」

「俺も教えてもらえないのさ。……さあ、用が済んだらさつさと帰れ。夜遊びを覚えるなんざ五年早えぞ」

店長はさつさと仕事へ戻ってしまった。浩太もこれ以上は聞き出せないだろうと悟る。

店長から手渡された紙には、「八月一日午前十時」という殴り書きの文字と、住所と建物の名前、それから「第三四会議室」と書かれていた。

（一体、何なんだ……）

混乱する浩太に、店長は最後にさらに訳の分からない言葉を言った。

「あ、そうそう。その名刺の場所へは楽器、持っていけよ」

「はあ？　何で？」

「もう一つ、条件がある。このことは誰にも言つな。わかつたな」
「だから何でっ」

浩太の更なる疑問は周囲の喧燥に掻き消され、店長には届かなかつた。

店長も仕事が忙しそうだし。

（しょうがない、…帰るか）

溜め息を一つ吐いた後、浩太は踵を返した。
ドンっ

「あ、悪い」

誰かにぶつかった。こちらの落ち度だったので浩太は素直に謝つた。

「いえ、こちらこそ」

浩太とぶつかったと思われる人物、眼鏡をかけた少女が反射的に頭を下げていた。

中学生くらい…に見えるのは浩太の観察力が足りないせいだろうが、飾り気のない服装が場にそぐわないように思えた。

二人の会話はたったそれだけで、少女は慣れない所でおどおどするよつに店の奥に入つていった。

* * *

「店長」

少女はカウンターの一番端に座った。彼女は大声を出すのが苦手
で、この呼びかけも届かないかもと心配したが、店長は気付いてく

れた。

「や。みゆきちゃん、こんばんわ」

店長は愛想良い表情を見せた。

「こんばんわ。…どうでした？」

「ついさっき、五人目が来たよ。五人とも見所があると思う」

バサツ、と店長は叶みゆきにファイルを手渡した。勿論、例のBGMに関して尋ねてきた五人のデータだ。正確に言うと四人のデータ、プラス、五人目の名前。五人目は下手に知り合いなだけに、詳細は後で書き足そうと思っていたのだ。

「五人目のことは今夜中にメールするよ。鼎のところでいい？」

「あ、私のところにもc.c. いただけますか？」

「了解」

「ありがとうございます。宜しく願います」

用件が済み、とつとと帰ろうとするみゆきを店長は呼び止めた。

「みゆきちゃんも大変だねー。あの堅物オヤジに捕まって。…あー、みゆきちゃんって十五歳だったよね？ 本当はこの時間は立ち入り禁止なんだよー。鼎によく言っておくからさ。こんな時間に、女の子寄こすなら自分で来いって」

「おじさんは顔が知られてるから。下手に動きたくないそうです」
申し訳なさそうに苦笑して、みゆきは「PREDAWN」を後にした。

都内某所。 八月一日、午前九時四五分

長壁知己は指定された建物の前に立っていた。

「PREDAWN」の店長に貰ったメモと見比べ、間違いのないことを確認する。

（「noa音楽企画事務所」……？）

一応、元業界人の知己としては、知らないはずが無い名前だ。

何故、こんな所に呼び出されなければならないのだろう。不審に思うのは当然だった。

ガラスの自動ドアをくぐると、そこそこに広いロビーが広がっていた。右手には受付があり、知己はとりあえずそこへ向かうことにする。

（…あれ）

受付には先客が居た。後ろ姿で女性とわかる。多分十代だろう。そして何より目を引いたのは、隣の大きな楽器。

（弦バス？）

弦楽器特有の形、茶色のソフトカバー、そしてあの大きさ。

知己にとって馴染みが無いわけではない楽器が置かれていた。多分、その女性のものだろう。それにしても、あの楽器は長さ一八〇cm以上あるのに、身長一五五cm程度の人間、しかも女性が扱うには大変な楽器だと思うのだが。

とりあえず知己はその女性の後ろに並んだ。受付で交わされる会話が耳に入ってきた。

「すみません。コレ、見せれば通していただけるとうかがったのですけど」

（！）

女性が受付に差し出したものは、知己が現在右手に持っているものと、全く同一のものだった。

「はい、三階の三四会議室です。エレベーターでどうぞ」

丁寧な受付嬢の対応に彼女は頭を下げた。それから、よいしょ、と楽器を肩に抱える。やはりかなり大変そうだが、楽器の扱いには慣れているように見えた。

「…おい」

知己は思わず声をかけていた。

「え？」

振り返った彼女は、化粧つ気はなく活発そうな雰囲気を持っていた。突然呼びかけた知己に対する不信感はない。知己は自分が持ち込んだメモを見せた。

「持とうか？　行き先は同じらしいから」

彼女はメモを見て少し驚いた表情を見せる。次に目的が同じだと分かると、知己と目を合わせて人懐っこい笑顔を見せた。

「ありがとうございます」

はつきり断わられたわけだ。そのことに知己は少々意外に感じた。彼女の表情には変わらず不信感はない。遠慮されているわけでもなさそうだ。知己には断わられた理由が分からなかった。

「重いだろ？　…」

「うん。でも、自分で扱えない楽器を相棒に選ぶなって、先生の教えだから」

何故だか嬉しそうに微笑んと言う。

彼女の発言を逆に言い換えるなら、相棒に選んだ楽器は自分で扱えなければならぬ、ということになる。でもそれは、知己の手助けを断わる理由にはならない。

…しかし彼女には、もしかしたら彼女なりの戒めがあるのかもしれない。

知己はちよつと言葉に悩んで、

「へえ。厳しくて、いい先生みたいだな」

と、言った。それに対し彼女は過敏な反応を示した。

「でしょ？　でしょ？　私もそう思う。……尊敬してる、自慢の先生なの」

まるで自分のことのように、口元をほころばせて嬉しそうに微笑む。知己もその笑顔につられて笑った。

二人はエレベーターホールまで来ると、一度立ち止まった。

ポーンという音と共に一つのボックスが開き、背広を着た中年男性が数人降りてきたところだった。いかにも会議が終わった後、というような風景である。あまり自分の周囲では見慣れない光景に知己と女性は顔を合わせて小さく笑い合った。

人間が降りきって無人になったエレベーターのドアを知己は素早く抑え、彼女に早く乗るよう動作で示した。重い楽器を運びながらもエレベーターにたどり着き、知己も中に入って扉は閉められ、そのまま「3」のボタンを押した。

「ありがと。私、片桐実也子」

一息ついて改めて自己紹介。

「長壁知己」

片桐実也子は自分が十九歳であることを述べた。知己はその年代の女性と会話する機会など全くないが、実也子の人柄はそれを感じさせない。もしかしたら実也子のほうが、知己くらいの年代と話をすることに慣れているのかもしれない。

「おさかべ…、って、長い壁って書くほう？」

「ああ」

実也子は、むー、と少しの間考え込むと、知己を仰いで真面目な顔で言った。

「じゃあ、”長さん”、かな」

どうやら呼び方を検討していたようだ。そして決定されたいい。…何でそーなるんだよ」

命名された初めてのあだ名に、知己はくすくすと笑い出した。

「まあまあ、気にしない、気にしない」

一方、実也子は長さん長さんと繰り返し呟いている。慣らしているようだ。

「あ、ねえ。もしかしてそっちもPREDAWNで引っかけたクチ？ 作曲家一人の名前尋ねただけなのに、楽器持ってこいって。何なのかな？ 一体。…あれ？ でも持ってないね」

「ああ。俺がそこそこに経験ある楽器って、ドラムスだから。さす

がに持ち歩きはできないだろ？」

「あはは。それはそうだねー」

チン。エレベーターは三階にたどり着いた。

都内某所。八月一日、午前九時五一分

高い声がロビーに響き渡った。

「だーかーらーっ！ 呼び出されたのはこっちなんだよっ！」

それは山田祐輔が受付の女性にメモを差し出そうとした瞬間のことだった。

キーンと響いたその声は気持ち良ささえ覚える響き方だった。

「……」

だがいくら気持ち良く響いたとしても、驚いたことには変わりない。祐輔はメモを落とし、受付嬢も来客対応中にも関わらずその声の源へ目をやった。

丁度、正面玄関の横。この会社の警備員と思われる男がずいぶん小柄な人影を取り押さえているところだった。

「君、まだ小学生だろうっ。こんな所でなにしてるんだっ」

「？こんな所で働いてメシ食ってんのは、あんたのほうだろうっ？」

それに、俺は中学生だっ！」

祐輔はその会話を聞いていて、思わず笑ってしまった。なんて口の減らない中学生だ。

微笑ましい、とは言えないがそれに近い感情を抱いてしまう。そして。

(…男っ！？)

かなり遅れて祐輔は驚いた。ショックも大きかった。

高い…女声と思っていたのは勘違いで、声の主は少年。

変声期前の、ボーイソプラノ。それに。

(…すごい声量。よく通ってる…)

感心を通り越して感動してしまう。

「ほら、これっ。俺は今日、呼び出されたんだっ」

(…っ！)

遠目ではあるが、少年は警備員に何やら紙を見せているようだっ

た。その紙に何が書かれているか、祐輔には推理することができた。

「……………」

ふむ、と祐輔は三秒程考え込んだ。

本来、人助けなんてものは祐輔のガラではない。

にも関わらず思わず足が動いてしまうのは、少年のその声と、どこから来るのか自信の在り方と、気性に興味があつたからと言い訳しておこう。

「あの」

強い口調で警備員を呼び止める。

「何だっ」

「本当ですよ。そのメモを持っている人間は、今日、呼び出されています」

自分自身が不審人物と思われないように、祐輔は愛想笑いを向けた。

「助かった。さんきゅー、……えーと名前、なんつーの？」

「ああ、山田祐輔と言います」

件の小学生……ではなく中学生と隣に並んで仲良く歩いているのは当然の成り行きだろう。目的地が同じなのだから。

「俺、小林圭」

そう名乗る表情も自身に満ちていて快活だ。人を引き付ける力がある。

「祐輔、変わってるって言われたい？俺みたいなガキ相手にも敬語遣ってさ」

何気に呼び付けにされた。少し複雑ではあるが、相手が圭だと悪い印象はない。

「これは癖なんです。誰に対しても」

ついでに「変わり者」扱いされているのも本当だが、声に出しては肯定しなかった。

二人はエレベーターに乗り込み、三階へ向かう。気持ちは分かるが、圭はエレベーターの壁のカウントアップしていく数字を目で追っていた。しかし途中で飽きたのか首が痛くなったのか、祐輔に向かい直して口を開いた。

「にしてもさあ。誰の曲か尋ねただけでここまでつれてこられるとはね」

「同感です。…僕は帰省中だったんですけど、結局戻って来てしまいました」

朝、ここに来るかどうかが三十分ほど悩んだが、結局祐輔はここにいる。折角、ここまで来たのだから、せめて知りたい情報はしっかり押さえないければならない。

「え？祐輔ってどこの人？」

東京人と思われていたのだろうか。圭は意外そうに尋ねた。

「横浜です」

「なんだ、すぐ近くじゃん。俺なんか名古屋だぜ？」

「名古屋から来たんですか？」

これには祐輔も本気で驚いた。

「いや、今はじーちゃん家に泊まってるんだけど。それに……、あつ、そうそう。同じ経緯でここに来たなら、楽器を持ってこいって言われなかった？ 見たところ手ぶらのようだけど」

確かに、PREDAWNの店長にはそう言われた。しかし祐輔はその場で「無理です」と答えた。

「……さすがにピアノは持ち歩きたくないです」

苦笑しながら言う。

「なるほどなっ」

圭もにかつと笑ってみせた。祐輔が視線で問うと、圭はすぐに察して含み笑いをした。

「俺はちゃんと楽器、持ってきてるよ」

「……？ 手ぶらに見えますけど」

「楽器は俺自身だよ」

演出を狙って圭はわざとそこで息をついた。

「俺の喉が、楽器なんだ」

都内某所。 八月一日、午前九時五九分

（遅刻だなー、これは）

中野浩太は早足でその建物に駆け込んだ。

受付を見つけ、PREDAWNの店長からもらったメモを見せたらすぐに通してくれた。浩太がエレベーターへ向かおうとするのに入れ違いに、オレンジ色のスーツを着た女性とすれ違う。ものすご

い形相で駆け足で、そのまま受付カウンターに激突しそんな勢いでまくしたてた。その迫力に浩太は思わず目で追ってしまった。

「ねえっ！ どうしよう、社長、怒ってるよ」。みゆきさんが来たら、直接三四会議室に行くように伝えて」

受付の女性は気心が知れているようで、落ち着かせるように笑った。

「はい。珍しいね、彼女が遅刻って」

「だよねー、希玖さんはもう来てるんだけどさー。じゃ、よろしくね」

どうやら駆け寄った女性もここの社員らしい。会話が筒抜けである。

そんな風景を後にして、浩太はエレベーターに乗り込み三階で降りた。難なく三四会議室を見つけて、その前に立つ。

この時、浩太が全く気付いてなかった真実があった。

PREDAWNで耳にした曲。妙に気になって店長に誰の曲か尋ねた。そうしたら今日ここへ来るように言われた。面倒臭くてやめようとも思った。それでも。

浩太は、あの曲をもう一度聴きたくて、今、このドアの前にいる。

出会えたのは、決して運命などではなく、本当にささやかな偶然。少なくとも数百人は耳にした曲の、さらにその先を知ろうとしたのは彼らだけだった。

彼らは。

“ K a n n o n ” の下_に集_つた。

5 話

半月前、休日の昼までベッドの中で情眠を貪っていた中野浩太は一本の電話で起こされた。

「机の上にある書類を持ってこい」

有無を言わせない口調は兄のものだった。浩太の兄は建築関係の事務所に勤めていて、自宅からは電車で駅六つの距離だ。

抜け切れていない眠気も手伝って、浩太はあっさり断わった。が、電話の向こうで実兄が現金をちらかせると、浩太はすぐにその命令に屈した。兄は浩太が愛用ギターの弦を交換したばかりでお金に貧していたことを知っていたのだ。

一時間半後に書類を持って現れた弟に、兄は用意していた別の封筒を手渡した。すると、

「それ、隣の病院の352号室に入院してる木下に渡したら帰っていいぞ」

さらにおつかいを命じられた。ここまできたらしょうがない、収入を得るためには少しの労働は仕方ないだろう。浩太は兄の仕事場の隣にある病院へと向かう。

その病院は古い建物で周囲の緑が多く、病院というよりは保養施設といった感じだった。浩太は言い付け通り木下なる人物に封筒を渡した。（話を聞くと兄の同僚で、入院してもなお仕事を持ち込まれているようだ）少しの同情と世間話の後、浩太は病室を後にした。そのときだった。

「こんにちは。誰かのお見舞い？」

突然、廊下で話し掛けられた。

色白の、折れそうな細い肩の、人懐っこい笑顔の、少年。

それが、彼との出会いだった。

東京都G区。十二月九日。午後七時十三分

日辻篠歩はいつもの喫茶店で、いつもの人物を待っていた。

すでに外は暗いが、日の短いことに驚くことはない。通りのネオンはいつに増しても派手で、赤と緑が入り交じっている。もう十二月。街はクリスマス一色だった。行き交う人はコートとマフラーを身に付け、体を小さくさせている、そんな季節であるから。

あんなに暑かった夏が嘘のようだ。

と、そこまで考えて篠歩は寒暖の移り変わり ”四季”の根元である地球の公転と太陽の偉大さに思案を巡らせた。

(……………)

自覚はある。これは現実逃避だ。

寒さに負けない賑やかさをもっている外の景色とは裏腹に、どんよりとした空気がここにはあった。篠歩の、テーブルについた片肘の上に乗る顔は眉間に皺が寄っており、左手の指先はトントンとソーサーを叩いている。篠歩は誰が見ても苛立ちが伝わってくる雰囲気醸し出していた。

彼女は某新聞社社会部勤務。現在ここにいるということは、定時で帰ってきたということになる。

篠歩は先程帰りがけに、気が向いて芸能部を覗いてみた。するとその室内は物凄い騒動になっていた。電話は鳴りっぱなしで、書類は空を飛ぶ。人は駆けずり回っていて、篠歩はぶつかった男にボサっとすんなつ、と怒鳴られてしまった。

理由は分かっている。

つい昨日のこと。

『B・R・』、今までずっと姿を隠してきた人気バンドのメンバー（のうち一人）を他社週刊誌がスクープしたのだ。この三年間の『B・R・』の人気を見れば大騒動になるのも無理はない。

そしてこれは今朝、各マスコミにFAXされた情報だが、『B・R・』の一人が明日、世間のこの騒動を見かねて記者会見を行うというのだ。

誰も口にしないが、マスコミ連中に無理矢理引き出された格好だ。それこそが、篠歩の苛立ちの理由である。

「篠歩」

自分の名を呼ぶ声があった。待ち合わせの相手、八木尋人が現れる。彼はフリーのライターで定時に縛られることはないが、連絡がつかないときは取材に出ているか打ち合わせ中のどちらか。几帳面というよりは神経質な性格、どちらにしろ時間はきっちり守る人間なのだ、が。

「珍しいじゃない、そっちが遅れるなんて」

と、篠歩は責めるでもなく、意外そうに言った。

「あー。途中で捕まってな」

と、こちらも不機嫌な表情で返す。警察に？ という篠歩の思いが表情に出たのだらう、尋人は否定するために背後を指差した。

見ると、尋人の後ろに立つは四人。その四人はあまり、というか全く愛想の無い態度で尋人と篠歩を眺めていた。

構成がまた面白い。三十歳前後と思われる男性、もう少し年齢が下がって目が細く髪を束ねている青年、それと同年代の女性と、最後に多分中学生であろうと思われる少年。ここまで年代がばらついたパーティはそう無いだらう。全く別の要件で、無関係の四人が同時に現われたというのも考えにくい。

「誰なの？」

小声で尋ねたのは、篠歩はその四人と面識が無い、と言い切れる

からだ。

どういう関連のメンバー？ 篠歩は首を傾げた。

「どうやら俺達に用があるらしい。席、移動しよう」

いつものように篠歩の疑問を無視した尋人は有無を言わせない強さで促した。

篠歩と尋人、そして謎の四人組は八人掛けのテーブルへ移動する。篠歩の隣に尋人、向かいに四人が座った。

そのうちの唯一の女性が視線を上げて言った。

「あなたが日辻さん？」

かなり刺のある言い方だった。彼女の年齢は篠歩より下で、二十歳くらいだろうか。

どうやらこの四人は篠歩の第一印象通り、こちらに対してあまり良い感情を持っていないようだ。

（何なの…一体）

きつい視線に居たたまれなくなつて尋人に視線を送るが、先に助けてくれたのは四人のうち年長の男性だった。連れの女性に窘めるように言う。

「あんまり感情的になるなよ」

それを聞いて先程の彼女はきつぱりと反論した。

「だって！ 中野が庇うからどんな人間かと思つたら、結局は報道屋なんじゃない」

（中野……？）

耳慣れた名前が出された。反射的に尋人の横顔に目をやる。どうやら尋人は、この相手が誰で何の用があるのか、ある程度はわかっているらしい。

「…誰なの、あなたたち」

ほとんど無意識に尋ねると、細目の青年のずいぶん丁寧な口調でもやはり厳しい声 が返ってきた。

「僕達は今、名乗るつもりはありません。どうせ二週間後にはバレることですから。今は、中野浩太の仲間、とだけ言っておきましょう

う」

（中野……）

先程も出た。最近、よく聞く名前だ。件のスクープされたバンドの一人が中野という名前だった。よくある名前なのだろう。

「……？」

よく、ある、名前？

（中野浩太？）

「……って、あれ？」

「同姓同名、ってオチはないからな」

「え……？ え、うそっ！ ……ちよつと、尋人っ！」

篠歩はあからさまに取り乱した。隣に座る尋人の腕を掴み激しく揺らした。

ナカノコウタ。まさしくそれこそが、『B・R・』のギタリストの名前だ。

「俺も、すぐそこで捕まったんだよ。中野くんが俺らの素性をバラしたらしいな」

「『B・R・』の素性を先にバラしたのはそっちでしょっ？」

泣き出しそうな剣幕で女性に怒鳴られても、篠歩は状況を把握するのに精一杯でまともな返答はできなかった。

つまり。

篠歩たちと面識のある中野浩太とこの目の前に座る四人が、三年もの間、音楽シーンを騒がせ続けていたバンド、『B・R・』だというのだ。

（うそ……）

篠歩の現在の心情は、困惑はもちろんだが感激も含まれている。新聞記者という職業では勿論、個人という立場でも『B・R・』という存在に惹かれ、追いつけていた。

『音』だけの存在。その正体 彼らが、目の前にいるのだ。『お陰でこっちは酷い被害を被ってるんだからっ』

「……って、…え？」

そこでようやく、篠歩は彼らから恨まれている原因に気付いた。そこに生じている勘違いにも。

「ちよつと待つて…」

彼らに会えたことの喜びに浸ってる場合じゃない。篠歩は我に返って負けないくらいの声を出した。

「ちよつと待つてよ。誤解だつてばッ」

どうやら激しく勘違いされているようだ。

” 私たちの素性を先にバラしたのはそっちでしょっ ”

” お陰でこっちは酷い被害を被ってるんだから ”

ああ、でもそれは、当然の誤解かもしれない、と篠歩は思う。

条件は全て整っているのだから。でもそれは、篠歩にとって、とても不本意な勘違いなのだ。

「言い訳したところで、俺らが諸悪の根元だつて事実是不変ならないぜ？」

すぐ横で尋人が冷静に呟く。その横顔をキッと睨むと篠歩は怒鳴った。

「少しは人間関係の修復に努力しなさいよっ。あんたはッ」

「別に繕わなくても弁解しなくても、付き合う奴とは今でもツるんでるだろ」

「それは尋人の周りの人間ができてるからよ。…まったくもう、昔っから変わらないんだからっ」

篠歩の説教はもう少し続きそうだったが、時と場所に気付いたのか、コホンとわざとらしい咳をした。

「中野くんは何も言つてなかったのか？」

尋人が四人に尋ねた。その質問に対し四人は顔を合わせコソコソ小声で囁き合うと、代表として山田祐輔が答えた。

「お二人のこと、そんなに悪い人じゃないから、とは言つてました

けど」

昨日、五人が集った夜。小林圭、片桐実也子、山田祐輔、長壁知己の四人は中野浩太を吊し上げたのだ。浩太の正体がバレたことの経緯、そして、それをごまかし切れなかった相手。…まあ、浩太を突つくのなんて簡単だけど、と四人は思うがこれは口にしない。

四人が浩太に吐かせたのは、浩太が正体がバレるようなボ力をやらかしたことで、そして浩太の正体を暴きに來た二人の名前。

自分がやらかしたことについては後ろめたくて言いにくいのか口を濁していた。そして八木尋人と日辻篠歩の名前を聞いて「とつちめてやる」的発言をした四人に、浩太はすかさず八木たちのフォロ―を入れた。フォロ―と言ってもその時の四人の迫力に圧され、かなり弱気なものだったが。

「あんまり悪い奴じゃないよ、その二人は…」

「なに言ってんだよ、今回の元凶だろ？」

「そうよっ、中野はお人好し過ぎる！」

圭、実也子に目の前に立たれ、浩太は反論さえもできなかった。

一言だけ、「会えばわかるよ」と言った。

「それだけ？」

篠歩は眉をしかめる。

「ええ。それだけです」

はつきりと、祐輔は頷いた。

「中野くんもけっこう薄情だなー。もうちょっと助け船があつて然るべきだと思うが」

「あんたに言われたくないけどね」

のんきに嘆息する尋人を篠歩が睨む。続いて、

「聞けば、『B・R・』がすっぱ抜かれたことを逸早く浩太に知らせたのは八木さんだそうですけど、その辺りの行動の矛盾が分からないんですが」

と、知己が訊いた。

昨日の朝早く、浩太の自宅に週刊誌のスクープを知らせる電話が

入った。それは八木尋人からのものであり、騒動に巻き込まれないよう身を隠すよう助言したものだということ。

自らがスクープした内容について、そんなことを言うのはおかしくないだろうか。

これは尋人に対する質問だったが、答えたのは篠歩のほうだった。

「だからっ、私たちが、バラしたわけじゃないのよっ」

待ってましたとばかりに言い切った。

「……え？」

「嘘じゃないわ。誓って本当。…信じてよ。確かに、今年の七月から『B・R』のこと知りたくて調査をはじめたわ。でもそれは仕事とは関係なく、純粹に個人的な興味として調べはじめたの。私人じゃ無理だっけ踏んだから、古い友人の尋人にも手伝わせた。でも『B・R』は百戦錬磨のマスコミにも捕まえない存在……私個人なんかじゃとても敵わない相手だったのよ。四ヶ月間駆けずり回ったけど、結局何も分からなかったしね」

「…じゃあ」

「十一月頃だっけ。旧友に誘われて、二人でライブハウスに行ったの」

気晴らしに二人が顔を出した店では、アマチュアのバンドが競うように自分たちの音楽を表現していた。その実力の上下はあるものの、その場所からメジャーを目指していく熱気はどのバンドも同じだ。ほとんどは十代半ばから二十代の若者で、具体的な目標を持たず人達の集まりだった。

奇しくも。

そのうちの一つのバンドのギターの助っ人として、中野浩太が参加していたのだ。

「俺はすぐに分かったよ。『B・R』のギターと同じ癖だっけ」

「癖？」

実也子が首をひねる。

「…あ」

心当りがあるのか、無意識の声を吐いたのは知己だった。

中野浩太のギターの癖は、知己も知っている。当人はそれを「個性」と言っているけれど。

しかし余程の耳の良さでないと分からないだろうに、尋人はそれを聴き取っていた。

「ま、そのことで確信とまではいかないけど、ある程度の予測は立ったわけだ」

両手を広げて尋人は肩をすくめた。すると、ここで初めて圭が口を挟んだ。

「浩太のやつ、まさかそれを指摘されただけでゼロったわけ？ 何の証拠もないじゃん」

「いや、続きがある。俺、そのライブハウスの店長と知り合いなんだ。あのバンドの演奏中にウラに入れてもらって、ちよつと楽屋を荒らさせてもらった」

「えッ、尋人、それ初めて聞いた」

「初めて言った」

「あんだ、そんな泥棒みたいなマネしてたの？」

「物証が欲しかったんだよ。案の定、中野くんのギターケースの開けたら、『B・R・』の楽譜が入ってた。しかも書き込み入り」

ギタリストに限らず、楽器ケースに楽譜をしまいこむ癖を持つ演奏家は結構多い。しかも奥にしまいこみ、そのまま忘れてしまう人もかなりいるのではないだろうか。

尋人の楽屋忍び込みについての告白のあと、奇妙な沈黙が流れた。

「浩太が馬鹿なだけじゃん…、それじゃあ」

呆れた、としか形容のできない言葉があった。

「圭…。それ、ミモフタもないですよ」

「だってそうだろ？ 『B・R・』の楽譜なんてすぐ処分して当然じゃん」

「……実は私もケースに入れっぱなし。中野のことは強く言えないなあ」

「ちょっと黙ってる、話が途中だ」

四人のそれぞれの個性ある反応を見て、尋人と篠歩は笑ったようだった。とりあえず、知己の言う通り話を続けることにする。

「それから一週間。俺は中野浩太の周辺を調べて、裏を取ったわけだ」

「私たち、中野くんに会いに行つたの。…尋人が正体みたりつてずばつと言つただけだ」

「中野くん、思いつきり顔に出るし、な」

「ね」

苦笑する二人。

「浩太らしい…」

まるで目に見えるように、四人は声を揃えた。

そこで篠歩は声を改める。

「でね。ここからが重要。『B・R・』の正体突き止めるつていう、当初の目的は果たされて、勿論、あなた達が疑っているように私が『B・R・』の記事にすることは簡単だったの。一時はそうしようとも思ってた。でも、中野くんに会ったら何か気がすんだし、それに本人が正体がバレるのをすごく嫌がつてたから。…私たちは今まで調べた資料を全て捨てたわ。本当。それで終わりだったの。なのに。昨日、『B・R・』の記事になると聞いて、一番驚いているのは私たちなのよ」

「…どういうことですか？」

「推測でしかないけど、どこかで私たちが『B・R・』について調べているのを知って、耳を欹てていた奴がいたんだと思う。…迂闊だったな」

「その誰かを調べるのは難しいし、今更無意味だ。…こんな事態になつてはな」

尋人は腕を組んで、溜め息をつくとともに背もたれに体重をかけた。それについて実也子が、

「無意味でも、私は知りたいわ。文句の一つくらい、言ってもいい

でしょう？」

と返した。

尋人と篠歩は視線を合わせた。気まずそうな表情を送り、篠歩が覇気のない声で答えた。

「……それは、無理よ」

「どうしてっ？」

空かさず実也子。

一瞬の間があって、

「”ニュースソースは明かさない”。…この業界の絶対の掟だ」

尋人が、低い声で言った。

記事を出す出版社が必ずしもスクープを取ってくるわけではない。フリーのカメラマンなり、一般の情報提供者がそこには存在し、それぞれがモノにしたネタを出版社に売っている。彼らは決して表に名前が出ることはなく、出版社からの金銭と信用だけを糧にしているのだ。それは決して名声などに無欲なわけではなく、スクープされた被害者側に恨まれることを避けるためだ。

そんな難しいことを言わずとも、簡単に言えば「おいしい話は他人には見せない」。そういうこと。

「責任の一端は私たちにもあるわ。それについては謝る。本当に、ごめんなさい。でも、私たちは部外者という立場でしかいられない。今後は見守ることしかできないわ」

悲痛な表情で篠歩は頭を下げた。その肩を、尋人はトントンと指で叩く。

「篠歩。ここ、おまえの奢りな」

「えっ、何でっ？」

いつも通りワリカンでしょっ？ と、器用にも小声で叫ぶ。尋人は篠歩の肩を叩いた指をそのまま目の前の圭に向け、自信たっぷりと言った。

「『B・R』のボーカル、男だよ。賭けは俺の勝ち。差額は後で請求するからな」

尋人と篠歩のやりとりを聞いて、今度は四人が目を合わせて笑った。

* * *

同日の昼間、ホテルで姿を潜めているはずの中野浩太は、サングラスに帽子という格好で外出していた。ベタでお約束な変装ではあるが、結構効果があるようだ。街中の街頭VTRや電車の車内吊り広告は『B・R・』、そして中野浩太のことで持ち切りだというのに、本人はこうして普通に外出できている。もしかしたら浩太の好きなミュージシャンなども、気付かないだけで、こうして街中を歩いているものかもな、などと思ってしまう。ホテルを出るときの叶みゆきの心配ぶりは尋常でない程だったが、現実はこのまんまだ。

浩太の携帯電話は昨日から鳴りっぱなしだった。それは主にニュースを見た外のバンド仲間や学校の友達で、中にはほとんど連絡を取らなくなっていた中学時代の知り合いもいた。珍しい電話の内容は何となく予想がつくもので、そして予想通りのもので、予想外の電話の回数にうんざりした浩太はほとんどの電話を無視し続けた。今朝になつてから浩太が接続を許した電話は、家族からのものと、一本の「例外」だけだった。

「大場か。つまんねー内容なら切るぞ」

浩太のクラスメイト。特に仲が良いというわけではないが、不思議と一緒にいることが多い人物だ。そういえば、昨日の電話の嵐のなか、彼からの電話はなかったな、と思い返す。

他の電話にイライラしていた浩太は八つ当たりも手伝ってあからさまな牽制をした。しかし。

『オレにとっては重要だ。浩太、てめー、五百円返せっ』

開口一番、受話器の向こうから大場は金銭問題を持ち出した。予測していたどの内容とも違うものだった。

「は？」

『夏に、今年も『B・R・』が現れるか否かで賭けしただろ？ おまえ、そのとき俺から五百円巻き上げたじゃん。おまえ自身が『B・R・』ならそりゃ反則だよ、このやろー』

大場は本気で怒っているようだった。

「……っ」

浩太は電話口で大笑いした。頭を抱えて座り込んでしまった。何故だか、笑いが込み上げてきた。

『こんな切実だったのに、何笑ってんだよ。それより五百円っ、マジ、返せよな』

次に会えるときでいいから。そう、大場は付け足した。

そんな気遣いが、とても有りがたかった。

「サンキュ。倍にして返してやるよ」

『余計な借りを作らせんな。まあ、消費税くらいプラスしてくれても、誰も文句は言わんが』

「オーケー。五二五円きっちり返してやるから待ってろ」

『なるべく早くな』

そんな電話で気をよくした浩太は、ホテルでじっとしていられなくなつて外に出たというわけだ。

ただ目的もなく外出したわけではなく、浩太にはちゃんと行き先があつた。

中野浩太には、つい半月ほど前に知り合つた友人がいた。彼のところへ顔を出してみよう、と思つていた。

彼は大抵、ベッドで寝ているか、ベッドの上でノートパソコンを

開いている。

浩太が訪れたときに寝ていても、気配で分かるのか浩太が近づくとすぐに起き出してくる。パソコンを開いているときはすぐに閉じてしまい、何をしているかは教えてくれなかった。

「いつつも、寝てるかパソコンしてるかだよな」

以前、そんな風に指摘したところ、

「どっちも趣味だからね」

と、彼は笑った。

神経研究所附属理和病院。

彼は三ヶ月前からこの病院に入院しているという。元々体は弱いほうで小さい頃から通院していたのだが、とうとう入院させられたというのだ。そして半月前、兄のおつかいでこの病院を訪れた浩太は、偶然彼と出会った。

廊下ですれ違ったとき、先に声をかけてきたのは彼のほうだった。初めはなれ慣れしいヤツと警戒していたが、話してみれば彼はちよつと抜けてるけど筋の通った人柄で好感の持てる人間だった。一部趣味が合うところもあり、浩太は週二回はここへ顔を出していた。「やつほー浩太。すごいことになってるじゃん」

西陽がよく当たる部屋、その窓際のベッドの上で肩の細い少年がくつたくの無い笑顔を見せた。色の薄い髪と瞳の色、そして病室というシチュエーションがその姿を弱々しく見せるが、それらと不似合いな程明るい声を出す。

やはりノートパソコンを膝の上に乗せていて、それをぱたんと閉めるところだった。

彼の言うすごいこと、というのは当然、テレビもラジオも雑誌も新聞も賑わせている『B・R・』について　つまり中野浩太のことだ。

「なに、その格好」

変装用のサングラスと帽子、そんな格好の浩太を見て遠慮なく笑い声を立てた。

「…うるせーよ」

浩太は口を尖らせてその傍らに歩み寄る。

「バンドやってるのは知ってたけど、まさか『B・R・』だったとはな」。昨日の朝ニュース見て、せっちゃん先生も驚いてた。浩太、

『B・R・』好きだって言ってたじゃん？ それって自画自賛？」

あははは、と白いベッドの上で体を折って笑う。

彼は浩太が『B・R・』だと知っても、いつもと同じように話し掛ける。昨日の、知人からの電話に辟易していた浩太がわざわざここに来たのは、彼のこういう性格を知っていたからでもある。

「 希玖」

彼、安納希玖の名を呼ぶ。

今日、浩太がここへ訪れたのは理由があつた。事情があつて今まで尋ねられなかった質問を、希玖にしてみようと思つていた。

「なあ。今更だけど、希玖ってnoa音楽事務所の安納社長の息子？」

この些細な質問を、浩太が今まで訊けなかったのには勿論理由がある。

浩太の質問に、希玖は目を丸くした。

「お父さんのこと知ってたの？」

あつさり、肯定を口にする。浩太はやっぱり、と思つても世の中の狭さを実感した。

「あれ？ もしかして『B・R・』の所属ってnoa？ なんだ、それならそうと言ってくればいいのに。まさか全然気付いてなかった？ でもそれってかなり間抜けだけど」

希玖に呆れられて、浩太は弁解するのを忘れたりもしない。

「俺が『B・R・』だってこと、隠さなきゃならなかったから、今まで迂闊に訊けなかったんだよ」

一般人は、一芸能事務所の社長の名前なんて知らないだろう。希玖のフルネームを聞いたからといって結び付けられるはずもない。「外は大騒ぎなのに、わざわざそんなこと訊きに来たの？ 案外、

暇なんだね」

悪気があるのかないのか、ずばっと言った。

「暇なわけねーだろ。外が大騒ぎなんだから」

そういう言い方もありか、と希玖が笑う。

「ねえ、浩太」

少しだけ声を落とした。

「テレビ、見たよ。マスコミの人も、けっこう痛いところ突いてきてたね」

世間を欺き続けてきたことについてどう思いますか。

そのことが、と浩太は視線を逸らす。一方で、分かってくれた人がいたという安堵感もあった。

「…確かに、あれはちよつと効いたな」

もしかしたらあの質問は、芸能人を問い詰めるときの常套句なのかもしれない。よくある質問なのかもしれない。でもその言葉に浩太は傷ついた。

「自分の好きなことやってきたつもりだけど、それが誰かに迷惑かけてるなんて思わなかったな……」

珍しくしおらしい浩太を元氣付けるように、

「誰にも迷惑かけないで生きるなんてできっこないよ。そういう僕も、短い人生のなかでやつぱり後悔したくないから、好きなことさせてもらってる。周囲には迷惑かけっぱなしだし」

希玖はそう言っただけで微笑んだ。しかし希玖の突然の告白に浩太は言葉が失った。

（短い人生　？）

「……………」

浩太が黙り込んだので希玖は視線を上げた。

あつ、と自分の失言に気付く、

「あ、勘違いしないで。僕は放っておけば百は生きる体だよ」

と、あまりにも簡単に訂正する。

ぷちっ、と浩太がキレた。

「てめーっ、質悪すぎだろそりゃーっ！」

希玖の頭を抱え込んで、その首をしめた。希玖は笑いながら悲鳴をあげる。

「わー、ごめんごめん」

あははは、と声をたてて笑う。しかしふと真顔に戻ると、希玖は呟いた。

「でも、短いんだ」

かなり小さい声だったけど浩太には聞えた。

そう言った希玖の横顔は、どこか儚くもあつたけれど、とても強いものだ、と感じた。

* * *

都内某所。 no a 音楽企画事務所五階、社長室前

「かの〜っ」

背後から伸びる両腕があつた。

突然強い力に抱きすくめられる。

「きっ」

勿論、叶みゆきは悲鳴をあげた。

「きゃあああっ！」

バサバサバサッと派手な音を立てて、みゆきが持っていた書類が空を舞う。それには構わず、みゆきはほとんどパニック状態で抵抗

したが、その力が弱まることはなかった。その正体を見極めようと
どうにか身をよじる。背後に立つ人物を目に入れるとみゆきは驚き
とともに呆れた声をあげた。

「な……っ、新見さんっ？」

そこにはみゆきの知る人物、新見賢三が立っていた。年齢は確か
三十一歳。

「よっ。半年ぶりやな」

人好きのする愛嬌ある顔で笑う。

「は、離してくださいー」

「まあまあ」

何がまあまあなのかさだかではないが、それでも手を放さない図
々しさはある意味立派だ。みゆきには迷惑以外のなにものでもない
だろうけど。

その時、目の前の扉が開いた。

「叶、何騒いでいる」

助け船、とは少々……いや、かなり言い難いが社長室から出てきた
のは、この事務所の社長である安納鼎だった。廊下に響く悲鳴をあ
げたみゆきを叱りにきたのだろう。しかしみゆきの背後にいる以外
な人物を目にすると安納は眉をひそめた。

「……新見？ 呼んだ覚えはないが」

「やつほー、安納社長。相変わらずツレないなー」

やつとのことみゆきから手を放した新見は、安納にひらひらと手
を振ってみせる。

ピタとその手を止めて、不敵に笑うと新見は声色を改めた。

「聞くところによると、明日、『B・R』の記者会見やるらしい
やん」

「それがどうした」

凄んで見せたのに、あつけないほど簡潔な回答。新見は一瞬だけ
落ち込んで、次に泣き落としにかかった。

「シャチョー。顔も知らん三年越しの仕事仲間がとうとう顔出すの

に、報道連中と一緒に大人しく発表を待ってる言っんは、かなり酷じゃねえ？」

「大人しく待ってる」

「シャチョーっ！」

仕事仲間、と新見は言った。

ところで『B・R・』は五人のメンバーから構成されていて、プロデュースのKanonをいれば六人になる。それからプロジェクト総指揮の安納鼎。

当たり前のことだがそれだけの人員でCDが作られるわけではない。

「シャチョーはケチだー、って桂川もムクれてたぜっ？ それにつ、

『B・R・』プロジェクトのスタッフだって、俺と桂川の他に数人はいるんだろ？ スタッフさえお互いの顔を知らんのは水臭いと思わんかつ」

「そういう契約だったはずだな」

「頭かつたいな、ほんと」

新見賢三は『B・R・』のCD製作スタッフの一人、正真正銘『B・R・』プロジェクトの一員である。が、彼が『B・R・』の仕事で会う人物といたら安納鼎と、企画打ち合わせで一緒になる叶みゆき、それから職種上どうしても共同作業になる桂川だけだった。これだけ大きい仕事だ、普通ならスタッフが数十人はいるところである。

「じゃあ、いつになったら会わせてもらえるん？ 叶はどうなん？

全員、把握してるん？」

「え…っ、あ、私は……」

「新見」

会話を中断させる、安納の声。そして続けた。

「二週間後に全員で記者会見を行う。全員、だ」

「え…それって」

とたんに新見の声が明るくなった。

「嫌でもそのときには顔を合わせることになる。…それより、一つ頼まれて欲しいんだが」

「は？」

「……」

そこで、安納鼎は新見賢三に仕事を一つ依頼した。

それは『B・R・』プロジェクトの仕事であった。今日、叶みゆきがここに居るのも、その仕事の打ち合わせに来ていたからだ。

期限は三日間というかなり無茶なものだったが、新見の性格から断わるわけがないと、安納もみゆきも知っていた。

「……さつすが、社長。商売人は考えることがあざといな」
嫌味を言いながらも笑みを隠せない新見。

「桂川にも言っておいてくれ。正式な通達は明日一番で届くようにする」

「他のスタッフには？」

「こちらから依頼しておく。まだおまえにはばらさないよ」

簡単な誘導尋問に引っ掛かるわけもなく、安納は最後に一言、付け足した。

「『B・R・』プロジェクトは秘密主義だからな」

新見がスキップしかねない足取りで去った後、残されたみゆきは安納に視線を投げた。

「全員での記者会見って、………」 Kanon は？

恐る恐る小声での質問に安納は短く答える。

「メンバー外だ」

露骨に安堵するみゆき。その横顔を、安納は冷めた目で眺めていた。新見や『B・R・』の五人、そしてみゆきもまた、二週間後の記者会見の意味を分かっているのだ。

安納鼎が『B・R・』プロジェクトを立ちあげた理由はたった一

つだ。忘れられがちだが、正体不明という売り出し方を持ち掛けたのも安納自身、他メンバーの都合とは利が一致しただけのこと。それは叶みゆきも分かっていたはず。まさか忘れたわけではないだろう。

「叶」

「え…っ、あ、はいっ」

隣の安納を仰ぐと、真っ直ぐに視線が合った。

「分かっているだろうがKanonのこと、誰にも言っていないだろうな」

「…はい」

みゆきは咄嗟にうつむいてしまう。ああそのことか、と嘆息した。途端に胃のあたりが痛んだ。原因はわかってる。それこそ、すべてのはじまりから。

「これからも、仲間内に対してもな」

「これからも？」

「これからも、嘘をつき続けろというのだろうか。彼らにまで。」

『B・R・』プロジェクトが立ち上げられたとき、みゆきは少なからず驚いた。彼の音楽が形になるという喜びもあったが、それとは別に不安もあった。何故なら、彼は表舞台に立てない人だから。隠れなければならぬ存在だから。だから。

Kanonの代役として、叶みゆきが選ばれた。

「おじさん…っ」

無意識のうちに、みゆきは声を発していた。また、胃が痛んだ。

冬だというのにこめかみには汗が滲んでいた。

血縁を表す呼称を使ったみゆきを睨みながら端的に返す。

「なんだ」

いつも、その視線に負けてしまう。

「あの…」

でも、言わなきゃいけない。

「…私、やっぱり駄目です！ 希玖の代わりなんて…できませんっ。」

嘘を付き続けているのが辛いんです」

言った。

たったそれだけの言葉に、みゆきの息はあがった。

Kanonは私じゃない。

何度、叫びそうになったことだろう。

期待や賞賛。押しつぶされそうになるそれらに対し、それでも見合う楽曲が出来上がってくる。誉められるのは私。でも私が造ったわけじゃない。

Kanonは、安納希玖だ。

「安心しろ。おまえがマスコミの前に出ることはない」

「…そうじゃなくてっ、スタッフの皆にです。新見さん、桂川さん、大塚さんや須佐さん一村さん、……………そして」

あの五人にも。

世間の評判はどうでもよかった。ただ、演奏者の五人に賞賛されるのが、一番辛かった。

そんなに、笑顔を見せて欲しくない。裏切っているのは自分だから。居たたまれなくなるから。

「社長！」

「叶も、あいつの事情は知ってるはずだろう」

「……」

「おまえは、仲間内ならKanonを公にしても大丈夫と思ったんだろうが、例えば『B・R・』にあれだけ気を遣っていてもバレるものはバレた。世間にとつて『B・R・』とはあの五人でしかないから、まあ、この辺りが潮時だったとしよう。…だがKanonは？ 叶も知ってる通り、あいつは外に出すわけにはいかない。バレて「しょうがない」では済まないんだ。少しでもKanonの正体を広めることの危険性はわかるだろう？」

「……」

Kanonを表には出さない。安納は、初めからそう決めていた。演奏者の五人の正体をも隠すことにしたのは、後の話し合いで確

定したことだ。結果的にそれが効を奏し、今の『B・R・』があるわけだが。

今、世間では『B・R・』が明かされることで騒がれているけど、仕掛人である安納は特に慌てていなかった。安納が思案を巡らせているのは、『B・R・』の作詞曲家である”Kanon”をマスコミに探られない為に、いかにあの五人を使うかである。

叶みゆきは、そのことをよく分かっていた。

にも関わらず、二週間後の記者会見を行うことの意味に気付かずにいるのは、人生経験の浅さであろう。多分。

念を押すように、安納は言った。

「Kanonのことは口をすべらすな。わかったな」

「はい」

声が震えていた。安納はいつも通り無視してくれるだろう。

「明日の記者会見は私のほうで巧く進める。おまえはおまえの仕事をしろ。近いうち希玖とも連絡をとっておいてくれ」

「はい」

気持ちを崩さないために、大声を出す。

安納はすでに廊下を歩き出していた。

「それから至急、スタッフ全員に企画案の送付を。特に須佐には早く動いてもらわんと間に合わない。頼んだぞ」

「はいっ!」

結局みゆきの願いは叶わず、いつものように慌ただしい企画がスタートする。

もう、溜め息も出なかった。

夜の九時を回っていた。

浩太と安納社長の記者会見が始まるまであと十三時間。

安納は世間を落ち着かせるために会見を行うと言っているが、今のこの騒動がさらに大事になるだけのような気がする。でもまあ、中野浩太という役者を明示することで話題は浩太に集中し、余計なところを勘ぐられることはなくなるだろう。二週間後にはその他のメンバーも顔見せするというのだから、脚本が良く出来ている。

「所詮は、…誰かのせいにして楽になろうっていうのは、ムシの良すぎる甘い考えだってことだな」

八木、日辻と別れた四人はホテルの近くのラーメン屋にいた。

今回の騒動の元をとちめる、と亥きりだって出かけたはずだったが、事情を知った今となっては覇気も収まった。

知己の意見に祐輔も同意する。

「蓋を開けてみれば、誰も悪くなかった、というのもよくあることですしね」

「世の中厳しいなー」

「ま、そんなもんだろ」

ラーメンをすすりながら、四人はそれぞれ溜め息をついた。どう足掻いても明日には浩太がマスコミの前に出る。そして二週間後にはこの四人も。（安納は代理人を使っても良いと言っていたが、多分それは無いだろう）

「で？ どうする？」

「……」

知己の問い掛けに、全員が沈黙した。

「ミヤは？ 嫌がってたじゃん」

圭が言った。

「え？」

実也子は話題を振られ、一瞬きよとした。しかしすぐに、当初、正体がバレるのを嫌がっていたのは自分だと気付く。その理由も思い出し、視線を落とした。

「ああ…、うん。そっか」

かたく目をつむる。

そして開く。

「…私ね、昔、弦バスの演奏家に弟子入りしてたの」

他三人は実也子の告白に驚いた。全員が初耳だった。

確かに、あまりメジャーと言えない楽器のコントラバスを実也子が巧みに操るのは、専門的に教わったことがあるからかもしれない、という程度には思っていたが。

そして、自分のことは何でもあつけらかと話す実也子から、そのことを聞かされたことは今まで一度もなかった。

うつむいたまま、実也子は続ける。

「思いっきりクラシック肌のところ。『B・R・』を始める前にやめちゃったから先生とはもう関係ないんだけど、今回のことで私の名前が出て、ちょっと調べられたら先生の名前も出ちゃうでしょ。

それは、嫌なんだ…。先生にも迷惑かけちゃうし、それに…」

「それに？」

「うつん、なんでもないよ。…先生に迷惑かけるのは、すごく、嫌だったから正体がばれるのも嫌だった。それだけ」

でも、と痛々しい笑顔で言う。

「しょうがない、のかな」

沈黙が生まれた。

しょうがない。その言葉はほぼ全ての事象を収めてしまううちからがある。

「あ、長さんは？ 長さんも、嫌がってたよね」

沈黙を取り払うために実也子が切り出した。

ちょうど麺をすすっていた知己は、それを喉の奥に押しこんでから、

「言ったことなかったと思うけど」

と前置きする。

「俺は昔、…十年くらい前だけど、東京でバンドやっててさ」

「え？ 何それ、知らない」

「プロだったのっ？」

圭と実也子が身を乗り出す。

「まあ、一応その金で生活してたからプロとは言っただろうな。ジャンルがマイナーだったから知らないだろうけど。俺が、自分の名前が出るのを嫌がったのは、その時の仲間に知られるのは避けたかったからだ。俺が勝手にやめたんで怒ってたし………っか、あんまり昔の事掘り返したくないんだよ」

最年長の知己。三年も付き合ってきたが、初めて弱音らしい弱音を聞いた気がする。

「…確か祐輔も？」

圭が三人目に話題を振った。

「僕は二人のように深刻じゃないですよ。ただ大学のときに「演奏家にはならない」と宣言して卒業した手前、気恥ずかしいだけです」

比較的冷静に（もしくは冷静を装っているのか）祐輔は答えた。さらなるつつこみを入れようとした圭の言葉を遮って、祐輔は三人に言い放った。

「多分問題は、今の生活を切り捨てられるかってことです」

圭、実也子、知己は食べるのをやめて、その言葉を聞いた。

「…どういうこと？」

「安納社長が何を考えているかはわかりませんが、記者会見の後、僕らがどうするのか選択は二つしかありません」

「メジャーでプロとしてやっていくのか。もしくは、きっぱりと解散するか、だな」

「その通り。もっと簡単に言うと、続けるか続けないか、それだけです。先程出たように、僕らは顔を出してまでバンドを続けたいとは思えない理由があります」

「でもっ、それを踏まえても『B・R・』を続けたいっていう気持ちもあるよっ」

「……だから難しいんだよ」

「そう。もし、このまま『B・R・』を続ける場合、今までのように年一回というわけにはいかないでしょうね。正体が明かされた後では、以前のような売り方は無意味ですから。もしかしたら、全員、東京に出てくるハメになるかもしれません」

「それって……つまり、プロになるってこと？」

例えば。

長壁知己は新潟の実家で稼業手伝い、山田祐輔は横浜でピアノ教室を営んでいる。片桐実也子は群馬で大学生、小林圭は名古屋で中学生だ。中野浩太も、都内の高校生である。

彼らは一年のうち、夏の一週間のみ、一年の五二分の一だけ、『B・R・』として活動している。他、五二分の五一は、皆、それぞれの生活があつて、それぞれ忙しかったり、楽しんだりしている。プロになるというのは、それらの生活を切り捨てるということだ。（つまり、プロになるってこと？）

実也子は自分の言葉の意味に驚いた。

「私……、そんなつもりはなかった。そういう風に、考えたこともなかった、な」

「……………」

現実に取り戻される。

先が見えない未来、足場のない明日。

本当に好きなことをやろうとしているのに、こんなにも不安になるなんて。

「……圭は？」

「そういえば、圭の言い分を聞いてませんでしたね」

知己、祐輔が言う。珍しく意見せずに聞き手に回っていた圭は、やっぱりきたか、と苦笑した。どんなふうに答えるべきか、圭は十秒ほど考えた。

「…俺は」

と、口を開く。

「皆と違って、あんまり悩む必要は無いんだよな。あと三ヶ月もすれば中学卒業だし、人生設計では高校で遊びながらデビューするつて算段だったんだけど。まあそれが早まったと思えばいいよ」

もしこの台詞を圭以外の中学生が吐いたなら冗談に聞えたかもしれない。けど、そう言ったのは他でもない小林圭だった。

憧れるだけの夢とは違う、具体的な目標、それを実現させる為の手段、努力。

圭はそれらをしっかりと考えているのが分かる。

「さすが、しっかりしてますねえ」

祐輔のその反応は単なる感心ではなく、尊敬が含まれる納得だった。

「しっかりしすぎるのも問題あると思うが…」

「あはは。メンバーの中で一番しっかりしてるよね」

年長三人組にとって、圭のその姿勢は羨ましく映る。そのひたむきさ、奔放さや情熱、そういった類のもの。

同じものを同じように好きなのに、いつのまにか臆病になっていくことに気付く。

それは多分、三人が、それぞれ目指したものを諦めたときから生まれた。

何かを始めるのは意外と簡単で、必要なのは勢いだけですむ。でも。

続けてきたことを辞めるとき覚悟はそれは大変なものだ。自分のちから不足、それを認める辛さ、費やしてきた時間を無駄にするということ。

一度諦めた道を、もう一度目指そうとするのは想像以上に大変だ。

圭にそういった不安や臆病さというものが無いのは、そういう経験が無いからだとも言えるが、若いうちはその勢いが必要である。

「でも」

圭はそこで間を置いた。

「ここで皆が辞めるって言うなら、俺は予定通り高校に行くぜ？」

まっすぐに三人を見据えて、圭はそう言った。

三人は極端な反応を見せて驚いた。

「…圭」

「圭ちゃんっ？」

今、確かなチャンスがあるのにそれを逃がすと圭は言っているのだ。

例え『B・R・』が解散したとしても、圭にその気があるならこの業界に残るのも難しくはないだろうに。

「これが卑怯な意見だったのはよく分かってる。俺の今後を皆の選択に委ねてるわけだからな。でも、今は『B・R・』でしか、歌いたくない。……それが、俺の意見」

相変わらずの迷いのない瞳で、今誰より落ち着いている圭は三人に言った。

そんな風に言われたら、納得するしかない。

四人は顔を見合わせて默契した。

「とりあえず、一度それぞれの家へ帰りますか。いろいろと事情があるでしょうけど、打ち明けなければならぬ内容は同じです」

「…だな」

それぞれが帰郷する朝、安納は駄目押しのように五人に問い掛けた。

君達は今からプロとしてやっていく気があるのか？

それは人生の選択でもある。

* * *

十二月十日。

五十人からの報道陣が集まる中、安納鼎と中野浩太による記者会見が行われた。

* * *

東京都。十二月十一日。

神経研究所附属理和病院。

病院の棟と棟の間にはちょっとした広場があつて、そこは中庭と称されている。建物に囲まれているにも関わらず日中は日当たりが良く、入院患者の散歩やちょっとした社交場として利用されていた。中庭の中央には二メートルほどの檜の木があり、クリスマス季節になると子供たちが飾り付けをして、日が沈むと電飾が灯った。自慢してもいいが、これはちょっとしたものだ。

午後五時。いつも通りツリーのあかりが灯った。中庭の芝生の上に、病院の窓からの明かりが映っていた。

実際、この季節のこの時間は寒くて外に居るどころではない。気温は10以下まで下がり、はしゃぎたい盛りの子供たちにドクタイストップがかかることも理由の一つである。

そんな中、安納希玖は中庭の椅子に腰掛け、西の空を仰いでいた。白いパジャマにカーディガンを羽織っただけのその姿はやはり寒そうだった。茶色の髪が風に晒されても、希玖は身震い一つせずただ空を眺めていた。

太陽は西の空へと追いやられ、そして沈もうとしている。空はもう夜の色。深い群青、闇から光へのグラデーション。ビルの輪郭ごとに光る色だけが、太陽の沈んだ方角を教えてくれていた。風が一層冷たく吹いた。

冬の匂いがした。

(…)

遠くで、救急車のサイレンが鳴っている。

希玖はかたく目を閉じることで、その音を意識から遮断した。

その時。

「早く病室へ戻って、関先生言ってるぜ？」

突然の背後からの声に、希玖は目を丸くした。反射的に振り向いた。

「よお」

「……っ」

そこには中野浩太が立っていた。ジャンパーにマフラー、それでも防寒対策は完璧ではないらしく、首を縮ませて両手をポケットに突っ込んでいる。

希玖は笑った。

「あはははははは」

座ったまま体を折って大声で笑う。突然のそれに浩太は亥を突かれた。

「…なっ、…前触れもなく笑うなーっ」

それでも笑い続ける希玖。浩太は何がそんなにかおしいのか分かんず、自分の格好を見直してみたり、後ろを振り返ってみたりする。見当違いの行動に希玖はさらに笑い続けた。

「浩太って、ホント、ヒマ人だねー。こんな時間にこんな所に来るなんてさ。他に行く所ないの？」

笑い涙を拭って、希玖は言った。

「ワリーかよ？」

むっとして浩太は逆に問うが、実は行く所がないのは事実だった。

家においてもマスコミは押し寄せてくるし、この状況で他の友人と会うのは更に騒がしい事態になる。『B・R・』のメンバーは全員東京を離れているし、社長が用意してくれたホテルに居るのもいい加減飽きたのだ。

それに、どうやら浩太は自分が思っている以上に、希玖のことを気に入っているらしい。

気が付くところへ足を運んでいた。

「悪くなんてないよ。かち合わなければ、僕は歓迎だよ」

「かち合うつて？」

「それは秘密です」

人差し指をたてて、くすくすと笑う。

「？」

「浩太、そんだけ厚着してるのにまだ寒いのか？ 風邪？」

「おまえが薄着すぎるんだよ。そんな格好で外出て、一体何やってんだ」

寒さも手伝って浩太はキレ気味だった。爪先から頭まで寒さが伝わってくるこの寒さの中、パジャマにカーディガンという希玖の格好のほうがるかに異常だ。見ていだけで浩太は震えた。

「お月見してたんだよ」

「は？」

希玖は西の空を指さした。かろうじてまだ明るさが残っていた。その夕闇の中に。

ビルの中に太陽が沈んだ後の群青の、飲み込まれそうな空の中。月が、浮かんでいた。

「この時間のお月見がけっこー好きなんだ」

「…へーえ」

浩太も、その景色に見入った。

（……………あれ？）

浩太はちょっとした既視感を覚えた。

何か思い出しかけた。浩太はそれを辿るために黙りこむ。

（誰か、同じこと言ってなかったか？）

深く集中しはじめると、その「同じこと」というのが何なのかさえも分からなくなってしまうた。

（……？）

浩太は考えることを諦めた。そのうち思い出すだろう、と見切りをつける。

顔を上げると、希玖の笑顔と目が合った。

「浩太って、いい奴だよなっ」

「え？」

希玖はにこにこしながら浩太を見つめている。ツリーの電飾が横顔を染めているその表情は決して冗談ではないようだった。が、突然で脈略のない告白を軽い冷やかしと思って、浩太は踵を返した。

「馬鹿言つてねーで、部屋戻ろうぜ」

「うんっ」

勢いよく椅子から立ちあがる。

浩太に続き歩きだそうとした、とき。

「！」

ある兆しを感じて、希玖は額に指を置いた。

一步を踏み出せない足は軽く震えていた。

心拍が速くなる。

下半身の感覚がなくなり、意識がブレる感覚に陥る。

「……っ！ ごめんっ、迷惑かけるかも」

それだけ、言葉を残すのが精一杯だった。

ぐらり、と希玖の体が傾いた。

「は？ ……えっ、おいっ！」

浩太は咄嗟に手を伸ばす。

希玖の腕を引いた反動で、その体はそのまま浩太のほうに倒れてきた。

「……！ うわっ」

軽すぎるはずの希玖の細い体を支えることもできず、結局浩太は

後方に崩れた。

希玖もろとも、地面に派手に倒れ込んだ。

ドサッ

「……………。いつてえー」

まともに背中から落ちた浩太はその痛みを口にせずにはいられなかった。下が芝生だったことは救いだろう。腹の上に希玖の頭が乗っているのは見なくてもわかった。

背中 of 鈍い痛みが通り過ぎるまで、浩太は立ち上がることはできなかった。

「希玖っ！ ……何だよ一体」

浩太は完全に巻き添えにすぎない。しかも当の希玖は予告までしていた。

「……………希玖？」

返事はない。浩太は背中 of 痛みを堪え上体をあげた。

「おいっ！ ……希玖っ！」

浩太の上に重なる希玖を起こそうとする。しかし希玖の肩を揺らしても、本人にその意志は見られなかった。

意識がない。

その時始めて、浩太は希玖がここに入院している患者なのだということを意識した。

いつもへらへらと笑って、パソコンをしたり、散歩をしているところしか見てないので深く考えたことがなかったのだ。

「希玖っ！」

完全に昏倒している。浩太は青くなった。

浩太は希玖の病気を知らなかった。怖くなって、叫んだ。

「先生ーっ！ ……希玖が倒れたっ、早く来てくれーっ」

「落ち着いて、中野くん。大丈夫だから」

希玖の主治医である関久弥はほとんどパニックに陥っている浩太をどうにか落ち着かせようとした。

関は三六歳で、七年前から希玖についているという。

結局、浩太の呼びかけに駆け付けた関が、希玖を病室まで運んだのだ。その後の処置はというと、関は希玖に外傷がないことを確認し、顔に耳を近づけて呼吸を聞いただけだった。

人一人倒れたというのに、それだけ見ただけで何が分かるというのだろう。だから浩太はパニックから抜け出せないでいるのだ。

希玖はベッドの上で、静かに眠っていた。

「でも、こいつ、急に倒れたんですよっ？」

大丈夫だから、と言われても、それだけで理解できるはずもない。

「そういう病気なんだ」

「そういう……って、それじゃわかんないですよ……？」

浩太は関の言葉の意味を理解しようとした。何か今、妙なことを言われたような。

「……え？」

浩太はさらに混乱した。今、関は「そういう病気」だと言わなかったか？

関は浩太を安心させるように笑ってみせた。

「希玖を見てごらん。顔色もいいし、呼吸も正常だ。今回のように突然倒れるのは確かに彼の病気の発作だが、これは寝てるだけだよ」

「は？」

ベッドの中の希玖に目をやる。

確かに、こうして見るとただ眠っているようにしか見えない。穏やかな寝息を立てていた。

そして、関は希玖の病名を告げた。

「希玖は過眠症なんだ」

睡眠障害の一つ、ナルコレプシー。

不眠症は五人に一人といわれるほど代表的な睡眠障害だが、その逆に過眠症というものもある。ナルコレプシーもそれにあたり、現在日本には二万五千人いるといわれている。

文字通り、健康な人よりも眠り過ぎてしまう病気で、周囲に理解されないことが多い。昼間でも睡眠魔が発作的に襲い、感情が昂ぶると足の力が急に脱力して倒れてしまうこともある。

過度の眠気、レム睡眠異常および情動脱力発作を特徴とする睡眠障害。

薬剤である程度抑えられるものの完全な治療法は見つかっていない。先天性であると言われているものの、一卵性双生児の不完全一致も報告されている。

「健常者の何倍もの疲労負荷、睡眠時と活動時の脳波異常。それが希玖の病気だ。簡単に言くと、すぐく疲れやすい体質で、長い時間起きていることができない。突然糸が切れたように眠っちゃうこともある、それこそ普通に歩いているときでもね」

つまり今回のように、目の前で倒れることもよくある、ということだ。

「希玖が昏倒するのは心配しなくてもいい。ただ寝ているだけだからね。どちらかというと、倒れたときに頭をぶつけるほうが心配だな」

関は苦笑した。

「……………」

浩太は何も言わなかった。そんな病気があるということさえ、今日初めて知ったのだ。どう受け止めて良いのか、まだ分からなかった。

さらに関は続ける。

「この病気の症例者の中でも、希玖はかなり重度なほうだね。一日に三十錠の薬を飲むことで、今の状態がようやく保てるほどなんだ。

それでも、希玖の一日の活動時間は八時間を切ってる」

「でもそれじゃあ……」

普通の生活など、できるわけじゃないじゃないか。

声には、出せなかった。

一日の活動時間は八時間。それは通常の人の中分だ。

何ができるんだろう。何がしたいんだろう。意識がない間に、時間は過ぎて行く。

例えば浩太が授業を聞かないでぼーっとしているような、そんな時間さえ彼には許されない。

限られた時間のなかで、彼はどんな気持ちで、どんな覚悟で、毎日を生きているのだろう。

関はもう一言、浩太に付け加えた。

「心配も同情もいらないよ。教えてはくれないけど、希玖は自分のやりたいことを実行しているようだし、それに周りの人間に恵まれてるんだ、彼は」

（短い人生のなかで後悔したくないから）

（好きなことさせてもらってる）

放っておけば百は生きる体だと言った。

それでも、短い人生だと。

希玖は、笑った。

「……こういう意味だったのかよ」

希玖が眠るベッドの傍らに腰かけて、浩太は呟いた。

不思議な気持ちだった。希玖の病気を知らされたショックと、知らされていなかった憤りと、これまでどんな風に生きてきたのかと

か考えてしまう。

きつと支えてくれている人がいる、ということは容易に想像できた。家族でも恋人でも、希玖にはそういう人がいるのだ。多分。

一人であんな風に強くはなれないだろう。

(……………あれ?)

浩太はそこで思考を停止させる。

また、何か思い出しかけた。

(なんだ…?)

記憶を辿ることに集中し始めた浩太。

しかしそれを邪魔する声があった。

「あれー、浩太、まだ居たの?」

ベッドから希玖がのそのそと這い出してくるところだった。

「今、何時? あ、まだ七時前なんだ」

ふわああああ、と緊張感のない欠伸をする。

(……………)

途端に、浩太は希玖を殴りたくなった。さっきまでシリアスに考えてきたことが馬鹿馬鹿しくも思えた。

「あんなあ……」

バンッ!

浩太の言葉を遮るように、物凄い勢いでドアが開かれた。

「希玖っ、倒れたって本当? 大丈夫なの?」

と、同時に同じくかなり勢いづいた少女が転がり込んできた。そのまま希玖のベッドまで駆け寄る。息が上がっている。病院内だというのに、ここまで走ってきたのだろう。長い髪が乱れてボサボサになっていた。眼鏡の奥の両眼は心配を隠せない色で、希玖をじつと見つめている。

驚いたことに、浩太はその少女の名前を知っていた。

「あ、みゆきちゃん。いらっしやい」

希玖は予定していなかった客を笑顔で迎えた。

「……………かのん?」

浩太は半信半疑で口を開く。

「え？」

少女はそこで、はじめて浩太を目に止めた。目を見開いて、もう少しで悲鳴をあげそうになったのではないだろうか。でもそれを飲み込んで、

「……………浩太さんっ？」

叶みゆきは器用にも小声で叫んだ。その後も意味不明の声を発して、希玖と浩太の顔を交互に見回した。どうしてここに？と言いたいのだろう。勿論、浩太もみゆきほどうるたえてはいないものの、驚いていることには変わらない。

ただ一人、落ち着き払っている希玖がみゆきに向かって言った。

「へー。みゆきちゃん、かのんって呼ばれてるんだ。かわいいね」

「希玖っ」

みゆきが希玖を軽く睨みつけた。

「……………」

意外な組み合わせだった。『B・R』の仲間である叶みゆきと、偶然知り合った安納希玖がこうして同じ空間にいるのだから。

「何でおまえがかのんと知り合いなんだよっ」

浩太は希玖に詰寄った。決して浩太の迫力がなかったわけではないが、希玖は平然とその言葉を受け止めた。

「えー？ どっちかってゆーとそれはみゆきちゃんの台詞なんじゃない？」

「どっちでもいいから説明しろーっ」

「だって、みゆきちゃんは僕の従姉だもん」

ね？ とみゆきに同意を求める。予測していなかった血縁関係は浩太の頭の中ではすぐに結びつかなかった。

「…は？」

「みゆきちゃんのお母さん、僕のお父さんのお姉さんなんだよ」

「ということは社長の…」

「姪、だね」

安納社長と希玖は親子で、希玖とみゆきは従姉弟同志。

（何か、できすぎてる気がする…）

希玖は『B・R』を好きだと言ったことがある。その正体を見
てみたいとも言った。

希玖の父親は『B・R』の所属事務所の社長で、希玖の従姉は
『B・R』の作詞曲担当。

そして、その希玖の従姉。

叶みゆき。

「…なんで浩太さんがここにいるの？」

と、浩太ではなく希玖に訊いたのはみゆきだ。問われた通り希玖
が答えた。

「半月くらい前かなあ。誰かのお見舞いに来てた浩太と偶然会った
のつて。それ以来懐かれちゃって」

「懐いてんのはそっちだろうっ」

浩太に怒鳴られて希玖はくすくすと笑う。

「あ。僕も聞かなきゃならないのかな。みゆきちゃんと浩太はどう
いう関係？」

その台詞に、浩太はじとつと希玖を見据えた。

「しらじらしーぞ、希玖」

わざと低い声で言う。希玖は首をひねった。

「なに？」

「おまえ、俺が『B・R』だつて知らなかったつて言ったよな」
「言った」

「あれ、嘘だろ」

みゆきが入ってきたとき、希玖が「あ、かち合った」と小さく呟
いたのを浩太は聞き逃さなかった。

希玖は浩太とみゆきが知り合いであることを分かっていた。そし
て自分が、浩太とみゆき、共通の知人であることをそれぞれに隠し
ていたのだ。それに。

「かのんが嘘つき続けるなんて、できるわけないし」

これは自信を持って言えた。

『B・R・』を好きだという従弟に対して、自分を『B・R・』関係者だと隠し通せる性格ではない。

「ど、どーいう意味ですか？」

自分の性格を挙げられてさすがにみゆきは反論する。

「へー。浩太、みゆきちゃんのことよく分かってるなー」

希玖は感心して声を弾ませた。冷やかしも含まれた言い方だったが、浩太もみゆきも気付かなかった。どこことなく似ている二人を目の前にして、希玖は表情を改めた。

「……あたり。浩太の言う通りだよ」

「希玖」

「嘘ついてもしようがないし。ごめん、悪気は無かったよ。ほんと」
みゆきを制して希玖は続ける。

「僕はお父さんやみゆきちゃんが『B・R・』に関わってることは知ってたし、浩太が『B・R・』のメンバーだってことも、実は初めから知ってたんだ」

みゆきがうつむいた。

「……俺が『B・R・』のメンバーだから、声かけたのか？」

半月前、この病院の廊下で声をかけられた。単なる偶然と思っていたことが、仕組まれたことだとわかった。

希玖は否定しなかった。

「それもあるけど……」

「他に何かあるのかよ」

「ほら、前に言っただろ？ 夏場に街中で助けてもらったことがあるって。浩太は覚えてないみたいだけど」

「……ああ」

確かに、それは以前聞かされたことだ。

浩太はさっぱり記憶にないのだが、今年の夏、浩太は希玖と会っていたらしい。街中の歩道で、具合が悪くなりうずくまっていた希玖に声をかけたのが浩太だというのだが……。

未だ思い出せない浩太を前にして、希玖は微笑んでみせた。

「あの時のお礼をちゃんと聞いたかったんだ。実は発作起こしかけてて、正直ヤバかったから」

発作、という言葉聞いて浩太の表情が曇った。先程、希玖の主治医に聞いたことを思い出したのだ。みゆきへと目をやる。希玖の病気のことは、もちろん彼女も知っているのだろう。

浩太は首を振った。

夏の一件のことを除いても、うまく逸らかされた気がしたから。

「俺が『B・R・』関係者だって知ってたなら、どうして隠してたんだ？」

「じゃあ、どうして浩太はお父さんと僕の間を訊けなかった？」

質問を予測していたらしく、希玖は満足気に笑みを浮かべた。

「わかってる。浩太は『B・R・』関係者だって、知られちゃいけなかったからね。それと同じで、僕もお父さんに『B・R・』について口止めされてたんだ」

「……で？」

「で、ってそれだけ。口止めされてたから、言わなかった」

希玖は浩太の目を見ているものの、口の中では込み上げる笑いを噛み殺している。

みゆきは、うつむいたままだった。

「あのな」

理由になっていない希玖の回答に釈然としない浩太は声を荒げる。巧く……いや、下手にごまかされた気がするのとは決して気のせいではない。

希玖はぼんと手を叩いた。

「そうそう。ところでみゆきちゃんは今日はどんな用事？」

「あ」

自分でも忘れていたのか、みゆきははっとして顔を上げた。手間取りながら持っていた封筒を希玖に差し出す。

「これ……。あ」

はつとみゆきは浩太に気まずい視線を送る。

受け取りかけていた希玖の手から、封筒を半ば奪い取るようにして自分の背中へと隠した。とても分かりやすすぎる反応だった。

「みゆきちゃん？」

手持ち無沙汰で希玖が声をかける。

「えーと……、あの」

浩太に向けられる視線の意味は馬鹿馬鹿しいほどわかった。

こんなときでさえ何も言えないみゆきの性格は、浩太もよくわかっている。

途端に気が抜けて、気付かれない程度の溜め息を落とす。

（…あほらし）

「俺、帰るよ」

そう言っていると浩太は上着を羽織り帰り支度を始める。

「え？ 何、もう？」

浩太との会話をごまかそうとした希玖がぬけぬけと言う。でも浩太を引き止めようとする言葉は本音のもので、彼の性格の複雑さが伺えた。いや、単に天然に意地が悪いだけかもしれない。

また追求する機会はあるだろうし、『B・R』が集まったときにみゆきを尋問するのもいいだろう。

希玖が何を隠し何を企んでいるのか知らないが、どちらにしろこれからも付き合うことになると思った。これは予感だろうか。

「浩太っ」

名前を呼ばれた。浩太は振り返る。

「今日のごめんな。あと、ありがとう」

真顔でそう言う希玖には、やはり勝てない。これからも振り回され続けるかもしれない、と半ば諦めの笑みを浮かべた。

「ああ。またな」

そうして、浩太は希玖とみゆきに別れを告げた。

「あれ、中野くん。今、帰り？」

正面玄関で関と会った。

「あ、はい」

「叶さん来てただろ？ あの二人も仲良いよね」

「あいつ、よく来るんですか？」

「彼女は希玖が通院してたときからの付き添い人だよ。従姉弟なんだってね。最近はFDや書類をやりとりしてるし…。一体何を始めたのかなあ」

関は楽しそうに笑った。

「…？」

ふと、関が胸に持つノートの表紙の文字が浩太の目に飛び込んできた。

何の取り止めもない、大学ノートだ。

でもすぐに、浩太は何故自分がそれに気を留めたのか理解した。見知った文字がそこに書いてあった。

でも何故、関のノートにそんな文字が？

「先生、…それ、何のノートですか？」

きつと偶然の一致なのだろうが、気になったので訊いてみた。

「ああ、これ？ これは個人的な希玖の診断書だよ」

「は？」

浩太はすつとんきょうな声をあげた。

「ほら、希玖、今日倒れただろ？ 毎回記録してるわけさ」

それはわかる。それはわかるが、何故、安納希玖の診断書（正確には関の個人的なノートだが）に、その文字が書かれているのだ。

（アノウ、キク）

胸の中でその名前を発音して、浩太は目を見開いた。

そして関のノートの文字を凝視する。一文字一文字を追いかけてながら、自分の読み間違いでないことを確認する。

体が震えた。

「中野くん？　どうかした？」

関の声も耳には入らない。

関のノートの表紙には、簡潔にイニシャルだけが書かれていた。

「K・anou」と。

約二十秒、浩太はそのノートを眺めていた。

「……なんだ、そりゃ」

呟いた。

6話

十二月十日。東京都H区

U MUSIC JAPANという会社がある。

オフィスは池袋ビジネス街の一角にあるビル、その6階の1フロアを間借りしていて、一二〇名からの社員は全員がこのオフィスに収容されていた。収容、と表現したのは、このフロアが既に面積的に手狭になりつつあるからだ。社員の間からは「引越しよう!」という意見が出ているが、管理職を含む上層部からの回答はいつも同じだった。「金がない」。

さて、この会社の業務内容を説明しよう。

取引先は主に某業界のそれぞれの事務所で、たまに個人や法人、行政団体などもいる。

客先からデジタル処理をした?音楽?をデータで受け取り、指定された媒体に焼き付け、それを指定された数に増産する。装丁を整え商品を作り上げるのが仕事だ。その後地方への発送を手掛けることもあるがそれはオプションである。

一般にレコード会社と呼ばれている。

各アーティストや事務所が持ち込む編集済みの?音楽?を何百万枚ものCDに焼く。CDケースを手配する。指定された通りのジャケットを作る。つまりただのデータを、店頭に並べる商品にするまでの工程を請け負っていた。しかしU MUSIC JAPANでは、CD増産やジャケット印刷などは下請けの会社に任せているので、実際の仕事は依頼主との交渉と下請け会社への指示、それからこれも重要だが、それら商品の宣伝全般を行う。

地味な仕事と思われるかもしれないが、セールスワークを全て担っているのだからアーティスト側にすれば必要不可欠にして重要な

存在だ。

U MUSIC JAPANは国内シェア五位。それでもこの業界では中堅企業と言える。

そして、今噂になっている『B・R・』のCDの発売元でもあった。CDだけでなく、店頭ポスターやテレビCM、その他関連商品もこの会社から配給されている。

メンバーから事務所スタッフまで全てにおいて秘密とされている『B・R・』の発売元。それは世間から見ただけで、『B・R・』に関わっている制作スタッフのうち、唯一身元が明らかになっている企業だということだ。（スタッフの一人、Kanonという名も世間には知っているが、どこの誰とも分からないのでは何の意味もない）そんなわけで、『B・R・』の人氣に火がついた当初からこの会社にマスコミが押し寄せていた。が、会社は守秘義務をこれ以上無いくらいの巧みさで貫き通し、何一つ情報が漏れることはなかった。以前、新聞記者の日辻篠歩がこのレコード会社の振込み口座から『B・R・』の事務所を割り出そうとしたことがあるが、調べたその先には偽造名義しか見えなかったという。

朝九時五十分。U MUSIC JAPANのオフィス入り口に現われた人影があった。

「はよーっす」

無精髭を伸ばし（単に時間がなかったのだ）、脹らんだ腹が目立つ五十歳の男性。ポロシャツとスラックス、コートを背中に引っかけている。

名は大塚スグルといった。

ちなみにこの会社の始業は八時半である。

「あ。おはようございます。今日はお早いですね」

指定の制服を着て髪をきっちり結わえている女性がにこやかに言った。若さゆえか、かなり直球な嫌味である。それを聞いても態度を崩さず、

「十時から『B・R・』の記者会見やるだろ。それ見ようと思って

な」

と、大塚は言った。この豪傑さは年の功だろう。

パソコンが置かれた机が並ぶ間の狭い通路を早足で自分の席へと歩く。体型の割には身軽な男だ、と後に続く女性は心の内だけで皮肉った。

「それなら」

口を挟む。

「それなら皆、テレビの前に集まっていますよ。あと五分で始まるそうです」

「あん？」

見ると、両脇に並ぶ机に人影は少なく、パソコンは電源が入ったまま放置されている状態だった。大塚はふつと視線を泳がせると、オフィス奥にある応接コーナーに数十人が集まっていた。主に若い連中、二十代の社員がテレビの前に詰め掛けていた。勿論今は業務時間内だ。

「…何やってんだ、あいつら」

大塚は呟く。

「見た通り、大塚さんと同じ目的の方々です。部長が特別に許可してました」

許可、というのはこの場合、『B・R』の記者会見を見る為の一時的業務の放棄だ。

「いい会社だなあ」

「そうですね。毎日遅刻してきても何も言われない会社ですしね。

あ、それから速達、届いてました」

「おお、さんきゅう」

もしかしたらこの相手は嫌味が効かないのではなく人の話を聞いてないだけなのかもしれない、と踵を返した女性は思った。

ほぼ毎日郵便物を受け取っている大塚は、A4封筒を渡されているつもと同じようにそれを器用に開けながら、倒れこむように自分の席へと座った。差出人を確認しないのは癖ではなく性格だ。中には

十枚程度の書類が入っていた。大塚はそれに目を走らせた。

「……………」

一方、テレビの前に集まっている社員の間には異様な熱気が漂っていた。

勿論、社員たちは全員、『B・R・』のCDの発売元が自分たちの会社だということは知っている。しかし不思議なことに誰もその仕事に関わったことがない。同じ会社に居ながら、皆、そのプロジエクトを見たことがないという。そんな病的なまでの秘密主義を貫いていた『B・R・』が現われるというのだ。例えば仕事中说いえずにせすにはいられないだろう。

この、大塚スグルと同じように。

「木村アツ！」

心臓を貫く馬鹿でかい声が響いた。近くにいた部下の女性は勿論、オフィスにいたほぼ全員が何事かと振り返る。

「ハイっ！」

テレビの前に座っていた一人が飛び上がった。若い、ひよろりとした体型の男が人垣を越えて大塚の元へ駆け寄る。息を弾ませているのは走ったからではなく、大塚の声に驚いたせいだ。

オフィス中からの非難の視線を全く気にせず、大塚は部下である木村康孝に命じた。

「一週間後に今井ンとこのプレス、予約取っとけ」

「は？ 無茶言わないでくださいよ。この新譜ラッシュの時期に割り込めるはずないでしょう」

プレスとは業界用語で、この場合CDの増産作業のこと。クリスマス前には大抵CD新譜が大量にリリースされる為、この時期に一週間後などという確約が取れるわけがない。小規模なプレス工場の今井産業では無理に決まっている。

「他の仕事全部蹴ってでもやれって言え」

大塚の表情はマジだった。木村は若年ながら大塚のもとで三年以上片腕として働いている（こき使われている）。その傲慢な性格も

よく知っているので反論することは諦めた。

「…一応、言うことは言ってみますけどね」

難しいと思いますよ、と続けようとした。

「その価値はあるとも伝える」

「！」

木村は大塚の表情にピンとくるものを感じて目を見張った。「あ

…」と言いかけるが声にならない。もう一度、息を吸う。

「…えっ、嘘。大塚さんがそんなマジになるって、その仕事って…

！」

誰かが記者会見が始まったことを伝えた。大塚もテレビの前へと歩き始めた。

「ねえ、大塚さん！」

その背中を止めようと手をのばす。しかし手は届かず、振りかえらないままの大塚の背中是不吉なことを告げた。

「あ。…そうそう、おまえが出したクリスマスの休暇届け。あれ却下な。仕事入ったから」

「そんな……っ！」

彼女と約束があるのに、と木村は叫んだが、既に大塚はテレビの前の人垣を掻き分け特等席を陣取ったところだった。

十二月十日。東京都I区

早朝。

とはいっても、早朝とは一体何時から何時までを指すのだろう。殊更に夜と朝の区別とは？

空が白んでいる時刻を朝と呼ぶのなら、今は本当に早い朝

早朝ということになる。

「はーつくしょん！」

都内某所の歩道橋の上。絵に描いたようになくしゃみをしたのは、カメラを抱えた新見賢三だった。

空はまだ暗い。しかし東のビル群の向こう側の空が、白くなってきたのが見える。

時刻は六時半。

つい三十分前、新見の携帯電話にメールが入ってきた。

【やっと終わったーっ！ お先に寝るよ。本日午前十時！ 忘れな
いで見るように。すごく楽しみ！ 桂】

人のことは言えないが、相手もヤクザな仕事だ。この時間までパソコンに向かっていたらしい。

（どーせ、起きられんやろな。時間になったら電話してやるか）

午前十時から『B・R』の記者会見が行われる。勿論、新見も見ないわけにはいかなかった。

パシャ。

東の空を一枚。

「おーい、新見さん」

下から声がかかった。顔見知りだった。

「よー、新聞配達のパース、朝から元気やなー」

荷台に新聞を山ほど積んだ自転車が止まっている。その持ち主が歩道橋の階段をかけあがってきた。

「おはようございますー。また、仕事スか？」

新聞屋の学生アルバイトくんだ。この歩道橋とこの時刻が新見のお気に入りスポットなので、何回か顔を合わせている。人懐こい性格で、いつのまにか懐かれてしまっていた。

「そう、仕事」

「最近撮ったのって、何かありますっ？ 見せてくださいよー」

「その辺、適当にスナップあるから勝手に見ていいでー」

カシャ

朝日が照らすビル群を一枚。

隣では新聞屋アルバイトが新見の荷物をがさがさと漁っていた。

「ねー」

「なんじゃい」

「新見さんて、風景写真専門なんでしょ？」

と新聞屋アルバイトが首をひねる。

「そだよ」

「これって、人間じゃん」

ぴらりと掲げて見せたスナップ写真は、赤ん坊を抱いた母親の
写真だった。どこかの公園で撮られたものだ。

にやり、と新見は笑う。

「おいボーズ。おまえ、動物園で撮られたライオンやペンギンの写
真を風景写真だと思うか？」

「え。…うーん、風景写真だと、思うよ」

「それと同じや。生物という点においては人間だって同じ。人間だ
って地球の風景写真には変わらん」

パシャ

本日三枚目のシャッターを、押した。

十二月十日。埼玉県J市

二七回目のベルで受話器をとった。時間に換算して約一二〇秒
二分間。出ない方も出ない方だが、かけている側も大した根性
である。

名前を言わなくても声ですぐわかる相手だったが、それは意識が
はつきりしている時の話だ。

カーテンから明かりがもれる部屋の中、出窓で電話機が鳴っている。今時珍しい黒電話だ。少女趣味的な部屋の様相のなかでミスマツチに見受けられるが、部屋の主は「それがいいのよ」という。

八畳の広さを持つ部屋の壁紙はシロ、カーテンはピンク色。主な家具はベッドとデスクとチェストと（これらはすべて木目模様）で、チェアとフローリングに敷かれた絨毯は花模様だった。チェストの上ではクマやウサギのぬいぐるみが十を越え、ベッドの脇に揃えられたスリッパは白いファーのウサギ型だった。タペストリーやチェアにもその趣味は感じられる。デスクの上のパソコンだけは型破りで白い縁取りのスカイブルー。これには部屋の主も事あることにグチっているのだが、アップル社のマッキントッシュG3ではしょうがないとも言える。同社の後発で発売されたパソコンはボディカラーが豊富だったが、その色彩感覚は部屋の主の好むところではなかった。慰めのようにディスプレイにはリボンがかかっていた。ベッドからよきと手が伸びた。がしつと黒電話を掴んだかと思うとそのままベッドの中へ引きこむ。

電話がベッドの中に消えてから、電話の音がやんだ。

「……………もひもひ」

再び意識が遠のくのを感じながらも桂川清花はどうにか声を出した。腹に抱えた電話はひどく冷たく、毛布の温かさの幸せをちょっとだけ感じてみたりする。

「だれ？」

仕事の依頼主からの電話かもしれないのに、かなり不躰だったはずだ。それさえも気付かずに桂川は相手が名乗るのを待った。

「…なんだ新見さんか。え？ ……………」

間。

「あーッ！」

桂川は毛布を剥ぎ取りベッドから飛び起きた。ピンクに近いアカでこれまた花模様のパジャマのうえからオレンジ色のカーディガンをはおる。

バタバタバタツと部屋を出て一気に階段を駆け降りた。その際、スリッパを履き忘れた。床はまるで氷のように冷たく、……電話は放り出されたままだった。

「お母さんっ！ 九時半には起こしてって言ったじゃない！」
居間の引き戸を開けた。

専業主婦の母親は朝の一仕事を終えくつろいでいるようだった。こたつの上に新聞を広げ茶をすすっている。清花の部屋とは赴きが異なり、畳敷きに堀ごたつ、窓際は障子がはつてある。床の間の上の一輪挿しには純白の水仙 このあたりは「ああ、お母さんだなあ」と思ってしまうほど、母親の趣味がよく表れている。

一方、母親の桂川一美は演技ではなく、本気で嘆きたくなった。目の前に立つのは、今年二十五歳になる一人娘で、パジャマ姿で寝癖をつけた、起こしてもらえなくて怒っているような娘なのだ。参考までに今の時間は十時七分だった。

「起こしたわよ。何度も」

「嘘」

「……清花」

一美は深々と溜め息をついた。

「二十五にもなつて、一体何してるの？ 他の人達を見なさい、平日の昼間から寝とぼけてる人なんて居ないわよ」

一人娘を甘やかしたのがいけなかったの？ と母親としては時々思いつめることもある。

清花は高校を卒業後、「おもしろそう」という理由だけで東京の大学の薬学科へ進んだ。二年後、突然に大学を辞めると言い出し退学、その後三年間フリーター（つまり、無職）でアルバイトを続けていたが、ある日「仕事が落ち着いたから」と言いバイトを辞めたのはいいが、何故か家に居ることが多くなった。

一美には清花の行動が分からず、さらにその仕事とやらも理解できずにいるのだ。

母親の小言にまたかというんざりした表情を見せ、

「何度も言うけど、私、仕事してるの。今日も朝の六時まで仕事してたのよ」

と、清花は言った。

「パソコンで遊んでるだけじゃない」

「そうじゃなくて、デザイナーだって、何度言ったらわかるの？」

「だって、服、作ってるわけじゃないんでしょ？」

「世の中のデザイナーがすべてアパレル関係だと思わないでね、お母さん」

「あばれる…？」

首をひねる一美にさらに言葉を返そうとしたが、清花は視界の端に時計を認めると短い悲鳴を上げた。

「テレビ！」

「え？」

「テレビつけて、早く！」

つけてと言っても結局自分でスイッチを入れた。ぶん、と画面が揺れて映像が表示される。

チャンネルを合わせる必要はなかった。

まず、カメラのフラッシュが絶え間なくたかれている光景が目に入った。画面の右下にはワイドショーの見出しである言葉が飾り文字で書かれている。

「ついに出現！『B・R』」

後で聞いたところによると、この時集まっていた報道陣は300人以上だったという。光を当てられているのは二人、四十代後半の男性（この人とは清花も面識がある）と、もう一人、高校生の男子。

無愛想に、尋ねられたことに、言葉少なに答えている。

「……」

清花は、息を飲んだ。目が、離せなかった。

「何なの、いったい」

芸能ニュースに疎い一美は、今、大騒ぎになっている『B・R』

のことなど知らなかったのだ。テレビの中の記者会見を不思議そうに見ている。

「お母さん」

清花は笑みを浮かべた。

「これが、わたしの仕事の依頼主よ」

十二月十日。神奈川県K区

「すーさー」

朝、出勤するとすぐに室長に呼び付けられた。時間は七時五十分。会社の始業時間は九時だが、須佐巽はいつもこの時間に通勤している。須佐が会社に入ると、スーツ姿の室長（事実上の社長。だいたい、この業界でスーツを着ているのは上層部だけだ）が新聞を読んでいた。普段は「仕事はいかにサボるかが大事」とか言ってるくせに結局はこの人も仕事人間。いや、会社人間なのだろう。

呼び付けられると言っても、スタッフ九人のみというこの会社では自分の机からたった数歩の距離。須佐はデスクへ荷物を置くと、狭い室内の一番奥、室長の席へと進んだ。

STUDIO SSSは、マンションの二部屋を間借りして営業している。一室は今居る場所、普段は九人のスタッフが仕事をしているところだ。もう一室には本棚が設置され資料が詰め込まれていた。

業務内容は主にテレビCMの制作。STUDIO SSSは某大手広告会社を親会社に持ったため、営業に人手は割かないことになっている。放っておいても親会社から仕事が降ってくるからだ。依頼主との契約後、ここで企画会議、日程、人手や器材の調整が行われ

る。いわゆるCMプランナーという職種である。実際の撮影は専門の業者がいるが、監督の選定や撮影の監督などもこのスタッフの仕事だった。

STUDIO SSSが親会社から独立した直後 四年前のことだが、当時のメンバーはこの室長と有馬という社員だけだったという。その後CM制作という業種に惹かれ、何の技術もなく感性だけで入社した者や、やる気や興味をアピールに来ていつのまにか居座った者もいる。そんな風にスタッフが増えていった。

室長の人を見る目のおかげでSTUDIO SSSの業績と知名度は上がり、親会社にとって無くてはならない存在にまでなった。しかしそれは、純粹に仕事を楽しんでいるスタッフたちの与り知るところではない。

スタッフの一人である須佐巽も、いろいろあつて三年半まえに中途入社した身である。眼鏡の中の瞳はいつも穏やかそうであるが、彼の仕事に対する厳しさは撮影会社の人達も含め、このスタッフ全員がよく知っていた。さらに矛盾することだが、須佐は背丈は人並みだが十人いれば八人に指摘されるほどの童顔で、高校生に間違われたこともある二十八歳だった。高校生のような顔でいつも穏やかで、でも仕事となると周囲に怒鳴り散らすのだから、彼ほど「外見に惑わされるな」という言葉が似合う男もいないだろう。

「おはようございます、成瀬室長。お茶でもいれますか？」

「あ、頼む」

他のスタッフが出社するのはまだ先の時刻だ。のんびりすることにする。

すぐ横に備え付けられた給湯スペースで須佐は手際良く日本茶を入れ始めた。湯を入れて急須を温めている時間、少しの間ができた。

「例の仕事、きてるぞ」

須佐の背中に向けて成瀬は言った。即答があった。

「あ、やっぱり」

「動じない奴だな。ちったあ驚けよ」

ばしゃつと湯を捨てて、今度は茶葉を入れもう一度お湯を注いだ。蓋をして押さえながら、ゆっくりと時計方向に回す。ゆっくりと。「だって、今話題になってるでしょ？ あそこの社長、ああ見えて派手好きそうだし、何か仕掛けてくるだろうとは思ってたし、それに」

巧いんですね、と付け加える。

「なにが？」

「何をどうすれば一番効果的か。Aをしたい場合、Bをどう動かすか、とか。そういうことです。殊にマスコミの動かし方をよく知ってますよ、あの人は」

二つの湯飲み交互に茶を注ぐ。茶柱は立っていないが室長好みの濃さにはいれられたと、須佐は満足した。振り返って成瀬の机の上に湯飲みを置いた。

成瀬は「さんきゅ」と言ってから、

「その顔で、性格擦れてんな、おまえ」と言った。

「顔は関係ないでしょ」

と須佐ははにかむように笑う。そして先程自分がいれた茶を口につけた。

成瀬は新聞をぺらりとめくり、三十二面を開いた。それは新聞の一番最後のページで、つまりテレビ番組欄だった。

十時からの時間枠の内容はすでに分かっている。あの『B・R』の記者会見が行われるというのだから、これを放送しない手はない。成瀬の想像通り、七つのテレビチャンネルのうち五チャンネルに、

『B・R』記者会見の予告がされていた。

「一週間でフィルムあげろって」

「？」

はじめ、須佐は何の話題を振られたのか分からず首を傾げた。しかしすぐに気付き、成瀬の言葉を理解すると大声をあげた。

「はあっ？」

「依頼書に書いてあったぞ」

「何考えてんだ…っ」と、言いたいところだけど、あの社長の無茶は今に始まったことじゃないし」

苦笑しながら須佐は近くの椅子に腰を下ろした。

STUDIO SSS。

『B・R・』のCDのテレビCMはここで作られている。

『B・R・』プロジェクトの裏方スタッフのなかで、直接仕事に関わる人数が一番多い作業だ。企画会議はnoa音楽企画の社長安納鼎と、作詞曲家のKanon叶みゆき、そしてCMプランナー須佐で行われる。その後須佐が絵コンテを書き（これは安納らの承認をもらう必要はない。基本的に仕事は任されている）、実際に撮影に入るわけだが、その撮影班の選定に須佐はまず頭を悩ませた。

企画の出所は絶対に秘密だというが、撮影に関わっている人間が後にテレビのオンエアを見たら、自分たちは『B・R・』のCMを撮っていたと当然分かってしまうからだ。『B・R・』のメンバーはもちろん、事務所、自分たちスタッフ関係者すべて名を明かしてはいけないと言われていたから、これは難しい問題だった（もとより、須佐たちは『B・R・』のメンバーを知らないのだが）。情報を洩らさないためには絶対の信頼関係が必要である。

安納鼎はその問題を解決できる人材を選んだ。

STUDIO SSS、須佐巽。

「でもほんとに、何考えてるんですかね。あの人は」

当の須佐本人は、お茶をすすりながらしみじみという。

「ま。とりあえず詳細は明後日。事務所に来いってさ」

「じゃ、成瀬室長。いつも通り三田さんのところの撮影班お借りしますね。話を通しておいってください。それから一村くんを借りていきますよ」

須佐は成瀬から依頼書入りの封筒を受け取り、自分の席へと戻る。書類を熱心に黙読する須佐の横顔を、鳴瀬はしばらく眺めていた。まだ、静かな朝だった。

十二月十一日。東京都L区

神経研究所附属理和病院。

中庭のツリーに電飾が灯って二時間が経とうとしている。

中野浩太が帰った後、安納希玖は叶みゆきが持ち込んだ書類に目を通していた。十枚程度の書類を熟読することはせず、自分に必要と思われるところだけ拾い読みする。この施設の面会時間は夜八時までで、みゆきもそれを気にして入る様子だった。

窓の外はもう真つ暗で、中庭のクリスマスツリーだけが光りを放っていた。窓に手を置くのと外の冷気が伝わってくる。みゆきは湿ったガラスに指を走らせた。文字を書きたかったわけではなく、外の景色をクリアに見たかったのだ。

「ふーん、面白そう。さすがお父さん」

その声に、ずっと外を眺めていたみゆきが振り返った。

「明後日にはスタッフ全員が集まるわ。レコーディングはその後から始める予定なの」

「スタッフ全員…って、初の顔合わせ？ 浩太たちも？」

「多分」

興味深そうに訊いた希玖にみゆきは曖昧な答えしか返せなかった。これは彼女が口下手で説明が足りないせいではなく、予定が不定だからだ。みゆきは安納鼎と並び『B・R・』プロジェクトの企画責任者であるが、安納のワンマンな手法のおかげで彼女が把握していないことは意外と多かった。

「おじさんが、二週間後に全員で記者会見するって言ったでしょ？」

「昨日のテレビで言ってたあれ？ うん」

『B・R・』が初めて姿を現した昨日は一大記念日だったに違いない。『B・R・』のメンバーの一人中野浩太と所属事務所社長の安納鼎二人だけの記者会見であったが、世間はそれに釘付けになっていた。

その記者会見のなかで、「他のメンバーは誰なんですか」という報道人からの質問に、安納鼎はこう答えた。

二週間後には彼らを紹介できるでしょう。

みゆきはその様子をホテルの部屋のテレビで見ていた。

「その二週間後って、二十四日。つまりクリスマス・イヴなの。今回の企画だってクリスマスに合わせてのものなのよ」

「派手だなー」

くすくすと笑いながら希玖は感心する。我が父親ながら立派な商魂だ。

希玖の反応を見てみゆきは、

「なんかね…うまく言えないけど。やりすぎな気がするのよ。演出が過ぎるっていうか…」

と言う。

「うん？」

「…」

安納鼎は芸能事務所の社長で、タレントという商品を売り出すのが仕事だというのは分かる。

秘匿性をネタに人気が集中した『B・R・』。レコーディングというまとまった時間に、一般人である彼らを一度に集めるのは、年に一回が限度だった。だから年に一度しかCDを出さなかった。その稀少さがまた人気の原因となった。毎回『B・R・』の曲は発売後二ヶ月はベストテン入りしているし、売り上げ枚数だって大したものだ。テレビにも雑誌にも、それこそCDの宣伝ポスターやテレビCMにまで現われない。そう、言葉さえも聴かせてくれない、「音」だけの存在どころか、「歌」だけの存在であるにも関わらず。語り継がれてゆく、まるで伝説のように。

『B・R・』は、「夏」の代名詞として君臨していた。

そのなりゆきに安納は満足しているようだったし、『B・R・』の五人も楽しんでいるようだった。

でも。

安納の目的は『B・R・』を売ることじゃない。

（それだけは、私も分かってるわ）

だって『B・R・』が立ち上げられた理由は一つだけだった。それはみゆきが待ち望んでいたことだし、希玖だって気付かずに願ってたはず。おじさんも分かってくれた、希玖から生まれた音楽を聴いた瞬間に。

安納希玖の曲を人々に聴かせることが、『B・R・』の目的だから。

安納希玖の病気は先天性のものだ。

彼が赤ん坊の頃、母親は「お昼寝ばかりしていて手のかからない子」と笑っていたという。

初めて異変に気付いたのは希玖が四歳の頃だった。日中、突然倒れるということが続けて起き、貧血かと心配した母親が希玖を病院へ連れて行った。そこで、病名を知らされた。

ナルコレプシー。この病気の症例者の中でも、希玖はかなり重度なほうだと分かった。

この日から、彼は「生活時間」と引き換えに、三十錠もの薬を飲むことを余儀なくされる。昼間に起きている為には、それだけの薬を飲まなければならなかった。普通の食事が喉を通らなかった。気分が悪くなって何回も吐いていた。かと言って薬を止めれば夢の中に落ちてしまう。

幼い頃はきつ過ぎる薬を飲ませてもらえず、病院のベッドの上で何年も過ごしたことがある。退院しても、通院生活が続いた。

当然学校には行けない。通ったことはない。病院内の友達。彼ら

はすぐに退院していった。

淋しかったけれど、でも、それほどでもない。

希玖には一人だけ、ずっと付き合ってる友達がいた。

叶みゆき。 同い年の従姉。

多分、彼女の母親（安納鼎の姉）が希玖の見舞いに連れてきたのだと思う。初めにあったのはお互いが八歳の時。みゆきは誰にも教えられずに、希玖の病気を受け入れ、理解していた。少々心配性であるくらいがあるが、希玖のよいパートナーだった。

彼女とは音楽鑑賞という趣味において、よく気が合った。歌謡曲に始まり次はクラシック、さらにハマったのはテレビCMや効果音などの「曲」ではない「音」。お互いCDを交換したり、流行歌批評もした。ある時病院へボランティアで来た中庭での楽団演奏を、楽譜に起こしお互いの記憶違いを指摘し合ったり。

でも、二人とも楽器は使わなかった。

興味がなかったのかもしれない。

一人や大人数で奏でる音、歌。嫌いなわけでは勿論無い。ただ、耳に入る心地よい音楽に浸るのが好きだっただけで。

希玖が十歳のとき、父親がパソコンを持って現われた。（みゆきはその時初めて安納鼎と会話した）

多分、安納は玩具として息子にパソコンを与えたのだろう。ゲームやインターネット、病床の希玖には良い暇つぶしになるかもしれない、と。

しかしそれは暇つぶしでは終わらなかった。

そのパソコンを用い、希玖は次々と曲を作っていたのだ。

溢れ出す才能の解放。

今まで溜めてきたものをすべて吐き出すかのように、希玖はいつもパソコンに向かっていた。自分のなかの世界を形にする充実感。そして解放感。安納希玖から紡ぎ出される音楽はとても心地よく、耳に優しく、ときには感動さえ覚えた。

みゆきはいつも、それらの曲を聴き続けてきた。となりで、希玖

の音楽に浸り続けてきた。

「きつとこの曲がいつかCDになって、皆が耳にするかもしれないね」

「だめだよ。これはまだ未完成だもん。ギターとかバンドにやつてもらって、歌も入れて、…本当に完成したものをいつか聴けたら、すごく幸せだけど」

安納鼎が自分の息子が作った曲を初めて聞いたのは三年半前

。希玖が十四のときだった。

その半年後。希玖とみゆきが十五歳の夏、『B・R・』プロジェクト開始。

安納鼎は息子の曲が売れると打算したわけじゃない。

皆に聴かせるに値する。

そう、判断したのだ。

「でもお父さん。僕のことを知られるとあの人達怒るんじゃない？」

「その点はぬかりない。正体不明なバンドを作るんだからな」

…そして今に至る。

正体不明なはずの『B・R・』のメンバーの顔が割れてしまった。そして今、安納鼎は手の平を返したように大々的な演出と舞台を用意して『B・R・』を世間に発表しようとしている。

開き直り？ でも派手に『B・R・』が現われて調子に乗ったマスコミがKanonに興味を持たないとも限らない。それは安納鼎のもつとも避けたい事態ではないのか。

それにKanonは実は叶みゆきではなく、安納希玖だという事実は、仲間たちにも秘密だと念を押している。この念の入りまくった秘密ゴツコはまだ続くのだろう。下手なことをするとは思えないのだが。

みゆきはますますこんがらがると、額を押さえ深々と溜め息をついた。そして訊いた。

「…おじさんは、何を考えてるのかな」

「何？」

首を傾げる希玖に、みゆき是要領が悪いながらもたどたどしく、希玖に説明した。

「ああ……。でもそれ、僕はわかるよ」

「え？」

あまりにもあつさりと希玖が言った。驚くみゆきに説明するため、うーんと数秒考え込んでから、

「……抽象的な言い方をすると、影を濃くするには光を作らなきゃね、ってことかな」

と、真剣な顔で言う。は？ とみゆきは眉をしかめる。希玖の言葉を反芻し、頭を回転させ希玖の言葉を必死で理解しようとする。でもわからない。

「具体的に言うとうなるの？」

と、みゆきにしては気の利いた返しかたをした。希玖は、

「具体的に言うとお父さんは僕を愛してる、ってこと」

と、真剣な顔で言う。

「……………降参。わかんないよ」

「うん、まあ。お父さんはお父さんなりに、僕のことを考えてくれるんだと思う。『B・R』のメンバーを潔く発表するのだから、多分、Kanonを世間に晒さない為なんだ」

「どういうこと？」

「例えば、ここで『B・R』を下手に隠そうとすると、ストーリーまがいのマスコミが出てくるのは間違いないよね。浩太を監視して他のメンバーを調べようとするだろうし、もしかしたら僕までたどりつくかもしれない。『B・R』の売り方もそうだけど、隠せば知りたがるのは人間の当然の心理だからさ。だからお父さんは『B・R』を堂々と発表することで、下手に裏を探られないようにする。つまり『B・R』という光源により影をつくり、そこにKanonを隠す。なんだかんだ言っても結局親馬鹿なんだよ、あの人」

自分と、自分の父親のことなのに容赦無い言い方をする。

でもみゆきは気付いていた。希玖の言う通りだとすると、安納鼎はKannonを守る為に『B・R・』を犠牲にしようとしているということだ。

正体をバラされたくないのは、彼ら五人も同じ思いなのに。

「……………Kannonのため、か」

溜め息混じりにみゆきは呟いた。

みゆきが考えたようなことは、希玖はすでに予想していたに違いない。Kannonもまた、自分の名が広まるのを恐れている一人だから。

「そう。みゆきちゃんが知ってる通り、僕がこんなことしてるっていうのが世間様にばれたら、ごく一部の人は非難するだろうしね」
そんな風に、笑う。

『B・R・』は正体をバラしたくないと言ってる。

Kannonは自分の名を広めたくない。

安納鼎は希玖の音楽を発表したい。

(そして私は……………)

自分の望むものは分かってる。安納鼎に談判してあっさりと却下されたものだ。

そのことを考えるといつも息苦しくなる。手の平に汗が滲んで、胃が痛くなる。

「……………」

言葉が喉まで出掛かる。そして息はそのまま声になり、言葉になった。

「……………でも希玖」

「え？」

「ごめんなさい。…分かってるんだけど、私は、ちゃんと言いたい」

「……………なにを？」

みゆきの声から真剣さが伝わったのか、希玖は真顔で返した。みゆきは言った。

「皆に。私はKannonじゃないって、ただの代理なんだってっ！
…希玖の事情は知ってる、隠れなきやいけない理由も分かってる、
のに、こんなこと言うのは勝手だって分かってる。でも」
唾を飲む。

「Kannonの名は、私には重過ぎるよ」

絞り出すような、声。

みゆきは希玖の顔が見えなかった。自分が酷く勝手なことを言っているとなっていてから。

『B・R・』が結成されたとき、自分の役回りを安納鼎から命じられた。『B・R・』のプロジェクトのなかでのみゆきの仕事は雑用と、Kannonを名乗りレコーディングに参加することだった。みゆきも初めは戸惑ったものの、結構簡単にOKしたと思う。希玖の曲を発表することに舞い上がっていたのだ。

わずか一ヶ月でスタジオワークを叩き込まれ、最低限の知識も詰め込まれた。Kannonを名乗る体裁は整えられたはずだった。

しかし。

(……)

空名を背負うことがこんなに辛いなんて、みゆきは知らなかった。誰かの名を名乗るというのは、単なるスポーツスマンとはわけが違う。代理だなんて気付かせてはいけない。

曲を聞いたのは自分だと、そう口にするのは簡単。良心が少し痛むだけで。

でも、その賛辞を受けたときの罪悪感といったら前述の比ではない。

ズキズキズキズキ。本当に、胸が痛くなる。

その度に、みゆきは叫びそうになる。

(Kannonは私じゃない！)

……みゆきちゃん。それ、違うよ」

静かな、声が響いた。

「え？」

みゆきが顔を上げると、希玖は目を細めて苦笑した。いつもの笑顔とは違う、悲しそうな表情だった。

「やっぱり、勘違いしてたね」と続ける。

「え…どういう」

意味？ と訊こうとした。

瞬間。

バンツ

病室のドアが開かれた。同時に叫ぶ声があった。

「おい、かのんっ！」

帰ったはずの中野浩太が現われた。えらい剣幕で二人に近づいてくる。

浩太が名指しした「かのん」とはもちろん叶みゆきのことだ。

と言ってももしかしたら浩太はこの時みゆきを呼んだのではなかったのかもしれない。

突然入ってきた浩太に二人は目を丸くした。

「浩太さん…？」

「どしたの、浩太。帰ったんじゃないかった？」

浩太は呼吸が乱れて両肩が上下に揺れていた。走ってきたせいもあるが、それよりも興奮が勝っていると思う。

浩太は二人の顔を交互に見渡した。

一人は叶みゆき。三年前に出会い、あれらの曲を作った本人Kanonだと安納鼎から紹介された。『B・R』のプロデューサーであり、雑用係でもある。

もう一人は安納希玖。半月前からの付き合いだが、ついさっき安納鼎の息子でみゆきの従弟であることを教えられた。…はつきり言っただけじゃない奴だ。

浩太は自分の中に生まれた小さな疑問を放っておくことができなかった。その疑問はついさっき生まれたものではなく、何年も前から存在していたもののような気がする。

（ああ、やっぱり）

何がやっぱりなのか分からないがそう思ってしまう。

今、ここで二人に何を尋ねようとするのか、その言葉さえまだ決まっていないのに。

まだ何も訊いてない。まだ何も答えてもらってない。それなのに。不思議と、納得してしまっている自分がある。それはとても、穏やかで激しい。複雑だ。

「浩太：？」

「一つ尋きたいんだけど」

浩太は、二人を見据えた。

「『B・R』の作詞作曲者のKanonって、叶みゆき。おまえのことだよな？ 希玖じゃなくて」

いつからだろう、妙な違和感を覚え始めたのは。

『B・R』の詞。曲。

叶みゆきという人間を知られば知るほど、その違和感は深まるばかり。

『B・R』の、少なくともあれらの「詞」を、叶みゆきが書いたとは思えないでいるのだ。

いつも自信が無さそうに、おどおどしていて、ちよつとつづけば言葉を返せないまま黙り込んでしまうような叶みゆきには。

恋愛や生き方の詞。叶みゆきが「表現」する内容とは思えない。

以前、片桐実也子にできるだけ柔らかい言葉で言ってみたところ、「え？ でもかのんちゃん、好きな人いるよ」と返された。

（：別に、あいつにそういう気持ちが無いつて言ってるわけじゃない）

さすがにバツが悪くなり、自分の中で弁解する。

それにそういう問題ではなくて。

叶みゆきは自分自身を表現するのが苦手だ。おまけに鈍感で気も

利かない。

あんな風に、「言葉」という明確な意思疎通手段で自分を伝えるという器用さは、彼女には無いと思うのだが。そして詞の内容を物語りとして演技する要領も、無い。

咄嗟のときに嘘が付けない。

中野浩太と同様、叶みゆきもそんな人間だった。

「……」

みゆきは明らかな動揺を表情に出した後、反射的に希玖を振り返ってしまった。希玖はみゆきのその視線を受け取らなかった。

希玖だけは表情を変えず、浩太の視線を受け止めていた。強気も弱気もうかがえない視線で。

空気が痛かった。

浩太の質問からどれくらいの沈黙があっただろう。誰も、息さえ飲まなかった。

浩太は二人を睨み付けたまま、どちらかが答えるのを待っている。みゆきは言葉を返せない。でもその表情だけは馬鹿正直で動揺しているのがわかった。

希玖は何も読み取れない表情で浩太を見つめている。

二人が答えられないでいるのは図星だからだ。と、言い切れるまで浩太は自信があるわけではなかった。でももし全くの見当違いなら笑い飛ばせばいいはずだ。それに少なくともみゆきは嘘をつけない。それは可能不可能ではなく単に性格の問題である。

(あ)

ふと、こんな場面であるが思い立ったことがあった。

(…どうするんだろう)

もしこれが本場で、もしここで二人がイエスと答えたら、自分はどうするつもりなのか。

自分の直感通りだと笑うのか？ それとも。

全く考えてなかった。わからない、今は何もわからない。その瞬間に生まれる自分の感情さえ想像できないから。

その瞬間に生まれる自分の感情が何故だか怖くて、ノーと言ってくれと、浩太は願った。

沈黙を破ったのは、希玖だった。言った。

「あちゃー…。バレちゃったね」

崩した雰囲気であう。どきっと驚いてみゆきは振り返った。

「希玖っ？」

「だってみゆきちゃん、これ以上隠してもしょうがないし」

軽く肩をすくめてみせる。不安そうな顔をしているみゆきを安心させるために笑顔を向ける。

しかし、

「ほんとなんだなっ」

という浩太の厳しい声に、みゆきの体は跳ね上がった。

希玖の、その何でもない事のような軽い言い方に、無性に腹が立っていた。

「うん」

と、希玖。

「確かに、『B・R・』の曲の作詞作曲をしていたのは、僕だ」
はつきりと、わざと単語を区切って希玖が言った。

真実を言った。

「社長は、知ってたのか？」

「お父さん？ もちろん知ってるよ」

「もしかして、そのパソコンで…、曲を？」

「あたり」

「…」

浩太は歯ぎしりした。

どうして、こうもどうでもいい質問ばかりが口に出るのだろう。

（落ち着けっ）

そう、自分に言い聞かせて、実行できた試しはない。

(Kannonはみゆきではなく)

(『B・R・』の曲の作詞作曲は希玖で)

(隠されていた? 三年間も)

(ああ、やっぱり)

混乱して、複雑な感情が入り混じる自分の中で、不思議と落ち着いている部分がそう呟く。

やっぱり、と。

そう考えるとしっくりとすべてが解決するような気がする。

Kannonとみゆきが同一人物とは思えないこと。みゆきの性格希玖の指し示すもの。Kannonの詞。希玖の言葉。

見えない糸が、ほどかれてゆく。

「…どうして、黙ってたんだよ」

と、浩太は訊いた。

この状況で尋ねるには、適当な質問ではなかったかもしれない。でも、浩太の心情的には、的確な疑問だった。

「どうして隠してたんだよっ」

手が震えている。それを自覚した。

声が大きくなるのは気持ちの昂ぶりだ。その大声でみゆきがビクツと肩をすくめたが知ったことではない。希玖は。

希玖は、その無表情のなかでも、どう受け答えするかを計算しているに違いなかった。

それが分かるくらいの付き合いはあった。

浩太は希玖が答えるのを待った。みゆきも、希玖の言葉を待っていた。

さあ、どう答える?

挑発的に浩太は胸の内呟く。

弁解の言葉で、納得いく説明をして欲しかった。きちんと説得されて、一言謝って欲しかった。

黙っててごめん、と。

希玖の事情、みゆきが代役を努めるまでの経緯。

それだけで、この、一人よがりな憤りは収まるはずだと。

浩太は、思っていた。
しかし。

浩太の思惑は外れて、希玖はにつこりといつも笑顔を見せると、
明るい声のたった一言で説明を終わらせた。

「どうしてって、秘密だからさ」
どこかで聞いた台詞だ。

ああ、そう。希玖が安納社長の息子だと名乗らなかった理由も、
彼はそう告げていた。きつと、その時とのシヤレも含めて、意図的
に同じ言葉を選んだ。きつと。

すう、と、浩太は頭が冷めるのを感じた。憤り？

浩太に鈍感と評されたみゆきでさえも、希玖の返答が浩太に与え
る感情に気付いた。

「き…、希玖っ」

「俺、帰るよ」

口を出た言葉は意外にも冷静なように響いた。

「浩太さん…っ」

「そう？ 浩太、また来てね」

「二度と来るか」

あたふたと声をかけるみゆき。

いつも通りの別れの挨拶をする希玖。

それを拒絶する浩太。

息を吸う。

「なんだかんだいって、仲間を騙してたのはおまえのほうじゃない
かっ！」

希玖ではなく、みゆきに。

浩太は怒鳴った。

希玖は弾かれたようにみゆきに視線を送る。みゆきが責められる
とは思ってなかったらしい。

みゆきは、唇を噛んで、酷く傷ついた顔を見せた。

それで浩太が気を静めることはなかった。

（三年間も…っ）

『B・R・』の面々は全員、みゆきのことを「かのん」と呼んでいた。それは勿論、みゆきがKanonであるからで、またそれとは別にKanonに対する尊敬も含まれていた。

みゆきもそう呼ばれることに異議無いようだったし、なにより三年間一緒にやってきた仲間だ。

それが嘘だったなんて。

浩太だって傷ついている。

「ま…待って！」

突如、みゆきは踵を返そうとした浩太に駆け寄ってその腕を掴んだ。浩太、そして希玖にとっても予想外の行動で少なからず驚く。

「離せっ」

腕を振り解く。

みゆきは息を切りながらも、浩太に懇願した。

「こ…このことは内緒にして、ください。お願い…、お願いします」
「…」

ほら、やっぱり、と思う。

みゆきがここまで必死になるだけの理由が、希玖にはある。

みゆき本人の都合じゃない。自分のことをここまで貫き通そうとする意志の強さはないだろうから。

希玖に理由があるんだ。

（…）

何故だが、むっ、と苛立って、浩太は突き放す言葉を返した。

「そんなこと言える立場か」

そして振り返り、ドアを開ける。部屋の外へ出る。ドアを閉める。今度は振り返る理由も、引き止める声もなかった。

窓の外、ずっと遠くに都心部の明かりが見えた。いつもと同じ景色のはずなのに。

浩太は、泣きたくなった。

「希玖…、どうするの？」

おろおろと慌てふためくみゆきは、浩太が去ったドアのところから振りかえった。

希玖はベッドの上で軽く肩をすくめて見せる。

「浩太は告げ口なんてしないよ。『B・R・』のメンバーに言うくらいはするかもしれないけど、外に漏れることはないさ。でも、僕の言い分を聞いて行って欲しかったな…」

膝の上で指を組み、希玖は目を細めてそんな風に呟く。

「そんな」

悠長なこと言つて、と言いかけた。

「きみもだよ、みゆきちゃん」

「え？」

みゆきの疑問符を、希玖はわざと無視した。

「みゆきちゃん」

そして人差し指を立て、笑顔を見せる。

「今回の企画の日程、教えてもらえる？」

* * *

十二月十三日。東京駅丸の内口

「久しぶりっ！ …とは言わないか、今回は。三日前に別れたばかりだし」

いつもと同じ、東京駅。

小林圭、片桐実也子、山田祐輔、長壁知己の四人はそれぞれの地元から戻り、再び集合していた。

いつもと同じでないのは、中野浩太がいないことだ。彼は今、外を歩くわけにはいかないから。年齢がばらばらで、にぎやかな四人組は駅構内で多少目立っていたものの、まさかこの四人が『B・R』のメンバーだなんて、人々は夢にも思わないだろう。

三日前。四人はこの場所で別れた。理由は、これから世間を騒がせる出来事に自分たちが関わり、その結果周囲に迷惑をかけるだろうという、家族への告白のためだ。

正体不明の人気バンド、『B・R』。

そのうちの一人、ギターの中野浩太がスクープされたのは四日前のこと。そして、四人が地元へ帰っている間、中野浩太と事務所の社長である安納鼎の記者会見が行われていた。四人はそれを自分の家のテレビで見ていた。

『B・R』の五人は皆、有名になりたかったわけじゃない。

お互い全く別の、それぞれの生活があるし、それを大切に思っている。『B・R』というバンド活動は趣味の一環で、勿論それも大切にしているけれど、一年に一回と割り切っている。

安納鼎は言った。

君達はプロになる気があるのか？

あるわけない。

結局、安納の説得（企み？）により、全員、マスコミの前に出ざるを得なくなつたわけだが、その後のことについて、明確なビジョンは無かった。

彼ら五人の意志を尊重する。と、安納は言っているが。

「あ、すごいことに気付いた」

と圭が面白そうに言う。

「？」

「俺達、コート着て会うことなんてなかったな」

年長組三人が目丸くした。

『B・R・』の活動は夏と決まっていた。故に彼らは夏以外に会うことなどなかったのだ。

ぷーっ、と実也子が吹き出す。

「皆とクリスマス過ごせるなんて夢にも思わなかったよ」

今日は十三日。安納が五人に記者会見を行わせる二週間後というのは、奇しくもクリスマス・イヴ。

「こんな状況にも、ちよっとは感謝しなきゃかな」

実也子は目を伏せて、苦笑いした。

「結論を出すのは、本当に最後でいいと思う」

知己が切り出した。場所は東京駅を出てすぐの皇居外苑広場。すぐ近くには桜田門、そして永田町の政府関連ビル。冬の厳しい風が吹くなか、吹きさらしの公園に人影は少なかった。そこで四人は話し合いをしていた。

「今回は事が事だけに、皆の意見が一致するとは限らない。お互い、最後までよく考えて、それこそ記者会見の当日に結論を出すくらいに考えていたほうがいい」

「やめるか、続けるか。選択肢は二つですがその切り分けは微妙です」

メンバーは五人いる。

一人だけ、やめたいと言った場合。

一人だけ、続けたいと言った場合。

それはすでに『B・R・』を続ける続けないの決断ではなく、個人として一人一人が芸能界で音楽活動をするかしないかという意味

になつてくる。

一人だけやめた場合、安納は別の場所から人員を連れて来て補強するだろうし、一人だけ続ける場合、それはすでに『B・R』ではない。事は単純ではなかった。

「皆と離れてこの三日間考えてたこと、聞いてほしいな」

「いいですよ」

冷たい風に身を震わせ、実也子はマフラーを巻き直した。

「私……ね。この間言つた通り、三年前まで弦バスの先生のところに通つてたでしょ？ それを理由も無くやめた。でね、両親は志し半ばで諦めた私を叱つたりしなかったけど、……さらに私、一年留年して大学に入ったのね。……私、すごくワガママで親不孝だと思うわ。この歳になつても、ふらふらしてて、独り立ちできない。……さらにここで、また、進路変更っていうのは、ちよつと言い出せないかな……なんて。今は、思つてる」

うまくまとまらない言葉で、実也子は三人にどうにか伝えようとする。その視線に促され、今度は知己が意見を口にした。

「俺んちは親父が単身赴任中で、もし俺が東京に出てきたら母親を一人にさせちまうし……まあ、そんな氣遣いを喜ぶ人でもないから言えないけど、やっぱり……そうだな、一人にはさせられないな」

知己も自分のなかでまだうまくまとまっていないうた。彼にしてみればすべりの悪い台詞だった。

「ご存知の通り、僕は音楽教室を営んでいるから生徒を放っておけないっていうのが、第一にありますね」

と、祐輔。何となく当たり障りのない言い訳にも聞える。もしかしたら別に理由があるのかもしれない。

「圭は？ 何か言いたそうですけど」

「……圭ちゃん？」

無言を通して圭は、コートのポケットに両手を突っ込んで、眉間に皺を寄せていた。

「……俺、実は怖いと思つてることがあるんだ」

と、切り出す。圭のこんな物言いは珍しい。

「圭？」

「……この間の夏、真剣に悩んでたことなんだけど」

三度目の夏のこと。あの時はまだ、こんな事態になるなんて夢にも思わなかった。

「多分、俺は、来年は今と同じように歌えないと思う」
「？」

実也子たちは目を合わせ、心配そうに圭を見つめた。

「変声期だよ。来年は十六になるし、『B・R』の、この声で歌えるのは今年が最後だなんて、夏に思った。そうしたらすごく、怖かったんだ」

『B・R』は正体不明。そのボーカルの声は男性とも女性とも思えるような微妙な声質だ。

それは『B・R』のボーカルである小林圭が変声期前の男子であるからだ。

バンドにとってボーカルの声が変わるってのは致命的である。他のどの楽器のメンバーが替わっても、歌い手が替わってしまったては、それはもうそのバンドではない。

全員が、沈黙した。

「……実家に帰ってたとき考えてたんだけど」
知己が言う。

「なに？」

「俺たち、自覚が欠けてるんじゃないかって」

「どういうこと？」

「『B・R』のCD売り上げ数って考えたことあるか？ それを金に換算したことは？ CD売り上げは数百万単位で、金にすると軽く億に届く。俺達は単に楽しんでやってる。けど、『B・R』の曲は二人に一人が聴いてるほど、世間に浸透している。それを恐いと感じた。名を隠しているからこそ、他人ごとのように楽しめたんじゃないか？ 責任から逃れてるんじゃないかとか。この先

続けていくつてことは、その責任を負うことなんだって、思った」さらに沈黙。

基本的に『B・R・』のメンバー五人は、『B・R・』としての報酬を受け取っていない。当初、安納はそれに見合った賃金を用意していたが、五人が丁重に断わったせいだ。

理由は、「自分たちはプロではないから」。

プロであれば、報酬を受け、それに見合った仕事をする。その仕事に責任を持つ。

もちろん、知己たちだって仕事に手を抜いているわけではない。

しかし、仕事に責任を持っているかは謎だ。

プロではない、ということに甘えているのではないか？

もし同じメンバーで同じように音楽活動が続けるのだとしても、プロと名乗る以上、今までとは違うものなのだ。

四人とも、何となくではあるが感じ始めている。

『B・R・』は、残ることはないだろう、と。

* * *

「皆さん、1002室を予約してありますので集まって下さい」

叶みゆきの声で各部屋に電話があったのは、四人がホテルについてすぐのことだった。

浩太の部屋も例外では勿論なく、希玖の病室での一件のせいか、みゆきはかなり気まずい雰囲気で用件を伝えた。

「…わかった。すぐ行くよ」

浩太の声も、内なる憤りが表れていた。

廊下に出ると、ちょうど他の四人もそれぞれ部屋を出たところだ

った。

「あれー、浩太久しぶり」

「よう」

久しぶり、と言っても別れたのは三日前の話だ。しかし浩太はこの三日の間に記者会見があり、それに希玖やみゆきについて考えることが多かったので、このメンバーと顔を合わせるのは本当に久しぶりのような気がする。

「今回は僕らを集めて何を話す気なんでしょうね」

祐輔が意地悪く言った。

「確かに」

知己も同調する。

二週間後に予定している記者会見の事前打ち合わせ…とも考えられるが、定期的に早すぎだろう。もしくは安納鼎が『B・R』の存続か否かの返事を待っている？ それも考えられる。

五人は揃って同じエレベーターに乗り、知己が十階のボタンを押した。

「かのんが早く帰って来いって言ったから、俺ら三日で帰ってきたけど、記者会見までかなり暇なんじゃない？」

「圭は学校はどうなってるんです？」

「自主休み。期末は終わってるし、大した授業もないから。…って、親を納得させてきた」

「中野？ 何か機嫌悪くない？」

「うっせー。何でもねーよ」

「何よその態度はーっ」

そうこう言ってるうちにエレベーターは十階に到着。五人は指定された部屋へ踏み出した。

ガチャリ

「あれ…」

一瞬、浩太は部屋を間違えたのかと思った。何故なら室内には既

に数名が椅子に座っており、ドアが開かれる音に反応してその全員が振り返ったからだ。浩太は（しまった…）とそのままドアを閉めようとした。

「何してる。早く入れ」

安納鼎の声だった。

「え」

落ち着いて部屋の中を見渡すと、その幾人かの中に安納と叶みゆきがいるのが分かった。

「中野？ どしたの？」

ドアの後ろでつかえている仲間から不審の声が上がる。

「あ。ああ…」

とにかくよく分からないが部屋は間違えていないわけだ。浩太は室内に足を踏み入れた。続いて圭、実也子、祐輔、知己が入室する。「なに、この人達」

と、誰に問うでもない、つまるところ、小さくない声で独り言を言ったのは圭だ。

「ほんと…」

実也子も、既に席についている人物からの視線をどう受け止めればよいか戸惑っている。

安納がいて、みゆきがいる。そして六人。年齢も服装もばらばらの人物が、興味深そうに『B・R・』の五人を振り返っていた。

いや、そもそも彼ら六人は浩太たちを『B・R・』と知っているのか？ 安納、そしてみゆきがいるのだから何らかの関係があるのは必至だ。

パタン、と知己が後ろ手でドアを閉めた。

「八木さん…？」

その六人の中で、一人だけ面識のある人物がいることに逸早く気付いたのは知己だった。

「えっ？」

知己の言葉に浩太が驚く。

「あーっ、ほんとだ、八木さんだ」

実也子が大声を出すと、六人のうち一人が立ちあがって軽く頭を下げた。

「どーも」

八木尋人だった。職業はフリーライター。表沙汰にはなっていないが、『B・R』のメンバーのうちの一人である中野浩太を誰よりも早く見つけ出した人物だ。

「どうしてここに？」

「安納社長に呼び出されたんだ」

八木は浩太たちの反応を面白がっているかのように笑う。どーして、と尋ねようとした矢先に安納の声が響いた。

「早く席につけ。会議を始める」

「その前にこの方たちが何者が紹介していただだけませんか」

冷静に祐輔が問う。

「勿論だ。早く来い」

入り口付近で足を止めていた五人は、みゆきの誘導により用意されていた席につく。丁度、八木を含めた六人と向かい合うかたちだった。八木は自分の席に座り、みゆきは白板の前に立つ安納の隣に腰を下ろした。

「ごほん、と安納が空咳をする。そして言った。

「全員が揃うのは初めてだな」

しん、と室内は静まりかえっている。

「三年前に立ち上げた『B・R』プロジェクト。現在この部屋にいる、八木くんを除く十二名が、『B・R』プロジェクトの総メンバーだ」

そう、言い放った。

「……っ！」

驚いているのは浩太たち五人だけだった。目の前にいる八木を含む六人、それと叶みゆきは静かにそれを聞いた。

「今まで、顔を合わせないよう打ち合わせを行っていたからな」

「そーやつ、えげつないでー、シヤチョー」

と、目の前の一人が立ち上がった。三十歳前後と思われる男性。怪しい関西弁で、びしっと安納を指差した。

「聞いてくれや、『B・R・』の人達っ」

浩太たちのほうに顔を向けたかと思うと馴れ馴れしく話しかけてくる。

「俺らスタッフもな、全員が顔を合わせていたわけやない。実際、俺はこの中では桂川と叶としか顔合わせたことなかったしな。今日、来てみたら何や。大塚のオヤジに須佐までいるし。他の仕事で一緒になったことあるヤツばっか。隠しとく必要なかったやん」

「必要かどうかは関係ないだろう。そういう契約だったただけだ」

と、安納。

「新見さんっ、話が進まないから座ってよ」

隣の女性が小声で諫めた。この女性は二十代半ばと思われる。全体的に派手…というより若作り気味で、ウェーブの髪をアップに結って花飾りがあしらっており、襟と袖にファーがついたピンクのシヤツにミニスカートという格好だった。

「桂川さんの言う通りだよ、新見。座れ。まず、自己紹介してもらう、新見から」

「よっしゃ。俺は新見賢三、三十一歳。フリーのカメラマンだ。」

B・R・『プロジェクトのクレジットで言うなら、Photography担当、つまりジャケ写の写真は俺が撮ったっつーことやで」次に隣の女性が立ち上がる。

「デザインワーク担当、桂川清花です。二十五歳。ディスクの盤面デザインは勿論、ジャケットの紙の素材、色や文字の配置を考えるのが仕事。新見さんの写真を好き勝手使えるのが特権かな」

さらに隣。眼鏡をかけた細身の男性が軽く頭を下げた。

「須佐巽。二十八歳。CF・テレビCMの製作をやってます」

隣。大学生のような男性が緊張しているような挙動で立ち上がる。「一村草介、ですっ。この仕事では宣伝ポスターの製作をやっ

ます。二十四歳です」

また隣。膨れた腹が目立つ壮年男性が胸の前で手をあげる。

「大塚スグル、五十歳。確認するまでもなくこの中では一番年配だな。製作担当。製作つてのは、まあ、CDやケースそれら全てを形にする仕事だ。CDだけでなくCMの配給もやってるから、ま、こいつらの総まとめ役でもある」

その、嵐のような自己紹介を浩太たち五人は黙って聞いているしかなかった。

「でも、ほんと、感動ですよ、社長」

桂川が高い声を出した。

他、新見たちも浩太たちに目を向けて、笑顔を見せる。

「会えて光栄です。あなたたちと」
スタツフ五人を前にして、感動しているのは浩太たちも同じだった。

自分たちだけで、『B・R・』のCDが作られているとは勿論思っていないかったが、こうして製作スタツフとして関わる人達と会うことで実感が伴う。三年間、一緒に仕事をしてきた仲間たちが、はじめて結集したのだ。感動を覚えるのは当然だろう。

「あ、あの…っ」

実也子だ。

「ジャケットの写真つて、いつもすごく綺麗なあの風景写真の？
あなたが撮ってるんですか？」

「そーやっ」

「うわー、私、あれ、好きなんですよーっ。嬉しいっ」

身を乗り出して新見の手を掴みぶんぶんと上下に振る。握手をしたいらしいが、気が昂ぶっていて何がなんだかわからない。しかし、実也子のそのテンションに新見もうまくのつていた。

「テレビCMつて、女の子が路上で踊ってるやつですよね…？」
と、祐輔が言う。

「そう。僕が撮った」

須佐が答える。

「あれって、BGM無しで無音ですよ」

「そうそうーっ。突然、音が消えてハッとさせられるやつ」

圭ものってきた。

「CDのCMでは珍しいですよ。あれも須佐さんのアイデアなんですか？」

「まあ確かに無音なのは演出だけど。でも実際問題として、毎回CMを撮ってる時期は、君らのレコーディングがまだ始まっていないんだ。だから『B・R・』の曲は使えないんだよね」

苦笑しながら須佐は肩をすくめた。

しばし歓談。

『B・R・』のPR商戦は本当に一般的なものだ。

リリース日の半月前には店頭にはポスターが貼られ、テレビではCMが流れ始める。CMは過去三回に渡り、ストーリー形式になっており、CMファンの間では好評だった。一見、何のCMが分からない映像で、最後にアルバムタイトルと『B・R・』という文字が出るだけ。ずっと無音であることも、人々の注意を引きつけるのに役かっていた。ポスターも同じイメージである。

一方、発売されたCDのジャケットはCMに比べるとかなり抽象的で、風景写真にデジタル処理を施してあるものだ。とくにこれは知己が気に入っていた。

「で、だ」

盛り上がっている中で、安納が口を挟んだ。

「八木くんには、ライターとして、今回の企画に加わってもらっ」

「よろしく」

と、挨拶。

「は？」

訳が分からず呟いたのは浩太だ。

同じく圭も首をかしげる。

「今回の企画、ってなに？」

「あー、君達五人には言つてなかった」

と、申し訳ないと思つてない表情で安納。

「二週間後の記者会見と同時に、『B・R』のファーストアルバムを発売する」

「えーっ！」

「聞いてませんよ、社長」

これも、驚いているのは浩太たち五人だけで、目の前の六人、そして叶みゆきは平然と聞いていた。すでに知らされていたのだ。

「だって、あと二週間で何やれつて言うの？ さらにアルバムってどういうこと」

「アルバムと言っても、ミニアルバムだな。今までシングルで発表してきたものと、新曲を一曲入れる。だから君達にはすぐにでもレコーディングに入ってもらいたい」

さすが、と言うか。安納が浩太たち五人を二週間も遊ばせておくはずがなかった。

「このアルバムは、『B・R』の正体をバラすのが目的なので、ジャケットにも色々と企画をつける。詳細は未決定だがメンバーのプロフィールや対談などだ。その為に八木くんを呼んだ」

『B・R』プロジェクト。

企画責任者。安納鼎、叶みゆき。

ミュージシャン。小林圭、中野浩太、片桐実也子、山田祐輔、長壁知己。

スタッフ。大塚スグル、新見賢三、桂川清花、須佐巽、一村草介、そして八木尋人。

合計十三名のプロジェクトがまた始まろうとしている。

しかし、これで全員ではないことを知っているのは、安納鼎、叶みゆき、中野浩太の三名だけだった。

目が覚めるような、鮮やかな、青。

の、衣装。

「はずかしーっ」

実也子が叫んだ。続いて同じ意見の圭も嫌味を含めた言葉を口にする。

「げーのーじんって、皆、こんなことやってんの？」

とある撮影スタジオでのこと。

教室ほどの広さの部屋の中は雑然としていた。撮影器材や照明器具、小道具が積み重ねられた棚は今にも崩れそうだし、所々に足場が組んであるので下手に歩き回れない。薄暗いのも気になる。が、部屋の一点だけ、照明が集中し、照度が高くなっている場所があった。

そこには壁から床にかけて白い布が皺一つ無く敷かれている。照明の色も白。眩しすぎる光の中に彼らはいた。

同じ青色の衣装。デザインはそれぞれ異なるけれどお揃いの服を着ている。圭は肩を出したトップに膝丈のズボン。浩太はタンクトップの上に襟付きジャケット。実也子は襟足の高いアンサンブルにミニスカート。祐輔はタートルネックの薄手のセーター。知己は首の開いたシャツとスラックス。

すべて、青。

靴下や靴まで同じ青だった。おまけに圭以外は、これまた青のレイバン。圭は大きな青い布を持たされている。

「今回のジャケット写真撮るでー。いいかー」

と、三脚に乗せたカメラの向こうで新見が手を振る。

いいか、と言われても五人は微妙に顔を歪ませることしかできないでいた。新見は試し撮りを既に始めていて、カシャ、ジー、という音が部屋に響いている。

ジャケット撮り、と言われて連れてこられたと思ったら衣装を着せられスタジオの照明の中に居た。ここにいるのは『B・R・』の五人と新見賢三と桂川清花だけだ。安納鼎と叶みゆきは工程進行の打ち合わせで、他のスタッフもそれぞれの役割分担の前準備に追われているらしい。

「にしてもまさかこんな格好させられるとは思わなかった…」
と浩太が嘆息混じりに言う。

「私、スカートはかない人なんだけどなー。あと慣れないヒールが痛い」

実也子は苦笑いしながら、スースーする足をさすった。

「なあ、この青ってやつぱり」

「Blue Rose からきてるんでしょね」

知己の言葉を祐輔が継ぐ。

「安易だなー」

圭が呆れる。

「分かりやすい、って言って欲しいな」

と、口を挟んだのは桂川だった。背後に声を聞いて圭は振り返った。

「よく似合ってるよ、小林くん」

「喜んでいいわけ？」

「喜んで欲しいなあ。私の見立てだもの」

この桂川という女性。 彼女の趣味はすでに新見経由で知られていた。

安納社長と同じく派手好きで、しかも極度の少女趣味。安納と桂川では「派手」の種類が異なるが、どちらも演出過剰という意味においては同じだ。

「あ、ほらほらー。小林くんの持つてるヴェールね、『B・R・』が

ヴェールを取って、今、明かされた』って意味を込めてるの。ね、ね。かつこいいでしょ？」

桂川は一人、はしゃいでいるが、それに賛同する声はなかった。（派手好き…ね）と誰もが納得した。

「そこどけつ、ファインダーに入っとるでっ」

カメラの向こうから新見の声が飛んだ。これは勿論、桂川に当てられた言葉だ。

「大体、なんで桂川が衣装決めるんやー。おまえ、デザインワークやろ」

「うるさいなー新見さんは。社長がこれ以上スタッフを増やしたくない、なんてケチなこと言うから仕方なく兼業してるんじゃない」

「嘘言え。楽しんでるくせに」

「あたりでーす」

からからと笑いながら、ファインダーの外へ出て、そのまま新見の後ろにつく。新見はまったく、と息をついて再び撮影再開。相変わらずここちない五人だがそれはそれ、持ち味というものだ。

「ほんと、今はあまりこういうのは流行らないのよね。CDジャケットにメンバーの写真をこれでもかってほど載せるのはね」

桂川が語りはじめる。声量から、新見ではなく被写体の五人に聴かせている言葉だった。

「どちらかというと、抽象的なデザイン　写真とか、前衛的なイラストとかそういうもので曲のイメージを伝えるものが多いの。

でも今回は『B・R・』の正体をバラすのが目的でしょ？　やつぱり写真がメインじゃなきゃね」

「とか言って自分が楽しみたいだけじゃねん？」

横から茶々が飛んだ。桂川はむっとして、報復の言葉を口にする。「新見さんこそ、風景写真専門のカメラマンだからって、人物撮りはセンス無しってのはプロとしてシャレになりませんよ」

「桂川ー。ケンカ売っとんのか」

桂川はくすつと笑うと、今度は五人に聞えないよう、声量を落と

した。

「そりゃあ、新見さんと対等に仕事するにはケンカくらい売っておかないと」

「若造がええ気になんなよ」

にやりと笑って、カメラの倍率をあげる。

青い衣装を着た彼らを、ファインダーから覗き込む。シャッターを押す。

新見の仕事はそれだけだ。そしてそれだけで全てが評価される。何年間もこの業界で生き残っている者を馬鹿にしてはいけない。桂川もそれをよく分かっている。

カシヤ。ジャー。

「新見」

出入り口から須佐と一村が入ってきた。二人ともノートとシャーペンを手元に持っている。先程まで打ち合わせを行っていたのだろう。

新見は頭を上げ、二人に軽く挨拶した。それから照明の中の五人に向かって、

「十分、休憩な」

と叫ぶ。

「まだ着替えちゃいけないのー？」

実也子言う。

「これからや、我慢せー。で、須佐たちは何の用だ」

スタッフ側四人が輪を作り会話を始めたとき、新見の声は一段下がっていた。桂川も表情を改めて、その会話に加わる。『B・R』演奏者の五人がそうでないとは言わない。が、スタッフの彼らはプロだ。遊びで仕事しているわけではない。

「一村のポスター案。やはりここは人物を使う方向で決まりだ。ついでだから、新見が今撮ってるもののポラが上がったら、ポスターの写真も撮ってもらいたい」

と、須佐。

「ポスターに人物？ 顔、写すんか？」

「いや、こっちはそちらと違って、事前宣伝だから。それはしない」
発売日前に貼られるポスターに『B・R』の顔を映すはずがない。

「だから、後ろ向きの写真を撮ってもらいたいんです」
と、一村が続けた。

「丁度、ジャケットの後ろ姿だと面白いんじゃないかと思ってます。ポスターでは後ろ姿、そして発売されたCDは前面からの写真、勿論、後ろ姿である程度人物像はバレてしまいますが、ポスターを貼ってからCDが発売されるまで一週間もないならそれもいいんじゃないかと思って」

一村の言葉が切れると今度は須佐が話しはじめた。

「ついでにCFでは、完成CDのモックアップ（実物大模型）使うから、これは大塚さんのほうに頼んでおく。桂川さん、インレイや盤面デザインってできてる？」

「インレイは製作中、新見さんのスナップ待ち。盤面はデータをすでに大塚さんのほうへ送付済みです」

「ありがとう」

「CFの絵コンテは？」

「新見に見せる必要ないだろう。それはこっちの仕事だ」

「かーっ、ケチくせえ」

「まあまあ、新見さん。抑えて抑えて」

噂通りの須佐の仕事に対する厳しさを初めて目の当たりにして、桂川はウキウキしていた。これぞ仕事の充実感というものだ。

セールスワークの作業も佳境に入っていた。

「うふふふー」

実也子が不気味な声を発したことに、他四人が振り返ったのは当然かもしれない。

「……？　なんだよ、ミヤ」

スタンドマイクの前に立つ圭が訝しい声を返す。チューニング中の知己たちも同じ意見なのか同様の視線を実也子に向けていた。

「やっぱ、この時が一番幸せだなーと思って」

現在、五人は馴染みのスタジオに入っていた。CM撮りも終わってスタッフ側は一息ついているころだろう。大塚スグルはいつでも量産に入れるように工場に出張っているというが。

そういうわけで、演奏者側は迅速にレコーディングを行うように言い渡されていた。今朝早くからスタジオ入りしてノルマをこなしているというわけだ。

「皆の音のなかに居るときが、やっぱり一番かな」

愛器のコントラバスを抱き込むように体重をかけ、実也子は笑顔を見せた。

「僕も、実也子さんのベースを聴いてるのは心地良いですよ」

「ありがとー祐輔！。私も祐輔のタッチはすごく好きだよー」

二人のやりとりを聞いて、圭は知己に、

「長さんも祐輔くらのマメさを見せないと」

と前置きしてから、

「ミヤと付き合えないんじゃない？」

と言った。

「俺があんな台詞吐けるか」

知己は珍しく躲さなかった。さり気なく聞いてしまった本心に圭は、くくくつ、と笑う。

「それにしても浩太は」

「……え？」

「調子悪そうですね。というより、機嫌悪そうですね」

と、祐輔は言った。話題を振られた浩太本人は、ぎくつ、という表情をそのまま見せた。

「そうそう。さっきの音合わせでもミス連発してたしな」

「体の具合でも悪いの？ それとも何かあった？」

四人に囲まれて、その疑惑の迫力に浩太は後ろに倒れそうになる。
「いや…、なにも、ないけど」

目を逸らす。

「あやしーなー」

『きやつ』

別の声がスピーカーから響いた。同時に、カシャンと小物が落ちる音がする。

五人がガラスの向こうのPA室に目をやると、叶みゆきが慌てて落ちたものを拾っているところだった。

「あっちも、調子悪そうだな」

と圭が言う。

「二人して何かあったんですか？」

「うわっ、祐輔。それってすごく嫌らしい言い方」

「何もねーよっ」

『な…何もありません！』

こちら側の声も向こうには筒抜けだ。会話を聞いていたみゆきもマイクに向かって叫んだ。

みゆきのそのうるたえようから、何かあったことが丸分かりである。（あのばか…）と浩太は内心冷や汗をかくが、浩太自身も案外簡単に見透かされていることに自覚がない。

あの、病室での一件から数日経っている。

みゆきと浩太は何度か顔を合わせているが、みゆきは目を逸らすだけで話にならない。そして浩太も、あの日耳にした真実を、他のメンバーに言い出せないでいた。

もちろん、このままみゆきが皆を騙し続けるのは、絶対に許さない。

それならば自分が暴露してしまえばいいのに。浩太は、何故か言い出せないでいる。

（このことは、内緒にしてください…っ）

みゆきはそう言った。希玖とみゆきには何か事情があり、隠さなければならぬことがあるのだろう。

それは理解してやってもいい。

けど。

（俺たちにまで、三年間も隠し通さなければならぬことなのか？）それを言ってしまったら秘密にならないのだが、その矛盾に気付かない浩太だった。

半月前に偶然（と、思っていた）出会った安納希玖が、これほどにまで深く、『B・R・』に関わっていたなんて知らなかった。

希玖という存在を知らない四人に、どう告げるべきか悩んでしまふのだ。

みゆきが、小さな悲鳴をあげた。

「なに？」

「かのんちゃん？　どうかした？」

「…」

浩太も我に振り返り顔を上げる。

みゆきは後ろを振り返っている（ドアの方向だ）。どうやら突然入ってきた誰かに驚いたらしい。

五人がいるところからではドアは見えないので、みゆきが誰に驚いたかはわからない。

『ど…どうしてっ』

みゆきの、驚きの声。それから遅れること一秒。

がちやり、とP A室と録音室の間のドアが、開いた。

「よー。陣中見舞いに来たぞー」

「……あーっ！」

ドアから現われたのは中年の男性だった。何者が察したのは、浩太が一番初めだった

他のメンバーもすぐに気付いた。

「あれーっ！」

「え…、まさか、店長？」

「確か、PRE・DAWNの…」

現われたのは、箕稔。喫茶店『PRE・DAWN』の店長だ。『

B・R・』が結成されることになった因縁ある店でもある。

「聞いたぜー。二四日の記者会見のときに同時に新曲披露だなんて派手だな、あいかわらず。鼎の考えることは」

「箕さん…っ」

追って、みゆきも録音室へ足を踏み入れた。

「…どうしてここへ？ 聞いてませんよ」

非難する言い方だった。

「鼎には言つてあるよ。俺が、ここにくることは、さ」

「……それって」

箕の意味ありげな言葉に、普段は鈍感なみゆきもピンとくるものがあつたのか気を止めた。全く気付いていない実也子が箕に弾むような声をかけた。

「ねえねえ、店長って何者？ かのんちゃんと知り合いなの？」

「かのんちゃん？ って誰だ？」

「あ、私のことです」

と、みゆきが自ら名乗る。そして実也子の質問にもみゆきが答えた。

「箕さんは社長のお知り合いで、私にスタジオワークを教えてくださいました先生なんです」

「そういうこと」

これには浩太も驚いた。

「店長、スタジオマンだったのっ？ マジでっ？」

「あれ、浩太も知らなかったっけ？ おまえが中坊のとき、貸しス

タジオ世話してやったのは誰だと思ってんだ」

「そりゃ覚えてるけど……。……っ！」

浩太は目をとめた。飛び上がりそうなほど、驚いた。

箕とみゆきの背後、丁度同じドアから、彼が表れるのを、見た。

「……………きっ」

浩太の呼びかけに、弾かれるようにみゆきが振り返った。

「！」

目を見開く。

「……………っ 希玖！」

みゆきと浩太の驚きは同じものだ。

ここに来るはずのない人間が現われて、二人は目を見開く。

彼が、そこに立ってた。ニットのコートと帽子、それにマフラー。

彼にしては厚着な格好。

そこにいる全員の注目を浴びているにも関わらず、動じずに、そ

れを受け止めていた。

「誰？ 浩太の知り合い？」

圭が言った。

非関係者ならばここに現われるはずがない。プロジェクトスタッ

フは先日全員と顔合わせをしたし、仮にスタッフだとしても年齢が

若すぎる気がする。

彼は圭、実也子、祐輔、知己に対して、にっこりと笑った。

「こんにちは。はじめまして、僕は安納希玖といいます」

明るい声で名乗り、ニットの帽子を取る。すると、茶色の髪が空

を舞った。ぶるぶると首を振った後、もう一度微笑んだ。

みゆきは彼、安納希玖の行動の意図を掴めずパニックになってい

る。考えがまとまらない。

浩太も、希玖が何故このシチュエーションを選び自分に会いに来

たのか全く分からなかった。

そして礼節通り名乗った希玖だが、この状況では何の説明にもなっていない。しかしながら名前だけから推察できる素性、それに逸

早く気付いたのは知己だった。

「安納…って」

「うん。そう。？社長？の息子」

希玖が言う。え、と皆、目を見開いた。

「あとみゆきちゃんの従弟だし、浩太の友達でもあるよ」

みゆきちゃんの従弟だし、浩太の友達でもあるよ。

「希玖…っ」

みゆきだ。希玖はそれに答えて、

「稔さんと違って、僕がここに来ることは、お父さんには言っていない。反対するのは分かっているし」

「じゃあ…」

「それにしても…あはは。テレビより先に、『B・R・』の皆を見ちゃった。ちよつと優越感」

もう一度五人を見渡して、希玖は熱っぽく語った。

「僕も『B・R・』のファンなんだ。サイン貰ってもいい？ 他のファンの人達から見たら、すごい抜け駆けだけど、それはまあ、お父さんのコネということで」

くすくすとよく笑う。

希玖は気さくな人柄で、圭や実也子ともすぐに打ち解けた。『B・R・』の音楽や、安納鼎の裏話で盛り上がっている。

そんな希玖を前にして、知己は浩太に気付いた。

浩太が、希玖を見る視線。苦々しく眉を寄せて、何か言葉を飲みこんでいるように、右手は胸を掴んでいる。

希玖は「浩太の友達」と名乗ったが、希玖が現われてから浩太は一度も言葉を発していなかった。

知己は浩太に小さく声をかけようとする。が、圭のほうが勢いがよく一瞬だけ早かった。

「浩太、なに怒ってんの？」

と、大きくはないが会話の流れを中断させるくらいの声量で言う。浩太は圭を睨んで、

「……なんでもねえよっ」

と刺々しい声。

「浩太」

「！」

希玖だ。凜とした声が響いた。

「僕は、君に会いにきたんだよ」

真っ直ぐに浩太を見つめる。いつものような場を和ませる笑いではなく、ただ一人に向ける、感情を表した笑顔だった。

「それから小林圭くん」

「ん？」

「片桐実也子さん」

「…あ、はいっ」

「山田祐輔さん」

「はい？」

「長壁知己さん」

「…ああ」

「…それに浩太。みゆきちゃん」

真剣な瞳を、二人に向ける。

「聞いて欲しいことがあって、今日はここに来たんだ」

「『B・R・』の作詞作曲担当はKanon……。これはクレジツトにも明記してあるし、世間にもそう知らされているよね」

算を退室させてから希玖がそう切り出したとき、過敏に反応を見せたのはみゆきだった。

「希玖…っ、あなたまさか」

「みゆきちゃんが言いたいって言ったんじゃない。どうせなら僕に言わせてよ」

今。希玖が皆に言おうとしていること、それはみゆきの望んだものだ。それなのにみゆきは素直に成り行きを聞いていられないと思

った。どうしてだろう。胸が痛かった。

続ける。

「皆の前に現われたことはなかったけど、僕は『B・R・』プロジエクトに立ち上げ当時から参加していた。というより、……『B・R・』を最初に考えたのは僕なんだ」

全員に、明らかな動揺が伝わった。

「僕は先天性の病氣持ちでね。あんまり外出できない体質なんだ。何年か前、そんな僕にお父さんがパソコンを買ってくれた。昔から音楽を聴くのは趣味だったけど、曲を作ったのはその時が初めてだったよ」

すらすらすと淀みない台詞が希玖の口から紡ぎ出される。話の内容の方向を見抜いたのか、「え……」と誰かが呟いた。

「初めに曲らしい曲を創ったのは十歳のとき。僕の曲を初めに聴いてくれたのはみゆきちゃんだった。その数年後、お父さんが仕事で僕の曲を使いたいと言ってくれた。僕はすぐにOKした。でも僕はこんな体だから製作に関わることはできない。だけど信用できない人に僕の曲を任せたくない。だから」

「ちよつと待つて、それつてつまり」

「

淡々と話される希玖の言葉をとめる。

「だから、僕はみゆきちゃんにお願いしたんだ」

その告白に。みゆきはぎゅつと目をつむり、顔をそむけた。浩太はそんなみゆきを見つめていた。

「待つてください。それじゃあKanonは……」

「『B・R・』の作詞作曲をしたのは僕だ。それは事実だよ」

希玖は言い放った。

「そもそも、Kanonというのは、僕が楽譜にサインした名前をみゆきちゃんが「カノン」と読み間違えたのが始まりなんだ」

「じゃあ、Kanonはかのかちゃんじゃなくて……」

びくつ、とみゆきの肩が揺れた。それを目に止めたかはわからない。希玖はまっすぐに言う。

「それは違うよ」

予想しなかった答えが返ってきた。
四人は混乱した。

浩太は目を見開き、みゆきは顔を上げる。

「え……？」

と呟いた。

「あははっ。もう、皆、早合点だなー。ここはみゆきちゃんも浩太も勘違いしているところなんだけどさ」

「勘違い……って、どういうことだよ」

「何でわかんないの？ 浩太」

浩太だけじゃない。みゆきも、希玖の言いたいことがわかっていない。

Kanonは、みゆきではなく希玖だ。当事者であるみゆきが、それは事実だと断言できるのに。

同じように当事者である希玖は、それを違うという。

「浩太も、『B・R・』のギタリストなら分かるよね。みゆきちゃんはどうな仕事をした？ みゆきちゃんは楽譜というただの書類から、浩太たちの音を録り、組み合わせで、「曲」にしている。それがみんなが耳にする『B・R・』の音楽だよ。一つの曲を完成させるには、どの音を選びどの音を抜くか判断しなければならない。それはオペレーターの手にすべてかかっている。……わからない？」
「B・R・」の曲を造っているのはみゆきちゃんだ。僕はその素となる楽譜を書いている」

一呼吸、おいた。

「つまり、Kanonは二人いるんだ」

だから、みゆきではなく希玖だというのは間違い。

どちらが欠けてもKanonという役はこなせないから。

希玖は三年前からそのことを意識して曲を書いている。みゆきの存在が不可欠だということを知ってる。希玖は口にしたことはなかったが、やはりみゆきは分かっていたいなかったのだ。

そして浩太も、レコーディングに参加し、みゆきの仕事を見てきていたはずなのに希玖が現われて疑惑を生じさせていた。

希玖の言葉に戸惑っているみゆきに、視線を向ける。

「…みゆきちゃん、僕は決して自分の仕事を軽んじているわけではないけど、Kanonの名を一人で背負うのが辛いのは僕も同じだ。

……Kanonは、僕たち二人の名前なんだよ」

「希玖……」

「浩太も、わかってくれた？」

「……」

浩太は答えなかった。しかしその表情からは先程と違うものが伺えた。希玖は返答を求めなかった。

「『B・R』の皆さんも、了解してくれた？」

圭、実也子、祐輔、知己に視線が振られ、今まで黙って聞いていただけの彼らは我に返ったようにはつとずる。

「ええ、もちろん。了解しましたよ」

と、祐輔。

「でも驚いたよ、マジで」

「ほんと、びっくり。私たち、六人じゃなくて、七人だったんだね」
実也子の言葉に、希玖は笑ったようだった。

「夢で描いていたことがすべて現実になった。本当に感謝しなくちゃいけないよね」

噛み締めるように、そう言った。

その時、

（やばい）

すう、と足の力が抜けた。発作だ。上半身が傾く。
がしつ、と。希玖の体を支えた腕があった。

浩太だった。

「おい、かのん。椅子持ってきて」

「あ、はいっ」

ぱたぱたとみゆきが部屋を横切って、折り畳み椅子を片手に戻っ

てくる。それを手早く組むと、浩太は希玖をゆつくりと座らせた。
「…さんきゅー、浩太。…みゆきちゃん、ごめん。せっちゃん先生に連絡しておいてくれない？ 勝手に抜け出してきたから心配してると思う」

椅子に座っても、希玖の足の感覚はなかった。

でも、だからといって希玖は絶望を感じたりはしない。

「おい、大丈夫なのか」

「どうしたのっ？」

希玖の病気の詳細を知らされていない圭たちが心配そうな声をかけてくる。希玖は笑顔で何でもないことを表した。後々、ちゃんと説明しなければならぬだろう。

「…浩太」

「何だよ」

「以前、僕、言っただろ？ 好きなことばかりして、周囲に迷惑かけてるって」

「ああ。でも、こういうのは迷惑とは言わないだろ」

気遣いや心配をかけるさせること。それは迷惑という枠には組しないと、思う。

「違うんだ」

「希玖？」

「アメリカの研究機関が僕に来て欲しいって言ってる。僕のはかなり重度な症例だというから、多分、データをとって治療に役立てたいんだろうね。でもさ、同じ病気の人達には悪いと思うけど……、僕は、ここで色々なことをしてみたかったんだ」

勝手すぎる自分に嫌悪を抱く。沢山の人を困らせていることに胸が痛くなる。

でも、僕の人生。好き勝手にいいはずだ。でも。

混乱と葛藤があつて、道徳や倫理が加わったら自分の意志だけで自分の行動を決められないと気付く。

それを振り切ることと引き換えに、この嫌悪感を抱き続けなければ

ばならいと、分かっている。

「僕がこんなことしてるなんてばれたら、いろんな所から苦情と非難がくるだろうし、ね。だから僕は、表舞台には立たないできたんだよ」

にかつ、とまたいつもと違う笑顔を見せる。これは自分のなかの痛みを表情に出さないための笑顔だと、浩太は見抜いてしまった。

「あ、ねえ。そういえば『B・R・』のこれからって、悩んでみたいだけと結論でたの？」

突然、話題を変えて、希玖は圭たちに尋ねた。

「まだけど」

希玖はいたずらを思い付いたように、不敵な笑みを見せる。

「僕、考えたんだけど、こういうのはどう？ 面白いと思うんだけどな。きつとお父さんも賛成するよ」

人差し指を立てて、希玖は、五人に一つの提案をした。

* * *

今日の仕事場所はn o a音楽企画の会議室だった。

日程調整と指揮は叶みゆきの仕事。今日、集合したのはプロジェクトの演奏者五人と八木尋人だった。別の仕事があるのか、みゆきはここには来ない予定だ。

「じゃあ、さつき説明した通り、CDジャケットに全員のプロフィール載せるから一人ずつ個人面談な」

広い会議室に六人。八木の声は意外なほどよく響いた。

「名前呼ばれたら、こっちの部屋に入って」

と、室内扉で区切られている別室へ向かおうとした八木に、実也子が手を挙げて質問した。

「なんで、わざわざ別の部屋でやるの？」

「一つ一つの受け答えに外から茶々を入れられないように、だ」

簡潔に回答が帰ってきた。要するに、邪魔をするなど言いたいのだろう。

「まず。名前」

「知ってるじゃん、そんなの」

「形式だ。答えて」

「小林圭」

「年齢は？」

「十五歳」

「出身地」

「名古屋。：現在住のときも出身地って言うのか？」

「言う。間違ってる。次、担当楽器」

「声」

「……。尊敬する音楽アーティスト、いるか？」

「堀外タカオと山村シンジ」

「：世代、違うだろ」

「俺、それ聴いて育ったから。親父の影響」

「じゃあ、最近の歌手では？」

「尊敬はしないけど、Little BACHはよく聴く。各パート巧いつてわけじゃないけど曲は俺好み。あとはLOVE PHYLLERYの八十年代初期風。それと矢野美樹の声は好き」

「えーと、『B・R・』を始める前の、圭の音学歴なんてある？」

「特になし」

「自分を『B・R・』に導いたものは何だと思う？」

「レコード屋の父と、オペラファンの母」
「最後に、これからの抱負」
「ずっと、歌ってるだろうな」

*

「名前は？」
「山田祐輔」
「年齢」
「二十四です」
「出身地は？」
「横浜ですが」
「担当楽器」
「キーボード及びピアノ。鍵盤楽器全般」
「尊敬するアーティストは？」
「特にいません」
「…。一人も？」
「どうしても挙げるといふなら、一人だけ」
「誰？」
「東京ミュー・フィルのピオラでセカンドの人です」
「……………？ 次の質問。今までの音学歴は？」
「音楽院を出たつていうのは音学歴になりますか？ あとは地元でピアノ教室開いてるといふくらいです」
「自分と『B・R・』を出会わせたものは何だと思う？」
「友人です。彼に呼び出されたとき、Kanonの曲とであつたので」
「これからの抱負を」
「なるようになります」

＊

「まず、名前」

「はいっ。片桐実也子でっす」

「年齢は？」

「…それを訊くか。二十一だよ」

「出身地」

「群馬県」

「バンドでの担当楽器は？」

「ベース。…使ってる楽器はコントラバスだけど」

「尊敬するアーティストは？」

「RIIZの加賀見康男！…あ、もう亡くなったんだけど。でもあの人はかつこいいよ、ホントに」

「RIIZ…って、昔いたジャズバンドだっけ？」

「知ってるのっ？　なんだ八木さんもー、早く言ってよー。そう、

あの人のベース聴いて、私もこの楽器始めたんだ」

「他には？」

「……………前田公昭」

「じゃ、次の質問。今までの音学歴は？」

「ありません」

「自分と『B・R』を出会わせたものは何だと思うっ？」

「RIIZ、かな。やっぱり」

「これからの抱負を」

「やれるところまで、やるよ」

＊

「じゃ、名前」

「長壁知己」

「年齢は？」

「三十四歳」

「出身地」

「新潟」

「バンドでの担当楽器は？」

「ドラム」

「尊敬するアーティストっている？」

「尊敬…っていうのは、いない、かな」

「じゃあ、最近よく聴く音楽は？」

「ビル・アルゲリッチはよく聴く。サーボ・バナルとか？ あとT
NMとOMO。当時は全く聴かなかったけど、最近聴くようになっ
た」

「あと…、長壁さんも、音楽歴ないの？」

「も、って…まさか実也子がそう答えた？」

「うん。違うの？」

「あ、いや。…俺は昔、東京でバンドやってた」

「え。プロで？」

「一応」

「へえ。バンド名は？」

「秘密」

「…また秘密か。ま、いいか。次、自分と『B・R・』を出会わせ
たものは何だと思う？」

「昔やってた、バンドだな。やっぱり」

「これからの抱負は？」

「気の向くまま。俺はそういう性格」

＊

「次。まず、名前」

「中野浩太。…なんでわざわざ」

「形式だよ。…次の質問な。年齢は？」

「十八」

「出身地」

「東京」

「『B・R』での担当楽器は？」

「ギター」

「尊敬するアーティストは？」

「ジミー・カート。あと意外なところで連香織」

「自分から意外とか言うなよ」

「だって、クラシックのギタリストだぜー？ …それから、バンドマンならどんなに遅くても一度は彼らへ帰ると言われるビートルズ」

「なるほど。『B・R』始める前の音学歴は？」

「俺の？」

「他に誰がいるか」

「えーと、中学二年から友達とバンドやってて、高校入ってからは助っ人として色んなバンドに出入りしてたこと……。これって音楽歴か？」

「勿論。次、自分を『B・R』に導いたものは何だと思う？」

「…んーと。…けっこー音楽に飽きてたときに、Kanonの曲を聴いたこと、かな」

「最後に何か一言」

「何かって？」

「CD買ってくれた人に対して、とか」

「『今、俺の前に居るのは、俺の正体をバラした本人だ』、とか」
「手厳しいな」
「いいんだよ。どうしても。俺達はもう、『B・R』の行方を決めてるんだから」

* * *

十二月二十四日。クリスマス・イヴ。

キリストの降誕を記念する祝祭。 の、前日。

と言つても、この世界的規模のイベントでどれだけの人がそれを意識しているだろう。街を歩けば煌びやかなネオン、華やかな通りを着飾った人々が歩く。例え名目が何であれ、東方の三博士が星見だけでイエスの生誕を予測したように、誰もが幸せな気分にいることを誰もが不思議と予感してしまうような、そんな、聖なる日。

そんな日のとても寒い朝。人々の話題を独占したものがあつた。

『はい。こちら渋谷MG会館前の高木です。見て下さい、この行列！ このクリスマスイヴの朝にずーっと向こうから、若い人達を中心とした人ばかりができています。皆さんお分かりでしょう！

本日午前十時から、MG会館大ホールにて、あの、『B・R』の公開生記者会見が行われるんですっ
』

女性リポーターが寒い中息を弾ませて叫んでいる。

『元々、マスコミ向けの記者会見だったんですよ。しかし同時に初のライブを敢行するというのが、昨日、各マスコミに通達されま

した。どういふことが分かりますか？ 過去、一度も、姿を表すことがなかった『B・R・』がライブを行うんです！ 半月前の中野浩太さんの一件は皆さんご存じだと思いますが、彼以外のメンバーも全員現われるんですよ！ 『B・R・』の仕掛人、安納鼎社長が言うには一般の方の出入りもオツケーだそうで、整理券をもらうために、こんな行列ができていというわけなんです！ ライヴの状況はテレビ放映の許可も出ているので、ここに来れない方々も放送を楽しみにしてくださいねっ！』

それとも一つ。
『高木さんありがとっ。替わってこちらは、Tレコード池袋店まへの平沼シンヤでっす。こちら人も、人の行列ですっ！ ちよっと訊いてみましょう。おはようございます！ 今日は何を買いに来られたんですか？』

『もちろん『B・R・』の新譜ですよー。テレビCMも超カッコ良かったしー、早く聴きたーい！』
『というわけでえ、こちら『B・R・』絡みの行列です！ 販売元の生産が間に合わず限定数発売との噂もあるので皆さん必死です。今日はクリスマスイヴ！ 同時に『B・R・』の日と言っても過言ではないでしょう！ それではスタジオにお返ししまーす』

『B・R・』。

三年前の夏。どこからともなく現われたロックバンド。
はじまりは有線放送だった。

街中を歩くといふのまにか耳にしていた。喫茶店に入れば気付くと耳を傾けてしまう。誰かと会っているとき、買い物の途中、食事、散歩、いつもの日常のなかで。

気が付くと耳を傾けていることに気付く、そんな歌があった。

初めは何件かの問い合わせの電話。少しずつ噂が広まり、話題が話題を呼んで、その歌がチャートに名を列ねる頃。誰もが、誰もその姿を知らないことを知る。

『B・R・』は正体不明。どのメディアにも姿を現さず、音だけの存在なのだ。

演奏形態はロックバンドの基本、ボーカルとギター、その他からなる5人（推定）で、ボーカルの声は男声とも女声ともつかず、性別すら分らない。

デビューから三年。これだけ時間が経つと、レコードをリリースする周期が読めてきて、『B・R・』は夏にだけ曲を出すことに気付く。

その秘匿さは世間の好奇心を掻き立てていた。
夏だけの存在。

しかしその歴史は今日までのこと。

クリスマス・イヴの今日。彼らは現われる。

「
ねえ、尋人」

白いコートに身を包んだ日辻篠歩は、隣に並ぶ八木尋人の名を呼ぶ。

「何？」

「クリスマスにライブに誘うなんて、あんたにしては上出来だけど、どうして『B・R・』のライブチケットがすでにあるわけ？　しかもバックステージパス付き」

疑惑の目を向ける篠歩。ぎく、と尋人は内心で思ったが態度には出さなかった。

尋人は、『B・R・』のアルバムにライターとして参加していたことを、まだ篠歩に言っていない。

まあ今日発売のCDを篠歩が手にしたら、クレジットの名前でバreshしてしまうのだけど。

「ダメ元で中野さんに頼んでみたら、意外とあっさりくれたんだ」
平然と嘘をつく。

「……怪しいわね」

「オイ」

「『B・R・』がライブするって聞いたのは、つい昨日のことよ？」

半月前の騒動から中野くんにはマスコミが張り付いてるし、端から見て第三者のあんたが中野くんと会う機会があるわけないじゃない

い」
確かに、筋は通っている。

(…さて、どうやってゴマかすか)

あとたった二時間の秘密を隠し通すことを、尋人は真剣に考える。煙草を啜える。すでに無意識下での行動。

「隠し事してるでしょ」

「そりゃ勿論」

「『B・R』絡みだったら、ただじゃおかないわよ」

「じゃあ言わない」

「『B・R』のことなのねっ！」

このやる。ぼすつと尋人の背中を叩く。

「すぐに分かるさ」

と、尋人が笑った。勿論、尋人が素直に笑うはずがなく、ごまかすためのものだ。篠歩は知っている。この辺りの歪みきつた付き合いが何年も続いているのだから。

「彼ら、どうするのかな」

と、篠歩が訊いた。質問の意図をすぐに察して、尋人は目を伏せた。

「…」

「……まさか、やめるなんて言わないよね？ 中野くん、何か言ってた？」

「俺は何も聞いてないよ」

ただ、五人の意志は決まっているという。
今日、それが明らかにされるのだ。

「おはよう、希玖」

病室のドアを開けて、叶みゆきが入ってくる。すでに出かける支度を整えていた安納希玖は笑顔を返した。

「おはよー、みゆきちゃん。今日も寒いね」

「おはよう、叶さん。今日は希玖のこと、よろしく頼むね」

隣で希玖の主治医である関久弥も手を振った。

「おはようございます、先生」

心配する関医師を他所に、外出許可をもぎ取ったのは希玖本人だった。関は絶対に駄目だと言い張っていたが、すべての事情を話したら納得してくれた。

今日ばかりは、行かなきゃならないから。

いつもパジャマ姿の希玖だが、今はコート姿でベッドのとなりに立っている。これからみゆきと渋谷M G会館へと向かうのだ。

「とうとうだね。みゆきちゃん」

「…だね」

どこか淋しそうに、みゆきは笑う。

「彼らは？」

「朝一でホテルから直行してる。今はリハーサルしてるころかな」

「ミキサーは誰？」

「箕さんがやってくれるの。…私じゃ、ライブは務まらないし。助手やれって言われたけど、断わっちゃった」

「どうして？」

「怖くなったの。こんな素人が、この業界にいることに」

みゆきは希玖の目を見て、はつきりと言った。

「私、やっぱり甘えてたんだと思う。自分が表に出ないのをいいことに、『B・R・』の仕事を楽しんでた。この程度の力量で、満足してたの。…でも急に怖くなって、このままじゃ駄目だと思った」

「……」

「私、専門学校に行こうと思ってるの。ちゃんとオペレーターのと勉強して、また、この業界に戻ってきたいの」

喋るのが苦手なはずのみゆきが、一生懸命自分の思いを伝えようとしている。それを受け止めて、希玖は微笑んだ。

「学校なんて行かなくても、お父さんに頼んでみたら？ noa 音楽企画だって優秀なミキサーはいるし、彼らの助手をしてたほうが実践で身につくかも」

「希玖。決心を揺らがせること言わないでよ」

「あははっ。僕もね、みゆきちゃん」

「ん？」

「アメリカへ行ってこようと思うんだ」

「希玖っ？」

「例の研究所」

「どうしてっ？ 何か言われたのっ？」

「別に。ただちょっとは献身しないと、夢見が悪いと思っただけ」

「希玖……」

「心配しないで。四月には戻るよ」

そろそろ時間だよ、と関が言う。希玖はマフラーを手に取り、歩き始めた。

シヨックで歩き始めることのできないみゆきは立ち止まったままだ。

希玖はみゆきに手を差し伸べた。

「大丈夫だよ。僕らのプロジェクトは、これで終わりじゃないんだ」
「……」

みゆきはぎこちない笑みを見せて、その手を受け取った。

『B・R』とは「Blue Rose」の略。

「Blue Rose」。その意味は、ありえないもの。

まだ手にしていない何か、…不確定な未来。

まだ手にしていない何かを探しながら。未来へと、歩いてゆくのだ。

渋谷M G会館大ホール。

午前九時半、開場。

開場から十分もしないうちに、数千からの客席は運良く整理券を手にした人でいっぱいになった。その二十分の一はプレス席で、報道関係がカメラを持ち込みひしめきあっている。

客席にはまだ明かりが灯り、ステージは薄暗闇にしか見えない。それでもマイクスタンドやドラムスが置いてあるのは確認できる。客席では期待と興奮が高まっていた。

その、舞台袖では。

「……………何か、すごいことになってるな」

と、Tシャツ姿の中野浩太が言った。その片手には愛用のギター。チューニング済み。

「今更じゃん、浩太」

呆れた声を返したのは小林圭。マイクはすでに舞台に設置されているので彼は手ぶらだ。

「まあ、折り返せない所まで来たのは確かですね」

「うーっ、緊張するなー」

「始まればおさまるだろ」

舞台袖には、『B・R・』のメンバーが集合していた。リハーサルは開場前に済ませ、あとは本番を待つだけだ。タイムテーブルでは、十時からライブで新曲とデビュー曲を披露。その後、スタッフも壇上に上がり記者会見をすることになっている。

プロジェクトでデザインワーク担当の桂川清花は、ライブで、ジ

ヤケツト写真と同様の衣装を五人に着せたかったようだが五人は揃って辞退した。そういうわけで五人の衣装は結局いつもと同じ普段着となった。

「かのんと希玖は？」

と、長壁知己がわざと浩太に訊いた。

「もう少しで着くつてさ」

さつき希玖から連絡が入ったので、浩太はそう答えた。

浩太以外の四人が顔を見合わせる。

「ところでどうなの？ やっぱり希玖って、かのんちゃんのことを好きなのかなあ」

本来、ひそひそ話となるべき片桐実也子の台詞は、しっかりと浩太の耳に入るくらいの声量だった。

「もしそうなら浩太に勝ち目ないじゃん。かのんが希玖のこと好きなのはまる分かりだし」

と、圭。

「まあ、浩太のこれからのアプローチ次第ですかね」

「浩太にその甲斐性があるかは謎だが」

山田祐輔と長壁知己もそれぞれの意見を口にする。

「でも希玖って、中野のこと気に入ってるよね、絶対。それってもう、完璧な三角関係じゃない。すごい、少女漫画みたい」

無邪気にはしゃぐ実也子の台詞に浩太は脱力した。

「あのなあ……ミヤ。……いーかげんにしろよ、おまえらっ！」

「そこで凄んでも照れ隠しにしか見えないって」

「圭っ、てめーっ！」

「ちよつと中野っ、圭ちゃんに八つ当たりしないでよっ」

圭の首をしめる浩太を実也子がブーイングする。

「でもこれで、浩太に本当に自覚がないなら、それはそれで恐いですよ」

「おもしろい、の間違いだろ」

細目をさらに細くさせて、知己の言葉に祐輔は微笑んだ。

「さすが長さん。よく分かってますね」

騒ぎ立てる浩太たちをよそに、クスクスと笑い続ける祐輔。それにつられて、知己も声を出して笑った。

「おい、いい加減静かにしないか」

頭上から注意の台詞が降ってきた。

いつもと同様、スーツ姿の安納鼎だ。

「舞台袖だぞ。騒げば客席にも聞える」

安納の諷める口調に五人は顔を見合わせて肩をすくめた。

「……まったく、本当に君達はマイペースだな。これから数千人の観衆の前に出るっていうのに」

安納は正直、呆れた。

どんなプロでも本番前は何らかの心構えをするものだ。気負いやプライド、自分をいきり立たせるように。そもそもこの五人は公式の場にでるのは初めてのはずなのに、このリラックスしきった雰囲気はなんだ。

知己が口を開いた。

「……社長。色々ワガママをきいてくれて、ありがとうございました」
五人とも、全員、感謝を表す表情を向けた。

「……」

安納は嘆息した。

「まあ、私は『B・R』についてはもったいないと思うがね」
ふと、そこで腕時計に目を落とす。

顔をあげる。

「……さあ。時間だ」

その言葉を合図に、ざつ、と五人が一斉に立ち上がる。
輪を作って、全員、拳を揃えた。

「では、最後の晴れ舞台。……………行きますか」

誰かが言った。

「おっしや」

「はい」

「楽しかったよ、この三年間」

「ほんとに」

「では」

輪を解き、五人は歩き始める。

すぐそこには、この三年間知ることのなかった光の庭。

安納鼎。そして安納希玖と叶みゆきはその後ろ姿を見送る。

きっと誰もが望み、期待していた瞬間。

中野浩太。小林圭。片桐実也子。山田祐輔。長壁知己。

五人は。

光溢れるステージへと飛び込む。

割れんばかりの歓声を、その身に受け止めるために。

そして。

そして。

『B・R・』は解散することが、告げられた。

『B・R・』初の冬の歌は、『B・R・』最後の曲となった。

最初で最後のアルバムタイトルは「SONGS」。

各小売店は品薄に嘆き、レコード会社はクレームの嵐に陥った。

年末だったので迅速対応は不可能。結局この騒動は年越しまで延長

させられた。

『B・R・』の解散に各報道関係はこぞつて騒ぎ立てた。号外まで出た。それこそクリスマスどころではなかった。ライブ後の記者会見でそのことが告げられ、メンバーや安納鼎を含む関係者は勿論質問攻めに合った。スタッフ一同は言う。「演奏者側が決めたことですから」。そして演奏者側は言う。「真剣にこの業界で活動されている方には申し訳ないですけど。僕たちはそれぞれの生活がありますので」。

予想以上のマスコミの盛り上がりぶりに、結局、『B・R・』の五人はホテルでの軟禁生活を余儀なくされた。しかし年末になると、それぞれの実家へ帰って行った。

某テレビ放送局の年末恒例の生放送歌番組では、異例のビデオライヴが行われた。もちろん、『B・R・』の。

年が明けても落ち着かず、それぞれの実家へマスコミが押し寄せた。

けれども、彼らは本当に、普通の、今まで通りの、自分たちの生活に戻っていた。その姿がニュースで流れたとき、世間は彼らが本当に一般市民なのだと実感させられることになった。

『B・R・』再結成を望む声も多くあった。投書があつたらしくテレビでも取り上げられた。それらは安納鼎の前まで持ち込まれたが、「本人たちの意志ですから」と、柔らかく納得させられた。

そんな風に『B・R・』の名は消えることがなかった。

でも、流れ行く時のなかで。バレンタイン・デイがショーウィンドウを飾るころになると、次第に『B・R・』の話題は薄れていった。

『B・R・』は、伝説になった。

四月。東京駅。

中野浩太は駅構内を颯爽と走っていた。

「やべーっ、遅刻だ」

左腕の時計にチラリと目をやると、約束の時間は五分前に過ぎていた。同じ場所に集合する他の人間たちのなかに、他に遅刻するような奴はいない。

（うるさく言われるなー…、これは）

そう、心の中で思っても、無意識のうちに浩太の口元は緩んでしまっている。自然と、足が速まる。

飛び越えそうな勢いで、自動改札をくぐった。

「あーっ！ 中野だっ」

懐かしい声が響く。相変わらずらしいというか、目ざとく浩太を見つけたのだろう。

「…声でかいよ。ミヤ」

「うるさいなー。皆、もう来てるんだよ？」

「浩太。お久しぶりです…って、この台詞も何回言ったかわかりませんね」

「よう、浩太。一番近場に住んでるくせに遅刻すんなよ」

「悪い」

息を弾ませながら、浩太は謝罪した。ふと、目に映ったのは最後の一人。

「圭ー。おまえまた背がのびたなー」

「そのうち浩太を抜くぜ」

にやり、と相変わらず不敵な笑みを浮かべる。一方、

「……………は？」

浩太は自分の耳を疑った。そして爆笑した。

「わはははっ、誰だよ、その声ー」

「そうっ！ 私たちも驚いたのっ！ 声かけられただけじゃ圭ちゃんだってわかんないよねっ」

「まさかここまで低くなるとはなー」

「まあ、歌のほうは今日にでも聴かせてもらいましょう」

「浩太、笑いすぎだっ」

東京駅丸の内口で騒ぐこの五人を、この間の冬、世間を騒がせた『B・R・』だと気付いた人がもしかしたら居たかもしれない。しかし四月という何かと忙しい時期。立ち止まり指摘する人はいなかった。

四月。

中野浩太は、この春、高校を卒業した。就職先も進学先も決めなかった。

小林圭は、この春、中学を卒業した。二月に訪れた変声期にはかなり悩まされたという。

片桐実也子は、この春、短大を卒業した。

山田祐輔は、この春、ピアノ教室を閉鎖した。事後処理が忙しかった。

長壁知己は、いつも通り、つい昨日まで稼業の手伝いをしていた。それぞれの人生を一区切りさせて、また、結集した。

「……にしても、これってインチキって言われるだろーな」

浩太が口元を歪ませて呟く。

「何言ってるんです。最初から決めてたでしょう」

「そりゃ、仲間内ではそうだけど、世間から見たらさ」

「いーじゃん。ケジメをつけるために、『B・R・』はしっかりと終わらせたんだから」

「今回だって、いつまで続けるか分からないしな」

「どこまでやれるかも、試してみたいしね」

ここに、『Blue Rose』が結成される。

これからプロとしてデビューし、本格的な音楽活動を始め予定だ。メンバーはこの五人。専属のスタッフもすでに決定している。

Blue Roseというのは、ありえないもの、まだ手にしていない何か、不確定な未来、という意味である。

「…なあ、希玖って、いつアメリカから帰ってくるんだ？」

「そっいえば詳しくは聞かされていませんね」

「かのんちゃんに聞こう！ 早く事務所に行こうよっ！」

「…まーたいつものメンツか」

台詞とは裏腹に、浩太は押さえ切れない笑みを口元に浮かばせていた。

「…皆さん、お久しぶりです」

少しぎこちない笑顔で、叶みゆきは彼ら五人を迎えた。

祐輔

神奈川県C市。十二月十日。

「ただいま」

山田祐輔は自宅玄関をくぐり靴をぬいだ。そこで、予想しなかった声を耳にした。

「あ。山田くん」

高く響く抑揚のない声。

祐輔が顔を上げると、線の細い女性が立っていた。茶色い髪を肩の上で切り揃えて、オレンジ色のセーターと茶色のロングスカート、それから客用のスリッパを履いていた。

「沙耶。来てたんですか」

祐輔は驚いた。少しだけ。

「うん。今日、帰ってくるって聞いて。お帰りなさい」

本村沙耶は祐輔の肩に手をかけて、頬にキスした。祐輔もそれを返す。

「一昨日はすみませんでした。約束してたのに」

「いいの。代わりにおば様がデートしてくれたから。帽子を買っていただいたんだけど、よかったのかな」

「あの人も娘ができたみたいで、はしゃいでるんですよ。気にしないで」

二人は自然に一つ目のドアの部屋へ入った。そこは祐輔が開いているピアノ教室の部屋で、グランドピアノとソファと本棚が置かれている。沙耶が祐輔の家へ来たときは、何となくこの部屋に居ることが多かった。

「で、その母さんは買い物ですか？」

実際に居るべき人物は沙耶に留守を預けて出かけてしまったらし

い。コートを脱ぎソファに腰かけて、祐輔は呆れた声を出した。一方、ピアノの前に座った沙耶は蓋を開け、でたらめに鍵盤を叩いている。彼女はピアノという楽器にあまり思い入れは無く、満足に弾ける曲もないので即席猫ふんじやつたを奏でていた。

「沙耶は今日は何時ごろに？」

「九時くらい」

「僕は今回東京へ行つてたんですよ。電話してくれれば向こうで会えたのに」

祐輔は苦笑した。今、沙耶は横浜の祐輔の家に遊びに来ているが、彼女は東京在住なのだ。完璧にすれ違いだったことには笑うしかない。

しかし沙耶は祐輔に背を向けたまま、相変わらず抑揚のない声で言つた。

「嘘。連絡しても会つてくれなかつたくせに」

「…何故？」

「質問するのは私。何かあつたんでしょ？」

ピアノの音がやんだ。

理由は沙耶がピアノの前を離れ、祐輔の隣に座つたからだ。

「話しくいなら、話さなくてもいいよ？ 聞きたいけど」

すぐ隣から真っ直ぐな視線を当てられる。

沙耶の正直な台詞を聞いて、祐輔は笑つた。そして、すぐに事情を白状した。

「僕が『B・R・』のキーボードだつて言つたら、驚きますか？」

あつさり言葉にしたにも関わらず、それでも視線を外してしまつたのは何故だろう。

山田祐輔が本村沙耶と付き合い始めたのは、『B・R・』結成よりさらに一年前。

『B・R・』を始めたときの約束通り、祐輔は『B・R・』について口外しないということを守り続けていた。二人の間の「隠し事」に、後ろめたさがあつたのは確かだ。

かなり長い沈黙の後、沙耶は言った。

「…情けなく思っちゃうかもしれない、な」

「？」

「『B・R』は結構聴いているの、私も。…それを、山田くんの音だつて気付かなかつたのは、ちよつとしたショック」

あいかわらず抑揚のない口調の、彼女なりの気遣い。

そんな言い回しで、沙耶は秘密を抱えていた祐輔の罪悪感を軽減させた。

祐輔は沙耶を抱き寄せた。

「ごめん」

「それだけ？」

身じろぎもせず、間髪入れずに問う。祐輔はくすくすと笑い、細い肩を抱く腕に力を込めた。

「ありがとう」

三年前 九月。

薪坂千鶴音楽院は都内K市に本校舎を構える学校法人大学である。創立は昭和四五年、まだ歴史は浅いが国立・武蔵野と並ぶ音楽大学で、いわゆる名門と呼ばれる部類に属していた。カリキュラムは大きくわけて二つ これは想像がつくだろうが、実技と規定。規定は主に楽典でこれは筆記試験がなく、実技試験の際の口頭試問によって評価される。実技は完全席次制で、同じ学科の生徒はAからEにランク分けされ、さらにその中で順位が付くというシビアな

ものだった。

生徒数はおよそ一千人。一学年は二五〇人。そのうちピアノ科は一〇〇人と最多。

そしてこの年の三回生、ピアノ科A組の一番に、山田祐輔が名を列ねていた。

「よー、山田あ」

頭上から声がかかった。

自分の名前だ。起きるしかないだろう。

教室の机に伏して寝ていた山田祐輔は、睡眠を邪魔された不機嫌さを隠して頭を持ち上げた。

「何ですか？」

祐輔は誰に対しても敬語を使う。それは癖なのだと、彼は言う。

祐輔に声をかけたのは二人の男子生徒だった。同じクラスだが名前は覚えていない。

「席次見たぜー。一番。二〇週連続、憎たらしーけど、おめでと」

「校史初だつて、先生言つてた。すげーよな」

毎週発表される席次順は廊下に張り出されている。祐輔にはその発表を見る習慣は無かった。

「ありがとうございます」

とりあえず笑顔で礼を言う。

祐輔はこの学校の評価システムを小馬鹿にしている節があった。

否定はしない、呆れているだけだ。

音楽という点数化しにくいものにどうして順位が付けられるだろう。どんな基準で誰が評価するというのだ。その基準はともあまいで、評価する先生方の耳にも気斑があるというのに。

そういう環境だからというわけでなく、一番を取り続けているということに祐輔は優越や気負いを感じたりはしなかった。どんな採点方法でも、彼には興味がなかった。

しかしそんな本人の思いとは裏腹に、席次発表のおかげで山田祐輔の名は学内ではちょっとした有名人扱いになっていた。

「山田ー、この間の授業の内容なんだけど、ちよつと訊いてもいい？」

「あ、ズルいつ。山田くん、私も教えて」

主席を取ったからと言って、規定の成績も良いということにはならないのだが、こんな風に頼られることは多かった。断わる理由も無いので、自分の分かる範囲で教えてやる。

「ええ、いいですよ」

貼り付けたような笑顔。自覚はある。それが悪いとは思わない。

良いとも思わない。

ただ周囲と問題を起こさない处世術を、自然と身に付けているだけだ。

他人に好かれないわけじゃない。嫌われても構わない。でも煩わしい人間関係に神経を使うのが面倒くさい。それらから避けるためには、当たり前障りのない性格がベストなのだと、祐輔は知っていた。

ピアノを弾くのは嫌いではなかった。

とくにバッハのオルガン楽曲は好きだった。あの、数学で表せそうな音の集合体が、いい。音楽と数学が似通う学問だということがよく分かる。逆にショパンは苦手だった。ショパンの曲は切ったら血が出る、という名言があるが、それくらい生々しく人情的だということだ。感情を露にした人間的な曲を奏するには、自分は人格的に問題があるようだから、と祐輔は思っていた。

祐輔がピアノを弾くのは、数学の問題に挑む気持ちによく似ている。解けた後の満足感。達成感。そんな気持ち。

煙草の煙が空を舞った。

一人になりたかったので祐輔は図書館へ来ていた。教室に居ると人の良いクラスメイトたちが豊富な話題を投げかけてくるからだ。嫌なわけではないが、長い時間付き合うのはさすがに疲れる。

図書館の隅、本棚に埋もれた場所で祐輔は煙草を吸っていた。煙草と古い本の匂い、静かで落ち着く。

祐輔のポケットの中にはいつも煙草が入っていた。しかし人前で吸うことは絶対にしなかった。これにはどうと言った理由はなく、単に二十歳前から吸っていたことの名残である。

「禁煙」

心臓がドキッと鳴った気がした。その、突然の人の声に。振り返る。

「…なんだけど。ここ」

まるで棒読みのような感情のない台詞。

女生徒が一人、立っていた。髪をアップにまとめて、サマーセーターにロングスカート。そんな厚着な格好でも華奢だと分かる体格。片手にヴァイオリンケースを抱えていた。

「失礼しました」

祐輔はすぐに携帯灰皿に啜えていた煙草を捨てた。人に見られたのは迂闊だった。

「本、探したいの。ちょっと、ごめん」

とゆっくり抑揚のない声で言うと、彼女は祐輔のすぐ隣の本棚に目を走らせ始めた。すでに祐輔の存在は意識の外の様子。

祐輔は突然現われた女生徒にまだ驚いていた。喫煙姿を見られたこともそうだが、どうもこの女生徒は妙な雰囲気を持っていた。先程、祐輔を注意したにも関わらずその表情は非難も苦笑もなく無関心で、喋り方もどこかおかしい。

そんな風に思っても、祐輔は長く気に留めることはなくその場を去ろうとした。その時、もう一度女生徒から声がかかった。

「ピアノ科の、ヒト？」

やはりおかしいイントネーション。

「…そうですが、何故わかりました？」

改めて女生徒と向き合つと、どうも焦点の合っていないような視線を向けられた。

「楽器、持ってないし。煙草吸っていたから、声楽のヒトじゃないでしょ」

ぼーっとしているように見えて結構観察眼があるらしい。質問を返された。

「ヤマダユスケって、知ってる？」

まっすぐに祐輔の目を見て、言う。

「は？」

まさか自分の名前が出るとは思わなかった。しかも、知ってる？とはどういうことだ。わざと言っているのだから、彼女は山田祐輔の顔を知らないのだろう。

どう答えるべきか祐輔は悩んだ。自分だと名乗るべきか、知っている」と質問に答えるべきか、知らない」と嘘付くべきか。

この、奇妙な雰囲気的女性に長く関わりたくなかったので、祐輔は一番早く会話を終わらせることができる三つ目を選んだ。

「いえ、知りませんが」

「そう。じゃあ、皆が言ってる程、有名でもないんだ」

と、簡単に納得する。

わざと言ってるのか？と疑いもしたが、祐輔が観察する限り、嘘は付いてないと、思う。

「その人がどうかしたんですか？」

「ううん、…いい。ピアノ科には知り合いがいるから、そっちに訊いてみる。ありがと」

礼まで言われる始末だ。

「…はあ」

女生徒は祐輔から視線を外して本棚に意識を戻した。祐輔の存在はもう忘れたかのような態度。

(……………)

祐輔はその後ろをすり抜けて、図書館を後にした。
妙な女と関わってしまった、と思った。

* * *

翌日。

「祐輔っ」

背後から呼び止められた。振り返らなくても分かる、この学校で祐輔を呼び付けにする人物は一人だけだ。

「張り紙見た。また一番か」

これは賞賛じゃない。あからさまな嫉妬でもない。

日阪慎也は手を振って駆け寄ると、そのまま祐輔の肩に手を回して体重をかけた。

祐輔も平均よりは長身なほうだが、慎也の視線は祐輔より高い。

この馴れ馴れしさは祐輔の苦手とするところだが、許せてしまう雰囲気、彼にはある。

「おはようございます。慎也」

祐輔が呼び付けにする相手も、一人かもしれない。

日阪慎也は二十四歳。彼は別の大学に入学したものの、ピアノになるという幼い頃の夢を諦められず、この音楽院に入学しなおした変わり種。学費をアルバイトで稼いでいる為、週に何日か学校をサボる日がある。勿論、興味の無い授業や必要ない単位を狙った日だけ。昨日発表された席次のことを今朝見たということは、昨日はサボりの日だったというわけだ。

祐輔が慎也のことを気に入っているのには理由があつて、他のクラスメイトと違って慎也だけが、堂々と率直な意見を口にするからだ。賞賛や批判、それらに付随する複雑な感情も。嫉妬という感情が彼には稀薄で、一度社会に出た人間であるのに繕おうとしない、

年の割に良い意味でスレていない。そんな人間だった。

「さすが、？コピー機？だよな」

「ありがとうございます」

「…誉めたんじゃないよ、皮肉ったんだよ」

と口の端を持ち上げて呆れる慎也に、祐輔は笑った。

「もちろん、分かってますよ」

山田祐輔には一ピアニストとしてかなり特異な特技があった。祐輔自身は早くからそれを自覚していた。それについては否定も肯定もしたことはない。

この学校の生徒の幾人かが祐輔の演奏を聴いてそれに気付き、？コピー機？と呼んで嘲笑っているのは知ってる。しかしその一方で先生方はそれに気付き、そして主席という成績をつけている。その特技が受け入れられている証拠だ。

学校の成績はともかく、コピー機と呼ばれる祐輔の演奏は周囲に賞賛され、評価されている。

祐輔がピアノを弾くのは誰の為でもないが、周囲の評価は自信につながる。自分の演奏に疑問を抱いたことはないし、スランプに陥ったこともない。コピー機というあだ名を、気にすることもなかった。

「昨日の楽典の授業、ノート貸してくれない？」

「ええ、いいですよ。学食の食券で手を打ちましょう」

「おまえな…」

「楽典の単位落としたら慎也危ないですよね？ 昨日休んだのは新しいバイトでも入れたんですか？」

「いや、いつものピアノ弾き。貸し切りパーティするから出て欲しいって」

「さすが、うちの学科のナンバー2ですね」

「すげー嫌味だな、おい」

結局、慎也は祐輔に昼食を奢ることになった。

日阪慎也は学校の敷地内の芝生の上で昼寝をする習慣があった。昼休み。山田祐輔におごりつつ、自分も昼食を済ませ別れた。慎也はすでに行動パターンになっている昼寝を敢行するために校庭に出る。まず荷物を放り出すと、自分も腰を下ろしそのまま寝転んだ。日除け代わりのテキストを顔の上に乗せ、すぐに睡眠モードへと突入する。

「慎也」

睡眠突入を妨げる高い声が頭上から聞えた。知っている声だった。……珍しいな。学内でおまえが声かけてくるなんて」

トーンを落とした声で返事をする。顔の上からテキストを取り除くと、すぐ傍らに見知った人物が立ち、慎也を見下ろしていた。

彼女が座ったので、慎也も視線の高さを合わせるために上体を起こし座り直す。

こんな間近で彼女を見るのは本当に久しぶりのことだった。

「山田祐輔、つて、知ってる？」

唐突に、尋ねてくる。

慎也は目を見開いた。二重の意味で驚いた。

一つは、彼女が他人に興味を抱いているということ。

一つは、山田祐輔の名を知らないこと。

……とりあえず、後者について尋ねてみることにする。

「知らないのか？ おまえと同じくらい学内じゃ有名人だけど」

「皆、そう言う。……でもじゃあ、その山田くんは、私のこと、知ってるの？」

うつ、と慎也は答えにつまってしまった。祐輔と彼女の話をしたことは、ない。そして祐輔の性格を考えるに、多分、知らないだろ

う。彼は彼で、他人の演奏になど興味がないうだから。

「どんな人？」

更なる質問。どんな人？ とはどこに照準を合わせた問いなのだろうか。

「興味あんのか？」

冷やかしも込めた言い方だった。分かつてはいたが彼女には通用しない。慌てて否定するくらいのリアクションは欲しいものだが、彼女の表情は少しも変わらず、何の気もない本当のことを告げた。「コンクールの伴奏、に、薦められたの」

相変わらず説明不足の言葉少なさはどうにかしてもらいたい。でもこれは慎也にも分かった。

彼女の属するヴァイオリン科では近々学内主催のコンクールが行われる。そのコンクールの課題曲が、ピアノ伴奏付きであることが発表されたのはついこの間のことだ。コンクールにエントリーする生徒は学内からピアノ伴奏を担当する相棒を選出する権利がある。「ああ、おまえ、出るんだっけ。でもあいつを誘うのは難しいと思うけど」

「どうして？」

「どうしてって…」

説明は簡単だが納得してもらうのは難しいだろう。

「上手なの？」

「ああ。うちの科じゃ飛びぬけてな」

山田祐輔の気難しさを伝えるのは難しい。そして彼のピアノの腕を説明するのも難しい。

慎也は、ぴん、と思い付いて、彼女に問い掛けた。

「…聴いてみるか？ 次の時間ちょうど講堂で公開授業だから」

講堂は、コンサートホールの縮小版と思ってもらえばいい。

各学科、週二回行われている公開授業。これは講堂の舞台の上で行われる個人レッスンで、学内の誰もが見学することができる。優秀な生徒の演奏を聴ける数少ない機会なので、教師のほうも茶々を入れ妨げたりせずに弾かせている。一人当たり約三十分。弾き手の腕前と聴衆の人数は完全に比例し、山田祐輔の場合は同じ学科のみならず、他の学科の生徒が授業をサボってまで聴きにくる始末だった。

「コピー機？と呼ばれる、山田祐輔の演奏を。」

慎也が講堂に入った時、講堂の客席の三分の二が既に埋まっていた。

「さすが、祐輔の人気は相変わらずだな」

勿論、祐輔本人に人気があるわけじゃない。祐輔のピアノ演奏に人気があるのだ。

客席は薄暗く、その中には慎也の知っている顔や、学内の腕利きと呼ばれる人物の顔がいくつもあった。

「日阪、遅せーぞ」

扉の近くにいたクラスメイトが声をかけてきた。目ざとく慎也の後ろにいる人物に目をやる。

「げっ、本村沙耶じゃん。知り合い？」

その声にさらに別の生徒が聞きつけた。

「嘘っ、本村沙耶？」

彼女　本村沙耶は慎也の背後に隠れた。不機嫌な表情こそ出さなかったものの、慎也にはそれが伝わった。

「沙耶……」

苦笑いを向けると、

「この反応にも、慣れたわ」

いつも通りの無機的な声が返ってきた。

ヴァイオリン科三回生、本村沙耶。彼女も、学内有名人と呼ばれる一人だがそれを良しとしていない。

「日阪っ」

「うるさいって。祐輔は？」

「ああ、山田ならちょうど……ほら」

ちょうど、山田祐輔は舞台の上にいた。光の中に。

「……」

沙耶が前へ進み出る。

舞台の上のピアノを弾くのは、長身の男の人。長い髪を一つに結び、指の動きにならってそれが揺れている。

「……あの人が、山田祐輔？」

沙耶はその見覚えのある顔に眉をしかめた。図書館で目にした顔だ。

ヤマダユウスケって知ってる？

いえ、知りませんが。

そう答えただけ。

その人物が、舞台の上、グランドピアノを前に音を奏でていた。

（あの人が、山田祐輔……）

沙耶は山田祐輔の演奏を初めて聴いた。

ショパンの、「革命」。有名すぎるくらい有名な曲。

あの力強い曲を、危なげなく弾きこなしている。指、そして手首と腕の力がなければこうはできない。

押し寄せるような音の波と、溢れる躍動感。

正確なタッチ。激しい強弱と、テンポの変化。

（……これが、山田祐輔）

ヴァイオリンのコンクール。課題曲が伴奏付きだと聞いて、沙耶は悩んでしまった。

誰かと共に演奏するなんて、今までしたことはない。

想像しただけで、これはとんでもないことだと、分かった。

ピアノ伴奏でやるということは、そのピアノの上で自分は演奏しなければならぬ。ピアノが不安定ではこちらにも引きずられるだろうし、例えばノーミスで弾ける人と組んでもお互いの息が合わなければ演奏はガタガタになる。対等なパートナーシップを持てる人を選ぶなんて。

人付き合いが苦手な沙耶は考え込んでしまった。

山田祐輔は？ とクラスの子に言われた。

「沙耶と組むんだもの。腕前としては申し分ないと思うけど？」

誰それ、と言ったらクラスメイトは大袈裟に驚いていた。かなりの有名人らしい。

パートナーを組むかは別として、そんなに巧いのなら一度は聴いておこう、と沙耶はここまで来たのだ。

「……？」

ふと、祐輔の演奏を聴いていた沙耶の頭に何か引つ掛かるものがあつた。

隣に立つ慎也の腕を掴む。

「……この演奏。…シーモン？ まさか」

「やっぱり気付いた？」

慎也は苦笑した。そして言う。

「これが、山田祐輔がコピー機と呼ばれる所以だよ」

S・シーモンという現代のピアノ演奏者が居る。クラシック界の中でも知名度が高く、世界的に評価がある演奏者だ。

沙耶は、祐輔の演奏とついこの間CDで聴いたシーモンの演奏法が似通っていることに気付いた。

一つ一つの音の強弱。演奏構成、テンポ、ペダルの使い方。全てにおいて。

似ているというより、これは真似、模倣だ。

「……嘘でしょう？」

「あいつが何のCD聴いてるかって、すぐ分かるよ。音に表れるか

ら」

真似できるだけの耳と技量が、彼にはある。

一部の生徒はこれに気付き、？コピー機？と呼んで嘲笑っている。教師もこれに気付きながら、主席という評価をしていた。

そう、完璧に真似しているのだから巧いはずだ。

完全なるコピー機。

それが山田祐輔だった。

やがて演奏が終わった。客席から拍手が巻き起こっても、祐輔はそれに応えることはせず舞台を降りる。声をかけるクラスメイトの間を縫って出て行こうとする。慎也の姿を見つけた。

「…慎也？」

「よっ」

「どこ行ってたんですか。はじめ居なかったでしょう？」 あ」

慎也の後ろに隠れるように、女生徒が一人立っていた。知っている顔だった。

自分でも驚いているが、よく顔を覚えていたものだ。クラスメイトの名前も覚えられないのに。

図書館で「山田祐輔って知ってる？」と聴いた女。そう、彼女だった。

「祐輔、こいつ、おまえに用があるんだって」

「慎也の知り合いですか？」

「ん？ ああ、まあ」

慎也はあいまいな答えを返した。隣の女生徒は慎也の腕に手をかけたままだった。

慎也の彼女なのだろうか、と祐輔は思った。

そして何故か、先程から祐輔の顔を凝視している。それを不快に感じた。視線を捕まえないように祐輔は顔を背けた。

「…何か？」

「山田祐輔って、知ってる？」

やはりどこか無感情な口調だった。その疑問に慎也は不可解な眼差しを向けたが、祐輔にはその意図が分かっている。どうやら図書館で嘘をついたことを責められているらしい。図書館で会ったとき、同じ質問に祐輔は「いえ、知りませんが」と答えた。

溜め息をついて、今度は真実を答える。

「…僕のことですよ」

「私、本村沙耶」

彼女は名乗った。祐輔は初めてその名を知った。

「今度、ヴァイオリン科のほうでコンクールがあるの、知ってる？」

「知りません」

素気無くあしらった。でも知らないのは事実だ。

どうしてだろう。あまり関わりたくないと思っている。直感的に。

沙耶は別に気にしていない様子で話を続けた。

「私の、伴奏を、お願いしたいの」

そう言った途端、祐輔の背後が沸いた。

「本村沙耶の伴奏……？　　すげーコンビだぜ、これ」

「山田が伴奏、って、もったいなくないか？」

「馬鹿、相手は本村だ。相手に不足なし、だよ」

どうやら山田祐輔と本村沙耶の対面に、周囲は耳をそばだてていたらしい。

慎也は呆れたような溜め息をついた。

沙耶はそれを無視しているかのように、祐輔を見つめたままだ。

その視線から逃れることができず、祐輔は居心地の悪い雰囲気を感じていた。やはりこの女はあまりよくない存在だ。

「引き受けて、もらえる？」

悩むまでもなかった。それが慎也の恋人であっても同じこと。

祐輔はにっこり笑うと、

「お断りします」

と、言い放った。背後の騒ぎが止む。祐輔はそのまま慎也の横を通りぬけ、扉をくぐり、廊下へと出て行った。

慎也は嘆息して、こん、と沙耶の頭を軽く叩いた。

「だから言つたろ。あいつを誘うのは難しいって」

「そう、ね」

沙耶は相変わらずの無表情だが、懲りた様子はない。

「あいつは誰の演奏にも興味が無いんだと。伴奏なんてもつての外だよ」

諦める、と言外に匂わせる。

「でも、あの人の腕は、評判通りだって、わかった」

「沙耶？」

「……」

何も、答えなかった。

山田祐輔も本村沙耶も、他人にあまり興味が無いという点において似ているが決定的に違うところがある。

祐輔は他人の演奏も、そして自分の演奏にも無関心で、あるのは曲を弾きこなす興味だけ。数学の問題に挑む高揚感に似ている。完全な自己満足だった。

沙耶は音楽で自分を表現するということにとても積極的で、そのための努力は惜しまない。共に演奏する者には同じものを要求する。音楽に対する厳しさを持っている。

その二人が、出会った日のことだった。

「は？」

廊下で担当教師に呼び止められ、思ってもみない話題を振られた。同時に、（やられた）とも思った。

「だから、本村の伴奏、やってみたらどうだ。おまえ、そういう経

「験なかつたら」

と、説得するような口調で言う。その様子は必死で、しつこく祐輔に食い下がってくる。

大体どこから情報が伝わったのだろう。決まっている。本村沙耶だ。

あのぼーっとしている彼女はこんな裏技を使うタイプとは思えなかったのだが、それは侮りだったらしい。

まさか教師陣から崩してくるとは。

「それについてははつきりと断わってあります」

これまたはつきりと、祐輔は言った。

「まあ、そう言わずに。おまえ本村の演奏聴いたことないって？

一度くらい聴いてみる。聴く価値はあるぞ」

「……」

「聴いてからでも、断わるのは遅くないだろ？ な？」

*

「と、いうわけなんですよ」

刺々しい口調で言ってしまったから（これは自分らしくなかったかな）と祐輔は思ったが、まあ、いいことにする。相手は日阪慎也だ。

慎也も一部始終を聞いて目を丸くしていた。

「……あいつがそこまで本気になってるとは思わなかった」

「本気？」

「悪いな、あいつ、本気になると手段選ばないから」

諦めて降参してくれ、という色を含ませた口調で慎也は言う。しかしその中に第三者特有の面白がっている節があるのも事実だった。「付き合い長いんですか？ 彼女と」

「……え、ああ。まあ普通」

と、あいまいな答え方をする。

はー、と大きな溜め息をついたのは祐輔だ。

本村沙耶も、慎也も、担当教師も、沙耶の演奏を聴いてから改め

て断われれば納得してくれるというのだろうか。慎也が言う沙耶の性格通りならそううまくいくはずはないが、沙耶の演奏に興味がないのだといえば、少しは牽制できるのかもしれない。

祐輔はそんな風に考えて、慎也に沙耶の演奏を聴く機会があるか尋ねた。

あいつはヴァイオリンを弾くときだけ性格変わるんだ。と、慎也は言った。

それは本村沙耶という人物を知り、その演奏を聴いたことがある者なら誰でも知っていることだった。

祐輔は沙耶の演奏を聴いたことが一度もない。

だから今日、今、それを思い知ることになった。

空気が、張り詰めていた。

スウツと表情が変わる。緊張が伝わる。

沙耶が操る弓が弦を響かせる。それは想像していたものとは全く違う音だった。

激しく、荘厳。

あの華奢な体のどこからこんな力強さが生まれるのだろう。

いつもどこかぼーっとしているような沙耶からは考えられない、音。

指先に集中していることが痛いほど伝わってきた。

激しく揺られるトリル。吸い込まれそうな迫力。心臓を揺さぶられる感覚。

性格変わるんだ、と言った慎也の言葉も今なら納得できる。

講堂、舞台の上で、本村沙耶はヴァイオリンを構え、弓を操っていた。

それを聴きに来ている生徒数は祐輔のときより遥かに多いだろう。その理由も、この音を耳にすればよくわかる。

いつものトロク感じられるほどの穏やかさは、このときの力を取っておく為かもしれない。

そんな風に感じられるほど、激しいまでの迫力。

譜面も見ないで、目を瞑り、音の世界を作り上げている。聴衆をも引き込む力強さ。

「どうだ？ 祐輔」

隣から慎也が声をかけた。

「……」

答えることはできない。

「祐輔？」

祐輔も、彼女の演奏に聞き入っていたのだ。

ただ一言、

「……まいった」

それだけを口にした。

どうしよう、と思った。

はじめて。

はじめて、音楽に感動したかもしれない。

伴奏を受ける旨、本村沙耶に伝えたところ、彼女は別段驚いたりしなかった。

けれども少しの沈黙の後、彼女ははつきりした声で言った。

「条件があるの」

その言葉は彼女のほうの優位性を示すものだった。

柄にもなく、祐輔は意見する。

「……そちらから勧誘しておいて、条件ですか」

「そうよ」

「一応、覗きましょう」

「私、山田くんの演奏が、聞きたい」

沙耶の言葉に、祐輔は眉をしかめた。

伴奏を弾きうけると言っているのは自分だ。山田祐輔以外の何者でもない。

「……意味がわかりませんが」
続ける。

「シモンやケイナのピアノなんて、CDで聞けるもの。山田祐輔のピアノが聞きたいの。わからない？ 私の伴奏にコピーはいらない、山田くんのピアノを聴かせて欲しい」

「」

「山田くんの演奏を、聴かせて欲しいの」

沈黙する祐輔の隣で、その一方的な会話を聞いていた慎也は溜め息をついた。

沙耶の言いたいことも分からないでもない。名演奏家の完璧なコピーを平然と弾きこなす祐輔の、その本人の演奏というのは誰も聴いたことがない。聴いてみたいとは思っ

演奏家というものは、それなりの技術さえ持っていれば、後は個人の感性、独自の世界観で個性が決まる。

あまり「自分」を晒すことのない山田祐輔の感性を、そのピアノ演奏で聴いてみたい。しかし。

山田祐輔の性格が、自分を晒すなんて、できるのだろうか。

「練習は火曜と金曜の放課後。あと一ヶ月、宜しく」

返事も聞かないまま、沙耶は本件をまとめた。棒読みのような口

調の割に容赦がなかった。

じゃあ、やめます。と、断わればいい。

けれど口は動かず、声も出なかった。

一度受けてしまったこと。簡単に意見を返すわけにはいかない。

これも、祐輔のプライド。

「…宜しく、お願いします」

それだけ、硬い声で、言った。苦々しい口調だった。

*

「何で祐輔に拘るんだ」

帰り際、慎也は沙耶に尋ねた。駅まで一緒に行こうと誘ったのは

沙耶のほうだった。

「…」

慎也の問いに沙耶は答えない。

「あいつは、お前と同じく伴奏者に収まるタマじゃないと思うぜ？」

「…そう言っても、山田くんだって今のままじゃソリストには、なれない」

「あいつにその気はないよ」

「え？」

「演奏家にはならない、って。祐輔の口癖だから」

口癖。

というよりも、慎也にはもつと別のもののように思える。

僕は、演奏家になるつもりはありませんよ。

祐輔はそう言うけれど、本当は、他人に言うことによって、自分を戒めてるような。

そんな気がする。

「どうしてもだめだったら、俺がやろうか？」

慎也の申し出に沙耶は素直に驚いた。微かに笑いながら、

「慎也も、私の伴奏なんてやりたくないくせに」
と言う。

「そんなことないよ」

「でも私も、七歳の女の子に引きずられてるような演奏者は、遠慮するわ」

だのはっ、と慎也は声をあげて笑った。

「その嫌味っぷり。祐輔と似てるわ」

当たってるけどな、と慎也は笑いをしまいこむ。そして話題を転じた。

「…気が向いたら顔見せに来いって、父さんが言ってるぞ」

慎也の台詞に、沙耶は肩をすくめた。

「気が向いたら、ね」

「オイ…」

このぶんじゃ、いつ気が向くのやら。

慎也は呆れて苦笑いしつつも、改札で別れる沙耶を見送った。

* * *

山田祐輔は寮の練習室にあるピアノの前に座っていた。そして考える。自分の指を見て。

（僕の、演奏…？）

ずっと、本村沙耶の言葉がひっかかっている。

今まで考えたこともなかった。

コピーの特技は昔から持っていたし、その演奏で周囲は評価してくれた。

それでいいと思っていた。

それでいいわけじゃないのか？

演奏家の存在価値について、考えたことがある。

昔の巨匠が書いた曲を奏でるだけの存在。勝手に解釈を歪曲させて、同じものを表現した気になっている存在。そうだ、大体。クラ

シックを奏でること事体、模倣でしかない。

既成の曲をカラオケで歌う素人や、昔話を読んで聞かせる年長者と、一体どれだけの差があるというのだろうか。　差、など無い。まるきり同じ存在。

奏でるだけならレコードやCDと同じだ。…そこで生まれる矛盾レコードだって、演奏者の演奏なのだ。

では、古い時代の音楽をレコードにして、周囲に聴かせるだけの存在？

よく耳にする「名演奏者」とは一体なんだ。何が優れているというのだろうか。

表現力？　ただ、他人の曲を自分なりに解釈しただけで、何が表現力だ。

何を言っても、演奏者など、演奏するだけでしかないのに。何も創り出すことができないくせに。

「……っ」

ふと、とあるメロディーが頭の中を過ぎった。音楽に携わっている者なら、こういうことはよくある。

（　　ああ、これは）

最近、聴いた曲。

本村沙耶の、演奏だった。

この曲は知ってる。何人もの演奏を聴いた。何も思わないはずなのに。

心の中で繰り返し返される音楽。

本村沙耶の演奏を聴いてから。

これが、本村沙耶の演奏……。

* * *

「禁煙、なんだけどな」

「ごほつ、と祐輔はむせた。」

いつものように図書館で煙草を吸っていると、本村沙耶が現われたのだ。

最近は週二回顔を合わせているのに、わざわざこんな所で会うなんて。

祐輔は前回と同じように携帯灰皿に揉み消し、ぱちんと蓋を閉める。

「失礼しました」

何となく、長く同じ空間に居なくなかったので、祐輔は早々に立ち去ろうと荷物をまとめる。そんな中で、沙耶は本棚に向かいながらも、背後の祐輔に声をかけてきた。

「山田祐輔は、見つかった？」

山田祐輔は、見つかった？

「」

祐輔は立ち止まり、息を飲んだ。

見抜かれている、と思った。自分が今闘っている、葛藤。

「…そんな人間は、元々いないのかもしれないよ」
そう返すのがやっとだった。

強がりでもいい。弱さを見せたくないかった。

沙耶が振り返る。逃げ出したかった。でも、足が動かなかった。

「私は」

沙耶の声。

「私は、見えてる、けど」

「え？」

不可解な台詞に、反射的に祐輔は聞き返した。

（見えてる…？）

何を？

沙耶はまた本棚に向き直って、

「何でもない」

と言った。

十月最初の週、学内を揺るがすニュースが起こった。

ピアノ科三回生、万年A組一番だった山田祐輔がE組に転落したのだ。

「山田がEい？ うっそだろー。んな急に下手になるわけないじゃん」

「はじめてじゃないか？ あいつ入学以来Aに居たもんな」

「先生方も大騒ぎだったさ」

「そりゃそーだろ、学校期待の星の危機だもん」

恒例発表の日の朝。校内は上よ下よの大騒ぎだった。学年・学科問わずこの話題で持ち切りになっていた。

様々な憶測が飛び交い、情報が入り混じる。

事実を知るのは、同じクラスの面々だけだ。しかしピアノ科三回生A組の二十名は口を重くし、そのうちの誰かはこの結果は納得しないと言ったという。

「日阪っ、説明しろっ」

と、教室に飛び込んできたのはピアノ科四回生数名だった。日阪慎也を名指したのは、山田祐輔と仲が良いことを知っているからであろう。

「…おはようございます。先輩方」

「挨拶はいいっ、山田の転落劇は何事だ」

四回生の間でも山田祐輔の腕と、今回の事件は噂のネタになって

いた。

慎也は何名かのクラスメイトと視線を合わせた後、苦々しい口調で言った。

「サボリですよ」

「なにい？」

「先週、あいつは実技の授業をぜんぶサボったんです」

*

山田祐輔は、学校の練習室でひとり、ピアノを弾いていた。

「……っ」

指がかたい。たどたどしく、いつものように弾けない。

イメージが湧いてこない。

何故、と思う前に祐輔は、どうしよう、と思った。

忘れてしまっている。

指が動かない。

忘れてしまった？ コピーの弾き方さえ。

焦り始めると気持ちは止まらない。

(…本村沙耶のヴァイオリン)

今まで祐輔は、尊敬する音楽家はいなかったし、特に好きという音楽もなかった。

沙耶が弾いた曲は、既成の、何度も聴いたことがあるクラシック曲。

それなのにどうして、こつも沙耶の曲が耳に残る？

どうして。

本村沙耶。ヴァイオリン。

山田祐輔の演奏が、聴きたいの。

「っ！」

バーンッ

何かが弾けたように、祐輔は両の拳を鍵盤に叩き付けた。そして駆け出した。

その日。昼になっても、山田祐輔は教室に現われなかった。

本村沙耶は山田祐輔を探しに図書館へ来ていた。

静かで、穏やかな空間。本校舎での慌ただしい様子とはまるで違った、別世界。

「……」

沙耶はそつと、足を踏み入れた。

日阪慎也は、今日は祐輔は来ていないと言った。

沙耶は、祐輔がここに居ると確信があるわけじゃない。居ないなら居ないで別の場所を探すだけ。

何故なら。

今、山田祐輔に会いたいと思った。

それだけなんだけど。

図書館の司書は事務室に籠っている。他に人の気配は無い。

静まり返った部屋に、本棚の林、古い本の葉。

この、妙に閉塞感があるくせに、不安になる広さを感じさせる部屋を、沙耶は好きではなかった。

好きだという人間は、どんな思いでこの空気に浸るのだろう。

「山田くん……？」

祐輔はそこにいた。

いつも、煙草を吸っている窓のそば、その壁にもたれ、祐輔は座り込んでいた。

手足を投げ、頭を垂れて。

沙耶の声が聞えたのか、腕がぴくと微かに動いた。

「君のせいで弾けなくなった」

うつむいたまま、低く、小さな声。

「どうしてくれるんですか」

額を手の平で支えて、自棄気味に発音されてしまう言葉を繕うこともしないで。

祐輔は沙耶に言った。

山田祐輔の演奏が聴きたい。

ただそれだけの、沙耶の一言に、祐輔は潰されてしまった。

ピアノを弾けなくなった。もう弾きたいとも思わない。指が動かない。十年近くやってきたことを、一瞬で忘れてしまった。

そうだ。そもそも。

ピアノを弾きたいなんて、思ったことがあっただろうか？

どうして始めた？ いつ？ どうして続けてきた？ 何か理由があった？

誉めてくれていた。

コピーで皆、満足してくれていたじゃないか。

山田祐輔の演奏が聴きたい。

本村沙耶。

嫌な存在。直感があった。

関わりたくない。

でも、彼女の演奏を聴いた。初めて、音楽に感動した。

あの深さ、音の表現力。彼女の内なる世界。

嫉妬？ あんな風に演奏できたらいいと思った。

それだけ。

でも、自分は弾けなくなった。

「山田くん」

沙耶の声。

コツコツと近づく音がして、沙耶は祐輔のすぐ隣に座りこんだ。

顔を上げると、その顔がすぐ近くにあった。じつ、と、祐輔を見つめている。

そして、顔が近づいて。

「沙 ……？」

唇が触れあつた。

沙耶は、祐輔にキスした。

図書館の中、他に人の気配はなかった。

祐輔が目を見開きただ驚いているだけの間に、沙耶は離れた。

「……山田くんは」

「え？」

「山田くんは、山田くんの中の山田くんに、何も無いと思つてゐる」

「……？」

祐輔は混乱した。沙耶にキスされたこと、そして沙耶の言葉にも。

沙耶は変わらない表情で続けた。

「だから、他人と同じように弾けるの。他人の真似しかできない。

だつて真似しないと弾けないもの。山田くんは、自分のなかに何も無いと思つてゐるから」

「」

祐輔は不思議と、素直に沙耶の言葉を聞くことができた。

「でも私には、ちゃんと見えるよ？ 山田祐輔というヒトが。他人の真似しかしないけど、音楽好きなこと。それを自覚してないこと。他人と上手く付き合えない自分にストレスを感じてゐること。煙草を吸うことで解消してゐること。本の匂いで落ち着こうとする、他人に弱いところを見せたくないプライド、弱さ。この窓からの景色が好きなこと。…それが、山田くんの知らない、山田くん」

間を開けた。

「自分を分かつたしなきゃ、ピアノも弾けないよ」

ピアノで音を出すのは本当に簡単で、ただ、鍵盤を押すだけでいい。ピアノはある意味打楽器なので、それだけで音が出る。

でも音を出すことと、楽器を奏でることは違ふから。

そして演奏というのはいまだ表現で、表現するのは演奏者。演奏者は何を表現するのかというと、それはいろいろあるけれど、結局は「自分」。それにすべては回歸する。

自分を、表現する。

自分を晒す？ そんなことできない。わざわざ、他人に自分を
せるなんて。

そう思っていた。つい、さっきまでは。

祐輔はくくつと、微かに笑ったようだった。

「山田、くん？」

「……僕の知らない山田祐輔は、随分と器が小さいんですね」
と、言った。顔に手をあてて、苦笑していた。

沙耶も、笑ったようだった。

初めて、笑顔を見た。

次のチャイムが鳴るまで、二人は壁のもたれ寄り添って、その場
に座りこんでいた。

「……慎也と付き合ってるんじゃないんですか？」

そういえばこんな風に尋ねたこともなかった。

先ほどのキスがただの慰めなのか確認するために言った。

沙耶は微かに笑って、

「慎也は、私の、兄」

と言った。

(……?)

祐輔は我が耳を疑う。

「はあっ？」

大声を出した。沙耶は落ち着き払った様子で言葉を続けた。

「両親が離婚してるの。もう十年くらい前。苗字が違うのはそのせ
い」

「慎也は何も言ってますでしたよ？」

「妹が同じ学校の同級生、っていうのは、慎也のコンプレックス。

妹のほうで成績が良いっていうのも、そう」

勝手に入学してきたのはそっちだっていうのに、と、沙耶は勝手
なことを言う。

本村沙耶と日阪慎也は兄妹だった。

「慎也も成績が悪いわけじゃないですよ。常に五番以内にはいますし」

「私は、ヴァイオリン科の一番だもん。…なんて、奢るほうも馬鹿みたいけど、それにコンプレックス持つほうも馬鹿みたいだね。そもそも学科が違うんじゃ、勝負にも、ならないし」

「同じ学科には僕がいるからだめですよ」
くすくすと、二人は笑い合った。

「それにね」
と、沙耶が話し掛ける。

「慎也は、だめなの。昔聴いた、ある人の演奏を今も、引きずってるから」

「ある人？」

「…多分、慎也が十一歳のとき、かな。まだ一緒に暮らしてたときだから。私は八歳とか九歳とか、そのくらいだった。慎也がコンクールの全国大会に、出たの。大会の優勝者は七歳の女の子。その女の子は当時は新聞に取り上げられたりもして騒がれていたって。その演奏を、ずっと忘れられないって、言ってた。でも女の子はその大会を最後に音楽界から消えた。慎也は女の子の弾いた曲を今も弾いてるし、当時の記事の切り抜きを保管してる。…妹としては、この人大丈夫かなって、心配したこともあるけど」

間を開けた。

「どの音楽を追いかけて行くか、なんて。…個人の自由だもん、ね」

慎也の経緯にそんなことがあったとは知らなかった。

「私は、初めて山田くんの演奏を聴いたとき、すごく感動した。だからコピーじゃなくて、山田くんの音も聴きたいと思った」

ほんとだよ、と付け加えた。

その後。

山田祐輔は一週間でA組に復帰し、さらに次の週にはトップに返り咲いていた。

ヴァイオリン科のコンクール課題曲は「亡き王女のためのパヴァーヌ」。ピアノ伴奏にヴァイオリン・ソロという構成。

本村沙耶・山田祐輔のタッグは話題を呼んで、先生方の間でも噂のタネになり、周囲の予想通り、一位となった。

後に二人が付き合い始め、同学院新聞部主催のアンケートで「ベストカップル賞」を受賞したときの、山田祐輔による「ま、当然でしょう」という名言は後世に語り継がれているという。

そして卒業するまで、山田祐輔は「演奏家にはならない」と公言していた。

この次の年の夏、祐輔はK a n o nという名を知ることになる。

「…煙草の味」

唇を離れた後、沙耶が呟く。もう四年も経つのに、思い出したかのように繰り返される台詞。

「沙耶が嫌ならやめます」

その度に、同じ回答をする祐輔。

本日は東京、沙耶のマンションに祐輔はお邪魔していた。

「いいよ。嫌いじゃないし……それに、煙草やめたら山田くん困るでしょ？」

本村沙耶は音楽院卒業後、東京ミュー・フィル・ハーモニーにオーケストラ要員として入団。現在はビオラのセカンドをつとめるま

でになった。

一方、山田祐輔は卒業後、横浜の実家でピアノ教室を営んでいたが、色々あって現在は芸能界で「Blue Rose」というバンドのキーボードを担当している。

「山田くんはストレス溜めてるしね」

喫煙が祐輔のストレス解消法だと、沙耶は知っている。

祐輔はそれを素直に認めたくなく、何か言い返そうとしたがやめた。確かにそういう時期もあったからだ。

「沙耶は違うんですか？」

彼女の実兄に言わせると「似過ぎている二人」の沙耶と祐輔。負荷がかかることは同じかもしれない。

「私は演奏することで発散してる。でも、山田くんはそれ、できないもんね」

それは適性の問題。

あ、と沙耶が思い出したように声をあげた。

「慎也が、結婚決めたみたい」

祐輔はさして驚かなかった。

「シヨウコさんと？」

慎也の彼女とは、何度か面識がある。

「勿論。六月だって」

「あの二人も長かったですね。付き合い始めて三年くらい経つでしょう？」

「私もそう言ったら、？おまえらはどうなんだ？って言われちゃった」

二人、笑い合う。沙耶と祐輔が付き合い始めてから四年、経とうとしていた。

祐輔は沙耶を抱き寄せて平然と言う。

「沙耶が結婚したいなら今すぐにでも」

「んー。とりあえず、慎也を送り出してから、かな」

普通は逆でしょう？　と言って祐輔は笑った。

そして、あ、今度は祐輔が思い出したように声をあげた。

それは「Blue Rose」のカップリングで弦楽器を用いた楽曲を使用する、それに当たりヴァイオリニストを探しているという内容だった。その候補に沙耶の名が挙がっているのだ。

「それって、山田くんのコネにならない？」

祐輔も頷いた。

「いつも話してる、愉快的な仲間の人達？」

*

山田祐輔が本村沙耶を連れて練習スタジオに現われたとき、その場にはメンバー全員が既に揃っていた。

一瞬の空白の後、実也子は隣に居た浩太に小声で耳打ちする。

「予想つくだろ、それくらい」

「なーと思ってたんだけど、結構まとも？」

その会話がすっかり聞えていた祐輔は笑顔で口を挟んだ。

「うわっ、最悪」

騒然とするメンバーを前に、祐輔は沙耶に囁いた。

「…ほんと」

沙耶は初めて会った祐輔の仲間たちに、好感を覚えていた。

*

「ちよつ、え？ 嘘でしょ？」

打ち合わせの最中、突然立ち上がり異論を申し立てたのは実也子だった。

「おまえ、話聞いてたか？ この曲の使用楽器は、ギターとヴァイオリン二本。浩太と、本村さん、そして実也子だ」

リーダーである知己が呆れたように言う。その隣でエディターのみゆきも頷いている。

実也子は天を仰いだ。

「嘘ー。私、もう一人フィーチャー（特別出演）するのかと思ってたよぉ」

「前に、ヴァイオリンやってたって言ってただろ」

「でもー…」

実也子は普段はベースパート担当。楽器はコントラバス。確かに、コントラバスを始めた初めの頃は、体が楽器を支えられない為にヴァイオリンで練習していた。

「でも、私、下手だよ？ 現役のヴァイオリニストと共演なんてできないよー」

「話にならないくらい下手なら、かのんも再考するってさ。とりあえずは合わせてみるよ」

きゃー、と半ばパニックになっている実也子に同情する者は一人もいなかった。

結局、その日のうちに圭、ボーカル浩太、（ギター）、ヴァイオリン ヴァイオリン沙耶、実也子によるセッションが行われ、みゆきのOKが出たので明日本撮りを行うことになった。

帰り際、実也子はまだ渋々言っていた。沙耶の音を聴いてさらに怖じ気づいたらしい。

しかし。

「山田くん」

そしてこちらにも帰り際。沙耶は祐輔に話し掛けた。

「どうかしました？」

「片桐さんて何者？」

質問の意図が分からず、祐輔は首をかしげた。

「どういう意味ですか？」

「趣味でやってた人の、音じゃない。…誰かに、ついてたんじゃない？」

沙耶は実際、今日、実也子の演奏を聴いて驚いた。確かにコントラバスとヴァイオリンは姉妹楽器だが、ここまでの弾き手だとは予想していなかった。

やはり個人の腕前は、音が薄くなってこそよく表れる。「Blue Rose」ではベースというあまり目立たないパートなので気付かなかったが、実也子の演奏には正直驚いた。

「ああ、…そんな風に言ってたことが、確かにありました」

以前、実也子は「先生に弟子入りしていた」と言っていた。

「誰？」

「そこまでは。気になりますか？」

「うん…。多分、すごく有名な人だと、思う」

「そうですねえ、コントラバスっていうと」

「遠藤周雄、前田公昭、大島秀、杜山雄一郎…。それから」

「でもまさかそんな有名どころではないでしょう」

祐輔は苦笑した。沙耶も、そっか、と考え直す。

「でも、今日は楽しかった。山田くんの仲間とも、仲良くなれたし」

「こちらこそ、ありがとうございました」

六月。

初夏を感じさせる青い空の、暖かい日だった。

指定された駐車場は丘の中腹にあった。木々に囲まれて、舗装されていない砂利敷き。あまり広くもないその場所に車を止めて、祐輔は目的地へ足を運ばせていた。

駐車場からは歩いて十分、とある。先程車で昇ってきたアスファルトの坂道を、今度は徒歩で歩く。狭い道で、谷側には都心の街並みが見渡せた。良い天気だった。

慣れないスーツはどこか着心地が悪くて、とりあえずネクタイを崩してみる。腕時計に目をやると、待ち合わせまであと二十分。十分余裕のある時間だった。

途中、同じ目的かと思われる何人かと出会う。その中の数人は知り合いで、音楽院時代の同級生だった。あまり付き合いはなかったので挨拶程度の言葉を交わす。

祐輔は視界の端に、見知った後ろ姿を認めた。

「沙耶」

その後ろ姿が振り返る。

「おはよう。山田くん」

沙耶は紺色のキャミソールドレスにシースルーのショールと、肘まである白い手袋をしていた。

「おはようございます。ドレス、似合ってますよ」

「山田くんも、かっこいいよ」

二人は並んで歩き始めた。

「いい天気、だね。良かった」

「そうですね。折角のおめでたい日ですし」

森林の中へこのまま散歩にでも出かけたような、そんな日だった。

祐輔はちよつと迷ってから尋ねた。

「余計な事かもしれませんが、今日は沙耶のお母さんは来ないんですか？」

「多分、来ると思う。慎也も招待状出してた、みたいだし」

バラのアーチをくぐると、そこはもう目的地。
場所は都内郊外にある教会。

今日は祐輔の友人であり、沙耶の実兄である日阪慎也の結婚式だった。

「よお、来たな」

新郎側の部屋を訪れると、真っ白いスーツの慎也が振り返り笑った。髪も整えてあり、いつもより三割増、と沙耶も祐輔も同じことを思ったが、本日はめでたい席、控えることにする。隣には慎也の父親が式服で座っていた。

「本日は、ご結婚おめでとうございます」

「おめでとうございます」

沙耶と祐輔は同時に頭を下げた。

「ありがとう」

と慎也。照れ臭そうに笑う。そして沙耶はふいともう一人に向き直り、改めて挨拶をした。

「お父さん、久しぶり」

慎也の父親ということは沙耶の父親でもある。二人の両親は十年以上前に離婚していて、沙耶は母親に引き取られた。その母親はすでに再婚している。

「沙耶。おまえは結婚しないのか？」

と顔に皺を寄せてからからと笑う父親（気さくな人らしい）に、沙耶は苦笑した。

「会つとそればかり」

「大丈夫だよ、父さん。遅かれ早かれ隣にいる男とくつつくからさ」
慎也の台詞に、なにっ、と微かな敵意が込められた視線を父親に向けられた祐輔は、

「はじめまして。山田祐輔といいます」

と、冷静に名乗った。こういう場面で、微塵も緊張しないのが山田祐輔の特徴でもある。

続けて、慎也と沙耶の同級生であること、慎也の友人であり、沙耶と付き合いがあることを簡単に並べる。その落ち着きぶりに慎也は舌打ちした。父親に質問攻めにされて慌てる姿を期待していたのに。

父親のほうからもあれこれ質問されても、祐輔はいつも通り、少しよそ行きの笑顔を見せて、素直に答えていた。

「そうそう、慎也のやつ、沙耶が同じ大学にいるなんて言わなくてな」

「卒業する前にバレただろ」

突然向けられた父親の愚痴に慎也は肩をすくめる。沙耶も会話に入った。

「でもお父さん。私たちも、狙って同じ大学に入ったわけじゃないよ」

「だよな。俺だって入学してから驚いたし」

それなら祐輔も知ってる。

慎也はピアノリストになる夢を諦められず二十二歳で音楽院入りした変わり種で、入学してから一ヶ月後、新入生最初の席次発表で沙耶の名前を見つけて驚いたという。二人は両親には秘密にするという同盟を組み、卒業まで隠し通したのだ。祐輔は途中で知らされた。「あれ。じゃあ山田くんは今は何をしているんだい？」

合間に、そんな質問があった。

何気ない質問だった。

「
」
祐輔は答えるのが遅れた

質問に意表を突かれたわけではない。ただ、自分の今の職業を何と言いつた方がいいのか、分からなかった。

数ヶ月前までは「ピアノ教室の先生をやっています」と言えば済んだ。現在は？

何度か、「Blue Roseでキーボードやってます」と答えたことがあるが、これは職業ではない。それ以前にこの父親は「Blue Rose」を知っているだろうか。はたまた「芸人」などと答えたら笑われるかもしれない。大体、芸人は職業名なのだろうか。「音楽関係者」と呼ばれたこともあるが、これも職業であるかは謎だ。

「演奏家、だよ」

沙耶だった。

「！」

祐輔は胸を突かれた。

振り返ると、沙耶は微笑んで祐輔を見つめていた。

「山田くんは、演奏家、だよ。ピアノだけじゃなく、電子楽器もこなしてる。テレビに出たりもする、演奏家だよね」

慎也も、沙耶の言いたいことが分かったらしく祐輔に笑顔を向けた。

「……………」

演奏家。

くすぐったい響きだった。

それは学生時代に既に諦めていた道、散々否定してきた未来。

今、祐輔はそれを生業としているのだ。運命とは、不思議なものである。

「ほう、それはすごい」

父親が頷いた。

「……ありがとうございます」

会話のつながりとしてはおかしかったかもしれない。

でも祐輔は、慎也たちの父親だけでなく、慎也と、沙耶に、感謝を述べたかった。

「じゃあ、その演奏家をお願いがあるんだけど」

にかつと笑う慎也。何か企んでいるようだ。すぐ傍らに置かれて

いた紙の束を無造作に掴み祐輔に手渡す。

「式のと看、この曲弾いて欲しいんだ」

と言った。紙の束は楽譜だった。何気なく受け取ってしまった後に気付いた。

祐輔は目を丸くして言う。

「は？ 聞いてませんよ」

「言ってない。祐輔なら大丈夫だろ。沙耶、おまえも一緒な。どうせ車に楽器積んであるだろ？」

とんとんと話を進めてしまう慎也に、祐輔は口を挟んだ。

「ちよつと待つてください。教会にはピアノなんて無いでしょう？」

「大丈夫。借りてあるから」

抜け目無かった。

「慎也、あのですねえ」

「おまえ、親友の結婚式なんだから文句言わずに大人しくやれよ」

「そういう台詞は事前に打ち合わせの段取りを組む親友に言ってもraithたいですね」

二人の会話に沙耶は笑ったようだった。

ふと、祐輔と目が合う。默契が成り立ち、二人は笑いあった。

「それに 一応、私たち二人ともプロなんだけども」

「まあまあ。他ならぬ慎也のため、ノーギャラでも演りましょう」

アイ・コンタクトで意地悪な芝居を打つ二人は、どう考えても性格が悪い。分かっているはいるが、慎也は素直じゃない二人に嘆息した。

「おまえらな…」

「何の曲なんです？ …ああ、これって、慎也が学生時代からしつこく弾いてる曲ですよね」

「違つよ山田くん。これ、慎也は十七年前から弾いてる」

この曲を初めて耳にした時から。

以前、聞いたことがある。

慎也と、彼の恋人はこの曲をきっかけに出会ったということ。

まあ、有り体に言えばノロケなのだが、随分と感慨深げに語っていたことを覚えている。

慎也の彼女とは祐輔も何度か対面したことがあるが、あまり笑うことが得意ではない美人、という認識がある。笑顔が板に付いてないというか、ある種、叶みゆきのようなぎこちなさがある。かと言って大人しいわけじゃない。

付き合いがあるわけではないので詳しくは分からない。

でも慎也の隣で見せる幸せそうな笑顔を、祐輔も沙耶も知っている。

お似合いだね、と沙耶が言う。僕たちほどではありませんが、と祐輔が言う。

幸せだな、と思った。

「山田ちゃんと演奏するのも、久しぶりだね」
沙耶が笑う。

二人はこの四年間、一緒に何度も演奏してきた。
でも、いつも。思い出す気持ちは四年前の秋。
まだ二人が、お互いの音を知らずにいた頃のこと……。

それは、タイトルもない。

十七年前の全国音楽コンクールで、七歳の少女が奏でた曲だという。

この曲が、今日結婚する二人をどのように巡り合わせたのか、祐輔たちは知らない。

ただ二人が喧嘩しているときも、笑い合っているときも、常にこの曲を意識し続けていたことは、分かっている。

七歳の少女が作曲したとは思えないこの優しい曲に、慎也たちは二人だけの題名を付けたと言っていた。アルファベット三文字。音

楽家の巨匠、そのイニシャルを　。

その由来も意味も知らない。知らなくていい。でも。

そんな風に、一つの音楽をきっかけに出会った二人が、どうか幸せでありますようにと。

祈った。

ピアノとヴァイオリンの音が、教会の鐘と共に響いていた。

初夏を感じさせる青い空の、暖かい日だった。

実也子

生まれて初めて買ったCDはジャズ・バンド「RIIZ」のファーストだった。

十一歳のとき。

デッキの前に座って、夢中になって、一日中聴いていた。

古い家に音は筒抜けで、両親によく叱られていた。

それでも、手放せない音楽だった。

Blue Roseという突然現われたバンドに、世間は大騒ぎになっていた。

三年前の夏、デビュー直後に爆発的ヒットを果たした正体不明のロックバンド『B・R・』。その正体が明らかにされたのが昨年末だった。彼らは全員普通の一般人で、年に一度だけ東京へ集まり、レコーディングをしていたというのだ。クリスマスに行われた記者会見では、「全員それぞれの生活がありますから」と理由付けをして、世間に惜しまれながらも『B・R・』は解散した。

それから四ヶ月後。Blue Roseというバンドがデビューした。何とメンバーは全員、元『B・R・』。ボーカルが変声期を迎えたため声は変わっているが、それ以外は『B・R・』そのものだった。

『B・R・』の復帰を待ち望んでいたファンは大喜びで、この復活劇にマスコミも飛びついた。さらに今までのロック調だけでなく、

ギター・ソロや弦楽器を用いるなどして幅を広げている。これからの活躍が期待された。

ファースト・シングルの発表し、数々の雑誌や新聞、テレビ番組などの取材をこなして、ようやく落ち着けたのが一ヶ月経った頃だった。

というわけで五月。

東京での住居が定まらず、五人が社長の指示があるまでホテル暮らしを余儀なくされてから一月が経過した。初めのうちは不便を感じていたが、慣れてしまえば快適そのもの。何と言ってもマスコミが入ってこないのが良い。

五人はホテルのラウンジでお茶するのが日課になっていた。

午前中にそれぞれの日課（ほとんどは楽器の練習）を済ませ、午後には誰も何も言わないのに自然と集まる時間。全員が集まっているのに本を読んでいたりと、それぞれが勝手なことをやっていたり、何も喋らなかつたりする時もあるけど、不思議と和む時間だった。

そしてそんな風にいつも通り集まっているけれど、最近、様子がおかしい人が、約一名。

「ミヤッ！」

「わっ」

がくん、とテーブルにしていた肘が落ちた。片桐実也子は驚いて声を上げた。

「……あ、…え、なに？」

眠っていたわけでもないのに目が覚めきっていないような表情でまばたきをする。

隣から小林圭がカップを手渡そうとしていた。

「さつきから、何回呼んだと思ってんだ？ ほら、コーヒー」

ガラス張りの日当たりの良いラウンジ。テーブルに付いているのは実也子を含めて現在五人。

「ありがとーっ。ごめーん、ぼけてたみたい」

あはは、と手を振る実也子に、隣から山田祐輔がつっこみを入れた。

「かれこれ三十分は、その雑誌、頁が止まってましたよ」

「やだあ、つまないもの見てないでよ、祐輔」

三十分というのは勿論冗談だろうが、かなり本格的に実也子は上の空だったらしい。

「目え開けて寝てるとか？」

中野浩太が半分真剣、半分冗談で言う。

「顔色悪いぞ」

と、声をかけたのは目の前に座る長壁知己。実也子はハツとして、うつそ、フアンデの塗り甘かったあつ？」

と、オーバーな仕種で窓ガラスに自分の顔を映した。

「違うつて…」

知己は呆れた。「真面目に言ってるんだ」と言いかけると、実也子は立ちあがり、

「と、ゆーわけで、ちょっとしつれーい。鏡見てくるっ」

言うが早いが実也子は祐輔の後ろを擦りぬけて席を離れた。やれやれ、と知己は嘆息する。

しかしその実也子呼び止める声があった。

「実也子さん！」

丁度、叶みゆきがこちらへ近づいてきたところだった。

彼女は他の五人のようにこのホテルに常駐しているわけではない。noa音楽企画との連絡係やマネージャー的役目を果たしていた。

本職はBlue Roseのプロデューサーで、既に次の企画を始めているという彼女は、今、一番忙しい身かもしれない。

「…かのんちゃん？　どうかした？」

みゆきの呼びかけで立ち止まった実也子は、振り返り足を戻した。

みゆきは手の平の中のメモ用紙に一度目を落として言った。

「フロントにお客様です。実也子さんに」

「！」

実也子は過敏に反応し、何かに刺されたようにその表情が歪んだ。誰にも見られなかったのは幸いだった。

それでも次に発したいつもより低い声は、全員が気が付いただろう。

「…誰？」

据えた、重い声に、誰かが振り返るより先にみゆきが続きを言った。

「ご家族の方？ 片桐俊哉、ですって」

「えっ！」

表情が一変、パツ、と実也子の顔がほころんだ。嬉しさを隠し切れない表情で、すぐさまその場から駆け出した。

「実也子？」

「皆も来て、紹介するよっ」

広いラウンジに響き渡るほどの大声を出して、実也子はフロントへ向かう。途中、人にぶつかりながらも身軽な動きでラウンジを出て行った。

*

「俊くんっ！」

。 実也子は意中の人物を目ざとく発見し、その名を呼んだ（叫んだ）。

片桐俊哉はフロントカウンターそばのソファに座っていた。大声で名前を呼ばれてビクツと肩を震わせたが、声を発した実也子を見止めると、その相変わらぬ性格に柔らかない笑顔を見せて立ち上がった。

「よ」

実也子は足の速度を落とさずに、そのまま俊哉に突進する勢いで抱き付いた。

「来てくれたんだっ、ありがとーっ」

俊哉はタートルネックのシャツにブルゾンという比較的軽装に荷物の一つ。実也子より十五cm背丈があるため、そのタックルにも

倒れないで耐えることができた。

「ついでにね」

「かわいくないなー、もー。でもどうしたの？ 突然」

「心配だから様子を見てこいって、母さんが」

「信用ないのね、私」

「信用はあると思うよ。危なっかしいだけで」

「とーしー。二十になってもまだ姉にそーいうこと言うわけ」

くすくすと笑う二人の顔はどこか似ている。二人とも母親似だった。

「え？ ミヤのきょうだい？」

後に続いてきたみゆきを含む五人。圭が驚きの声を上げた。

実也子はあると向き直り、俊哉の腕に手を回したまま言う。

「そうつ、自慢の弟だよ。いい男でしょ」

満面の笑顔で紹介した。自分の弟を紹介する言葉としては珍しいのではないだろうか。

実也子の隣、俊哉は目の前に立つ五人に深々と頭を下げた。

「片桐俊哉といます、はじめまして。いつも姉がお世話になっております」

その礼儀正しさに一同は少なからず驚いた。本音が思わず口に出たのは浩太だった。

「…性格は似てないようだけど」

「どういう意味？」

刺々しい声で浩太に詰寄る実也子。

一同に笑いが起こった。

「浩太ー、一言多いよ」

「そうそう。例えば本当のことでも言っていていいことと悪いことがあります」

「祐輔…、俺はそこまで言っていないから」

圭と祐輔の会話を聞いて、俊哉も吹き出した。砕けた表情で笑って、実也子の居る環境を知って、安心したようだった。

その後、改めてのメンバー紹介と歓談。「それから、やっぱり頼まれてしまった」と、俊哉は色紙を数枚差し出した。大学の友人に、Blue Roseのベースистの弟だとバレてしまったらしい。五人は色紙にそれぞれの名前とバンド名を書いた。（全員、楷書体なのが笑える）

「あんまり、姉弟って感じしないな」

と言ったのは圭だった。実也子と俊哉は目を見合わせて笑った。笑うときの表情はやっぱどこか似ていて、血縁なのだろうということは一目でわかるのだから。

実也子は俊哉と腕を組んで言った。

「俊くんは弟っていうより、友達なんだよね」

そっという姉弟関係を、結果的に築いた片桐家であった。

*

俊哉を見送るため、実也子はエントランスの外に足を運んでいた。一応、人目があるので変装用の帽子をかぶっている。

「別件の用事もあるからあと数日はこっちに居るんだ。上野のホテル泊まってるから、何かあったら連絡して」

「うん」

ホテルの近くの駅まで歩くことにする。二人は肩を並べて、歩道を歩く。

少し前は一緒に買い物へ出かけたりもしていたが、実也子が東京で暮らすことになったので、こんなシチュエーションも懐かしく感じた。

「いい人達じゃん、皆。安心したよ」

「心配だったの？」

「後、俺は、実也は男を見る目が無いと思ってたけど、今回は当たりみたいだな」

長壁知己のことは嫌というほど聞いていた。片桐家の長女は弟に恋愛相談をするので。

「なによ、それ」

男を見る目がない、と評され実也子は苦笑いした。

その笑いを抑え込んで、実也子は声を落とした。

「ねえ、俊哉」

「…なに？」

「私、迷惑かけてないかなあ？ 今、Blue Roseやってること、父さんと母さんと、俊哉に」

暗い声で実也子が言うので、俊哉は実也子の頭を小突いて言った。
「まあ、何か悩んでんの？ 父さんも母さんも、好きにやればいいって言うてくれてるじゃん。まあ、ミヤがまた家を出たせいで淋しがってるみたいだけさあ。俺だつてミヤが有名人になったことを学校で自慢してるしさ。鼻が高いよ」

俊哉が元気付けようとしてくれているのが分かった。微かに笑つて、そっか、と実也子は呟いた。

「来てくれてありがとう。楽しかったよ」

駅の改札で、手を振って別れた。

同日、夜。

コンコン

ホテルの部屋、ドアをノックされた。空耳かと疑ったけど、どうやらそうではないらしい。

実也子は枕元のデジタル時計に目をやる。時間は二時を過ぎていた。

丁度起きていたので、パジャマの上からカーディガンを羽織り、部屋のドアを、そつと開けた。

すると、

「…長さんっ？」

知己が立っていた。実也子は大声を出した自分の口元を咄嗟に塞いだ。ドアを開けているのだ。深夜の廊下に響いてしまう。

気のせいだろうか。知己は機嫌が悪そうだった。

声を潜めて実也子は知己に言った。

「どしたの、こんな遅くに。今日は入れないよ」

「馬鹿、違うよ。…さっきホテルの従業員呼んでたろ。何だったんだ？」

実也子は首を傾げる。

「え？ 別に。…ちよつと寒かったから毛布持ってきてもらったただけだよ。まさか浮気なんかしてないって」

「ちやかすな」

強く響いた知己の声に、首をすくめた。心配そうな声が続いた。

「最近、寝てないだろ？ 昼間ばーつとしてるし、顔色が悪い。…何かあったのか？」

知己の手が実也子の頬をなぞる。実也子はくすぐったそうに笑う。

「おせっかいだなー。何にもないよ」

「じゃあさっきの従業員に訊いてくるぞ？」

知己の疑う言葉に、むかつ、と意味不明な言葉を実也子は吐いた。睨む視線と共に、低い声で言った。

「怒るよ？ 訊いてきても同じ。…ほらっ！ 毛布だってここにあるしさあ」

手元を持っていた毛布を知己の胸に押し付ける。でもすぐに表情を和らげて、

「心配してくれるのは嬉しいけど、過保護なんて長さんらしくないじゃん。…それに、もし、本当に私が調子悪かったとしてもあんまり騒がないでよね。心配性なのはかのんちゃんだけだけど、うちのメンバーそういうの気にしすぎるでしょ？」

ね？ と、たしなめるように言った。

勿論、これは実也子の調子が目に見えて悪かったときのことを仮定している。現在の話では、なく。

「……実也子」

「本当に何でもないってば。ほらほら、早く寝ないと明日、起きら

れないよ？ それにうら若き乙女の部屋へ深夜訪れるなんて、人道外れた行為だって」

知己はもう少し何か言いたそうだったが、実也子もいい加減早く寝たいので、長さんといえど追い返すことにする。

知己も降参するように肩をすくめて、

「人道は外れてないと思うけど」

「ほらほら、そこでつつこまない」

二人してくすくすと笑った。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だから」

「わかったよ。おやすみ」

「ね、長さん。おやすみのキスはー？」

「あほ。じゃあな」

「ケチー」

むくれる振りをしながらも、おやすみなさいと言って実也子は手を振った。ボタン、とドアを閉めた。

「……」

また、静寂が訪れた。

からん、と、実也子の足元に何かが落ちた。毛布の中から転がり落ちたのだ。

実也子は溜め息をついて、それを拾う。

手の平におさまるくらいの、透明なビン。

ホテルの従業員に、毛布と一緒に持ってきてもらった胃薬だった。

（こんなものが効くとは思えないんだけどね）

知己には嘘をついた。

心配はありがたいと思う。でも。

（情けは私のためにならないんだよ、長さん）

備え付けの水差しから水をコップに注ぎ込む。それを持って、実也子はベッドに乱暴に腰を下ろした。コップは枕元の台に置いた。

「……………ばか」

小さく小さく、呟いた。これは自分に対しての言葉。

実也子は乱暴に薬ビンを開け、三錠ほど取り出し、一気に飲み込んだ。ついでにコップの水も掻っ込む。口の端から溢れた水をパジャマの袖で拭う。

水が気管に入って激しくむせた。実也子は涙が出るほどの胸焼けを覚えながらも、ベッドに潜り込み布団に包まり、一人丸くなった。五分ほどでそれは収まり、さらに二時間後、実也子は眠りにつくことができた。

？ 私たち？ は、皆ライバルだった。

互いに競い合い、蹴落とし、淘汰されてゆく。目指した場所へ辿りつく為に、先生の下へ集っていた。

そんな場所だと知っていた。

？ ここ？ に居ることの誇りと責任は誰もが自覚していたし、先生への尊敬と羨望も当然のように持っていた。

実也子もそれが自分の選んだ道だとそれらの慣習を受け入れてきたし、偶に対人関係の不穏や技術のスランプに悩まされても、不器用ではあるが立ち直り、しっかりと前を見続けてきた。

（きっかけは、何だったっけ？）

もう忘れてしまった。

ぷつ、と糸が切れるように。

前が見えなくなったことがあった。

「 どうした 」

声をかけてくれたのは…… そう、先生だった。

問い詰めるわけでもない、優しい声だった。

先生の顔を見たら、涙が出てきた。

十三歳の時から六年間。師と仰いだ人、いろんな事を教えてくれた人、叱ってくれて、優しくった人。

「 …… やめる 」

「 え？ 」

「先生。私、もおやめます」

意外にも、簡単に言うことができた台詞。後にこの台詞を悔いたことは一度もない。

「やめます…。音楽なんてやめる」
やめる。

自分のちからではどうしようもない壁を感じ始めたのは、もう何年も前のこと。

その壁を越えることはできないのだと、わかった。

壁の名前はたった少しの試練。実也子の決断は挫折という。

片桐実也子は十九歳だった。

「……ぎぼぢわるい…」

とーとつに。□元を手で押さえて、呟く。

午後。いつものラウンジでのこと。

「は？」

突然の発言に、その他四名は実也子に注目した。真っ青な顔で、□を押さえている。

「ミヤ？」

本当に具合が悪そうだった。実也子の隣に座っていた祐輔が心配そうに手を出してきたが実也子はそれを遮った。

「ごめーん、ちょっと失礼」

低い声で呟くと、実也子は席を立ち、レストルームの方へ走っていった。

「大丈夫か？ あいつ」

浩太が呟く。次に圭が、

「ツワリかつ？ 長さん、とうとう…」

ゴツンッ

容赦無く、圭は知己に殴られた。

「いてーッ！」

そのままテーブルに伏す。

「ちつとは手加減しろよっ……。あれ？」

軽い冗談だろうと、圭が頭を上げると、知己はもうそこにはいなかった。残っているのは祐輔と浩太だけだ。祐輔の指差す先で、知己が実也子を追ったことを知った。

* * *

吐きこそしなかったものの、幾分すっきりして実也子がレストルームから出てくると、知己が壁にもたれて立っていた。

ある程度、予測していたけれど。

「……だーからー、長さん」

はふー、と実也子は額に指を当てて溜め息をついた。知己の隣に、並ぶ。

「あんまり、私をカッコ悪くさせないでよお」

苦笑い。表情を隠すように、前髪を掻きあげる。

心配させたくないから、迷惑かけたくないから。気を遣って欲しくないから、自分の弱いところを見せないよう努力するのに、簡単にバレてしまっている。

カッコ悪い、と思う。

「」

知己は壁に背中をもたせたまま、無言だった。

実也子は苦笑いして、知己の腕に、自分の両腕をすりと回した。

「何でもない、って言っても、通用しないかな。長さんには」

「まーな」

即答があった。しょうがない。白状することにする。

「…確かに、最近眠れないんだ。胃も調子悪いし」
でも、と続ける。

「眠れないのはつまらないことを考え過ぎてるからだし、胃が痛いのも以下同文。どっちも理由ははっきりしてるの」

すっかりした迷いの無い声。知己は実也子の顔を覗き込んだ。

「そのつまらない考え事っていうのは？」

「言いたくない」

ぴしつと言いきる。でもすぐに笑顔を見せた。

「ねえ、長さん。確かに私は長さんみたいに要領良くないよ。でも自分の問題を自分で解決できないほど不器用じゃないつもり。心配かけてごめん。何も言わないで見守ってて？ 私はちゃんと、一人で立ち直るからさ」

なーんて、ちょっとクサかった？

実也子はそこで知己の腕から離れた。

「…おい」

「早く戻る？ あ！ これで私がツワリですとか言ったら、皆びっくりするかなあ。勿論相手は長さん」

既にいつもの笑顔。実也子はスキップするような足取りで、祐輔たちが待つテーブルへと向かう。

「そのネタは圭が言ってた」

「えっ、そうなの？ もー、圭ちゃんは一」

ネタを取られたことの恨み言を吐きつつ、知己より一足先に実也子は走っていった。

* * *

「ごめーん。食べ過ぎみたい。失礼、失礼」

実也子が元居たテーブルに戻ると、そのいつもの調子に三人は安心した。

「食べ過ぎって…、そんなに食ってたっけ？」

「皆がいなくて。夜食とかね。えへへ」

ぽりぽりと頭をかく。知己以外の三人は笑ってくれた。気を遣ってくれたのかもしれない。

「あ、そうそう。実也子さん」

と声をかけたのは祐輔だった。

「んー？」

「今度、僕と一緒にデートしませんか」

その、唐突な発言に、素直に驚くりアクションを返したのは浩太と圭だった。実也子は目を見開たものの、面白そうに祐輔の顔を覗き込んだ。満更、悪い気はしない。

「なにになー。どうしたの？ 突然」

祐輔は、というと、この人物がポーカーフフェイスを崩すはずもなく、いつも通りの口調で、いつも通り面白がっている。他人にとってはた迷惑なこともあるけど、祐輔の企てに実也子もあやかろうというのだ。

「こういうものがあるんですが」

ぴらっと、紙幣大の紙を二枚、差し出した。

実也子はそれに目を走らせると、ガタンツと立ち上がり大声を發した。

「あーっ！ これ、前田公昭のコンサートチケットっ？ えっ、どうしてっ？ これ、なかなか手に入らないんだよおっ？」

ふるふると震える手でチケットを握り締め、実也子は力んだ。

前田公昭。その名を実也子は当たり前のように口にしたが、浩太と圭と知己は首を傾げていた。

「ちよっとツテがありました。…実也子さんの趣味でしょ？」

「なんでわかったのー？ 私、今一番尊敬してる人って前田先生なんだよおっ」

「何となく、技術的…というか拘ってるところが同じ方向だと思っ
て。…どうです？ 行きますか？」

実也子は隣に座る祐輔に抱き付いた。

「もちろん行くーっ、ありがとうっ、祐輔っ」

そのまま、興奮が収まらないのか実也子は「ありがとう」を連続した。祐輔も別段動じる様子もなく、どういたしまして、と言った。「でも、長さんの視線が痛いので離れません?」

「誰がだよ」

合い向かいに座っている知己がつつこむ。

「やだー、長さん。やきもちい?」

笑いが収まらない実也子。大人しく椅子に座り直した。

「でも、いいの? 二枚あるってことは、沙耶さんと行く予定だったんじゃない?」

本村沙耶はこの間一緒に仕事をした祐輔の彼女だ。

「沙耶経由で二枚貰ったんですよ。何でも団員仲間が入手したらしいんですけど、合宿と重なって行けなくなっただけです。沙耶は実也子さんにあげたくて、チケット貰ってきたそうですよ。本人も合宿組ですから」

「じゃあ、後でお礼を言わなきゃ。ついでにエスコートに祐輔を借りるお礼も」

「こちらこそ、喜んで」

「ところで、前田公昭って誰?」

会話の区切れを狙って圭が疑問を口にした。

「あ、そっか。別にコンサートと言ってもアイドル歌手じゃないよ」と、実也子は苦笑する。祐輔が言葉を継いだ。

「日本を代表するコントラバス奏者の一人 実也子さんと同じ楽器ですね。本人は多分六十歳くらいだったと思います。コントラバスでは珍しくソロ・コンサートも演るし、テレビにもたまに出ていますよ。巨匠と呼ばれる一人であるにもかかわらず、オーケストラの一人として出演することもあります」

その祐輔の説明には、実也子も驚いた。

「祐輔、詳しいねー」

「それくらい有名だってことですよ。雑誌にもよく出ているし」

それは実也子も知ってる。雑誌の特集はけっこうチェックしているのだ。

「ミヤって、なんで弦バス始めたの？」

浩太が言った。

「あ、そっか。言ったことなかったっけ？」

でも改めて言うとなると照れるものなのか、実也子にはにかむように笑った。

「私はどっちかっていうとクラシック畑の人間だけど、元々この楽器を始めたのはあるバンドのファンだったからなの」

「バンド、って？」

「RIZっていうジャズバンド。解散したのはもう七年くらい前だから、中野や圭ちゃん知らないかな。RIZのリーダーで、ウツドベース担当の加賀見康男って人がいてね。…あ、もう亡くなったんだけど。この人がものすごくかっこいいの！ 十一歳の幼心にも本気で惚れたなー。とにかく、加賀見さんに憧れて、弦バス始めたの。私」

「えー、でもこの間、クラシックの演奏家に弟子入りしてたって言うってたじゃん」

「そう。加賀見さんの尊敬するベーシストがクラシックの人でね。私はほとんど押しかけで、その人のところに弟子入りしたんだ。一ヶ月も経たないうちに、今度はクラシックにハマってたよ」

「ジャズの次にクラシック……って、普通、逆じゃないですか？」

と、祐輔は苦笑した。でも、実也子らしいかもしれない。

「私の初恋は、RIZの加賀見康男さん。次は私の師匠だよ」

そう言って、笑った。

翌日。

午後六時。

部屋の電話が鳴ったとき、相手が誰なのか実也子は咄嗟に判断できなかった。

（かのんちゃん…？ …長さんかなあ）

どちらにしてもこの時間にかけてくるのは珍しい。

みゆきがかけてくる場合は仕事のことだろうし、知己の場合食事の誘いとかだったら個人的には嬉しい。

ベッドに腰かけて、枕元の電話をとった。

「はい、もしもし。片桐です」

ホテルの電話の場合、普通は名乗らなくても良い。実也子はほとんど勢いで受話器に向けて言った。

返ってきた声は想像したうちの誰でもなかった。

「フロントでございます」

きれいな、高い声が返ってきた。その人物の顔もすぐに頭に浮かんだ。フロントカウンターにいる、すでに顔見知りとなった女の人だ。

「あつ、はい。何でしょう」

実也子は改まった声を返した。

「フロントに塚原様という男性の方がいらっしゃっています。片桐様に面会したいとのことですが、いかがいたしましょう」

呼吸が止まった。

「すぐ、行きますので、ロビーで待っててもらえるように伝えてもらえ、ますか？」

「かしこまりました。この件は安納様にお伝えしたほうがよろしいでしょうか？」

「いえ、その必要はありません。全くの、プライベートですから受話器を置くときに、最大限の注意を払った。少しでも気を抜くと、落してしまいそうに手が震えていたから。」

ドクン、と。自分の鼓動が嫌に耳につく。

「はあ……」

わざと声に出して、実也子は溜め息をついた。

（やっぱり……、来たか）

*

会うのは三年ぶりなのに、実也子は相手をすぐに見つけることができた。

多分、今二八歳だっただろう。よく覚えていない。

それからもう一つ。実也子は、彼が自分のことを良く思っていないことを知っていた。

「こんにちは。片桐さん」

目の前で懐かしい顔が笑った。

彼は自分の嫌いな相手に対しても笑顔を見せられる人柄だ。それを性格と呼ぶか外面がよいと呼ぶかは難しいところだ。

「……塚原くん」

彼の名は塚原正志といった。

「久しぶりだね」

と言っても、塚原が実也子との再会を喜んでいるわけじゃないことは伝わった。

「……もし来るなら、塚原くんだと思ってた」

七人のうちで。

塚原の、仲間……とは言えないかもしれないが、とにかくあと六人同じ立場の人間がいる。塚原正志を入れて七人。

片桐実也子を入れて、八人になる。

「はは。ほら、弟子の中では俺が一番年下だろ？ 押し付けられちゃってさ。と言っても、君なんか放っておけっていう意見のほうが多いんだけど」

実也子は塚原が何しに来たのかよくわかっていた。

「…先生は？」

「何も言わない。演奏会が近いんだ、ゴタゴタしたくないんだよ」

「…」

「で、片桐さんは今頃現われて、先生の顔に泥を塗る気？」

「まさか…っ」

「知ってるだろ？ 先生の芸能界嫌い。君がどう思ってるか知らないけど、マスコミは近いうちに君らの経歴を調べあげるだろうし。君が昔、先生の門下生だったとバレたら、こっちも迷惑するんだけどな」

「…」

「それと、俺らの中には、クラシック界を志し半ばで諦めた君が、芸能界で騒がれているのを、面白く思っていない奴もいる。はつきり言って君は目障りだから」

実也子はしつかりと、塚原の言葉を受け止めた。

それでも崩れることはない。それは塚原に対して、ある種の「意地」が働くからだ。

対等なライバル関係を保つためには、気弱な態度は見せないことだ。

実也子は挑戦的な口調で言った。

「…変わってないなあ、塚原くんは」

次の瞬間。

パンツと渴いた音をたてて平手が飛んだ。

塚原の右手が、実也子の頬を叩いたのだ。実也子はよろけたものの、どうにか倒れずに済んだ。

頬が、熱くなった。

「……っ」

何をされたかは、すぐに理解できた。

目に涙が滲んだ。でもこれは酷いことを言われたせいじゃない。殴られた屈辱からでもない。

ただ、少し痛かったただけだ。それだけの涙だ。

「君も、自分勝手なところ、全然変わってないね」

「言われなくても、…分かってる」

自分がどんなに我が儘で、勝手に、周囲に迷惑かけてきたかなんて、よく分かってる。

そんなこと、塚原に言われるまでもない。

ほとんど押しかけで弟子入りしたのに、勝手にやめて、教わった技術を利用して別の場所で活躍しようなんて、虫の良い話。

言われるまでもない。

けど。

塚原の言葉を、平気で聞いていられるわけじゃない。

塚原の言葉は全て真実だから、深く、胸に突き刺さっている。

(どうしよう。泣いてしまいかもしれない)

もしこれが塚原の前じゃなかったら、泣いているかもしれない。

もし私が一人だったら。

もし、誰か。

「実也子っ」

知己の声が聞えた。

「長さんっ？」

駆け寄ってきたと思ったら、間に割って入って、塚原を睨み付けた。塚原は知己が誰かなのか分かっているらしく、事情説明も言い訳もなく、無言で目をやっただけだった。

「何やってんだ！」

先ほどのシーンを、知己は離れた所で見ていたらしい。咄嗟に弁解したのは実也子だった。

「長さん、何でも…何でもないから、騒がないで」

未だ熱い左頬を押さえながら、知己を抑制する。

ホテルのロビーで男が女を殴ったのだ。周囲の幾人かに注目されているのが分かる。これ以上騒ぎを広めたくない。

「…でも、実也子」

「ほんと。私は大丈夫だから。」

塚原くんも、せっかく来てく

れたのに申し訳ないけど、用件がそれだけだったら今日は帰ってくれる？ 本当に、ごめんね」

「ああ。もう二度と来ないよ」

じゃあな、と捨て台詞を残して、塚原はホテルのエントランスから出て行った。

*

「実也子っ、何ださっきのは」

「お願いだから騒がないで。…本当に、何でもないから」

知己の手を振り払って、実也子は安心させるような笑顔を見せた。でもすぐに俯いた。

今は知己の声さえ、鬱陶しく感じる。皆の、心配そうな視線も、何もかも。

顔がひきつつて笑えない。こんな私、見られたくない。

前田先生。

（自業自得だ…）

好き勝手に生きてきたことの、これは罰だ。

「実也子っ」

「何でもないったら！」

強く、叫んだ。

しまった、と思った。

口元を抑える。自分の発した声が信じられなかった。

「…あ。ごめん」

呟いた。

（こんなの私らしくない…）

私らしくないよ、と言い聞かせるように、強く、胸の中で呟いた。

「ミヤ」

え、と顔を上げる。

圭が濡れたハンカチを差し出していた。

「冷やすと、腫れ、おさまるから」

「あ……」

左頬を押さえていた左手で、それを受け取る。

「ありがとう」

圭は時々ハツとするような気の遣い方をするときがある。ありがたいな、と、心から思った。

まだ熱い頬にハンカチを当てると、ひんやりとして気持ち良かった。

心も落ち着いてきた。

鼓動が安定してきて、深呼吸をすると気分が変わった。

知己の顔を見ると、相変わらず何か言いたそうな目をしていた。

実也子はもう一度深呼吸をして、

「……さっきの彼は、昔の知り合いなの」と切り出した。

「もう何年も会ってなかったんだけど、今回のことで私のこと聞いて、会いに来てくれたみたい」

「その知り合いが何でおまえを殴るんだよ」

「……………」

実也子は言葉に詰まった。説明が難しいし、説明したくもない。

答えないでいると、祐輔が口を挟んだ。

「……塚原正志でしょ。あれ」

「何で知ってるの??」

実也子は飛び上がった。

祐輔の口からその名前が軽々出てくるなんて。

「今年のコンクールに出てましたよ。ほら、三月の。前田公昭の門下生の一人」

「前田……って、この間言ってたクラシック界の大物ベースリスト?」

浩太が尋ねる。祐輔は頷いた。

「ええ。前田公昭には七人の弟子がいるんです。年齢はバラバラですが、皆それなりに活躍しています。何でも前田公昭は公式のコン

クールには門下のうち一人しか出場させないとか。今回はその中で最年少ながら塚原正志が出場しました」

すらすらと語る祐輔の言葉の内容は、実也子が当たり前のように知っていることだった。

「……あ、あいかわらず詳しいねえ」

どうにかおどけた声を出す、思った通りには響かなかった。

祐輔は実也子に視線を向けて、さらに続けた。

「でもこれって、クラシック界ではかなり有名な話なんです。雑誌にも書いてあります。実也子さんも前田公昭のファンって言ってたし、多少知ってるんじゃないんですか？」

祐輔の台詞は、疑問ではなく確認だった。

ここまで言われて、実也子のほうも気付かないはずがない。観念したように溜め息をついて、実也子は苦笑して言った。

「祐輔、意地悪だなあ……。気付いてるんでしょ？ もう」

察しの良すぎる彼のことだ。もしかしたら祐輔の台詞だけで他に気がついた人がいるかもしれない。

例えばバれているとしても、できれば口にしたくなかった。

「……そうよ」

でもあえて実也子のはつきりと明確に、自分の過去を明かした。

「私は、十三歳から十九歳になるまで、前田公昭に師事してたの」

*

「祐輔が言った通り、さっきの塚原くんは兄弟弟子。……前田先生の顔に泥を塗る気がつて、叱られた。だから、叩かれたの」

こんな所で何してるんだ、と。よく顔が出せたものだ、と。彼の言いたいことは、分かった。

殴られるくらいのことは初めから覚悟してた。

単なる暴力じゃなく、無言の戒めのようなものがあって、八人の間では厳しく監視しあっている節があったから。前田公昭の弟子、という誇りと責任が、そのような関係を作るのだ。恥ずかしくないようにと、お互いがお互いを高める。

あれだけの言葉と、一発叩くだけで塚原が帰ったことのほうが、実也子は意外だった。

「あ、でも気にしないでね。あの人は、クラシックが高尚な音楽だって、思い込んでるだけなの。…先生はそんな風に教えたこと、なかったのにな」

ははは、と少しだけ笑うことができた。

少し間をあけて、祐輔が尋ねた。

「…前田公昭のところをやめたのはいつですか？」

「箕さんのお店でKanonの曲を聴く二ヶ月前」

「どうしてやめたんだ？」

ちくんと胃が痛んだ。

「……」

知己の質問に、実也子は口を閉ざした。一度だけ視線を泳がせて、「私ね、十三のときから先生に弟子入りしてたんだよ。中学一年だった」

と、語り始める。知己たちの目を見ないように、続けた。

「でも群馬の地元の学校へ通ってた。平日の放課後は、地元のベーストの先生に教わりながら前田先生のメニューをこなすの、夜の十時まで。土日と、夏休みとかは、東京に来て練習、先生の家泊まってた。……ははっ、今思い返すと笑っちゃうよ。そんな生活を六年間も続けてたんだよ？ 高校も地元だったからね。ほんと、感心しちゃう」

声が震えた。四人は黙って聞いていてくれた。

少しだけ胸が痛んだ。

「前田先生はとても厳しい方だし、私は他の兄弟弟子とも折り合い悪かったし…。結局、その厳しさに耐えられなくなって、…そんな生活に我慢できなくなつて、飛び出しちゃった」

やめた理由はそんなところ、と実也子は付け足した。

「……」

それを聞いていた実也子以外の四人 知己と祐輔と浩太と圭は、

誰からともなく目を合わせた。四人とも言いたいことは同じなようで、それに対する回答も同じであることを視線だけで確認し合う。

「……？ なに？」

それに気付いた実也子は、一人わけが分からず首を傾げた。

「ミヤ」

どうやら代表として圭が言うことになったらしい。でも。

実也子に向けられた四人の視線はとても厳しいものだった。

「それを本気で信じさせようって思ってるなら、俺ら、かなり、なめられてるな」

え？、と実也子は呟いた。意味がわからなかった。

「え……、なに？ どうして？」

「嘘ついてまで言いたくないなら、別に無理して訊かなくてもいいじゃん」

と、含みを持たせて言ったのは浩太だ。

「中野？ ……私、嘘なんかついてないよ？」

誰かが溜め息をついた。

そして圭が言った。

「この中で一番努力家なのってミヤだぜ？ 努力家って言葉が違うなら単に練習好きって言うてもいい。だから、そんなミヤが、練習がキツくて逃げたってのは嘘だな」

「……っ！」

実也子は動揺した。その表情を出してしまった。

凶星をさされたのは、勿論嘘をついた自分が一番よくわかってる。でも。

本当のやめた理由なんて。

皆に言いたくない。絶対、言いたくない。

「……買い被りすぎだよ、皆」

「もっとはつきり言っと、今のおまえが嘘付いてるのは誰でもわかる」

「……っ」

知己にまで言われて、実也子はカッとなった。

「……………」

四人を見回して、呟く。小さすぎて声が届かなかったらしい。聞かせるつもりもなかったが。

「え」

前田先生のところをやめた理由？

それを訊くの？ あなたたちが。

すつと息を吸う。

叫んだ。

「皆にはわかんないよっ！」

そして駆け出す。ミヤ、と後ろで圭の声が聞えた。構わずにホテルのロビーを横切った。

走った。

行き先もどうするのかも決めてない。ただ皆の前に居たくなかっただけで。

過去の、痛いところを刺されただけで。

実也子は、逃げ出した。

実也子が足を止めたのは、ホテルから二ブロック先、数百メートル走った後だった。

我に返って、財布がホテルの部屋に置きっぱなしだということに気付く。それから上着も着てない。いくら春先だと言っても夜はまだ寒いだろう。

（……………どうしよ）

ホテルに戻るつもりはなかった。

今は知己たち四人には絶対会いたくない。顔も見たくない。

前田先生のところをやめた理由？

（言っても分かんないよ。皆には）

そんな風に腹立たしくらい、実也子は昂ぶっていた。
何故なら。

実也子が前田公昭の下から逃げ出したのは、自分が持つ欠点に耐えられなくなっただからだ。

初めは気にならなかった。

でも一度気になると、自分がみじめな存在だと気付くまで時間はかからなかった。

そして、あの頃どんなに望んでも手に入らなかったものを。彼らは持っているのだ。

「……これは、ヒガミだよ」

目に涙を浮かばせて、実也子は失笑し、呟いた。
皆が意識せずに持っているものを、自分は欲しがっている。未だ、欲しがっている。

前田公昭のところをやめた理由は、自分はそれを持っていないから。

それを何気に尋ねられたからといって、質問の無神経さに頭にきて、ヒステリー起こして、逃げ出してきたなんて。

単なるヒガミでしか、ない。

「……」

実也子は壁に寄っかかり、くすくすと笑った。
少しだけ、泣けた。

*

ばん、と地下駐車場に車のドアがしまる音が響いた。

「はい、おつかれさん」

運転席から降りたのは木田理江という二六歳の女性。背中まで伸びる黒髪に黒いパンツスーツ、派手過ぎないメイクに赤いルージュとマニキュア。この女性の格好良さは、今、助手席から降りた実也子の憧れでもある。

「ありがとう理江さん。わざわざ向かえに来てもらっちゃって、ごめんね」

財布を持って出なかったのも、唯一可能な通信手段　携帯電話で実也子は知人の理江を呼び出したのだ。実也子とは年が離れているが気兼ねなく話ができる友人であり、姉のような存在でもある。

その理江は車の鍵を指に絡ませながら笑った。

「別に構わないよ。私も実也に会いたかったし。でもいいの？　今、忙しいんじゃない？」

「あ、うん、大丈夫。…わあ、理江さんの店に来るのも久しぶり。懐かし」

地下から階段で三階へ上がる途中、実也子は声を上げた。

この建物は理江の所有で、一、二階は木田楽器店の店舗になっている。戦前から開業している老舗で、大物演奏家御用達の店でもあった。三年前、父親から受け継ぎ、今は理江が店長に就任している。店長になる前から理江は店を手伝っていて、知識は全て父親から教わり、結局大学にも行かず稼業を継いだ。理江はヘビースモーカーであるが、店内で吸うことはない。煙草の煙が木製楽器を焼いてしまうからで、その辺りの心意気も父親から受け継いでいた。

三階は理江の住居になっており、実也子は過去何回か泊まりに来たことがある。

「ねー理江さん。明日、ベース弾かせてもらえない？　一日二時間はやらないと腕が鈍っちゃうから」

実也子は両手を合わせて甘えた声を出した。この場合のベースとはコントラバスのことだ。

「いいけど、ホテルに戻らなくていいの？　お仲間にはここに泊まるって言ってるの？」

「うん。それは大丈夫」

につこりと笑う実也子を理江は訝しがったが、特に追求はせず自宅のドアを開けた。

*

理江がシャワーを浴びに消えて、一人部屋に残された実也子は、即座に携帯電話を取り出し上野の某ホテルへ電話をかけていた。

「俊哉、頼みがあるの。ホテルに電話して、長さんに伝えて。私は友達のトコ泊まるって。心配しないでって言って。お願いっ」

理江の「お仲間にはここに泊まるって言ってるの？」という言葉で実也子はある可能性に気が付いた。同時に（やばいつ）と思った。

遅くまで連絡も無く帰らない実也子を、知己たちは探そうとするだろう。彼らは実也子が行きそうな場所は数える程しか知らないのでもしかしたら部屋にある実也子の手帳にも手を付けるかもしれない。それ以前に、心配させない為には連絡を入れておく必要がある。

「……自分で言ったら？」

電話の向こうからは俊哉の怪訝な声。実也子はどうにか説得にかか

かる。

「言えたらあなたに頼まないよー」

『いいけど。…どうせ木田さんの所に居るんだろ？』

バレてるし。察しの良すぎる弟を持つのも大変だ。

実也子は念を押すことを忘れなかった。

「それは言わなくていいからねっ。ていうか、言わないでっ」
ここまで言っておけば大丈夫だろうというくらいしつこく念を押して、実也子は電話を切った。

ふっ、と溜め息をつく。

「実也」

ひっ、と実也子は叫びそうになった。突然の声、それは勿論理江のもので、振り返りその姿を見止めると実也子は飛び上がった。

「わーっ、理江さんっ」

恐らく聞かれた。そして見抜かれてしまった。

理江はいつからかそこに立っていた。バスロープ姿で、髪から水滴を滴らせて。

理江は目を細くさせ、厳しい目つきで実也子を睨んだ。

「実也。ちよつとそこに座りなさい」

あちゃー、と茶化すことも許されなかった。

見抜かれてしまった。

理江の視線の痛さに目を伏せる実也子。

「まさか、ここを逃げ場にしてるわけ？」

「……」

一発必中。理江の言葉は実也子をぶすつと射した。ずきんと胸が痛んだ。

うつむいたまま何も言わない実也子に、理江はさらに言葉が続けた。

「一晩つて言つてたけど、あわよくば数日居座るつもりだ。図々しいね」

シヤカシヤカとタオルで髪をかき混ぜながら、あからさまな皮肉を口にする。

実也子は青い顔でごくんと唾を飲んだ。理江の性格は分かっているつもりだ。

「理江さん……」

「連絡は全部シャットアウトするわけ？ 突然仕事が入ったら？ 連絡取らせないの？ あんたプロだね？ ははっ、サイテー」

理江は実也子の目を真っ直ぐに見据えて、言った。

「言つとくけど、このまま何もしないで逃げるつもりなら、今すぐ出て行つてもらふよ」

「理江さん……、違うの」

「言い訳は聞きたくない」

冷たく言いきる理江。実也子はうつと言葉を詰まらせた。

本当に、違う。今回は前のように自分に付きまとう環境から逃げてきたわけじゃない。

自分の過去の悩みを、仲間たちに話すことができなくて、仲間から逃げてきた。

「理江さん…っ！」

弱い部分を見せることができる、強さ。

過去の確執を埋めるためにそれと向き合っ、強さ。

自分に足りないものは、よくわかつてる。

「まあ、事情説明くらい、させてよおお」

ここで理江に嫌われるのは、すぐく、つらい。

両手を結んでうつむく実也子を目にし、理江は苦笑した。実也子の隣に座り、その頭を抱き寄せた。

「ひどいこと言ってごめん　でも、私が何も言わなかったら、

実也は何も説明してくれなかったでしょ？」

凶星だった。

申し訳ないと思った。

*

実也子もシャワーを浴びさせてもらい借りたパジャマに着替えて、理江の部屋の隅に座り込んでいた。膝を抱えて、流れる音楽に耳を傾ける。

理江は実也子のために布団を敷いてくれた後、自分のベッドに入って雑誌を読んでいた。

室内のCDコンポの横にはさすが楽器屋店長というべきか、数百枚のCDが壁を埋めている。理江の選曲で今夜のBGMは、何故かBlue Roseの前身『B・R・』の最初で最後のアルバム「SONGS」だった。

懐かしい曲の数々を聴いて、実也子は膝に顔を埋めた。

人生最初にハマった音楽はジャズだった。次はクラシック、その世界で食べていくと思ってた。

でも、今は、芸能界でお金を貰っている。

世の中何が起るか分からないものだ。その世の中で、自分が今悩んでいることなど、本当に小さなことなのだろうけど。

デビュー曲の「Blue Rose」が流れた。自分のパートを意識しないで聴けるのは、それなりの時間が経った証拠だ。

「…最近、悩んでいることが二つあるの」

前触れもなく、実也子は呟いた。

「うん？」

実也子が語り出すまで、理江は待っていてくれた。雑誌から目を離して、実也子のほうを向いた。

(……)

自分の気持ちを誰かに話す時の、鼓動が早くなるこの気持ちを何と言っのだろう。緊張、高揚…とも違うような気がする。気持ちは冷えているのに、胸が高鳴っている。喉が閉ざされる感覚、舌がうまく回らなくなる。それを振り切って、

「一つは前田先生のこと。私が芸能界に入ったことは勿論耳にしてるだろうし。良く思うはずないのは分かるの。その一方で、マスコミが私の昔のこと調べて、発表しちゃって、先生に迷惑かけるって考えると、すごく恐いの。いつそうなるかって考えると、夜、眠れなくて…」

小さく、でもしつかりとした声で言った。

「いつかは、バレルよね…」

「うん。そうなったら、ちゃんと、先生に謝りに行く覚悟はあるの。」

「…だけど、…予想はしてたけど、今日、塚原くんが来て」

ぶつ、と理江が吹き出した。

「…塚原って、昔、実也と付き合ってた塚原正志いつ？」

ベッドから飛び起きて叫ぶ。ぐはつと何かに射られたように実也子はその場に伏した。

「理江さん…。そんな昔のことを」

たはは、と苦笑い。

そんな実也子を気にせず、理江はベッドの上であぐらをかくと、腕を組んで堂々と悪口を叩いた。

「前田先生の弟子の中じゃ一番性格悪かったよね」

「そうでもないよ。…彼は音楽に対して誰より厳しかったし、先生を尊敬してたし、技術的なものもすごく懂れたったなあ…」

しみじみ、と語る実也子。これはノロケではないが、それを聴かされたのと同じような気持ちを理江は味わっていた。口の端を歪めて「やってらんないわ」と言いたいような仕種で笑う。

「当時から思ってたけど…実也。あんた塚原の技術に惚れてたんじやない？ 恋心とは別でさ」

「んー。今思い返すと、それも否定できない」

素直でない認め方をした。でもすっきりした笑顔で言った。

何故だか笑いが込み上げてきた。

確かに一時期、塚原正志と付き合っていた。自分にも他人にも厳しい人だったから周囲からは敬遠されがちだったけど、実也子は尊敬にも近い感情を抱いていた。

でも。

実也子は今、ちゃんと恋心を抱いている相手が他にいるのだ。

それは自信を持って言えた。

「で？ 塚原が何だった？」

「皮肉ー…じゃなかったな、あれは。直接的に非難された」

「あ、そう。まあ、そういう奴よね」

「うん。一つ目の悩みは、先生のことがいつバレるかなって、気がじゃないってこと」

そんな風に話をまとめた。

「二つ目は？」

理江がすかさず尋ねる。すると実也子は口を閉ざし、少し考えてから、言いにくそうに呟いた。

「…最近、皆と居るのが…ちょっと辛いかな、って」

その言葉には理江も驚いて目を丸くした。

「皆って、Blue Roseの仲間？」

「そう」

理江が驚いたのは、実也子は今の仲間とは気が合って、うまくやっているように見えているからだ。

それでも、胃が痛くなるまでストレスを感じているのだと、実也

子は言った。

「辛いつて、どうして？」

「あつ。彼らはすごく言い人達だよ、勘違いしないでね」

理江の声が不穩に響いたのか、実也子は必死で付け足した。

「これは、私のほうの問題。…昔は気にならなかったんだけどな。年に一回、会っただけだったからかな」

独り言のように言う。

理江は一般論を口にしてみる。

「…まあ。年一回しか会わなかった仲間と、ずっと一緒にいることになったらストレス感じ始めたつてのは普通じゃない？ お互いの性格が嫌でも見えてくるし」

「違うの」

はつきりと否定する。どうやら実也子は原因を自覚しているようだ。

「多分、…嫉妬」

「嫉妬お？」

理江は声をあげた。わけが分からなかった。

(……)

ところで嫉妬とは、転じて劣等感でもある。

そのコンプレックスは、とっくの昔に吹っ切れたと思っていたのに。

それなのに。

「嫉妬つて……どうしてよ」

実也子は、仲間に対して嫉妬心を持っている。

それが疎ましくて、羨ましくて、心が汚くなる。

激しいまでの嫉妬。耐えられなくなる。

自分の至らなさに、悲しくなる。

「理江さんには、言ったことあったよね。私が、前田先生のところ、やめた理由」

理江はハツとした。

「…やめた理由って、あれですか」

「あれですよ」

くすくすと実也子は笑った。理江は大きな溜め息をついて、ベッドの上で仰向けになった。

「だから嫉妬、か。相変わらずガキだねー、実也」

「おっしやる通りです」

「それに耐えられなくて、飛び出してきたわけ？」

「ううん。直接的にはちよつと違う。ほら、塚原くんが訪ねてきたって言ったでしょ？ そのせいで皆に黙ってた私の昔のこと、色々と掘り返されちゃってさ。しまいには先生のところやめた理由をつこまれて…。それで嘘ついたら見抜かれて、あはは、逆ギレして逃げてきた」

「皆に見抜かれた嘘っていうのは？」

実也子は圭にすっぱりと指摘された嘘を理江に聞かせた。理江は眉をしかめて、

「…そりゃバレるよ」

と呆れた。

「どしてー？」

頭を傾げる実也子。その天然さに理江はさらに溜め息をつく。

実也子は周囲からどんな風に見られているか、あまり意識していないのだ。

そんな見え透いた嘘をつかれたBlue Roseの面々には、惜しみない同情を送ることにする。

「良かった私、本当のこと聞かされてて。それ、信じて言われたら一発殴って縁切るよ」

「理江さあああん」

泣きにかかる実也子には、同情しない。

理江は真顔に戻って、声を改めて、言った。

「もうちよつと分かってあげなよ。心配なんだよ。…無駄に心配かけさせるのは良くないって。毎日、顔を合わせる仲間なんだし、ち

「ちゃんと教えてあげたら？」

どっちの味方なのー、と実也子は反論しようとした。やめた。長さんも祐輔も中野も圭ちゃんも、皆、心配してる。これは自惚れじゃない。

問題を抱えていることを見抜かれてしまうような態度を取ってしまった以上、事情説明しなきゃいけない。

「…うん。そうだね。心配してくれてるの、わかる。忘れたことなんてないよ。本当に。…彼らと会えたことに、感謝してるんだ」

「実也らしいよ」

理江が言う。

「…」

その言葉に反論しようとして、やめた。

言葉がまとまらなかった。

『と、いうのが姉からの伝言です』

夜の九時半。そろそろ実也子を探し始めなきゃいけない、と思っていた矢先。

片桐俊哉から電話がかかってきた。知己はホテルの部屋でその電話を受けた。

内容は実也子からの伝言で、今夜は東京の友人の家に泊まるので

心配するな、と。そんな内容だった。わざわざ弟経由で連絡させたということは、気持ちが落ち着いていない証拠だろう。

『姉の居場所は俺も分かってますので、安心してください。ただ、口止めされているので場所はお教えできませんけど』

「わざわざありがとう。消息が分かっているなら、とりあえずは安心できるよ」

『何かあつたんですか？』

実也子から一方的に伝言を頼まれた俊哉としては、訳が分からな
いのも当然だろう。

知己は適当に言葉を濁して、全く別の質問を返した。今日、実也子がキレることになった、直接的な原因だと、知己は思っている。

『ミヤが前田公昭のところをやめた理由？ さあ、それは俺も聞いたことはないです』

「……そうか」

知己は溜め息をついた。俊哉から聞き出せるかもしれないと、少しの希望を持っていたからだ。

その気まずい雰囲気を感じて、電話の向こうから俊哉の困惑が伝わってきた。それを取り払おうという気遣いが働いたのかもしれない。今度は俊哉が実也子について質問してきた。

『Blue Roseの中で、ミヤってどんな感じですか？ 浮いたりしてません？』

「いや、ものすごく馴染んでるよ。明るくて、ムードメーカーだし、他のメンバーともうまくやってる」

『そうですか』

と、安心したような声を響かせた。

『…意外に思われるかもしれませんが、ミヤって地元で友達少ないんですよ』

「まさか」

『ほんとです。中学、高校と学校には通っていたものの、朝と放課後と夜…ずっと音楽一筋だったから。ずっとそんな生活を続けてた

ら、友達なんてできるはずもないでしょう？ 大学入ってからほら、あの性格だから。周りからは好かれるんだけど、本人はどう対応すればいいのかわからないらしいんです』

それからこんなことがあった。

俊哉が、うちの姉弟はどこか普通とは違うのかも、と思ったのは十五歳のときだ。

実也子は弟子生活を始めて五年目のこと。

朝早く夜遅い実也子の生活は、俊哉の生活と重なることがなかった。が、珍しく早起きした俊哉が居間へ向かう途中、玄関前を通ると、楽器を抱えた姉が出かけるところだった。

「いつてらっしゃい」

寝ぼけも手伝って何気なく声をかけると、姉は振り返り、何故か驚いた。

「え…、俊くん？ うわぁ、大きくなつたねえ」

はたしてこれが同じ家に住む姉弟の会話であろうか。成長期の男としばらく会わなかったら、体つきが変わって見えるのは当然だけど。

今でこそ近所で仲良し姉弟と呼ばれる二人だが、あの六年間は、同じ家に住みながら滅多に顔を合わせたことがなかったのだ。

二人が喧嘩をしたり協力したりするようになったのは、実也子が帰ってきてからのこと。この三年間は、結構上手く付き合ってきたと思っている。

「ミヤ」、「俊くん」というのは小学生の頃の呼び名で、「姉ちゃん」、「俊哉」に直そうと二人で決めたが、二人とも矯正しきれないでいた。それでもまあいいか、と思う。

そんな経緯があつたので、俊哉にとって実也子は姉というよりは女友達という意識のほうが強い。

『長壁さん』

「？」

『姉のこと、お願いしますね。放っておくと何するか分からないし、

危なっかしいから』

身近な者だけが知る彼女の性質をお互い身に染みて分かっている
ので、苦労性を浮かばせる渴いた笑いを、二人はした。

翌朝。

木田理江はいつも通り九時に店を開けた。

片桐実也子はまだ三階で眠っている。最近眠れないと言っていた
が、今日はぐっすりと眠っているようだ。起こすのも気が引けてそ
のまま寝かせてある。

理江は朝の仕事を開始した。

窓を開けて一通り空気を流す。ディスプレイ用の楽器をケースか
ら出して飾り、はたきをかける。ピアノなど鍵盤楽器類は蓋をあけ
る。

それから入荷予定の荷物のチェック。午前中に届く予定の楽器以
外の小物類。メンテナンスの道具や付属品などがそれにあたる。

理江が伝票とにらめっこをしている最中のことだった。

からん、と音をたててドアが開かれる。本日第一号のお客様がい
らっしゃったわけだ。

「いらっしやいませー」

と、常套句を口にしてから顔をあげた。

「……あっ」

理江は大声を上げそうになった。

知っている人物だった。

ドアから入ってきたのは初老の男性。ほとんど白くなった髪の毛を丁寧に撫で付けて、年季を感じさせる顔の皺、茶色のジャケットを羽織っていて、様相にどこことなく品の良さが伝わってくる。

（あらあら）

理江は表情には出さずに苦笑した。

この辺りはさすがプロ、理江はいつも通りの笑顔で客を迎える。

「おはようございます。前田先生」

客の名は前田公昭。二十年以上も前から、この店の常連だった。

木田楽器店店長の挨拶に前田も穏やかに微笑んだ。

「やあ、理江ちゃん。おはよう」

「そのちゃん付けはいい加減やめませんか。私、もう二六ですよ」

「君が生まれたときから知っているから、ついね。いつもの、もらえる？」

「はい」

理江は踵を返し、背後の棚を開け、物を探し始めた。作業の手を休ませないまま、理江は話題を振る。

「確か先生は今日コンサートでしたよね」

「ああ。…理江ちゃんも来るかい？ 招待席のチケットならあるよ」
平然と前田は言うが、そのチケットを売るところに売ればいい値段になるだろう。

「いえ、ありがたいですけど、私は仕事がありますので」

理江は分かっている。店を休んで行くなんて言ったら、この先生は怒るに決まってるのに。

理江は探し出した品物を店名印の紙袋に入れて、ぱちんとホツチキスで止めた。

「はい、先生。千百五十円になります」

「はいはい」

理江のさばさばした物言いは前田も気に入っているのだ。微かに

笑いながら、お金を差し出した。

お釣と領収書を受け取る。領収書の宛名は「前田公昭」。但し書きは「品代」（意外と無難な性格）。

理江は「ありがとうございます」と笑顔に向けた。

が、いつもならすぐに背中を向ける前田が、今日はすぐに帰ろうとしない。

「先生？」と首を傾げた。

次の前田の台詞は、理江の予想もしていない言葉だった。

「君は片桐と仲が良かったよね？」

どきつ、と思いつつも、理江は平静で言い返した。

「どの片桐さんですか？」

商売柄、沢山の人達と出会う。その中には同じ名字の人はけっこう居るものだ。

前田は苦笑した。

「意地悪だな。片桐実也子だよ」

片桐実也子、と。前田は口にした。

「先生の中からその名前が出るなんて。数年ぶりですね」

「最近、連絡取ってたりするの？」

「そりゃあ友達だし、たまにはね。…どうしたんですか？ あの子のこと訊いたりして」

チャンスだ、と理江はほくそ笑んだ。前田公昭の本心は前田公昭に聞くのが一番だと、思い立ったのだ。いっそのこと上にいる実也子と対面させてしまったほうが実也子が悩んでいることもすつきりするかもしれない、と意地悪く思っていた。

どうしたんですか、あの子のこと訊いたりして。という理江の質問に、

「いや、元気でやってるかな、とね」

と、前田は言葉を濁した。

理江は無理が無い程度の話題転換を試みる。

「あの子、芸能界に入ったでしょう？ そのことについて先生自身

はどうお考えなんです？」

理江の質問を、意外にも冷静に前田は受け止めた。

「僕は別に……。そうだな、この世界に戻って来てくれて良かったと思ってる。あのまま消えるには、惜しい子だったよ」

やっぱりな、と理江は思った。

前田公昭が弟子のなかで片桐実也子を可愛がっていたのは、理江も知っている。弟子のなかで唯一の女性、という理由もあっただろうが、それ以前に、音楽に対する誠実さ、ひたむきな努力、向上心など、そういうものが、実也子は誰より長けていたから。

本人は周囲からの期待には無頓着で、反対に、先生に対する尊敬の念や、先輩弟子への憧れなど遠慮無く口にする。そういう性格だったから、弟子仲間ともうまくやっていた。

そんな実也子がやめて前田は残念がっただろうし、その前田が実也子が芸能界に入ったからと言って憤慨するとは、理江は思わなかった。

実也子は塚原の言葉を、イコール前田公昭の言葉と錯覚していたようだけど。

（どうしてああ鈍いかなー）

時として実也子は本当に鈍いところがある。

多分それは、中学や高校での生活を通して培うべきところなのだろう。実也子は学校へは通っていたものの、学校での対人関係は無いに等しい生活を送っていたから。

そんな青年時代を過ごしてきたことに、原因があるのかもしれない。

「実也は……、楽しくやってるみたいですよ。ほんとに」

「そうか」

「……確か、実也を初めてこの店に連れて来てくれたのは前田先生でしたね。実也はまだ十三で、私は高校生だったかな」

「ああ、そうだったな」

理江は思い出し笑いをする。

「明るくて小さくて、飛び跳ねるように元気な子だったから、お弟子さんとは思いませんでしたよ。私、先生のお孫さんかと思いましたもん」

前田もはにかむように笑った。

「娘、とは思ってくれないのかい？」

「あら、失礼しました」

声をたてて二人で笑い合った。

ふと、思い立って理江はもう一つ質問してみる。

「実也が先生のところをやめた理由、先生は知ってらっしゃるんですか？」

「ああ、知ってるよ」

あっけない回答に、理江は驚いた。

「えっ！ 実也が言っただんですか？」

「やめる時に本人から聞いた。：私としては複雑だったね」

と、複雑な表情をして前田は言った。

理江はふーっと息を吐いた。

「先生はどう思います？ ……私は、つまらないことを悩んでるなあって、思っただけですけど」

「僕は立場が違うから、何とも。でもベーストで同じ悩みを持つ人は多いらしいね。勿論、それでも続けている人は沢山いるけど」

「そうですねー」

やめちゃうなんて馬鹿だなあ、と当時から理江は思っている。本人は真剣に悩んでいるから強くは言えなかったが。

「でも、結局はこの世界に戻ってきたわけだから、僕としては嬉しい限りだ」

前田はそう言って微笑んだ。理江も、口の端をもちあげて笑った。時計に目を落とした。

「じゃ、僕はこれで帰るよ」

「あっ！ 先生待って」

引き止める。振り返った前田に、理江は照れ臭そうに言った。

「やっぱり、先生のコンサートチケット、一枚、いただけます?」

前田公昭、六四歳。

十七歳のときにウィーンのN.L音楽大学に留学し、二一歳で卒業。後、六年間オーケストラのコントラバス奏者として活躍。帰国後はフリーの演奏家として、クラシックだけでなく伝統音楽や芸能など数々のセッションをこなす。日本を代表するベーシストとして人気をよんでいる。

そんな解説が、パンフレットに書かれていた。

実也子は理江から貰ったチケットで会場入りしていた。

昼遅くに起きると、理江はチケットを差し出し「私、仕事で行けないから、行ってきた」と渡されたのだ。さらに理江には電車代を借りてここまでやってきた。

周囲をいちいち気にしながら歩を進める実也子の挙動はかなり不審だった。

激しい躊躇いの末、ここに来ていた。

前田公昭のコンサートとなれば、周囲関係者や弟子たちも全員集まるであろうことは容易に想像がつく。その中のほとんどは昔の顔見知りだ。実也子と顔を合わせた時の彼らの反応が、実也子には恐い。

塚原と同じように軽蔑を露にする者、罵る者もいるだろう。本当はそれらと真っ直ぐ向き合わなきゃいけないのに、その度胸が、ない。

それからコンサートに誘ってくれた山田祐輔（後で謝らなきゃい

けない)。彼が来ているかもしれない。

色々な人から逃げようとしているけど、前田公昭の演奏は絶対聴きたい。

この我が儘で矛盾した実也子の気持ちは、とりあえず眼鏡という変装で、どうにか納得させた。

(……ばれませんが……)

と内心で念じながら、実也子はロビーを足早に通り過ぎ、ホールへと入った。

途中、やはり知っている顔が数人。祐輔は見かけなかったが、まだ安心はできない。

できるだけ目立たないように、実也子は座席に腰を下ろす。一息つくことができた。

舞台には緞帳が下りたままで、それには花畑の絵が刺繍されている。会場によって違う緞帳の絵柄をチェックするのは楽しいものだ。その絵の作者のサインを読んだが、実也子の知らない画家だった。

周囲にはチケットと椅子のナンバーを見比べている人がいる。実也子は客電の明るさと、照明器具の位置を確認するのに高い天井を仰いだ。これは癖だった。

(あ。この雰囲気……)

よく知っている、と思った。

もう何年も前。

前田先生の舞台には必ず八人揃って、花を持って、こうして客席から聴いていた。

一番初めは十三歳のとき。

生意気にも黒のワンピースを着て、兄さんたちに連れられて、いつも一番後ろの席に座る。純粋な観客ではないため、前田先生がわざわざ最後列のチケットを取るのだ。

客電が落ちる瞬間のざわめき、イベントが始まることの高揚感、それから、自分たちの先生が唯一光のあたる舞台で素晴らしい演奏を披露している風景、それに聞き入る聴衆。

いつも、実也子は夢中で舞台の上の先生を見ていた。手のひらが真っ赤になるほど拍手をした。

いつかあの場所へ行く、と誓う瞬間。

（いつか、あの場所へ行く…と）

ブザーが鳴って、実也子は現実へと引き戻された。

前田公昭の演奏が始まった。

「……っ」

目の前が曇った。涙が滲んできたのだ。

（泣くなっ）

自分にそう命令する。でも、それに成功したのは数回しかない。涙が溢れて、頬を伝った。

「……」

堪らなくなつて、拳を額に押し付け、実也子は俯いた。

（先生…）

実也子は泣いていた。

この音楽。

前田公昭の演奏に。

ステージの上には楽園がある。

聴く者すべてに感動を。この素晴らしい世界に拍手を。

音楽に涙する、というのは不思議な感覚だ。

こんなにも胸を打つ音楽に、私は出会っていた。

幸せだ、と思った。

それからもう一つの涙。

それは、舞台という楽園へ。

実也子が辿り着けなかった場所。手を伸ばしても届かなかった空間。

挫折。

諦めてしまった、憧れ。

何故こんなにも、未練が残っているのだろう。

逃げ出したのは、自分なのに。

逃げ出したのは、私。

わき目も振らずに努力していた過去の自分に申し訳ないと思う気持ち。

協力してくれていた家族への謝罪。

同じ志を持つ仲間への裏切りにも似た罪悪感。

沢山のことを教えてくれた前田公昭、…合わせる顔がない。

（ごめんなさい。先生…）

過去、何度も口にした言葉。

そして苦い気持ちと共に思い出してしまった感情。

*

*

*

ロビーの人波の中、背後から肩を掴まれた。

「やっぱ、来てた」

聞き慣れた声。実也子は目を見開いた。振り返りざまに叫んだ。

「長さん…っ？」

コンサートも恙無く終わり、ロビーに出たところだった。沢山泣いたおかげでメイクが崩れたので化粧室に向かおうとしたところだった。

行き交う人々の中、長壁知己が背後に立っていた。

実也子は目を疑った。祐輔が来るのは予測していたが、ここにいるのは知己だ。

「どうしてここにいるのっ」

「おまえを探して来いって、祐輔からチケット渡されたんだよ」

知己はそんな言い方をしたが、もしかしたら本当は知己のほうが発案したのかもしれない。それでも祐輔は協力を惜しまないだろうから。

怒鳴られると思って構えていたら、意外にも知己は穏やかな雰囲気だった。

「で。どうなんだ？　ここまで来て、すっきりしたか？」

知己の優しい声を、素直に聞くことができた。

「……ありがとう」

これは答えになってない。でも自然と口から出た言葉だった。胸が暖かった。

皆の気遣いに本当に感謝した。

同時に、自分の身勝手さに嫌悪した。

何日か前に知己に「自分の問題は自分で解決する」などと大見栄を切っておいて、勝手にホテルから飛び出して、連絡もなく外泊して。

結局、何も進展してない。何も解決してない。

すごく、情けなくなった。

「ありがとう、長さん。……でも、あんまり……すっきり、してない。ごめんね」

小さい声で笑う。表情を隠すように前髪をかきあげる。この仕種は実也子の癖だ。

「……謝ることはないけど」

「ね、帰ろっ」

すがり付くように、知己の腕を掴んでひっぱった。駆け立てられるように、実也子は必死な形相だった。知己は突然腕を引かれて驚く。

「おい……」

「早く帰りたい、皆の所に」

知己の腕を引いて走り出す。

「……おいっ、危ない」

「え？」

知己の声に顔を上げるのと同時だった。
どんっ

人波で走り出したら誰かにぶつかるのは当たり前だ。事実、実也子は背中から体当たりした。

「すっ…すみません…」

あ

どくん、と心臓が鳴った。

振り返り反射的に謝ると、そこに居たのはよく知っている人だった。

実也子は目を見開いた。呼吸が止まるのを感じた。

よく知っている人だった。

さっきまで、舞台の住人だった人。

初老の男性がそこには居て、実也子の顔を見ると目を見張った。

でもすぐに表情を和らげて、穏やかに笑った。

笑った。

「…おや、懐かしい顔だな」

「！」

懐かしいその声を間近に聴いて、実也子は動揺した。

本当に久しぶりに、耳にした声だった。

レセプションのためにロビーに出ていたのだろう。数人のスタッフ

が後ろに付いていたが、それを下がらせて実也子へと向き直った。

「元気でやってるか？ 片桐」

「……ま」

声が震えた。

「前田先生…」

前田公昭が目の前で笑っているなんて、実也子は信じられなかった。

昔は少なくとも週に一度は顔を合わせていた人。六年間、師と仰いだ人だ。

この人についていく、と。そう誓ったときもあった。

「あ……」

会いたかった。思っていた。

三年前から。そして四月からも。

「あの」

言葉が出てこない。

前田公昭を前にして、実也子は口をうまく動かさなかった。

耳の先まで熱い。

「片桐に先生なんて呼ばれるのも、久しぶりだな」

これを前田は懐かしさを含めて言ったのだが、実也子は歪曲解釈した。

「……ごめんなさいっ！」

「え。片桐っ？」

実也子はその場から駆け出した。

人波にぶつかりながらも全速力で、どうやら外に向かったようだ。追いかけることはできなかった。

*

取り残されたのは前田と知己。

知己は溜め息をつきつつ、

（いつまで逃げる気だ、あいつ）

と半ば呆れた。

前田は実也子の知人と思しき知己に声をかける。

「僕は片桐に嫌われているのかねえ」

肩を竦めながら、少し淋しそうに笑った。

「それはあり得ません。俺：いえ、僕たちは都内のホテルに泊まっているんです。今日は逃げてしまいましたけど、また、会ってやってくれませんか？ 片桐実也子に」

「もちろん、喜んで。 ああ、すまん。君は？」

そういえば自己紹介もしていなかった。

「申し遅れました。片桐実也子のバンド仲間で、長壁といいます。」

お会いできて光栄です」

知己が握手を求めると、前田は丁寧に握手を返してくれた。それからじつと知己の顔を見て、言った。

「君とは会ったことがあるな」

はつきりと、確信があるように。

知己は正直に驚いた。

「よく覚えてましたね、もう十年近く前のことなのに」

「もちろんだよ。あいつが可愛がってたドラマーだからね。それにしても不思議な縁じゃないか、君と片桐が知り合っていたなんて。やっぱり片桐のほうから声かけたの？」

この台詞で、前田が実也子の性格を熟知していることは知己に伝わった。思わず苦笑してしまう。

「いえ、実也子は俺の昔のことを気付いてないんですよ」

「おやおや。昔、あんなに大騒ぎしていたのに」

前田は声をたてて笑った。

「あなたは、片桐実也子が芸能界に入ったことを批判しているわけじゃないんですね」

「？ あたりまえだよ。誰かがそう言ったのか？」

「……いえ」

「僕は芸能界というところが苦手だね。あまり良い印象は持っていなかったが……親バカというべきかな。愛弟子が活躍しているとなれば、チェックしてしまうね」

ふと思いつて、前田は知己の顔を覗き込み、別の話題を切り出した。

「君は、片桐の恋人なのか？」

「……」

意表を突かれた質問だった。

けれど、これと同じ意味を持つ質問に、知己は一度も明確な回答をしたことがない。否定したいわけではないけれど。

「まあ、答えなくてもいいよ。でも、もしそうだとしたらあの子は

諦めたのか、それとも受け入れたのか：どっちなんだろうな」

「どういう意味です？」

「君は、片桐が自分を嫌った部分って、何だか知ってるか？」

「…？ いえ」

もちろん昔の話だ。

あの頃、実也子は自分を嫌っていた。ただ、一つの部分を。

前田はそれを、「やめる理由」として本人から聞いた。

「女だってそこだよ」

* * *

外に出ると、実也子が階段に座り、佇んでいた。

空は真つ暗で星も見えない。しかし、ホール入り口の階段から正門まで真つ直ぐ伸びる通りには、両脇に街頭があり、道を照らし出している。実也子はその通りを抜けて歩く人々に目を向けていた。

しかし知己の姿を見つけると立ち上がり、手を振って、駆け寄った。

「長さん。…前田先生と、なにか、喋ったの？」

笑おうとして、笑えない。複雑な表情で覗うように言った。

知己は悩みもしないで即答する。

「おまえの悪口」

実也子は顔を歪ませて、

「ちょーさん。それ、シャレにならないよお」

たはは、と苦笑いした。笑うことができた。知己は、ほれ、と手を差し伸べた。

「帰るか」

「……」

実也子は、その手ではなく腕に、がしつとしがみついた。知己は少しよろけたものの、そのまま二人、歩き始める。

こんな風に堂々と、二人で外を歩くななんて最近できなかったのだ。実也子は上機嫌だ。

やっぱり好きだなあ、と思った。

「男の子に生まれたかった」

はつきりと、唐突に言った。知己はしつかりとそれを聞いた。

「って、ずっと、思ってたの。あ、今は別。男の子じゃ長さんと恋愛できないもんね」

「……それで？」

「私は、自分のこと、汚いつて思ってる。いつも無いものねだり、僻み、嫉妬。そんな感情ばかり。ほんと、嫌になる。でも意外と他人からは、そうは思われないの。昔から不思議だったよ」

まるで他人事のように、飄々と語る。とは言っても、他人の性格をそんな風に批判することは、実也子にはないだろうけど。

「弦楽器全般似通っているけど、とくにコントラバスをやる上で、無言のうちに要求される肉体条件ってわかる？」

「……いいや」

「身長と、腕の長さ、それと筋力。あとは左腕が強いこと」

実也子は左手首をコキコキと鳴らしてみせた。それから袖をめくって、肘までを知己に見せた。

知己に言わせれば、細いとしか思えない、白い腕。それをブンブンと振って、

「まあ、腕の長さなんてある程度身長に左右されるもんだし？ 身長は見ての通り。…こんな腕でも昔よりは太くなっただよ？ なっさけないくらい非力なの、私。 すごく煩わしいの。自分の体が思い通りにならないなんて」

実也子は知己に足を止めさせた。

今度は知己の右手を取って、自分の左の手の平と重なる。じつとそれを見やってから、低い声を出した。

「私、右利きなんだけど、左手のほうがちょっと大きいの」
「知ってる」

ベーシストの左手は、楽器の特質上、鍛えられることが多い。ギターに比べれば弦は少ないものの、倍以上に太い弦を左手の指一本で押さえなければならぬのだ。指一本の力強さが要される。先に実也子が言った「左腕が強いこと」というのは、こういうことである。

「それでも、私の手より長さんの手のほうがずっと大きいよね」
「当たり前だろ」

「どうして？」

「……」

「そう。長さんは男で、私は女だからよ」
続ける。

「弟子のなかで、女は私一人だったの。違うなんて思わなかった。同じだけの可能性があるんだと思ってた。でも…、体格や腕の力、その差に気付いたときはすごく悲しかった。自分の無力さが非力さが、悔しくて悔しくて、周りの人が成長していくのが疎ましくて、…結局、逃げ出したの」

迷いのない喋り方だった。

「もちろん、弦バス演奏者のなかには女性も数多くいるし、身長が一四五cmのプロだっている。でも私はあの中に…先生の下に居るのが耐えられなかった。自分が墮落していくのを感じるのは恐かったし、周囲を妬むことで自己嫌悪する自分が嫌だったから。…それが」

知己の目をしっかりと見て、目を逸らさずに言う。

「それが、前田先生のところをやめた理由なの。嘘ついて、ごめんなさい」

皆に嘘ついたことを、実也子は気にしていた。

今、知己に告白したことは全て本当だが、知己にだけ言ってもし

ようがないのだ。ホテルへ帰ったら、また同じ説明を繰り返すことになるだろう。それでも、聞いてもらえて、良かった。

口にするのも我慢できなかった数日前に比べて、今は心穏やかに知己に言うことができた。

そう考えると、今日、前田公昭の演奏を聴いて、本人に出会えたこと。無駄ではなかったのかもしれない。ちゃんと、一歩進めることからになったのかもしれない。

知己は微笑んで、実也子の肩を抱き寄せた。

「前田公昭からも、逃げてちゃしょうがないよな」

「さつきは突然だったから驚いただけだもん」

拗ねるように頬を脹らませる。次に、しっかりと前を向いて、実也子は言った。

「ちゃんと、会いに行くよ」

今は早く帰って、仲間たちの顔が見たいと、思っていた。

まず謝って、本当のことを話して、それからありがとって言うんだ。

二人は並んで、最寄りの駅まで歩き始めた。

翌日。実也子は前田公昭と、二週間後に会う約束を取りつけた。

三年前。高校を卒業して、実也子は東京で暮らし始めていた。

五月。「もう、音楽なんかやめる」と言って、前田公昭の前から消えた。

勝手にやめて帰ってきた娘に、家族は何も言わないで暖かく迎えてくれた。稼業の手伝いや家族とのコミュニケーション、新しい幸せを見つける。

七月。知人の木田理江に事後報告するために東京へ行った。その時、Kanonの曲を耳にした。

『B・R・』、そして「Blue Rose」は思いの外、居心地が良くて。

勝手なことばかりやってきた自分に、色々なものが、沢山の人が、優しかった。

感謝を忘れちゃいけない、と。常に思い続けている。

ありがとう、って。言い続けたい。
ずっと。

知己

『トモつ。命令。今すぐ出てこい。いつもの店。以上』

電話のベルで起こされた。手に取った受話器からの第一声がそれだ。そしてそれだけで通話は終わり、代わりに発信音が空しく響いていた。

それが、その日、一番に耳にした人の声だった。

そんな電話に叩き起こされて、さらには呼び出され、指定された（？）喫茶店に入れたのは電話があつてから三十分後だった。元々、仲間が集まる店はアパートのすぐ近くのものだ。

「おーっす、トモ。ここだ」

店の奥で、小柄の中年男が手を振る。

「ヤス」

命令通りすぐに出てきたのだから誉めてもらいたい。折角の休みを返上して招集に応じたのだから。（とは言つても、予定は何もなかった）

「お前、休みだからって寝てばっかいるんじゃないよ。いい年してツルむ女もいねーのか」

到着するなり、そんなことを言われた。余計なお世話だと返したところだが、その台詞はそのまま事実なので否定できない。それから「いい年して」と言われてもまだ二十六だ。五十五のオヤジにしかも恋人とは結婚もせず同棲生活を楽しんでいる甲斐性無しに言われたくはない。ひがみではない、と付け加えておく。

これだけ悪態付いても、実のところヤスのことを尊敬しているのだ。これでも。

「…それ、言うためにわざわざ呼び出したのか？」

半ばウンザリしながら、冷めた視線を送る。喜ばしいことに、ヤ

スはそれを否定してくれた。

「まさか。いちおう、紹介しとこうと思ってな。まだ会ったことなかっただろ。こいつと」

「は？」

（誰と？）

たった今気付いたが、その親指が指す先には、テーブルに同席している人物が、もう一人居た。

「こんにちは」

低い声の挨拶。男性。年齢は多分ヤスと同年代で、五十歳前後といたところ。しかしベストに背広姿という、どこか品の良さを感じさせる雰囲気は似ても似つかない。

その、年齢以外共通点の無さそうな二人は顔を見合わせて笑った。「はじめまして。前田公昭です」

普通、年下のほうから名乗るものだが、その男性は軽く頭を下げた。様式などには拘らない人間らしい。

それより。

（前田…？）

「えっ！」

心の中で名前を復唱するのと叫んだのはほぼ同時だった。

前田公昭。その名前はよく聞かされていた。

「ヤスっ！ 前田、って」

「そー。俺の悪友う」

「いや、そうじゃなくて！」

「そうじゃなくて…って、なんだ。失礼なヤツだな。俺の同窓で、ついでにクラシック・ベーシストの前田クンだよ」

もちろん知っている。

と、言ってもクラシック界のことに明るいわけじゃない。

自分の仕事仲間で、恐らく世界でも指折りののベーシストだと尊敬しているヤス。その彼が「尊敬するベーシスト」として公言しているのが、この前田公昭なのだ。

一度会ってみたいと思っていた。

「トモつ。感激してないで自己紹介」

「あ…っ、えと、はじめまして。長壁知己といいます」

電話に起こされた。

『長さんっ！ どうしたの、今日は八時集合で事務所行くんでしょ？ もう過ぎてるよ』

この声は片桐実也子だ。その名前はすぐに頭に浮かんた。知己が一瞬迷ったのは、現在がいつかということだった。

今は今。Blue Roseの中に自分が居る、今だ。

枕元のデジタル時計に目をやると、なるほど八時五分。知己はそれを見止めても、何が起こっているのか、次にどうすべきか頭が回らなかった。とりあえず自分がホテルの部屋のベッドの中にいることは分かる。

『長さん？ 起きてる？』

「ああ。…今、起きた」

実也子の高い声は眠気が覚めきつてない頭にもよく響いて、意識がはつきりしてくるのを感じた。

「他の奴らは？」

集合時間に遅れても慌てることはしない。思考すべきは自分が遅れたことで派生する不具合、その修正。仲間への謝罪は遅すぎたはいけないが、対策より早い必要はない。

感情的に頭を下げることは、もうない。そんな年齢に、自分はなっていた。

『皆、ロビーにいるよ。希玖とかのんちゃんは直接事務所へ向かう

って。どうする?」

知己はかりかりと頭をかくと、

「先、行つてくれ。二十分差……くらいには着きたい」

語尾は苦笑混じりに言つた。実也子はすぐに返事を返してきた。

『わかつた!。そう伝えておくね』

「は?」

おまえもだよ、実也子。寝ぼけていたせいもあり、知己はそのようにつつこむのが遅れた。

ただ、知己がそれを口にする前に、実也子は電話を切つた。

「……」

嘆息して、ベッドから起き上がり、大急ぎで支度を開始する。

スリッパを履いて、洗面台の前に立つ。鏡に映るのは、三十を過ぎた見慣れた自分の顔。少しだけ違和感を感じたが、その理由はすぐに分かつた。

昔の、夢を見ていたせいだ。

洗顔を終わらせタオルを引っかけて戻ると、ほとんど無意識でテーブルの上の腕時計を左手首にまいた。

ふと、目に付いたのは、腕時計のカレンダー。

五月三十日。

「……………」

急がなければならないのに、知己はその数字にしばらく見入ってしまった。

(……命日か)

そんな風に、思った。

*

先に行つてると言つたのに、実也子はロビーで待っていた。知己がエレベーターから降りてくると、目ざとく見つけて駆け寄ってきた。

「おはよー、長さん。寝坊なんて珍しいね」

いつもの明るい笑顔で手を振る。それに応えながら、

「おはよう。遅れて悪い、祐輔たちは？」

「とつくに向かったよー。私たちも早く行こ、タクシー呼んであるから」

二人は、そのままエントランスまで走った。

今日はnoa音楽企画の事務所へ集まり、新企画の打ち合わせが行われるのだ。昨日、知己自身が全員にスケジュールを伝えておいて、知己が遅刻していれば世話ない。

本当に、こんなことは珍しいのだ。知己には。

まるで詰め込むように二人はタクシーに乗りこんで、運転手に行き先を告げた。

「そつえば長さん。前田先生が、長壁くんによろしくって言うてたよ？」

実也子の話題提議は唐突だったが、知己にはすぐに伝わった。

五日前のこと。実也子は「前田先生とデートだよーん」と言ってお機嫌で朝早く出かけて行った。前田公昭は実也子の師匠で、長い間、確執があり疎遠になっていた関係を解くことができたのだという。

そしてさらに半月前、前田のコンサートの会場でのこと。実也子は逃げたが、知己は前田と話す機会があった。その時のこともあり、前田は「よろしく」と伝えたのだろう。

「やつぱ、あの時、何か喋ってたんだ」

何喋ってたのよー、と追求する実也子に、知己はしれっと答えた。

「だから言っただろ。おまえの悪口だって」

「長さんっ！」

（そつえば　　）

隣でむくれている実也子をどうにか宥めて、知己は思い返した。

今日の夢。あれは九年前。前田公昭と初めて会ったときのことだ。半月前、前田のコンサートで再会するまで、会ったのはあの時――

度きりだったのに、前田もよく覚えていたな、と思う。

（確か…、あの時、弟子の話もしてたよーな）

そんなことを思い返したが、どんな話をしたのか、詳細はもう忘れてしまった。

九年も前のことだから。

ヤスと、前田公昭。そして知己の三人でテーブルを囲んで、世間話をする中、前田はこんなことを言った。

「僕のところ、新しい子が入ってね」

知己はその台詞の意味が分からなかった。新しい子？　なんだ、それ。

その疑問は次のヤスの言葉で分かることができた。

「おまえ、もう弟子は増やさん、とか言ってなかったっけ？」

前田はクラシック・ベーシストとして日本の音楽界の将来についても考えていて、音楽家の育成も手掛けているのだった。つまり、弟子をとっているのだ。

ヤスが言うにはすでに七人いるらしい。

「ものすごい勢いで押し掛け志願してきたから、つい、ね。それに、可愛いんだ」

八人目の弟子について、前田はくすくすと笑いながら言った。

それを聞いたヤスは呆れた。

「いくら小さくても男に可愛いなんてなあ…」

「女の子なんだよ」

「へーえ」

そりゃ珍しい、と興味を持ったようだった。

「おまえの大ファンらしい」

「そりゃ光荣」

「一応、試験みたいなこともしたんだけど、見かけの割に根性ある子だね」

「女の子ねえ。見込みあるのか？」

厳しいプロの目になって、ヤスは言った。

その視線を受けて、しっかりと受け止めて、前田は堂々ときっぱり言い切った。

「なければ入れない」

「ごもつとも」

ヤスは表情を和らげて肩を竦めた。

畑違いではあるが、お互い、同じ実を持って第一線で活躍しているプロだ。甘えもしないし、生温いこともしない。

二人の会話を、知己は黙って聞いていた。

no a 音楽企画のビルに着き二人が受付へ飛び込むと、名乗らなくても通してもらえた。

このプロダクションに属する芸能人は数十人いるのに、新入りにも関わらず顔パスが通用する立場になってしまったということだろう。

「おはようございます」

知己と実也子が指定された部屋へ飛び込むと、当然だが他のメンバーはすでに揃っていて、二人を待っていてくれた。

小林圭、中野浩太、山田祐輔。それから叶みゆき、安納希玖。知己と実也子を含む合計七人が、Blue Roseの主要メンバーである。

「おはよう。実也さん、長さん」

明るい声で手を振ったのは希玖だ。

「あれーっ、希玖。久しぶりーっ」

半入院生活をしているため、希玖が事務所に現われることは稀だ。実也子のはしゃぐのも無理はない。

「遅れて悪い、待たせたな」

「いえいえ。別の話題で盛り上がっていたので、待たされたという意識はありません」

「別の話題？」

知己は祐輔の言葉に首を傾げた。祐輔が答えるより先に、みゆきがか心配そうに話し掛けてきた。

「ホテル出るときにマスコミの人達、いませんでした？」

「急いでいたから、よくわからなかったけど？」

「かのんさん、今回のことは慌てる必要はないですよ」

祐輔は楽しそうに笑う。何の事だ？ という知己の表情を読んで、祐輔は部屋の奥にいる浩太と圭を指差した。

「ミヤっ、面白い記事載ってるぞ」

「え？ なになに？」

浩太たちは一つの雑誌を皆で覗き込んでいて、どうやらその雑誌の記事が話題になっていいるらしかった。実也子が駆け寄ると、まず一つ目の雑誌を広げて見せた。

それは今日発売の芸能週刊誌。その、三五頁（つまり、あまり大きく取り上げられているわけではない）。

実也子はその見出しに顔を歪ませた。

背後に知己が駆け寄る。知己が記事に目をやるより先に、

「なにこれーっ！」

実也子が叫んだ。

>>Blue Rose 片桐実也子は前田公昭の弟子だった！<< そんな見出しで、記事は始まっていた。

今話題のロックバンドBlue Rose、ベース担当の片桐実也子は、過去、クラシック界の大御所ベーシスト前田公昭の弟子の

一人であつたということ。Blue Roseの概要、前田公昭の概要。

なんと写真付き。レストランで前田公昭と実也子が談笑しているところがキャッチされていた。実也子が言うには、先日会ったときのものだという。タイミングが良すぎはしないか？

「思つてたより早かつたな」

勿論、呑気にこんなことを言つたのは、実也子の前田との確執がすでに解けているのを知っているからだ。

案の定、実也子はこんなことを言つた。

「わー、この写真、よく撮れてると思わない？ 前田先生も私もカッコ良く撮れてるよー。あ、先生は元からカッコ良いけど。カラーじゃないのが残念……」

はー、と溜め息をつく。後ろからさらに覗き込んだのは祐輔だ。

「これは芸能誌ですけど、来週には音楽誌……とくにクラシック系がこのニュースで持ち切りになりますよ」

「多分、マスコミが実也子さんのところへも来ますね」

心配そうに言うみゆきの台詞に意見する言葉を發したのは希玖だった。

「あー、でもね、実也さん」

「ん？」

「前田さんからお父さんに連絡あつたらしいよ。“ニュースになりますか”って」

は？ と全員が希玖のほうへ振りかえつた。

希玖の言う「お父さん」というのは安納鼎 Blue Roseが所属する事務所の社長である。

「この記事を仕組んだのって、前田さんなんじゃない？」

「えーっ」

平然として言う希玖。実也子は叫んだ。

「なんだ。じゃあ社長は記事になること知つてたわけか」

「でも、先生が直々にバラすなんて、何のメリットがあるのー？」

「…メリットはないけど、きつかけならあったのかも、な」
後ろで圭が呟いて、浩太が頷いた。

「これ。同じく今日発売の「CLASSICO」」

浩太が二冊目の雑誌を差し出した。「CLASSICO」は古典派に重点を置く音楽雑誌である。実也子は定期購読者だが、今号はまだ手にしていないらしい。

「あ。今月号って前田先生の特集だよな。買わなきゃ」

「そう。そのインタビューのここ、読んでみるよ」

「ん？ …えーと」

最近気になる演奏者は？

前田：「（笑いながら）Blue Roseの片桐実也子、かな」と、あった。

実也子の表情が自然と緩んだ。

「これは…、兄さんたち怒るなあ」

と言いながらも、口元がほころんでいる。

想像だが雑誌の特質上、前田のインタビュー（音楽誌）のほうが実也子とのキャッチ（芸能誌）より早いだろう。インタビューに素直に答えてしまってから、どうせなら暴露してしまおうと前田が手を回したのか。それとも、もともと芸能週刊誌を利用するつもりでインタビューに答えたのか。

どちらにしても前田が裏で動いていたのは、安納への電話の件からも明らかだ。

「どーせ社長は、いい宣伝だとも思ってるんだろ？」

安納が素直にこの記事を出させたことに、浩太が穿ったことを言った。

「あはは、僕もそー思うよ」

とは安納社長の息子・希玖の言。

実也子は暴れてはいないものの精神的にはしゃいでいるの是一目瞭然。いつかはバレル、とハラハラしていたものが解消されたのだ。しかもそれが前田の仕業と分かった。嬉しいのかもしれない。

「あと実也子さん、訊きたいんですけど…ここ」

「え？」

祐輔がインタビュー記事の続きを指差した。

尊敬する音楽家は？

前田：「元RIZ、加賀見康男」

「これって、実也さんが言ってた人ですよ？」

「あれ？ 確か、加賀見って人が尊敬する人が前田公昭じゃなかったっけ？ だから前田公昭に弟子入りしたって、ミヤが…」

祐輔と圭が疑問の声をあげる。

「…」

実也子はというと、そのインタビュー記事を読んで、真顔に戻り微笑んだ。

実也子が前田公昭に弟子入りしたのは、圭が言う通り前田は加賀見の尊敬する人物だったからだ。そしてこの記事を読むと、ちょうど逆で加賀見は前田の尊敬する人物でもある。

「…うん。元々、加賀見さんと前田先生って同窓生だったらしいの。お互いがお互いを尊敬してるって公言するのは、昔からの悪友同士の約束事だって、前田先生言ってた」

「じゃあ実也子さん、この加賀見康男という人に会える機会もあったんじゃないですか？」

その質問に、実也子は苦笑いした。

「あー…うん。昔、加賀見さんを紹介してくださるってゆー話もあったんだけど、…丁度その頃、加賀見さんが亡くなられて…。前田先生の前じゃ、RIZのことも言えなくなっちゃったんだ」

「男三人で、なーにやってんのよお」

喫茶店での大物ベースリスト二人（と、知己）の会談中、割り込んだ声があった。

ブリーチした金髪、足首までのワンピースを着た年配の女性が立っていた。よく知っている人物だった。

「ほら、お姫様がいらっしゃった」

ヤスは肩を竦めて笑う。前田は軽く手を振った。

「久しぶり、リス」

「お久しぶりね、前田くん。いつつも康男の我が儘に付き合ってもらっちゃって悪いわね」

知己の隣に腰を下ろし、眉をへの字にした笑顔を見せた。

彼女の名前はリスという。仕事仲間である知己さえ、彼女の名字も本名も知らなかった。年齢はヤスと同じ。

リスは知己に視線をやって言った。

「知己も呼び出されたの？」

「ああ」

「康男、今日は久々のオフじゃない。休日を潰させちゃ可哀相よ」

「いーんだよ。こいつ、休みって言っても趣味がなけりゃあ女もないし。出かけるとしても、どーせ楽器屋でも覗き行こうとしてたんだろお？」

これも、実は図星だが肯定はしないでおく。

リスがくすくすと声をたてて笑った。

「そんなこと言っているのかしら？ 恭二が？ 地元で腕のいいドラマー見つけた？ って連絡よこしてきた時、すぐに新潟へ向かって、知己を口説き落としてきたのは康男じゃない」

「そつだよ、ヤス」

「おまえが言うな」

「痛っ」

デコピンを食らわされた。

リスと前田は顔を見合わせて笑っていた。

五年前。

すでにプロとして活躍していたヤスとリズは（その頃から二人は付き合っていた）、新たなバンドを結成する為にメンバーを集めていた。後に石川恭二らベテランプレイヤーを仲間に入れ、そしてただ一人、全くのアマチュアである知己を参加させた。

ヤス自ら知己の前に現われた。知己は一週間ほど悩んでそれを承諾し、当時三年目だった大学をやめた。担当教師に理由を問われ、知己はただ一言、「就職します」と答えた。

前田公昭がクラシック・ベーシストとして活躍している一方、ヤス 加賀見康男は、ジャズ・ベーシスト。都内のライブハウスやクラブを点々としているジャズバンド「RIZ」のリーダー。

「RIZ」。ウッドベースの加賀見康男を筆頭に、ソプラノボーカーのリズ、ジャズピアノの石川恭二、サクスの小松省吾、パーカッション兼ヴァイオリン兼コーラスの高橋次郎、ドラムの長壁知己、以上六名で構成されている。

東京のレコード会社から数枚CDを発表したものの、例に漏れずブルーノートに立つことを目指していた。（ブルーノートとはアメリカの名門レーベル。世界中のジャズプレイヤーの注目）

でも、その夢も潰えた。

noa音楽事務所では社長が禁煙家のせい、嫌煙権を主張する厳しいルールがいくつかある。

まず、決められた場所以外での喫煙は禁止。社長室や事務員が働くオフィス、会議室はすべて禁煙。来客を迎えるロビーでは、喫煙

スペースがしつかり決められている。

各階の片隅にある自販機など置いてある休憩室は、数少ない喫煙できる部屋の一つだった。そのため部屋の中は煙草の匂いが染み付いてしまっている。

ところでBlue Roseのなかで喫煙家は知己と祐輔だけだ。（他、実也子以外は未成年なのだから法律的には当然といえる）新企画打ち合わせの休憩時間、知己は煙草を吸いに休憩室に来ていた。他には誰もいない。前から思っていたがこの階は活動する人口密度が特に低いようだ。

一人で煙草の匂いがする部屋にいるのは反って落ち着く。

「……」

ぷはーと煙を吐いた。

知己は今朝見た夢を思い出していた。

（ヤス、…か）

加賀見康男は死んだ。

もう十年近く経つのだから当時ほどではないものの、込み上げてくる感慨は、やはりある。

リズはまだライブハウスで歌っているという。キョウさんは色々なアーティストのセッションに参加しているらしい。次郎さんは他のジャズバンドで活躍していて、省吾は何かという歌手のプロデューサーをしていると聞いた。

恭二には一度再会したものの、他のメンバーとは解散以後会っていない。会いたくない理由はないが、会えば嫌でもヤスのことを思い出すし、ヤスの話題が出ることは明らかだ。

軽く口に行けるほど、知己の中ではまだ時間が経っていない。

「長さん」

実也子が顔を覗かせた。

「おう、どうした」

実也子は煙草を吸わない。でもその匂いが嫌いなわけではないらしい。

仲間内で、圭は自分の喉のために喫煙所には近寄らないし、浩太は根っからの嫌煙家だ。この部屋に近寄ることはない。

実也子はすぐ近くに駆け寄って、知己と同じように壁に背をかけた。

「えへへ、隣に立ちたかっただけ」

「何だそりゃ」

たはは、と知己は苦笑する。

啜えていた煙草を灰皿に揉み消して、もう一本、火を点けた。煙を吐くときに実也子のほうへ向けないことは注意した。

実也子は本当に隣に立っているだけで、何も喋ろうとしなかった。隣に、立っているだけだった。

知己も何も言わなかった。

煙が漂う中、ゆっくりと時が過ぎた。

それは息苦しい沈黙ではなく、自然で落ち着いた時間。

煙草が短くなるまでの五分間。

(……?)

何故だろう。その間、知己は今朝の夢の淵に、深く沈まずに済んだ。

実也子が、そこにいるだけで。

そのことに気付いて、知己はそっと実也子の横顔を見た。実也子はまっすぐ前を見て、ただそこに佇んでいた。

知己自身、自分の心情を態度に出すようなことはしてない。そういうことは既に身についているからだ。

けれどももしかしたら彼女は彼女なりに何か勘付いて、気を遣ってくれているのかもしれない。

そう考えると胸が熱くなった。

これだけのことで、と自分に向けて非難めいたことを言う。でも、今朝の夢は知己の想像以上に知己を陥らせる影響力があったようだ。沈みかけていた気持ち、実也子の存在に少し軽くなった。

実也子から顔を背けて煙を吐く。もう一本取り出そうとしたところ

ろで、実也子はガシツとその手を掴んだ。

「吸いすぎ」

それだけ口にして、知己を睨み付ける。

「……」

その表情が何だか可愛くて、知己は笑ってしまった。

「長さん？ 何笑ってんの？ 私、怒ってるんだけど」

実也子は知っているだろうか。知己が常用している煙草は、加賀見康男が愛用していたものと同じ銘柄だということ。

「……長さん？」

「……」

知己は笑いをしまいこんで正面から、壁に背をかけている実也子の肩に手を置いた。

折れそうな細い肩。それを声に出して指摘すると、実也子は枕を投げつけてきて、必ず怒る。その理由はついこの間分かった。「男の子に生まれたかった」と、彼女は言った。自分の非力さが嫌だとしても。実也子が男だったら嫌だなー、と知己は苦笑する。

「え……？」

知己は上体を屈ませて、実也子の唇に、顔を近づけた。
がちやり。

ドアが開いた。

「……っ！」

未遂のまま顔を離して、知己は実也子の後ろの壁に腕をついた。
鼓動が早くなっていた。

ドアが開かれたということは、誰が入ってきたということだ。

「……お取り込み中でしたか」

冷静に響いた声は、知っているものだった。

「祐輔……」

安心して良いやら悪いやら。知己は極度の疲労感を覚えた。でも、一番騒がれなくて済む人物ではある。

懐にいる実也子が一歩前に出た。

「祐輔のばかりっ、せつかくいいところだったのにいっ」

と、拳を握り締め、恥ずかしさではなく不満を露にする。

「あのな……」

と、知己が言ったのは祐輔の乱入ではなく、実也子の反応にだ。

祐輔は思わず吹き出してしまつて、くすくす笑いながら謝罪を口にした。

「それは失礼しました」

「祐輔も、煙草？」

照れ隠しも手伝つて知己は違う話題を口にした。

「いえ、言伝です。お客様ですよ、お二人に」

「今、何やってんだ？ おまえの腕は正直惜しかったから、こつちで続けて欲しかったんだがな」

四年ぶりに会った石川恭二はそんなことを言った。PRE・DAWNという店でのことだった。

「地元で適当にやってる。もうblank四年だ。腕だつて腐ったよ」とにかく！　ウチの業界に入るならアイサツに來い。でないときめるぞ」

「……お手柔らかに」

知己には全くその気は無い。それでも穏便に交わそうと曖昧な答えを返した。

RIZの解散後、知己は地元へ引き込み稼業の手伝いを始めた。母親は「出て行け」と常にこぼしていたが、満更不快に思っているわけではなさそうなので、図々しく居座っている。

それから地元にも沢山のバンドがあつて、ドラムというポジションの助っ人は事欠くことがない。数多くのバンドの助っ人をしてきて、依頼も増えて、音楽という世界から離れることはなかった。

偏った知識があること、手先が器用なこともあつて、ご近所の便利屋的なこともしていた。家電製品のちよつとした故障や子供の玩具は直せだし、力仕事で借り出されたこともある。

職に就かなくても、一人で食べて行ける程度のことはできた。

たまに、本気で笑いたくなる。

我ながら、かなり要領良くここまで生きてきた事に。

一人っ子でありながら、しっかりした面倒見のよい性格に育ったのには反面的な原因があつて、それは単身赴任の多い父親。母の、女手一つでも一人前に育てる、という江戸っ子根性が働いたせいだ。自分自身、親に迷惑かけないようにという注意がいつも働いていた。

かといって、そんな生活を煩わしく思ったり、ストレスを感じたりすることもない。

生まれながらの小器用さで、運動や勉強もそれなりの成績を収めだし、人付き合いも良く、何が起つても結構簡単に解決してきた。中学、高校時代は大したつまづきもなく過ごしてきた。

そして気が付けば幼いころからの夢を、二十代前半で叶えてしまっていた。その後七年間、その夢を満喫して、やめた。その後は今に至る。

早くに夢を叶えてしまったら、その後は何をして生きろというのだろう。

RIZの七年目。

ほとんど過ごしてきた人生の中で、初めて絶望を感じたときだった。

リーダーの加賀見康男が死んだ。

事故だった。

電話の音は苦手だ。

最悪なことが、告げられそうな気がして。

バンドとして正式に解散を発表した後、長壁知己は地元の新潟へ帰ると言い出した。

他のメンバーには止められたけれど、ここにすることはできなかった。

声にしては中々言えなかったけど。

父親のように慕っていたんだ。

傲慢な態度も、ガサツで強引で勝手にワンマンなところも、愛すべき人間だった。

人を失うことがこんなにも辛いということ。

初めて、知った。

「私、片桐実也子」

目の前の、コントラバスを抱えた女の子は元気良く名乗った。

石川恭二とPRE・DAWNで再会してから、数日後。noa音楽企画の事務所でのことだった。

PRE・DAWNで耳にした曲を追っていたら、こんな所まで来てしまった。noa音楽企画は元プロの知己にとって馴染みは薄い。が名前は知っている。J・POP系のアーティストを数多く抱える

業界大手の一つだ。

二人して指定された会議室へ入ると、まだ誰も来ていなかった。片桐実也子に特に目を惹かれたのには理由がある。彼女がコントラバスを持っていたからだ。それは加賀見康男と同じ楽器だった。一五五ｃｍ強の彼女の背丈で、一八〇ｃｍ以上ある楽器を扱うのはかなり骨だろう。知己は何故その楽器を始めたのか尋ねた。実也子はぱつと表情を輝かせた。自分のことを語るのを嬉しく感じる質らしい。

「昔、ＲＩＺってジャズバンドがいてね、ベースの人に憧れて始めたんだ」

嬉々として彼女は言う。知己は凍り付いた。

「へえ」

平然と、相手に何も察せさせずに、相打ちすることはできる。それはすでに年の功と言ってもいい。

「ＲＩＺ、…ね」

そう呟いたとき、一種の感動を覚えた。四年ぶりに口にした言葉だった。

「そのウッドベースのね、加賀見さんっていう人のファンだったの、私」

そこで知己は思案を巡らせた。

（わざと言ってるのだろうか）

ＲＩＺをよく知っているらしいが、知己のことを知らない？

自惚れているわけではないが、自分がＲＩＺの一員だったことは事実だ。

さらに実也子は知己の顔を覗きこんで言った。

「長さんは？ 何やってた人なの？」

「…っ」

その直後。

知己は大笑いした。実也子は本当に気付いてないのだ。何故だか、笑いたくなつた。気持ちが晴れていた。

「え、なに？ なにっ？ 長さんっ？」

実也子は知己が笑い出した理由が分からずに困惑している。知己はそれを抑えながら、どうにか言った。

「いや…、何でもない」

後から分かったことだが片桐実也子は思い始めると一直線で、つまり、…加賀見康男しか見えてなかったのだらう。…きっと。

その気質に惹かれたかもしれない。それに実也子に自覚は無いが、同じ人間を知っているという親近感もあった。

自分がR I Zにいたことを、何となく口にできなかったのは、この後数年にも及んだ。まあ、それもいいさ、と思う。

その時、扉が開いた。

ガチャリ

「…失礼」

入室してきたのは背の高い青年と男子中学生だった。失礼、と言ったのは実也子と知己が仲良く喋っているところを邪魔したと思ったからだらう。

「二人だけ？ もう、時間だよな？」

そんな風に尋ねてきたのは青年のほうではなく中学生のほうだった。変声期前なのか、高くよく通る声だった。

「やっぱり皆、P R E - D A W Nでひっかけられたの？」

実也子が言った。

「そうですね。でもそう考えると、ここに集まるのはごく少数のようですね」

「集まるって言っても、単に例の曲が誰のものか教えてもらうだけだろ？」

どうやら同じ目的で、この四人は集まったようだ。時間は丁度、十時になったところだった。

ガチャリ

もう一度、扉が開いた。

「あー？ …何だ、これだけ？」

今思い返すと最後の一人が現われたことになる。

片桐実也子、山田祐輔、小林圭、中野浩太。

RIZが解散して四年目。

彼らが、新しい仲間となった。

片桐実也子と付き合い始めたのは『B・R・』の一年目。

誘ってきたのは彼女のほう。はじめは年齢差による抵抗感も手伝って断わったものの、まあ、いろいろあつて、今に至っている。

でも何か約束したとか、付き合いおうと言ったなどということはない。何故なら、『B・R・』をやっていた当時、会うのは一年に一回。お互いの連絡先を教え合つてはいけないという規定があつたので、夏以外に会うことがなかったからだ。

実也子も、特に知己を縛るような発言はしなかった。ただ、夏に会う度に、繰り返される会話がある。

「長さん、結婚する予定とかないの？」

「おまえ、それ、毎年訊くな。訊いてどーする？」

「そりゃ、もちろん相手に挨拶に行かなきゃー。元愛人として嫌味の一つくらい言わないと醍醐味がないでしょ？ ほら、火サスみに」

でも長さんと結婚する人が現われなかったら私と結婚してね。これは予約。

面白そうに笑いながら言った。実也子はその一種駆け引きを楽しんでいる節がある。

「長さんは男の人だから、年一しか会わない私が浮気しないでねなんて言えないよね。でも私は長さんのこと好きだし、好かれないと思う。つまらないことで喧嘩もしたいし、心の中で思っていることを聞かせて欲しい。…すごくね、長さんと会えて幸せだなあって、思ってるの。あ、でも、それを長さんが重荷に感じることはないよ。良い関係でいたいな、って、思うだけ」

そんなことを真正面に言われて、知己は照れるのも忘れた。

片桐実也子は、明るい笑顔で考えていることを正直にずばっという。それはいつも本当のことだし、時々はっとさせられることもある。でも考え無しに無遠慮なことを言うわけではなく、腹芸もできるが嘘をつくことはない。（ついてもすぐ分かるから）よく気を遣う性格だがコミュニケーションが経験豊富というわけでもなさそうで、信じられないほど鈍感なところもある。

そういう人柄に気付いたのは、付き合い始めてから。

好きと言われて悪い気はしないし、知己自身、実也子の傍に居たいと思っいて彼女を必要としている。

好きだと、声に出して言ったことは実はない。恥ずかしいから。それを年齢のせいにしてしまうのは、知己の悪い癖。

* * *

「こんにちは、はじめまして。それからお久しぶり」

日本語の使い方間違ってますよ、と言いたいが実は間違っていない。

実也子、そして知己が客が待つという部屋へ入ると、そこには品の良い年配女性が立っていた。年齢は六十歳くらい。洋装で、肩まで伸びた髪はブリーチの金色。シヨルダーバッグを小脇に抱えて、皺だらけの手が添えられていた。

その他に同じく年配男性が三人、実也子と知己に視線を向けている。

「っ」

知己は慌てたりはしなかった。驚きすぎて、反応を返せなかったのだ。汗が噴き出てくるのを感じた。

女性はにっこり笑うと実也子の手を取って言った。

「片桐実也子さんよね？ 噂は聞いてるわ、お話したいと思ってた

の

「え…、あの」

実也子は目の前に立つ老婦人が何者か分からず戸惑っている。腰が引けているのはそのせいだ。

女性は気にせず笑顔で続けた。

「あのね、私は…」

がしつ、と。その手を掴んで、知己が二人の間に割って入った。

「リズ、こいつに変なこと吹き込むなよ？」

知己のうるたえながらも保身する台詞を聞いて、女性はニヤリと笑う。つぎに。

ガシツ、と。知己の首根っこを掴んだ力強い腕があった。

「おまえは、こつち」

そのままズルズルと引きずられて、知己は部屋の奥に追いつめられた。

「がーっ、苦しいって。……キョウさん！」

（何でここに居るんだっ）

嘆きたい気持ちで、知己は彼らに向き直った。

先ほどまで知己の首を絞めていたのが石川恭二。それから意地悪そうに笑っている小松省吾と高橋次郎。

貫禄ある年配男三人に囲まれ知己はたじろいでいる。

「久しぶりだなー、おい」

何やら脅迫しかねない口調で恭二はポキポキ指を鳴らした。

「ちよっ…、キョウさん。ちよっと待てって」

落ち着きを取り戻せないでいる知己。

「待てじゃねー。この業界に戻ってくるなら、挨拶に来いって言うてあったよなあ」

「トモー。一発殴りたいって、恭二が言ってたぞー」

「次郎さんっ！」

「一発ぐらい殴られときなよ」

「省吾っ、てめえっ」

正当な反論をしようとした。が。三人の視線に刺され、知己は言葉を飲みこんだ。

そして三人は口を揃えて。

「おまえが、悪い」

嫌にはつきりと区切って、言った。

(……)

分かつては、いる。

「いや、でも…それは確かにそうだけど、…。それにしたって、何で実也子まで呼び出すんだよ！」

*

一連のやりとりを見ていた女性陣二人。

「……」

実也子はこの四人が誰なのか、未だ分からないでいる。でも知己の知り合いだということは間違い無さそうだ。

あちらでは何やら不穏な会話が展開されていた。知己は必死だが端から見れば仲の良い友人がじゃれているようにしか見えないので口出ししないでおこう。

実也子は隣に立つ女性に目をやった。その視線に気付き、実也子に優しい笑顔を見せた。

「突然ごめんなさいね。私、リズよ。ちょっと前になるけど、雑誌インタビューを読んだわ。好きなミュージシャンに、私たちの名前を挙げてくれてありがとう」

え？ と実也子はすぐに答えを出すことができなかった。

(リズ……)

そっという名前の女性は、……一人だけ、知っている。

RIZのボーカリスト。リズだ。

「え…。エーッ！ リズって…、あの、RIZの…？」

「そう」

「や…、私、すごくファンだったんですっ！ きゃーうれしーっ」
興奮を露にして実也子は飛び上がり、握手していた手を上下に振

った。その元気の良さに少しだけ驚きつつ、

「今日、前田くんの記事が出たでしょ？ あなたのことは昔から聞いてたけど、奇しくも康男の命日だし、会いにきちゃった。こうでもしないと知己も顔出さないしね」

「そっかあ。今日は加賀見さんの……、え？」

ふと、実也子は思い立ってリズに訊いてみた。

「あの……、長さんとどういう関係なんですか？」

あら、と拍子抜けしたようにリズは首を傾げた。

「あれ？ 実也子ちゃんて、さっき、RIZのファンだったって言ったよね？」

勘違い？ と首を傾げるリズ。

「今もそうです！」

「……」

繋がらない会話にリズは額に指をやり、何やら考え込んでいる。

「あのね。RIZって、何人いたか、知ってる？」

「え？ えーと、五人……じゃなくて六人ですよ、確か。あは……実は加賀見さんばかり見てたので、あんまり詳しくは……」

リズは笑いを堪えきれずにくすくすと声を立てた。

「六人っていうのは正解。どんな人がいたか、なんて覚えてないわね」

「すみません」

ぽりぽりと頭をかく。

「謝らなくていいのよ。じゃあ、教えてあげる」

(……?)

ふと、気付いた。

確か、実也子は「長さんとどういう関係なんですか？」と尋ねたのだ。

リズはそれに答えようとしてくれている。だとしたら、この話運びは、どういう関連だろう。

「RIZはね、ベースの加賀見康男と、……今、この部屋にいるあな

た以外の五人で成っていたのよ」

そのように語るリズの後ろでは、知己が他三人に追い込まれているところだった。

実也子は息を飲んで目を見開いた。この部屋には、実也子を抜かすと五人しか、いない。

*

「ちょーさぁんツ！」

耳を破る声がしたと思ったら、実也子が駆け寄って知己の腕にしがみついた。それには恭二たちも驚き、思わず道を開けてしまった。

「え…？ あ…なんだあ？」

下から睨み付けてくる実也子は顔を真っ赤にさせ、目がうるんでいた。

「長さんが、RIZのドラマーだったって、ほんとっ？」

「あ…」

その問題があった、と知己は今更ながら気が付いた。リズが言ったのか。

「黙ってるなんてひどーいっ！ 長さんには初対面のときに言ったよねえ？ RIZのファンだって。…もーっ！ 何で黙ってたのよーっ」

実也子の心情としては、三年間も正体を隠されていたことへの憤りと、当人を目の前にして「ファンだった」と言い続けていた恥ずかしさと悔しさ。怒るべきか笑うべきか複雑で混乱している。

知己はその迫力に押されつつも、苦笑いしながら、

「そっちこそ、ファンだったなら気付けよー。初対面でそう言われたから、言うに言い出せなかったんだ」

「あつ、私のせいにするわけ？」

「前田さんだって、この間会ったときに、すぐ気が付いたぞ」

「…あ、だからよろしくって…。もーっ！ 前田先生も教えてくれればいいのにーっ」

実也子のパニックぶりに、知己はもちろんリズや恭二も、笑った。

宿めに入っただのは次郎だった。

「片桐さん、今夜ヒマ？」

「え？」

安っぽいナンパの台詞だが、そうではない。

「追悼記念と銘打って、今日の夜、RIZのライブするんだ、まあその辺の小さい店だけど」

えっ、と目を輝かせる実也子の隣で、

「は？」

と、知己は眉をひそめた。

「トモっ、おまえ六回もサボってるんだから、今日こそやれよな」

「おい、ちよつと」

まさかこれが本題か？

そうだっ、とリズが手を叩く。

「実也子ちゃんも康男のパートで出ない？ いつもは前田くんが来てくれてたんだけど、今、海外行っちゃってるのよね」

「ほんとにつ？ やる！ やりますっ、長さん！ やろつよ、ね？
ね？」

さきほどの勢いはどこへやら、実也子は知己に合意を求めた。

「…そんなこと言っただって俺らフリーじゃないんだから簡単に…」
「みゆきちゃんに訊いてくるっ」

実也子の対応は素早かった。

言つと同時に踵を返し、ドアの向こうへ走って消えた。

知己たちは事務所に雇われてる身なので、この腕（売り物）を勝手に使役することはできない。「仕事については事務所を通してください」というやつだ。でもまあ報酬を貰うわけではないので、プライベートと言えばどうにでもなる。もちろんプライベートでも、イベントを起こすことで自分たちの知名度が世間に及ぼす弊害を考慮しなくてはならないが。

そんな理屈はさておき、みゆきが出す答えなどとうに分かっている。

とりあえず知己は実也子を追った。

「ごめん、すぐ戻るから」

小走りで退場。室内には来客者のみが残された。

「若者は騒々しいなあ」

「あら、恭二。年寄りのヒガミは見苦しいわよ」

「うわ、きつつー」

ねえ、と省吾が口を挟んだ。

「Blue Roseってさあ、…いや、『B・R』のとき？」

正体は地方の一般人だったって、報道されてたじゃん」

「ああ」

「あれ、嘘だよな。だって知己はプロだったわけだし、片桐さんは前田さんの弟子だったんだろ？」

例えそれが過去の経歴だったとは言え。

「ははっ、確かに一般人と呼ぶにはちよつとな」

「それだけじゃないよ。キーの山田って、あいつ薪坂の主席卒業者だと。知らぬ者無しの有名人だったそうさ。あとギターの…何だっけ？ 中野？ は、アマチュアの間じゃ名が通っていて、ギターの助っ人としては指名率ナンバー1、しかもノーギャラでやるって。

つまり自分の価値を分かかってないんだな。それからボーカルの小林圭、森村久利子の子供だって知ってた？」

「…森村って、あの？ うっそ」

「一部の業界関係者の間で噂になってる。信憑性は、ある」

「おいおいー。じゃあ、そんな奴らが集まったわけ？ 偶然？ 勘弁してくれよ」

「ほんと。それこそBlue Roseありえないものだっつーの」

その日の夜。

都内の某ライブハウスで、毎年恒例（と言っても世間にはシーク

レット)のRIZ・加賀見康男の追悼ライブが行われた。

リスが初めにメンバー紹介をしたので、Blue Roseの長壁知己と片桐実也子が混ざっていることはすぐにバレた。それから客席に山田祐輔、中野浩太、小林圭がいたことも周囲にはバレたが、理解ある客層だったので騒ぎになることはなかった。さらに客席の中には、叶みゆき、安納希玖、本村沙耶、日阪慎也とその彼女、木田理江、日辻篠歩、八木尋人、大塚スグル、新見賢三、桂川清花、須佐巽、一村草介の顔があった。(皆、暇なのだろう…)

知己はヤスのことを思い出していた。

仲間であり、父親でもあった人。

今回、今まで避けていたリスや他の仲間たちと再会し演奏すること、昔を思い出して、頭を抱えなくなったり息苦しくなったりすることがあるかもしれない。

ヤスは、大きな存在だったから。

(でも)

それも、まあ、いいか。

と。

今日、はじめてそう思えた。

悲しみに潰されなくなったのは、時間が経ったからだ。

そして。新しい仲間と出会えたから。

今、目の前に立ち、ベースを奏でている後ろ姿は七年前とは違う。曲が終わって客席から拍手が起こったとき、その後ろ姿が振り返り。

弓を持った手を振って、笑った。

圭

どうして皆、叫ばずにいられる？

小学生の頃、教室でひとり考えていた。

胸が逸る。静かな熱情がずっとここにある。

足が疼きだす。

立ち止まっただけではいけないのだと。

風の吹く方へ。

走り出さなければいけないのだと。

叫ぶ鼓動。

どうして皆はそんな平然と笑っているんだろう。

この絶望に似た焦燥感に耐えていられるんだろう。

狂おしいほどの無力感に何もせずにいられるんだろう。

俺は叫びたい。

どうして叫ばずにいられる？

小さい頃。そう思っていた。

「うるあつしゃああ！ 今夜のゲストは、なんとッ、Bluer
oseの皆さんでえゝす！」

癖のあるハスキーな高い声がスピーカーから響く。それは店頭や車の中、山辺でも海辺でも、歩きながらも部屋の中でも聴くことができたはずだ。電波受信機ラジオの周波数を合わせてさえいれば。

時間は夜11時。ラジオはここからがゴールデンタイム。

毎回ゲストを招いて突っ込んだトークを繰り広げるこの番組は、今夜50回目を迎えた。「The 50th night Special Live」と題して時間拡大の生放送、スペシャル企画満載、豪華なゲストを迎えた。

「もー、今回はね？　ウチのスタッフちょー頑張ったツスよ。絶対BlueRose呼ぶつつって2ヶ月前から交渉しててね？　どーにか、どーにか、こうして来ていただくことができたの！　スタッフの涙ぐましい努力に報いるために、それからこれを聴いてくれている皆のタメに、この1時間でBlueRoseの知られざる一面をふか〜く暴いちゃうのがアタシ・早坂はやさかの使命だよね？　楽しみにしてください！」

中央のマイクの前で女性DJは拳を振り上げつつ喋った。ニットの帽子にトレーナーという服装の彼女の声は自然熱を運び、それはブース外にいるスタッフにも届く。

もちろん、向かいに座る5人　BlueRoseにも。

BlueRoseは今年の5月にデビューしたJ-POPバンドで、一枚目のシングルは3ヶ月経った今でもチャートインしており、2枚目は4週目に入っても3位にランキングされていた。デビュー以前にも世間を騒がせていたが、デビュー後もメンバーの意外な経歴が明らかになったりと何かと話題の絶えないバンドである。今最もアクティビティの高い芸能人と言っても過言では無いだろう。

「BlueRoseって歌番組にしか出ないもんね〜。トーク系のお仕事は珍しいんじゃないかな。まずはお約束で端から自己紹介、ヨロシクう！」

早坂のシャウトの後、少し間があって、

「Blue Roseのキーボード担当、山田祐輔です」

「ギター、中野浩太」

「小林圭です」

「ベースの片桐実也子です」

「ドラム、長壁知己です」

「ありがとーう。…って、なんか、皆、落ち着いてない？ これ生番組だけど緊張とかなあいい？」

「俺は歌うよりかは緊張してるな」

「嘘でしょ。圭が緊張してる場所なんて見たことないですよ」

「そうそう。この中で一番図太いな、圭は」

「浩太は変なところで繊細すぎるんだよ。祐輔は鉄骨の心臓だし」

「おいおいBlue Rose、いきなりケンカかあ？」

「いつものことですから」

「でも圭ちゃん以外はこういうトコであんまり喋ったことないよね」

「テレビだと大体、ケイくんがトーク担当じゃない？」

「こいつが一番喋りうまいんですよ」

「そーそー、一番クチがうまい」

「クチだけじゃなくて歌も巧いんだ」

「その生意気な態度で釣りがくるな」

「…あの、ケイくんとコータくんがなんか睨み合っちゃってるんだけど、これもいつものことなの？」

「はい」「ええ」「うん」

「私たち、ラジオのお仕事は初めてだけど、事務所の社長は“普段通りに喋ってくればいいからとりあえず行つてこい”、って」

「普段通り喋られたらフォローしきれないから、頼むからやめろ」
「もう遅いと思いませんか」

「リスナーからメールが来てるよーん。えーと、“Blue Roseの皆さんは休日はどうなことにしてるんですか？”だって。っていうか、休みあんのかなあ、どうよ？ んーと、じゃあ、ケイくん」

「あ、この間の休み、5人でカラオケに行った」

「あつはは、カラオケ？」

「ミヤが行ったことないって言うから。そろって変装して。な？」

「うん、すごく楽しかった。また行きたい」

「え？ ミヤさん、カラオケ初体験？ 珍しくない？ なに歌ったの？」

「えっと、みんなのうたとか童謡」「ほんと珍しいな、それ」「あと圭ちゃんの歌も」

「わお。え？ じゃ、そのケイくんは？」

「堀外タカオと山村シンジ」

「しぶつ！ ええええ？ ケイクんの趣味？」

「そーそー、こいつプライベートではこんなんばっか」

「他人の部屋からそのCD奪ってたヤツの台詞かよ、浩太」

「あははは。じゃ、コータくんも結局聴いたんだ？ 堀外タカオと山村シンジ」

「当然」

「浩太はね、ほんと、節操無い。何でもかんでもあるものは聴くってかんじ」

「あー、じゃあ、コータくんは一番レコード持ちだったりする？」

「うーん…、この中じゃそうかな」

「この中？」

「うちのスタッフにも一人…いや二人？ 浩太に似たコレクターがいるから」

「もひとつ質問いこっか。“ケイはいつから歌手になりたいと思ってたの？”だって」

「え？ 俺？」

「そう」

「…わかんね、いつだろ？ 結構、前」

「『B・R』がデビューしたときって、ケイクんは13歳だった

んだよね。それより前ってことでしょ？」

「あ、もつと全然、前。小学校上がるより前だったし」

「え？ うそぉ」

「あー、確かに圭はそんな感じだった」

「そうそう。真っ直ぐここまでできたーってカンジ」

「初対面るとき、凄い覚悟を決めてる子供だなって思いましたね」

「そうそう、この中で一番プロ意識高いのは、絶対、俺だし」

「んんん？ どういうこと？ ケイクン」

「浩太とミヤは遊びの延長だし…あ、良い意味だから。祐輔は例えは彼女に何かあったら仕事放りだしそうだし、長さんは食ってけるなら別にこの仕事でなくても構わなそうだし」

「…んん、…それは否定できない！」

「俺らの評判落とすようなこと言うなよ」

「いや、言い得てると思いますよ」

「でもはつきり言われると腹立つ。…確かに間違ってるけど」

「じゃあ、そのケイクン。歌手になりたいって夢を持ってるリスナーに何かアドバイスしてあげてよ」

「あー、それなら、誰かを目標にするのがいいんじゃない？ 目標っていうか目的があれば、あとは努力と根性と運だけだからさ」

「すんません、CM前にいつこ告知するね。えーと？ …うおおー

！ 森村久利子の緊急来日ライブが10月にあるって！ チケット

の先行予約、来月開始！ って、これはマジで貴重！ ホントに。

森村さんはほとんど表に出てこないよね、本拠地はロンドンで日本にも滅多に帰ってこない！ これは行かないと損だっ！ と、言うわけで先行予約はAN音響および各チケットセンターまで！ 番組のHPにも情報入れとくから、みんな見に来てね！」

「CM入りましたー。1分間でーす」

ディレクターの声がブース内に響く。早坂は誰よりも早く席を立つと、本日のゲスト5人に向かって頭を下げた。

「BlueRoseの皆さん、お疲れ様！」

オンエアのチャネルは今ではマイクから離れてCM用ディスクへ移っている。音量を気にせず早坂は大声で言った。

BlueRoseの5人もそれぞれ立ち上がり挨拶を返す。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

「お先に失礼します」

調整室にいるスタッフにも会釈を残す。そしてスタッフも笑顔で手を振り返した。

早坂は今日、初めてBlueRoseと対面した。何かと噂の彼らと会うことを楽しみにしていて、今日の番組のゲスト招聘にも精力的に協力したのだ。

ラジオDJという職業の早坂は業界内ではまだ表舞台にいるほうだ。その部類に比べ、番組プロデューサーや脚本家、カメラマン、照明音響、TKという裏方スタッフの間では業界内の噂が本当によく伝わる。

「あいつら、ほんとに仲良いよ」

と、BlueRoseの噂を耳にした。噂を広めたのは主に歌番組の裏方スタッフたちだ。

グループやバンド、芸人のコンビたちがプライベートでは口も利かない、というのは実は珍しくない。仕事は仕事と割り切る、仕事以外は距離を置く、そういう関係も大切だろう。ただしそれを大衆に見せないことが暗黙のルールだ。夢を売り物にしている以上、客を興ざめさせてはいけない。

BlueRoseもご多分に漏れないんじゃない？ と思ってい

たところ前述のような噂を耳にした。今日、実際に会って確かめるのことが早坂はずっと楽しみにしていた。

「今夜は楽しかった！　また来てね」

「またお誘いください」

紅一点のミヤコが手を振り無邪気な笑顔を見せた。

と、そのとき。

ぱたん。

「え？」

重すぎも軽すぎもしない音に振り返ると、

「圭……っ！」

ケイがテーブルの上に突っ伏していた。その顔は汗を滲ませ、苦しそうに見える。

「え？　ケイくん？」

早坂が声をあげるのとはほぼ同時に、コートがケイの上体を持ち上げ、肩を支えた。

「だめだ、完全にダウンしてる」

と、コートが呆れたように溜め息を吐いた。

続いてユウスケが、

「公言した通り、今日の仕事は保たせたわけですか」

「大したヤツだよ。実也子、マネージャー呼んでこい」

「わかった！」

いち早く、ミヤコはブースから飛び出していった。

「小林くん、どうかしたのか？」

早坂と同じ心持ちのスタッフが声をかける。

「お騒がせしてすみません」

と、ユウスケ。

事情を説明してくれたのはトモのほうだった。

「今朝から熱があつて体調不良だったんだけど、本人が今日の仕事はこなすって聞かなくて」

「えっ、ケイくん、病気だったの？」

早坂が叫ぶと、それが他のスタッフにも飛び火した。

「は？ さっきまで元氣よく喋ってたのに」

「病院行かなくていいの？」

その少しの騒ぎにトモとユウスケは困ったように笑った。

「遅かれ早かれダウンするだろうとは思ってたから」

「それより、早坂さん達はまだ番組あるでしょ、心配しないでください」

心配が煩わしいようにも聞こえたが、それ以上にまだ仕事である早坂達を思いやつの台詞だった。

「じゃ、こいつ、連れてくぜ」

コータがケイの肩をかつぐ。

「お先に失礼します」

トモがそれを手伝い、3人＋1人はブースからそそくさと出て行った。

「……………」

早坂と他スタッフはしばらくポカーンとその後を目で追ってしまった。我に返ったのは、

「20秒前でーす」

というスピーカーからの声のおかげだった。

その合図とともに、一時固まっていたスタッフたちも動き出す。

途端にブース内が慌ただしくなった。

「仕事終わったとたん倒れるなんて、いい根性してんなあ」

「早坂、さっきのケイのこと言うなよ」

「わかってる！ 馬鹿にしないでよ」

“一番プロ意識高いのは、絶対、俺”と公言したケイの、そして倒れるくらいの熱があるのにしつかり仕事を終わらせた彼のプライドを傷つけるようなこと、するわけない。

「CM開け、10秒前でーす」

そして今夜の早坂の仕事はもう少し続くのだ。

例えば。

白い森にひとり立つ。

重力に抗えない雪が静かに降り続く。

白い地面に跡をつけるのは堕ちた雪だけ。

漂うことさえできない凍てついた大気は肌を刺し、焼いた。

髪先从ら、気が遠くなるような冷気が近づいてくる。

どこまでも続く針葉樹の影。

他には何もない。深い森の中。

そつと肩を抱く寒冷。

雪に埋もれゆく自分。

そこに音は無い。

唯一持っていた声はすべて雪に消えた。

その孤独感は心地良くさえあった。
深く青い海の中を漂うように。

体の芯が温かい。

その静けさは胸を熱くさせた。その熱に泣くほどに。

ここはとても綺麗な場所だけど、目指す場所じゃない。
行かなきゃいけない。ここにはいられない。

ずっとこの居心地の良い場所で雪に埋もれていたかった。
この静けさに包まれていたかった。
でも歩きはじめなきゃいけない。この汚れ無い白い地面を、この
足で踏み荒らしても。

あの人の音楽は、そんな情景に引き込むちからがあった。

意識が戻ったと自覚した。

取り戻した現実には、かすかに人影が見えた。

「……あさん？」

その人影が振り返る。「え？」

「！」

圭は何か叫びかけて、ガバツと勢いよく上体を起こす。

が、そのまま倒れそうになった。ぐあんぐあんと頭が鳴っていた。

「大丈夫？ 熱下がってないから大人しく寝てて？」

ベッド脇に駆け寄ったのは実也子だ。心配そうな顔が覗き込んでくる。

「えっ、俺、さっきなんか言った？」

「ん？ よく聞こえなかったけど、なに？」

「……」 起き抜けに呼びかけた言葉、それを思い返し一瞬で頭に熱

が昇る。(よ、よかった…)

その安堵感と引き替えにさらに熱が上がったようだ。冷たいものを食べたときのようなシヤレにならない頭痛に襲われて圭はそのままベッドに横になった。

(いてっ！)

「圭ちゃんっ？」

自分の部屋にいる。と、圭はその枕とシーツの感触で今更ながら気付いた。

(ラジオの仕事で…何かあったっけ？)

頭痛のせいで圭の思考稼働率は普段の60%以下、それでもどうかこの状況を理解した。

「…俺、どれくらい寝てた？」

「半日くらいかな。もう次の日のお昼」

「は！？」圭は大声をあげた。「仕事はっ！？」

毛布の中でまた頭を抱えるはめになる。大声を出すと頭に響いた。
「あたたたた…」

「もお！ 大人しくしてなさい！」

「でも、スケジュール入ってただろ？」

「仕事はマネージャーさんが調整中、かのんちゃんは社長に相談しに行ってるよ」

「ごめん。自己管理能力、疑われるな」

その声は深く落ち込んでいた。

「そんなこと考えなくていいんだよ…圭ちゃんらしいけど」

「みんなは？」

「長さんの部屋にいる。さっきまで祐輔もここにいたんだよ」

「…じゃあ、ミヤも、ここはいいからさ、みんなの所行ってるよ」

「でも、圭ちゃん病人じゃない。面倒見させてよ」

「ミヤにうつしたら仕事復帰がさらに遅れるだろ」

「…」

「ていうか、俺、人がいると寝付けないからさ。大丈夫、何かあつ

たらちゃんと呼ぶし」

「…わかった。　けどねッ！　キッチンにごはん作っておいたからちゃんと食べて、あと水分もたくさん摂って、薬はあんまり飲まないでね。汗掻いたら着替えもちゃんとするこゝと！　あとは…」

実也子が大人しく出て行くはずもなく、その長すぎる捨て台詞を圭は苦笑しながら聞いていた。

「明日になつても熱が退かないようならお医者さんに行くからね！」
「意地でも下がらせるよ」

ひらひらと手を振り返すと、やっと実也子は部屋を出て行つた。
そこで圭は大きな溜め息を吐く。誰もいなくなつた部屋だ。遠慮はいらない。

布団を少しだけはぐと、汗を掻いた身体に寒気が走つた。ついでに痛みが頭を撃つた。（あいたゝ）それをやり過ゝすと圭は手を伸ばし、ベッドの下の収納引き出しの中から一枚のCDを取り出す。

圭の所有するCDは机の横のCDラックに整然と並べられているが、そのアーティストのCDだけはここに置いていた。部屋を訪れた他人に見られたくない。圭にとって特別なものだった。

枕元のポータブルプレイヤーにそれをセットする。イヤホンを両耳につけて、プレイさせて、音量を調節して、圭は乱暴に布団をかぶりなおした。

早く治して仕事復帰しなければならぬ。さらに明日までに熱を下げなければ病院に連れて行かれてしまう。

（注射嫌いなんだよねゝ）

CD一曲目の前奏が終わり歌が聴こえ始めた。

圭はきつく目を閉じた。

* * *

Blue Roseの5人はこの夏からマンション暮らしを始めた。全員、部屋を捜すのを面倒臭がったので、結局事務所から紹介されたマンションに別々に部屋を借りている。

その際、知巳のところだけ部屋数が多い物件を借りた。それはこうして全員が集まれるようにだ。

「実也子です、入りまーす」

実也子が知巳の部屋の玄関を開けると、メンバーの他3人と、それから叶みゆきが来ていた。

「かのんちゃん…！」

小走りで駆け寄る実也子に気付いたみゆきはちょこんと頭を下げた。

「実也子さん、こんにちは」

「社長、何か言ってた？」

「ええ、今回のことは仕方ないって言っていました。5月からこっちハードなスケジュールでしたから、疲れが出たんだらうって」

「嘘くせー。あの社長、そんなタマじゃねーだろ」

組んだ足の上で雑誌を広げている浩太が冷やかした。

「まあ、鵜呑みはできませんね。…かのんさん、それから？」

祐輔が先を促した。

「あつ、はい。今はマネージャーさんがスケジュール調整してます。取り急ぎ3日、どうにかなりそうですって。他の皆さんは雑誌関係がいくつかあるみたいですよ、あと希玖が次の曲をあげてきたのでこの機会に撮り始めましょう。マスコミはそれで深追いしてこないと思います」

Blue Roseが次々と仕事をキャンセルしていることはマスコミにも容易に伝わってしまう。圭が倒れたなんてわかったらマスコミはまた騒ぎを起こすだろうし、それは事務所にとってもなにより圭にとっても本意ではない。それならいっそのこと急な仕事を作

つてしまおうという魂胆だ。

「実也子、圭の様子は？」

「ん、さつき目が覚めた。まだ熱が高くて…頭痛が酷いみたい。ごはん食べて、今は寝てる…と思う。私がいると、圭ちゃんに気を遣わせちゃうみたい」

何もできない自分を責めるように実也子が声を震わせてうつむく。知己は溜め息をついてその頭を撫でた。

そして祐輔が言う。

「まあ圭の性格からして自分の体調不良を他人に見られたくないでしょうね。気にすること無いですよ、実也子さん」

「圭ちゃんたら、“喉にこなくてよかった”なんて本気で安心してた。…それは分かるんだけど！圭ちゃんってなんか…価値観ズレてるってこない？ラジオで言ってた“プロ根性がある”っていうのとはちよつと違う気がするの。うまく言えないけど…」

実也子が言葉に詰まると横から割り込む声があった。

「もともとあいつ、そういうところあるじゃん」

「中野…？」

浩太は膝の上で雑誌をめくりながらさりと言った。

「自分の中で価値があるのは声だけだと思ってる」

しん、と室内が静まる。

「…あー、…そういうところ、ある、かな」と知己。

「どうしたの中野、今日冴えてるじゃん」

「どういう意味だ！」

実也子と浩太が騒ぎ始めたのを収めるために、祐輔は口を挟んだ。

「そつえば今朝、圭の実家に連絡したんですけど…」

「あー、あの楽しい親父さん？」

浩太が思い出し笑いをした。

Blue Rose が再結成されたとき、全員の实家へ全員で挨拶に回った。なのでお互いの家族とは一通り面識がある。

「何て言ってた？」

「『一度倒れたら大丈夫。恥ずかしくて治るまで出てこないから』
と言っていました」

「あはは、さすが圭ちゃんのお父さん」
「たまらず実也子は笑い出した。」

「あいつの性格、よく解ってるなあ」

「あ、それともうひとつ」

祐輔はさらに付け加えた。

「『家内をそっちに向かわせますので、圭が許すようなら会わせて
やってください』」

「は…?」「え、それって小林くんのお母さん、ってことですよ
ね?」

浩太とみゆきは顔を上げてそれぞれ質問になりきらない言葉を返
す。

「確か皆で挨拶に行ったときは、不在でしたよね」

圭の実家は愛知県名古屋市内、父親は小さいレコード屋を営んで
いる。全員で挨拶に行ったときも営業日で忙しそうに動き回ってい
た。そのとき圭の母親を見ることはなかった。

「俺、圭って母親いないのかと思ってた。親父さんの話はたまに出
てくるけど、母親のことあいつから聞いたことないぜ?」

「あ、実は私もそう思ってたから圭ちゃんには聞かないでいたんだ
けど」

「でも来るってことですよね」

ぴんぽーん

「わあ!」

あまりのタイミングの良さに実也子が声をあげた。

「え? まさか本当に本人?」

「びっくりしたあ…」

知巳はインターフォンに応じるために部屋を横切った。オートロ
ックなので来客はまだエントランスの外だ。

いくつかの言葉を交わし合った後、知巳は向き直って言った。

「小林圭の母親、だってさ」

好きな音楽を見つける能力は誰にでもある。

それはこの身体という鑄型に、ピタリと当てはまる音楽と出会えたときに気付く。

まるで、鑄物の錠が力チリと音を立てて回り、扉を開けて、見たことのない向こう側の景色が広がる。そんな感覚だ。でも。

（俺はいつも、その景色を素直に見ることができなかった）

自分の鑄型に合う音楽を見つけられる人は沢山いるけど。

俺は、その音楽からこの鑄型を造られた。この喉も声もすべて、その音楽から造られた。

それを独占したかった。

だってそれは俺だけのものだった。

いつもそこにあり、いつもこちらを向いていた。求める必要なんてない、手を伸ばせば触れられた、抱きしめることができたから。

まるで心を見透かすようにこの身体に染み入る。悔しいときや悲

しいときにその声を聴けば素直に泣けた。優しい気持ちになれた。

幼い俺の未熟な思想も稚拙な反抗もすべて受けとめてくれた。貸したゲーム機を壊されて友達と喧嘩した日も、悪態吐いて父親に殴られた後も、その声は俺の怒りを冷やし冷静に考えさせ、大好きで大切な人達と楽しく過ごしていくにはこんな時どうすればいいかをそつと示してくれていた。

たからものだった。その声に出会えてよかったと、ある夜、声を殺して泣いた。

それは俺だけのものだと思っていた。

知らなかったんだ。その声を希んでいる人が他にも大勢いるなんて。

「ね。圭くんはどっちがいいと思う？」

不安な面持ちの母が覗き込んでくる。11歳のときだった。

母の後ろで、いつもは不敵な面構えの父が難しい顔で視線を落としている。

「お母さん、ロンドンのレコード会社に誘われたの。CD出さないかって」

「……は？」

そのとき初めて、母が結婚前にマイナーな歌手だったことを知った。母が毎日のように歌っていた歌は古いレコードに収められているものだった。

「仕事を受けたら長い間向こうにいなきゃいけなくなる。でもお母さんは、お父さんや圭くんと一緒にいることも大切だし…でもまた歌いたいのっていう気持ちも、正直あるんだ。ずっと悩んでたけど、まだ決めかねてるの。ねえ、圭くんはどっちがいいと思う？」

「おい、やめろっ」

呆然としている俺と母の間を父が割って入った。

「あなた…」

父が母に、声を荒げるのを初めて聞いた。

父は母を指さして詰め寄った。

「おまえが歌いたいつていうなら俺は止めない。もし後になって圭が離れていった母親を恨んだとしたら、それはおまえの決断の結果だ。その決断を圭に押し付けて責任をなすりつけるようなマネはやめろ。圭に後悔させないでくれ。おまえはおまえの意志で、ここを出ていくんだ」

「私、そんなつもりじゃ…」

「どんなつもりでも、おまえの行動を決めるのはおまえだけだし、それに責任を取るのはおまえ自身だ。どっちを選んでも後悔する選択を圭にさせないでくれ」

「いいよ」

「圭くん？」

母の思いも、父の気遣いも俺はよく解っていた。

どう答えればいいか、ちゃんとわかってたんだ。

「俺、母さんの歌をいろんな人に聴いてもらいたいよ？ それってスゲー自慢できるじゃん？」

* * *

「はじめまして。小林圭の母で小林久利ひさしです」

知己が連れてきた中年女性は浩太たちの前でゆっくりと頭を下げた。

「圭がいつもお世話になってます」
ぴたり、と。

何故かそこにいる全員 浩太、みゆき、実也子、祐輔が目を見開き、言葉を失った。

突然現れた圭の母親に驚いたからじゃない。

「…え」

「わあ…」

それぞれの反応は意味を成さないもので、浩太もまた、それに耳を奪われていた。

人の喋り声を耳にして驚いたのは初めてだった。

透きとおった、その向こう側まで見えるような透明な声。

特に高い声というわけでもないのに、両耳をすり抜けていく心地良い響きを、人間のものと疑ってしまうような美しい声を、誰が驚かずにいられるだろう。

「…あのっ」

浩太はその声を知っていた。

「もしかして、森村久利子？…さん？」

「…えっ！？」

反応したのはみゆきで浩太に視線を投げる。「まさか」と口が動いたがそれは声にならなかった。

当の本人、小林久利ひさとはにつこり笑って、

「あら、光栄です」

と言った。その美しい声で。

「えっ、本当に？ 森村久利子さんが小林くんのお母さん？」

普段は大人しいはずのみゆきが顔を赤くさせ大声をあげた。そのみゆきと同じ興奮を浩太も味わっていた。

「ど、どうして日本に？…あ、確か再来月に」

「ええ。今朝、成田に着いたんです」

「結婚してるって噂はあったけど…まさかあんなでかい子供がいたとは……」 おわっ

その浩太の肩を背後から引き寄せる腕があった。

「中野」「んだよ」

「すごいキレイな声の人だけど…有名な人なの？」

実也子が小声で聴いた。

「はっ？」どうやら知っているのは浩太とみゆきだけのようで、祐輔と知巳も実也子と同じ思いだったようだ。確かに、バンド内で鑑賞音楽ジャンルに節操が無いのは浩太とみゆき、それから希玖くらいで、他の連中は極端に偏りがある。仕方ないのかもしれない、が。「馬鹿っ、世界中でレコード売れてる歌手だよ。名前は知らないかもしれないけど、曲は絶対、聞いたことあるって」

さらにみゆきも、

「昨日の早坂さんの番組でも紹介してたでしょ。ロンドンを拠点にしてるアーティストで、あまり表には出てこないけど今度日本でコンサートをすることになったって。チケットはこれから発売ですが一騒動あるのは必至ですよ」

浩太とみゆきの一生懸命な解説を聞いて、森村久利はクスリと笑った。

「おこがましいようですが、よろしかったら招待させていただきますな」

「えっ」

飛びつかんばかりの浩太。しかし、

「…あ、でも、お忙しくていらっしやるのよね」
「がくっ、と頂垂れた。」

「あ…うー…、かのん、どうにかならない？」

「そればかりは…マネージャーさんに訊いてみませんか」

みゆきも残念そうに浩太を宥める。

さらにその後ろでは、やっと事情を飲み込めた実也子がぽつりと呟いた。

「圭ちゃんのお母さん、歌手だったんだあ」

「初耳ですね…」

「全然知らなかった」

祐輔と知己が頷く。その会話に小林久利は顔をしかめた。それをこまかすように、

「…あー」

こめかみのあたりをぼりぼり搔くと、

「やっぱりお母さんのこと自慢するっていうのは嘘かあ」と苦笑した。

その声から産まれたのだという確かな証だったのに、この声は急速に醜くなっていった。

変声期。生まれて初めて絶望を体験した。

『B・R・』解散直後だった。来年はもう同じようには歌えない、そう覚悟していたはずなのに、直面した現実に泣いた。

（返してくれ）

その声から産まれたのだという確かな証を失くした。二度と戻れない。

街に流れる以前の自分の声に嫉妬した。

母は昔と変わらず今も綺麗な声で歌い続けていた。

俺もそんな風に歌いたい。

羨ましい、嫉妬、憧れ、追いつきたい、近づきたい。

物心ついた頃からすぐ傍にあった声。真似するように一緒に歌っていた。

歌が好きだった。

母の歌が好きだった。

「俺、母さんの歌をいろんな人に聴いてもらいたいよ?」

それは嘘だ。手放したくはなかった。独占していたかった。でも後悔はしない。

立ち直るには時間が必要だった。

でも立ち直ることができると直感していた。

俺には俺の、歌う場所があったから。

声が、歌を紡ぐ。

「……」

圭はベッドの上で目を覚ました。

頭がぼーっとしている。熱もまだ下がっていないようだ。

(あんまり時間経ってないのかな)

多分、夕方だろう。気温が下がってきている。湿度も低い。静かで穏やかな空気だった。

(……?)

(…歌が聴こえる)

よく知っている声と歌。夢の中でも響いていた歌だ。

(そっぴや、寝る前にCD聴いてたっけ…)

気持ちが良いので圭はそのまま目を瞑って歌を聴いていた。とても静かだった。

その声は確かに音なのに、無音たり得ないのに、静かだと感じた。空気が澄んでいく。

その空気がとても懐かしかった。

（ん？）

ぱちりと見開く。

それでも歌は聞こえ続けていた。あたりまえだ、CDを流しているのだから。しかし。

（…あれ？）

耳にイヤホンの感触が無い。それに。

（この声…）

オケが無い。CDの音源とは違う、囁くような歌声。

（　　　）

圭を起こさないように。

（…どうしてッ）

目頭が熱くなる。

「何で、ここにインだっ！！？」

大声を出して飛び起きた。

勿論、頭は痛かったけれど痛がる余裕は今は無。

（どうして）

ベッドの脇で、圭の母親が椅子に座っていた。圭のポータブルプレイヤーを膝に置いて、それを聴きながら歌っていた。

久しぶりの母の姿に圭は動揺した。

そして目の前であの声が歌っているのを耳にして感動した。

しかしそこで歌は途切れた。その両耳からイヤホンを外すと、

「あれ、起きちゃった？」

と笑った。その声で。

「おはよ。圭くん」

「……母さん？」

声が震えた。その声はやはり母のものとは全然違うものだった。似てもいない。少し胸が痛んだ。

「そうよ。忘れられちゃった？」

「え…どうして？　ここに…」

一瞬、名古屋の実家にいるのかと錯覚した。

でもここは東京で、圭は独り暮らしをしていて、…母はこの住所を知らなかったはずだ。

「お母さんの帰国チェックもしてくれてないの？ 薄情だなあ」わざとらしく嘆息して。「成田着いて、お父さんに帰るコールしたら、圭くんの看病してこいって」

「…だからって」

まだ頭がふらついている。母の言葉を半分も理解できなかった。

（あれ？ じゃあ…）

（浩太たちは母さんと会ったのか…？）

「大丈夫？ まだ熱があるの？」

母が手を伸ばしてくる。そこで圭は熱から我に返った。

「近付くなッ！」

大声を出して、全身でその手を拒絶する。

「…圭くん？」

やり場のない手を空に晒して母は戸惑いを見せた。

（…ったく）

「歌手だろ？ 風邪引いてるやつに近付くなんて…」

（自覚無さすぎだ）

母の声を壊したらと思うとぞっとする。

圭は不用意に近づく母に怒りさえ覚えているのに、その母は無邪気に笑い出した。

「相変わらず厳しいなあ圭くんは。でもさあ」

「なんだよ」

「病気の息子を放っておけるわけないでしょ？」

真顔で覗き込んでくる。

圭は少しでも泣きそうになって、しばらく言葉を返せなかった。母はそのまま何も言わず、圭の反応を待っていた。

「…いつまで日本にいる？」

「コンサートの他にもいくつか仕事あるから3ヶ月くらい」

「後で時間つくるから…」

「ほんとっ？」

「だから、今日は帰れ」

わざと強い声で雰囲気を変えて、至近距離にいる母の肩を押し避けた。照れ隠しだ。

「圭くん」

「母さんにうつすわけにはいかないだろが！」

「そういう厳しいところ、お父さんにそっくり」

「そりゃ親子だから！」

半ばヤケになって答える。

「ふふふ。じゃあ、圭くんが帰れ帰れ言うから、今日は帰ります」

音を立てて椅子から立ち上がり、ポータブルプレイヤーを圭の枕元に戻す。

「お母さんの曲、聴いててくれてありがとね」

「げっ」圭は顔を歪ませておもいきり口にしてしまった。

（しまった、聴かれてた）

照れ臭さが全身を襲う。「たまたまだよ」そう言い訳しても、きつと母にはバレてる。

圭はその表情を隠すため、母に背を向けてベッドに横になった。

「早く行ったら？」

「ハイハイ」

軽く笑いながら母はバッグを手取る。「時間空けるって約束、忘れないですよ？」

「わかったから！」

今はとにかく早く出て行って欲しい。

久しぶりに会ったのだからもう少し声を聴いていたい。

そのジレンマに悩まされるが、圭は母の顔を見ることができなかった。

「あ、もうひとつ」

ドアに手をかけた母が声をあげる。

「あのね、3年前にね、ウチの日本人のスタッフが一枚のCDを持

ってきたの」

思わせぶりの台詞回しだった。

「休憩中に皆で聴いたんだ。日本では今、彼らの噂で持ち切りなんだって。正体不明なバンドなんだって。ボーカルは高く澄んだ声で、男声女声の区別できない綺麗な声。伴奏とも息が合って、楽しそうに歌ってた。とても綺麗な声だった」

圭は毛布の中で目を見開いた。

「その日の夜は眠れなかった、…本当に一睡もできなかったの」

「……。なんで？」

背を向けたまま毛布の中で呟く。

「だって、私を知る最高のライバルが出てきたんだもの」

「……」

圭はそこで上体を起こし、振り向いて、見開いて母を見た。母は微笑んでいた。

「うかうかしてられない。立ち止まったらあの子が追いついてくる。怠けてる姿なんか見せられるはずない。そう思ってお母さんは必死で走ってきた」

「……追いつかせてよ」

「世の中そんなに甘くない！」

手のひらを見せてつつばねる母を見て、圭は笑いが込み上げてきた。

「ひでえ……」

それでも緩んでしまう顔を抑えられない。「……！」

不意を突かれた。

母は踵を返し戻り、ベッドに手をかけて、圭の横顔にキスした。

「待ってたよ」

「……ッ」

圭は意味の無い声をあげて真っ赤になる。

頬に手を当ててそっぽを向くと「……すっかりかぶれやがって」と小さく呟いた。

* * *

「こんばんわ、早坂みことです…。ああああ、いやいやいや、こんな大人しく始まったけれど、間違いなく早坂ですよ、間違っていないですよ、チャンネル変えないでください。…ふう、ごめんね？今日はちよつと、スタッフ含めアタシもちよつと感激…いや感動しちゃってるの、しよっぱなから。それは今日のゲストさんのせいなんだけども…あっ！今、この番組を聴いてないヒトいたら、すぐ聴くように言つて。ホラホラ、急ぐ急ぐ。聴かないとソンだよ。…いいかな？ゲストさん紹介しちゃうよ？じゃ、いきまっす！今日のゲストは…、森村久利子さんでーっす！！」

ラジオからやかましいくらいのハイテンションな声が流れた。

「こんばんは、森村久利子です」

「……すつつつこい、キレイな声ですよ。いや、ご本人もお綺麗なんですけど。…あ、さっきね？アタシとスタッフ、ポカーンと放心しちゃったくらい森村さんの声に感激しちゃったの！」

「ありがとうございます。本日は宜しく願います」

「こちらこそ！願います！…えつと、もしかしたら知らない人もいるかもしれないので、ちよこつとばかり説明させてもらいますね。森村さんは、現在ロンドンを拠点としてご活躍されている

アーティストです…あ、これ、今流れてる曲ね。曲は知ってるーって人も多いんじゃないかな。森村さんは、あんまし顔を出さないですよ、レコードジャケットもロングだし、テレビにも出ませんよね」

「そうですね。ラジオもこれが初めてじゃないかしら」

「わお！ 今夜は世界中のモリムラファンが羨ましがるプログラムだ、みんなつ、ココロして聞けい。で、今回は何で日本に

来ているかというと、コンサートがあるんですよ」

「ええ、来週から」

「森村さん、コンサートもそんなにしませんよね」

「そうですね。私の楽曲は基本的に重ね撮りが多くて…生オケじゃないんです。そういうわけでライブという形はとらないようにしていたんですが、今回はアコースティックに編曲して、私が日本で演りたいって駄々こねて」

「あはは、駄々こねたんですか」

「駄々こねたんですよ。で、PAとバンドメンバーをこっそり連れてきてしまいました」

「そうそう！ プロデューサーのデニス・フィーロービツシャーも来日してるんですよ」

「ええ。駄々こねても彼だけは落とせなかったの。最後に泣き落とし。ふふふ。彼らに是非紹介したい人がこっちにいるから私も必死でした」

「おつとお？ だれだれ？」

「あ、予告させていたでいいかしら？ コンサート初日にビッグゲストを紹介する予定です。と言っても、本人は絶対嫌がるからその人の事務所にしか話を通してないんですけど」

「え？ 日本のアーティスト？」

「まだヒミツ、大騒ぎになっちゃうから」

「えええ〜？ 最終日のチケット買ったじゃないですか！」
「ありがとございます、ごめんなさい」

「みんな聞いた？ コンサート初日はビッグゲストを招いているらしいぞお！ ずるい！ そのゲストが誰なのかは、その日のうちにネットで判るかな？ チェキラ〜！」

「誰だ、ゲストって」

移動中の車の中、後部座席で居眠りをしていたはずの圭は不機嫌そうな声で言った。

「あれ？ 起きてたんですか？」

「お母さん出てるよって、今、起こそうとしてたのに」

5人と、みゆき、それに運転をしているマネージャーを乗せてバンは夜の街中を走っている。時間はそろそろ日付を超えそうだが次の仕事への移動中だった。

「起きてたよ、さつきから」

続けて機嫌が悪そうに眠い目を細めた。

フィーロービッシャーは見たいが、ビッグゲストとやらをととても嬉しそうに語る母に圭は面白くない。

（母さんと親しいアーティストが日本にいるなんて聞いてないぞ）

「あの、初日のゲストって…それって」と、みゆきが助手席から振り返ると、

「決まってるじゃない」と、実也子が詰め寄ると、

みゆきの口を浩太が押さえるのと、実也子の口を知巳が押さえるのはほとんど同時だった。

もがもが、とみゆきと実也子は口を塞がれたことに抗議する。

「おまえは〜」

こちらもほぼ同時に浩太と知巳が声にする。

「うちの女性陣はデリカシーに欠けますね」

と祐輔は呆れる。

「なんだよ？」

圭はわけがわからず祐輔に尋ねた。

「何にせよ、コンサートは来週ですよ。全員、初日のアリーナに招待されてるんですから、嫌でも当日には分かるでしょ」

祐輔の回答に圭は釈然としない。

「おい、そろそろテレビ局に着くぞ、降りる準備しろ」

知巳の一声で圭のスイッチが切り替わる。

「うっしや。行くぜ」

そして今日もBlueRoseの歌が街に流れるのだった。

番外編 Your Song

1

「素直に呼べばよかったじゃない？ 溜め息吐くくらいなら」

ひそめた声で口にしてから、ちよつと冷たかったかな、と後悔した。でもこの台詞を朝から我慢していたので、私的にはかなりスッキリ。彼にとってはイジワルだろうけど、謝るつもりはなし。まったくなし。たたみかけるけどなし。

私の本心だし、彼の図星だろうから。

すぐ隣、同じ向きに座っている彼は軽く睨みを効かせてうらめしそくに言った。

「こういう日にそういう言い方は無いんじゃない？」

同じく、彼も小声だ。

目の前で展開されるパーティに私はあまり熱心じゃない。こういうイベントには消極的な本日の主役2人の為に、友人達が企画・敢行してくれたパーティだった。私たちは主役席に2人、並んで座っている。もちろん、つまらない顔をするわけにはいかない。それを心得ていたからこそ、私は笑顔のまま小声でイジワルを言ったんだし、彼も周囲に気付かれないように軽く睨み返したのだ。

彼はシワひとつない白いスーツを着て、左胸にオレンジ色の花を差している。同じく私はスマートな純白のドレスに同じ花のブーケを持っている。今日は2人の結婚披露宴だった。

正面の雛壇の上では、現在、友人たちのお決まりの出し物が進行中。彼や私の両親と親戚一同はそれを楽しそうに鑑賞したり、こんな機会でもなければ会うことがない血縁と歓談したりしていた。

嬉しいし、幸せだと思う。

たくさんの友人たちが集まってくれた。2人を祝ってくれてる。彼を愛してるし、両親に感謝する。こんな風に生まれて初めて素直

でイイコになる日でも。

「ごめん。私はあまり、パーティを楽しんではいなかった。

彼本人はきつと、楽しんでいるつもりになってる。でも朝

から彼が、人知れず憂えていること、私は知っていた。その理由も知っていた。

それが気がかりで、悪いとは思いつつも私は友人をそっちのけで彼のほうばかり気に掛けてる。

「溜め息なんか吐いてないだろ」

「わかるの。私は」

ちょうどその時、彼の男友達とそのまた友人によるギター伴奏にのせて、流行りの歌を歌い始めた。彼がその歌に気を取られたことに、私は気付く。

その曲は、デビュー一年ほどの五人組のバンドの歌で、先月リリースされたばかりのバラードだった。ここ数週間はチャートのトップを飾っている歌だ。わざとらしいほど酔って歌う友人に、周囲は口笛や歓声を投じている。

「…ねえ」

「ん？」

「気なんか遣わずに、招待状出しとけば良かったと思うわ。来るか来ないかは、ミイちゃんが判断する」

そんなこと言ってももう遅いことはわかってる。でも結局気をもんでいる彼の行動に異を唱える私の気持ちもわかって欲しい。

「その判断もさせたくないから、送らなかつたんだよ」

と、彼はもつともらしいことを言う。けど私には言い訳にしか聞こえなくて、正当化する為の理由付けにしか聞こえなくて、ドカンと頭にきた。

「だ、か、らっ。それを決めるのは君じゃないのっ、ミイちゃんなの！」

こらーっ、新郎新婦、記念すべき第一回夫婦喧嘩は旅行から帰ってからにしろー。と、歌い途中の男がそのままマイクで響かせて、

会場がドツと沸いた。私たち2人は揃って前を向いて苦笑する。皆の、こちらへの注意を早めに分散するためのごまかしだ。こういうケースに対し、私たちのチームワークはすこぶる良い。

まったく。披露宴でこんなやり取りしてるの、私たちくらいだ。

「…後悔するから」

「そうしたら慰めてくれ」

「甘えるナ」

「その場になつてからの譲歩に期待」

私は深い息を吐く。

「しょうがないわね。どうせ君は、ミィちゃんに怒られることは間違いないワケだし」

* * *

「あいつとつきあい始めたってマジ？」

大学時代。同じクラスの男子にそんな風に言われた。あいつ、というのは彼のことだ。

「苦労すると思うな」「どうして？」

「あいつ、姉ちゃんとすげー仲良いんだよ。休みの日とか一緒に出かけるくらい。オレはあの姉弟知ってるから、シスコンという表現はしないでおくけど、恋人としては複雑じゃね？」

「友達としてはどうなの？」

「まー会ってみれば分かるけど、あいつの姉ちゃんはおもしろー人だよ。よく笑うし喋るし、そのヘン、あいつとはあんまし似てないかも」

「つまり、彼は非社交的だ」と「いや、社交性が高いのは弟のほう」

「なにそれ」

「オレもよーわからん」

ああ、でも。…わかってきた。

標準以上によく笑うわけでもよく喋るわけでもないけど、確かに社交性が高いという意味。

隣を歩いていると、彼のこと、わかってくる。

友人が多い。「うち、田舎だから。近所付き合いとかうるさいんだ。それにこの学校、俺がガキの頃から知ってる連中がすごく多いから」とは、彼の言。

意外にも料理が得意なこと。挨拶がしっかりしてること。

歩幅を合わせてくれること。（これ、できない男は結構多いんだ）彼の両親にも会った。彼は母親似みたい。父親は農家をやっているだけあって筋骨たくましい人だった。

噂のお姉さんにも会った。初対面るとき、その人懐っこさにビックリした。最初は彼の妹かと思ったくらい、無邪気な笑顔を見せる人だった。

いつか聞いた通り、よく笑いよく喋る人だった。そしてそれが、社交性とイコールでないこともわかってきた。彼女は歳不相応に、裏表無い感情を表に出す人だったので、多分、人によっては退いてしまうこともあるのだろう。

幸い、私は彼女とうまく付き合えていた。ただ、これも聞いていた通り、彼女は彼と仲が良く、姉弟というより、彼の女友達のように見える。

私は彼女のことも好きだから、本当は認めたくはないけど、やっぱり嫉妬してたのかも。

ある夏、彼女が帰ってくるなり

「好きな人できた！」

と、真っ赤な顔で宣言したとき、私はほっとしていた。

今日の主役の母親である菊枝がアルコールを断り水を頼んだとき、菊江をひそやかに呼びに来た係員がいた。とりあえず着いて来るよう言われて、周囲の雰囲気気を遣いながら菊枝はそつと席を立つ。防音も兼ねている重いドアを開け、通路に出た。新郎新婦の友人達による出し物で盛り上がっている会場内とは対照的に、通路はひっそりとしている。菊枝は騒々しい空間に少し悪酔いしていたので、係員に呼ばれたのはちょうど良かった。ここの空気はとても清々しく思えた。

通路に出て、ようやく係員は用件を口にした。

「あちらの方が呼びでございます」

その手が示す方向へ、菊枝は目をやった。

「あらあ！」

目を丸くする。

そこには長い廊下を背にして立つ、頬をふくらませて今にも泣き出しそうな表情の人物がいた。黒髪を肩の上で切り揃え、ピンク色のＴシャツにジーンズ姿。化粧つ気もないが、23歳になる菊枝の娘だった。

「……おかーさん」

その声も小さく震えて、爆発してしまうのをどうにか抑えているような響きがあった。

「よく来れたわねえ」

「ひどいよ……父さんも母さんもー。私のこと仲間はずれにしてさ

「……。ひどいよおおお」

堪えきれなくなつて、とうとう泣き出した。両手で握り締めたハンカチに顔を落とす。

「やつぱり離れて暮らすなんて嫌だよ……。仕事は辞められないけど、こんなことあるんじゃ、嫌だよー」

「文句はあの子に言つてよ」

「お母さんも同罪だよ、私、すぐ、傷ついたっ」

「後で謝るから、早く準備しなさい。出たいんでしょ？」

「私、すごく怒つてるよ？ あの手鹿、殴つてもいい？」

「明日の結婚式が終わつてからにしてちょうだい。婚礼写真で新郎の顔に痣があるなんて母さん嫌だわ。一生残るのに」

菊枝が真顔でそう答えると、娘のさらに後ろで誰かが吹き出した。

「さすが親子ですね」

「ここン家つて、かあちゃんも面白いのな」

いくつかの笑い声が重なった。菊枝はもう一度、目を丸くした。

「まあ！ みなさんも、いらっしやつてたの？」

* * *

「こんにちは！ 新郎の片桐俊哉の姉で、片桐実也子といいます」

な……っ！ と、彼は叫びかけた。いや、実際、叫んでいた。立ち上がりかけて、椅子が派手な音を立てた。しかしそれに気を止めたのは私だけだった。何故なら、彼と同様、皆、雛壇の上のひとりの女性に注目していたからだ。

「なんで来てるんだ……」

彼は呟いた。目を見開き、驚いている。そんな彼を横に、私は冷

静に彼女を見ていた。

雛壇の上、マイクの前に単身たたずむ彼女は、多くの視線に見つめられ少し緊張しているようだった。

「あの…、突然ごめんなさい。ここに立たせてくれて、ありがとうございます」

ちょこん、と頭を下げる。

ピンク色のＴシャツにジーンズ。招待客でないことは一目瞭然で、今まで会場内にいなかった新郎の姉の登場に会場の客たちは「何やらおもしろそう」と雛壇のほうへ目をやった。

「私は、…えーと、音楽をやってるんですけど、十年くらいひとすじの楽器があります」

息を吸う。

「弟の結婚式で演奏する！っていうのが、ずっと前から…本当に昔から、ずっと、夢だったんです…」

段々と声が震えて、小さくなって、顔を両手で隠しつつむいてしまった。

「だから…」息を吸う。

「俊哉ッ！一生、恨むからねっ」

言葉は強かったけれど、声は震えていた。マイクを通して、微かに嗚咽が聞こえた。会場が静まり、彼女の呼吸だけが聞こえる。

私の隣では彼がどうにか動揺を抑え、椅子に座り直していた。

「…相変わらず、泣き虫なんだから」

「泣くよ。そりゃあ」

私は声だけで返す。彼が顔を向けたのがわかったけど、それには合わせなかった。まっすぐ、前を見ていた。

このあたりで、会場のあちこちからひそひそ話が聞こえてきた。ある者は不審そうに、ある者は興奮して。

「あれ…、Blue Roseのミヤコじゃない？」

Blue Roseとは、デビュー一年ほどの五人組のバンドの名前だ。テレビやラジオで彼らの曲を聴かない日はないくらいの人

気バンドである。芸能人が何故、こんな地方の一個人の結婚披露宴に来ているのかという思いだろう。数人がざわめき始める。

「私は東京で仕事をしてるんですけど、忙しいだろうからって、気を遣ってくれたみたいで…。弟のヤツは、今日のこと全然教えてくれなかったんです。もう少しで私の夢が潰れるところだったわけだから、…恨まれるくらいは覚悟してるよねえ、俊くん」

今度は会場中の視線が彼に集まった。

彼女もこちらを見ていた。ただ、見ているのは彼じゃない。私だった。彼女は目に涙を溜めた顔で笑うと、マイクに向かって言った。「だから今朝、連絡をくれた花嫁さんには、一生、感謝します」

「え…？」

隣から彼に腕を掴まれた。ちよつと痛かったけど、私は軽く笑って見せた。

「今朝、電話したの」

「なんでっ？」

「ミイちゃんに知らせてないこと、君、後悔するってわかってたから」

今朝、悲鳴とともに、先ほど語られた実也子の夢も聞いたので、私は式場の人に彼女の楽器を用意しておいてくれないか頼んだ。急いでやってくるとしたら、あんな大きな楽器を運ぶのは骨だろうから。

その甲斐あって、今、彼女は式場から借りた楽器を手にして、調音を始めていた。コントラバスの低い音が響く。「やっぱ、Blue Roseだよ」という声がどこからか聞こえた。

「でも本当に来るとは思わなかった」

電話で知らせて、楽器を手筈してもらったときでさえも。彼女がここへ来るのは五分だろうと思ってた。

「2人のために、一曲やらせてもらいますっ」

コントラバス用の背の高い椅子に座り、彼女は最後に弓を整えた。

「イギリスの作曲家エルガーの、？愛の挨拶？」

さつきまで今にも泣き出しそうだったのに、楽器を構えたその表情は落ち着いて、集中するのがわかった。

騒いでいた客も静かになった。

呼吸が聞こえたほど、静かだった。

のどかできれいな曲。彼女のクラシックを私は久しぶりに聴いた。

私は彼女のことを好きで、そして少しの嫉妬も持ってた。

音楽という表現手段が彼女にはあること、それで生活していること。うらやましかった。

あこがれてた。素直に泣けること。自分が感じたことを言わずにはいられない正直なところも。

ふと、隣を見ると、彼も彼女を見ている。

ああ、彼も同じなんだって気づいたとき、私は妙に納得した。

彼はこっち側の人間なんだと知ったとき、私は安心した。

演奏が終わり、私たちの席に歩み寄ってきた彼女は、彼を睨みつけ私には笑いかけ祝いの声をかけた。

「結婚おめでとう」

「実也……」

「言ったとおり、一生恨むから！ 覚えときなさいよっ」

「ミイちゃん、久しぶり」

「久しぶりっ。言ったとおり、一生感謝するよん。ありがとう！」

「どういたしまして」

「実也、今日仕事だったんじゃ」

「これくらいで驚いてるよーじゃあ、張り合いないなあ。皆も来てるんだけど」

「……は？」

舞壇の上に、今度はドラムやキーボードがセッティングされているのが見えた。

* * *

「はじめましてー。さっき演奏したミヤはトシの姉ちゃんだけど、俺らはミヤの職場の同僚です。よろしく！」

場慣れしているような挨拶でマイクを握る少年と、ドラム担当、キーボード担当、そして彼女が舞壇に上がった。

「うそあ！ Blue Roseだよーっ！ 本物の！」
「何でこんなトコロにいるんだあ？」

「そうそう。Blue Roseのコピーバンドもやってんの。だから、あんまり騒がないでやって。俺らは、新郎の、姉の、職場の、同僚。そこんところしく」

後ろではコントラバスがキーボードに合わせて調音し直している。
「えーと、まずは主役の2人に。結婚おめでとう！ 今朝、初めて聞いてビビったぜ。いや、トシに彼女がいるのはミヤから聞いてたけどさ。そうそう、今朝、ミヤが彼女から電話もらったみたいで。

電話を切るなり『俊くんが結婚しちゃう』…なんだそりゃ、って」
「圭ちゃん！ バラすなー」

「そのまま一人で行かせたら、逆方向の新幹線にも乗りかねなかったんで、俺らも付き添いでここまで来ちゃいました。来ちゃったついでに一曲演らせてもらおうって魂胆です」

客席中程の誰かが叫んだ。

「おーい！ 職場の同僚、もう1人いるんじゃないのっ」

「オレの勘からすると、中野ってヤツ！」

「おっ。お兄さん達、すげー鋭い勘。確かにもう1人いるんだけど、ちよっとノロマな奴だから。…あ、来た来た」

「誰がノロマだっ！」

「だってそーじゃん。楽器手配するのに時間くってたんだろ」

「相性にうるさいの、俺は」

「弘法、筆を択ばず」

「やかましっ」

コミックバンドか？ と誰かが言っつて、会場中が笑いに包まれた。そして。

自称「Blue Roseのコピーバンド」の彼らの演奏が始まった。

普段はCDで聴く曲を、生演奏で聴いたのはこれが初めてだった。

ふう、と私は息を吐いた。それが聞こえたらしく、彼は顔を向ける。「どした？」

「ミイちゃんて…やっぱ、ただ者じゃないよね」

私は泣いていた。

「ほんと、尊敬しちゃう」

人前で泣くなんて何年ぶりだろう。

彼が白いハンカチを差し出した。化粧がぐちゃぐちゃになる！と心配しているあたり、私は確かにこちら側の人間だ。彼女とは違う。

でも、それも悪くない。

今、演奏している彼女がまぶしく見える。それも、悪くないな。

「好きだなあ…」

「コラコラ、結婚するのは俺」「拗ねなくても」「拗ねるよ！」

その様子がおかしくて、私は口を開けて笑った。

泣きながら笑うなんて何年ぶりだろう。

それはとても幸せな気分だった。

番外編 ロンドンデリーの歌

そのライブの最中、どうしようもなく泣けてきて、私は声を殺す努力をしなければならなかった。

薄暗い客席で、本当は顔を伏せて大声で泣きたかったけど許されるはずもなく。それに目を逸らすこともできなくて、ステージを見つめたまま両手で口を押さえて、馬鹿みたいに私は泣いた。

込み上げる想いの名は判らない。ただ、

（よかったね　　）

それだけの気持ちで胸がいっぱいになる。

「おい、どうした」

隣の相方が慌てたように覗き込んでくる。私は涙を流し続けている顔で、にかつと豪快に笑ってみせた。

「なんでもないよ」

「なんでもないって、おまえ」

「うつさい。ちゃんと聴いてろ」

無理矢理ステージのほうを向かせる。

眩しい光を放つ場所には、ふたりの男女が立っていた。そして…。

また、涙が込み上げる。

（よかったね。ホントに。…よかった、よかったね　　…）

1

叔母さんのことは、もうよく覚えてない。

どんな顔でどんな声だったか、もう思い出せない。

叔母さんの息子 私の従弟 とは、今でもたまに会うけど、叔母さんとはもう何年も会ってないから。

* * *

叔母さん ひーちゃんを思い出そうとすると、彼女は必ず唄っている。きれいな声で囁くように、息をするように唄う。料理をしながら、公園で遊びながら、お風呂に入りながら。私と従弟が眠る布団の傍らで、子守歌を唄う。

そしてまるでそれが遺伝したかのように、従弟もよく唄っていた。喋るより唄うほうが多いくらいに。

「ひーちゃんたちって、いつも唄ってるよね」

幼い私がそう言くと、ひーちゃんは微笑んだ。

「おばさんがあの子に教えられるのはこれだけなの」

「うまく唄えるベンきょう？」

「ちがうちがう。そんな大変なこと、教えられないよ」

「じゃあ、なあに？」

「いろんな歌がいっぱいあるってこと。それらを唄うのは楽しいってことを、おばさんはひーちゃんに知ってもらいたい。こーちゃんも一緒に唄う？」

「うたうー」

ひーちゃんが教えてくれた歌のいくつかは、今も時折、喉から込み上げる。彼女がいるのはいつも、優しい思い出のなかだった。

ここだけの話、従弟 ひーちゃんは泣き虫だった。幼稚園でもいじめられていたようで、よく泣かされて帰ってきた。
「ひーちゃん、また泣いてるの？」

幼少時の3歳差は大きい。一人っ子の私は、この年下の従弟に姉貴風を吹かせたものだ。

「こーちゃん」

「まったくもー。男の子はそんな泣くもんじゃないって、おじさんも言ってたでしょ！」

ばかり、と頭を叩くとけーちゃんはびっくりするほど大声で泣き出した。小さい体で、声だけはでかいんだ、この子は。

手をつなぎ家に連れて帰ると最初に出迎えたのはおじさんだった。大声で泣き続けているけーちゃんの脳天にガン、と拳を振り下ろす。「うるさい」

と、その一言でけーちゃんを黙らせた。

「…」

声を詰まらせてけーちゃんは泣きやんだ。この父子はどこ

かおかしい。けーちゃんは泣き虫だけど、おじさんの力技には絶対に泣かなかった。

「そりゃ、ウチの息子だもん。赤ん坊の頃から躰てるんだよ」

とは、おじさんの言。

「おじさんは元々、静かなのが好きなの。音楽以外の騒音は許せないタチなんだ」

「おじさんもお歌、唄うの？」

「いや。おじさんは聴く専門。あいつらとは違う」

「あいつらって？」

「ひーちゃんとけーちゃんのことさ」

と、子供の私を諭すように笑った。

うちの本家は東京にある。本家、などと言っても、特別堅つくるしい家柄というわけでなく、単に家系図を上へ辿っていくと生存している人間で一番上は私のおじいちゃんになり、そのおじいちゃん

が東京に住んでいるというだけの話。

私の父はおじいちゃんの3番目の子供で、けーちゃんのおじさんが4番目の子供。

けーちゃんのおじさんは結婚して、奥さん（ひーちゃん）の実家の稼業を継ぐために地方都市へ引っ越したんだって。そこでけーちゃんも生まれた。

一方、私の父は仕事の特質上、引っ越しが多くて、一時けーちゃんと同じ町に住んでいた。あの家族との思いでのほとんどはそのときのもの。

幼心に不満だったのは、うちの親戚筋はひーちゃんのことをあまり良く思っていないことだった。

「あんな芸人崩れと結婚しおって」

「4男があんなミーハーだとは思わなかったな。…賭けてもいい、すぐに離婚する」

と、けーちゃんのおじさんを責める声がある。意味が解らなかったがひーちゃんの悪口を言っていることは判った。

ある年の七夕の夜、私はいつもみたいに、けーちゃん家に遊びに行った。

「ひーちゃん、けーちゃん、おじさーん！」

走って飛び込んでいくと、出迎えてくれたのはおじさんだった。

「いらつしやい、こーちゃん」

「ひーちゃんは？」

「奥にいるよ、行っておいで」

「うん！」

靴を脱いで玄関をあがり、音を立てて廊下を走り抜ける。

居間は照明が消えていた。さらに奥のキッチンのあたりが部屋の中を照らしている。「ひーちゃ……」

私は何故か声を抑え、足を止めた。

2人はベランダにつながる窓枠に並んで座っていた。

ひーちゃんはささやかな笹の枝を持っていて、それを空にそよがせている。枝には折り紙で作った飾りと短冊がぶらさがっていた。

そして唄う。

2つ並んだ大小の背中がこちらを向いていた。ベランダの手摺りの向こうには街のあかりが僅かに漏れて見えるだけで、2人の向こう側は夜が広がっている。キッチンの照明で2人の影ができて、ベランダに伸びていた。その、鮮やかな明暗。

ひーちゃんとけーちゃんは唄っていた。夜ということに気を遣っているのだらう、小さな声で、囁くように。顔を寄せ合い、まるで会話をするように唄う。

時折笑い合う、交互に唄う。それがとても自然に見えて、本当に歌だけで2人は会話しているようだった。

なんとなく、私は足をとめてしまった。

その様子がとても神聖なことのよう思えて、2人の空気を壊すことがとてもいけないことのような気がして、声をかけられなかった。

振り返ると、おじさんはキッチンのテーブルでお酒を飲みながら2人の歌を聴いていた。2人の背中を、ひとり眺めていた。

「……ッ」

途端に胸が辛くなる。

意味も解らず愕然とした。

そのときの気持ちを何て言おう。ひーちゃんに抱きつきたいのに、それはいけないことのように思えた。一緒に唄いたいのに、その空気を壊すことが怖かった。

おじさんはひーちゃんとけーちゃんを眺め静かに微笑う。

私はその気持ちがとてもよくわかった。わかってしまった。

回れ右しておじさんの隣の椅子に腰掛ける。するとおじさんは不思議そうに声をかけてきた。

「どうした、こーちゃん。まざってきたら？」

声にはせずに頭を振る。泣き出しそうな表情に気付いたのだろう、おじさんは優しい声をかけた。

「じゃあ、おじさんと晩酌する？」

「する」

短い返事に軽く笑って、冷蔵庫からジュースを出してくれた。

「…おじさん」

「ん？」

「こーこ、ひーちゃんとけーちゃんのうた聴くの好き」

好きなものは好きと簡単に口にしてしまえる程、私は子供だった。言わずにいらなかった、おじさんも好きでしょう？ 同意を求めたかったのだ。

ぼん、と、おじさんはけーちゃんをよく叩く手で私の頭を優しく撫でた。

「おじさんはこーちゃんの歌も好きだな」

そんなことが聞きたいんじゃない。おじさんは私の言いたいことが解っているはずなのに。

「こーちゃんはまだ自由に唄ってな。おじさんだけじゃない、ひーちゃんもけーちゃんも、みんな、こーちゃんの歌が好きだよ」

* * *

従弟が泣かなくなったのはいつからだろう。

私が東京のおじいちゃん家に引っ越した後だったから、はっきりとした時期は判らない。

ただ同じ頃、叔母さんがあの家を出たという話を聞いた。叔母さんを疎んでいた親戚筋はそれみたことかと嘲笑う。

2人の歌はもう聴けないのだろうか。

それはとても悲しいことだった。

「よー、香子カウコ、ひさしぶり。じーちゃんいる？」

夏休み初日に玄関を開け放つなり、靴を脱ぎ廊下を走る姿があった。

「圭！ あんた、中学受験するって話じゃん。遊んでていいの？」

「俺のことより自分の心配したら？ 高校受験」

減らず口を叩く従弟に昔の可愛らしい面影はもう残ってない。幼い頃はよく泣いて、私の後を着いて歩いていたくせにさ。

圭は夏休みになると私の家（つまりおじいちゃんの家）に遊びに来る。おじいちゃんは圭を気に入っていたし、圭もおじいちゃんのことを好きなようだった。近所の子ともすぐに仲良くなって夜遅くまで帰らないことが多かった。

よく笑い、よく喋る。口が達者でなまいきも利くけど、それが微笑ましくもある。

「男の子はいいわねえ」

私の両親もそんな明るい性格の圭が来ることを楽しみにしているようだった。……でも私は。

「香子、宿題教えろ！」

「それが人にモノを頼む態度か、コラ」

「教えてください」

「高いよ」

「おまえ、身内から金取るのかよ」

「お金じゃない」

「なんだよ」

「なんか唄って」

「確かに、高いな」

頓着無さそうに笑う。

何故か、このときの私はむちゃくちゃ機嫌が悪かった。

「圭、ひーちゃん、どこに行っちゃったの？」

ひーちゃんは家を出たっていう。どこに行ったかは教えてもらえない。両親は知らないと言う。圭のおじさんと圭だけが、ひーちゃんの行方を知っている。

圭がその話題に触れて欲しくないことは解っていた。だからうちの親もおじいちゃんも私も、圭の前でひーちゃんの名前は出さないよう結託していた。それでも私がそれを口にしたのは、圭の明るさが鬱陶しかったからだ。

「なんだよ、急に」

「平然としてないで！ むかつくから！」

「なに、怒ってんだあ？」

「私、…ひーちゃんと圭の歌が聴きたい」

そう言うのと、圭はやっと笑うのをやめた。挑むように睨みつけると、圭は目を逸らした。

圭は明るくなったって皆言う。でも私はそうは思わない。

圭は泣かなくなった。そして唄わなくなった。一緒に唄う人がいなくなっただからだ。

「それは無理」

「無理とか言うな！」

「…おまえ、無茶苦茶言ってるって判ってるか？ いらない人間と、どーやって唄えっていうんだ」

「圭はひーちゃんと唄いたいって思わないの？」

「…」

圭は喉を詰まらせた。勝った、と私は思った。

（ほら、やっぱり）

（あんたが望まないからだ）

（願っていながら、何もしないからだ）

圭が望めば、ひーちゃんはきつと帰ってくる。どんな理由があつても、例え一時期でも、きつと戻ってきてくれる。それなのに圭は何もしない。ひーちゃんがいないのは、圭のせいだ。

「ひーちゃん…帰ってこないの？」

「簡単には帰って来れないだろうな。自分から出て行っただから」「ひどい言い方」

「ひどくないだろ、別に。…母さん、こっちにも顔を出しにくいけど、自分ちも敷居が高いんだぜ。親父に稼業を継がせておいて自分が出て行くなんて、ってあっちのじーちゃんとばーちゃんも親父に頭を下げる始末でさ、今更、どのツラ下げて」

「圭はひーちゃんがなくて淋しくないのッ？」

その瞬間、圭の表情が揺れた。（あ…）

「…ごめんっ」謝ったのは私のほう。

「ごめん、…ごめんねっ」

手で表情を隠す圭の腕を掴んで、必至に謝罪した。自分の酷い物言いに気付いたから。

「いいって」

こちらに向けた顔は苦笑していた。その表情に、今度は私が傷ついていた。

（どうしてこの子は）

（我が俣を言わないんだろう）

しばらくして、圭はぼつりと口にした。

「俺は唄うことをやめてないよ。やめるつもりもない」

「…でも、ずっと聴いてない」

「そりゃ、これだけ離れて暮らしてるんだし、それに子供の頃みたいに毎日唄ってるわけにもいかないだろ」

と、苦い笑みを見せる。

（そついう、もののかな）

ひーちゃんと圭はいつでもどこでも、いつまでも、唄っているよ

うに思えた。それが彼らの一部なのだと、幼い私は思っていた。

「ひーちゃん、…どこにいるの」

「遠く」

短く、呟いた。

そのあと、圭は小さく唄ってくれた。それは幼い頃よく聴いた歌で、圭の声も変わらずきれいだった。ただひーちゃんの声がここには無い。そのことがやっぱり、少し悲しかった。

翌年、恒例通り夏休みに遊びに来た圭が言った。

「俺、一週間ほど知り合いのところに泊まってくる!」

「は?」

そのまま支度を始めた圭だが、圭を預かっている立場として簡単に受け入れられることではない。

「ちよつと待ちなさい! 誰のところ? 友達? 遊ぶだけなら泊まらなくてもいいでしょ?」

「心配いらない。できれば親父には言わないで。俺のケータイはいつでも出られるようにしておくけど、できれば連絡しないで欲しい。…あ、香子、帰ってきたら宿題よろしく」

「圭ったら!」

結局、肝心のおじいちゃんがそれを許したので圭は悠々と出て行ってしまった。

それから3年間、圭は夏休みになると遊びにきて、そのうちのー

週間はどこかへ消えてしまふという妙な習慣ができてしまった。

「ねえ圭、森村久利子って知ってる？」

宿題中の圭は手を止めて、顔を上げた。

「は？ …… ああ、歌手だろ」

「そう！ 私、最近、知ったんだけど、むちゃくちゃハマった、泣いちゃった」

お気に入りの歌手を圭も知っていたことが嬉しくて、私ははしゃぐ。

森村久利子はロンドンを拠点に世界的に活躍する日本人歌手。派手な活動ではないので知る人ぞ知る歌手だが、彼女をよく知らない人でも歌は耳にしたことがあるはずだ。

「すごく、きれいだよね。世界が。音楽にこんな感想抱いたの初めて」

「…」

何故かそのときの、圭のはにかむような笑顔を今でも覚えている。

「俺も好きだよ、森村久利子」

「へへえ、珍しいじゃん」

本当に珍しいことだ。圭に好きな歌手を尋ねると「堀外タカオと山村シンジ」という世代を疑いたくなる答えが返えるのが常だし、そのときの圭はJ・POPやロックにはまっていて、森村久利子みたいなジャンルを聴いているとは到底思えなかったから。

「森村久利子が昔、日本の芸能界にいたって知ってる？」

「えっ、うそ、知らない。どのくらい前？」

「15年前」

「圭が生まれる前じゃん」

「そう。レコード漁ると結構出てくるよ」

「ふーん、相変わらず、古い曲をよく知ってる」

「香子こそ珍しいじゃん。今まで聴いてたジャンルとはかなり違くない？」

「もうね、ひとミミ惚れ。聴いた途端、ぴしっとハマった。カレシにも言われた、珍しーって」

「香子のカレシはどんなん聴いてんの？」

「今はB・R・に大ハマリ中」

そこでまた、圭は声を抑えて笑った。

B・R・（ビーアール）というのは、最近話題になっている正体不明のロックバンドである。

「そいつ、B・R・のボーカルは女だって思いこんでるんだけどさ、私は男の子だと思うんだよね。声変わり前ならあれくらいの声でもおかしくないじゃん？」

「俺も男だと思ってたな。歌詞の一人称が“僕”だし」

「私もそう言ったらね？ “それは作詞作曲のKanonが男だからだ” って論破されちゃった。まあ、正解を知ることはいないんだけどさ」

「だな」

と、何故かそこでも圭は声を噛み殺すように笑っていた。

まあ、そんなこんなで圭が中学3年の冬、いろいろあつていろいろバレた。そのとき、圭は少し遠い存在になってしまったけど、今でもたまに私たちは顔を合わせている。

ただ、圭は今も、ひーちゃんのことを教えてはくれない。

「あ　　っ！！！」

突然、大声を出した私に、運転席の彼は両手で耳を塞いだ。信号待ち中だったのでそれもできたことだ。

「なんだ、突然大声出して…」

抗議してくる彼を無視して私はさらに叫ぶ。

「ラジオ！」

「は？」

「ラジオつけて、早く」

助手席からコンソールボードに手を伸ばすけど、ボタンが多くて全然わからない。あたふたしてる私を見かねて、彼は指ひとつでラジオをつけてみせた。

「なんなんだ？」

「今日は森村久利子が出るんだよ！」

午後１１時。この時間までには余裕で帰れると思ってタイマーをかけてこなかったのだ。涙が出るくらいの失態だけど、どうにか間に合ってセーフ、結果オーライとする。

それから３０分間、私は一言も喋らないでラジオに耳を傾けていた。彼も気を遣ってくれて、その間、話しかけてこなかった。

「ふいふい」

と、私は盛大な溜め息を吐いた。番組は終了して車ディーラーのCMが流れていた。

「…森村久利子の喋り声って初めて聴いたあ」

思わず口に出てしまう。想像していたより年配の人の喋り方だったように思う。気さくに喋って、くったく無く笑う。（こんな人だったんだあ）かなりフツーの人っぽい印象。

「いい声だな」

「ね」

彼の呟きに短く答える。

「あつと、ライブは来週だからね、忘れないでよ」

しかもさっきラジオで「ビッグゲストを紹介する」と予告されていた初日のチケットだ。思わずガッツポーズをとってしまうくらい嬉しい。それなのに、

「…忘れてた」

という彼の声。

「むっかーっ！ Blue Rose に付き合う代わりに、こっちにも付き合うつて約束でしょ！？ まさか予定入れたりしてないでしょーねッ」

「こらっ、揺らすな、運転中！」

Blue Rose はかつてB・R・という正体不明のバンドだった。その時節、「B・R・のボーカルはぜったい女だ！」と自信満々に言い張っていたこの男。結局、ボーカルは男だと判った今もファンをやっている。

私かというと、Blue Rose のファンと公言することはできなくなっていた。何故だろう。もちろん嫌いじゃない。けど、だからといって無条件に好きと騒げるほど舞い上がることもできない。

ずっと幼い頃から、好きな歌唄いがいた。それがいきなりテレビの中で唄い始めてもピンとこない。

複雑なのだ。

彼女の歌は生で聴いてもやっぱりきれいだった。

綺麗な景色を見たときと同じ、胸が痛くなる。とても大切なものを手に入れたような気分になる。滲み出る幸福感に、自然、微笑んでしまう。

10人ほどのバックバンドはアコースティックギターやヴァイオリンなどの弦楽器とピアノ、フルートやオーボエの管楽器が並んで静かだけど深い音色が響き渡る。

彼女は白い衣装を着て、祈るように両手でマイクを持ち、まるで語りかけるようにそっと唄う。40歳近いはずなのに稚い少女のようにも見えた。

唄っているときはまるで別世界の住人のような彼女だが、MCでは軽快に喋り、おどけたりして、客席を笑わせることもあった。

「ありがとうございます」

ひとつ曲が終わった後、彼女は小さく頭を下げた。

客席からの拍手が収まった後、いずまいを改める。

「えっと、じゃあ、そろそろゲストを紹介しようかな」

と、いたずらをする子供のように歯を見せて笑った。

「って言ってもね、実はアポとってないんだけどね。まあ、怒られることは覚悟のうえです」

バックバンドに休むよう手振り伝えて、彼女は客席を見渡す。

スウと息を吸った。

「圭くん、いらっしやい」

明るいステージの上から彼女は細い手を差し伸べる。照明の落ちている客席へと。

（え…？）

ざわめく観客席。ほとんどの客は彼女の視線を追うが、その先に何者か動く気配は無かった。

それでも彼女は手を差し伸べたまま動かなかった。

（けい…？）

さらに数十秒後、堪りかねたのか彼女がもう一度呼んだ。

「圭くん」

しばらくしてアリーナの一画がざわめいた。私の席からはよく見えないけど、周囲の数人に押し出されるように客席からはみ出した人影があった。自分の席のほうへ振り返り何やら言葉を発したが聞こえるわけではない。でも悪態を吐いたようにみえた。

「観念しなさい」

彼女がマイクごしに言うと、その人影　少年のようだ
はしぶしぶといった様子でステージに近づく。

帽子を目深にかぶった少年らしき人影が警備員の間を通り抜け、身軽な様子でステージに上がった。

薄暗い客席から一転、眩しいステージに招かれた少年は客席からの視線に臆することなく、自らを呼び出した彼女へ近づく。
何やら喋ったようだが、それは聞こえない。

彼女は用意されたマイクを差し出した。何故か慣れた様子で少年はマイクを構えた。

「…聞いてねーぞ」

苦々しい声がホールに響いた。

（あれ…この声…）

知っている声だった。

「だって、絶対断ると思って」

「あたりまえだって」

マイクを通しての不穏な、でも棘はない会話に客席がざわめく。
その少年は誰で、一体どんな関係なのだろうと。

「どうしても紹介したかったの」

彼女のきれいな深い声に、少年は顔を伏せた。彼女は笑った。

「ほら、帽子とって」

「…おぼえてる」

「忘れるって言われても、忘れない」

どうやら彼女のほうが上手なようで、少年の恨めしそうな台詞はあっけなくかわされた。

しょうがない、といった風に少年は帽子をとった。やわらかそうな髪が揺れて、ぶすつとした顔が明るみになる。

「ケイだ！」

と、最初に叫んだのは誰だったろう。

「えっ、BlueRoseの？」

「BlueRoseのケイだッ」

またたく間に客席が揺れる。どわつと音が聞こえたような気がした。

BlueRoseのケイ。彼のファンは今日の客層とはかなり違うだろうけど、普通に世間の動向に興味がある日本人なら知らないはずはない。

（圭…？）

それとはちよつと意味が違うけど、一応、私も知ってる。

「まじで？ BlueRose？」

BlueRoseファンの隣の彼も、上ずった声をあげた。ステージの上の彼女は静まらない客席を見渡して、

「私よりずっと有名だもんね」

と、笑う。

「でも紹介します」

彼女の凜とした声に客席がぴたりと沈黙した。

圭の肩に手を置く。

「小林圭くん。」

私の息子なの」

しん、と客席が静まりかえった。それが少しばかり長く続いたの
で彼女は首を傾げる。

「あれ、反応無し？　びつくりすると思ったのに」

呑気な台詞がホールに響いた。それでも静寂は続く。次にフォロ
ーするように圭が喋った。

「あ、本当だから。この人、俺のかーちゃん」

客席がどよめいた。悲鳴に近い声をあげる人が多数いる。その意
外な関係に誰もが信じられないといった様子で並んで立つ2人を見
た。

そして。

私はこの会場でおそらくただ一人、別の意味で驚いている。

（ひーちゃん…？）

今更ながら思い立つ。森村、というのはひーちゃんの旧姓ではな
かったか。名前は久利、ひさこ男の子みたいな名前がイヤ、とよくこぼし
ていた。

（ほんとに…？）

（…ひーちゃん！？）

どうして気付かなかったんだろう。CDから顔も声も知っていた
はずなのに。

（ちよっと待って、私が森村久利子ファンだったこと、圭は知って
るはず。ということは、あの馬鹿は自分のことだけでなく、ひーち
やんのことも隠してたってこと？　むかつくっ！）

…ううん、ちがう、そんなことより。

（やっと逢えた…）

幼い記憶のなかで、いつも唄っていた人。笑っていた人。突然い
なくなつて、誰も何も教えてくれなくて。

森村久利子は聴いてすぐに好きになった。でもまさかひーちゃん
だなんて、ぜんっぜん思いもしなかった。

私は、圭と一緒に唄うひーちゃんしか知らない。ベランダでひっ

そりと唄う、洗濯物を干しながら唄う、子守歌を唄うひーちゃんしか知らない。

ステージで唄うひーちゃんなんて、知らなかった。

（圭のバカタレ…。何も教えてくれないで）

「もういいだろ！ 紹介したんだから」

その圭は居心地が悪そうで、早くステージから降りたいようだった。

「だーめ。一曲、一緒に唄おう」

「な…っ」

圭は拒否の言葉を言いかけたが、その前に客席が沸いた。拍手と歓声が広まっていき、そこかしこで口笛が響いた。

「ちよつと待てって！」

本気で慌てる圭、しかしそれでも客席は静まらない。

「あのなあ」

これ以上、駄々こねて、白けさせるわけにはいかないのだろう、圭は観念したように大人しくなった。

「…音響さんが大変じゃん」

「大丈夫よ、前もって言っただけだもん。このトークの間に合わせてくれてるよ」

「ハメられた…。なに唄うんだよ」

「あら。圭くんとお母さんの持ち歌はいっぱいあるじゃない」

「は？」

「アカペラで。昔はよく一緒に唄ったでしょ」

圭が絶句したのがわかった。そのとき圭が受けたであろう激しい衝撃が私にも伝わった。

いつかの七夕の景色が私の頭を駆け抜ける。とても懐かしい匂いを、私は思い出した。あの鮮やかな光景を。

（圭…）

目頭が熱くなる。だめだ泣いてしまう。
溢れてきてしまう。

（ねえ、…願ったでしょう？）

でも圭はそれに手を伸ばさなかった。その願いを口にしなかった。
欲しいと言わなかった。それは馬鹿っていう。

私はひーちゃんと圭の歌が好きだった。

圭もそうなんでしょう？

ずっと、願っていたでしょう？

そして歌が響きはじめる。

それはいつか聴いた歌と同じで、アイルランドの古い民謡だった。
遠い昔と同じように、ひーちゃんと圭は唄う。ただ、圭の声は変わ
っていたけど、そんなこと気にならないくらい息が合って、それは
響いた。

客席からは物音さえしない。誰もがステージに目を惹かれ、そし
て耳を奪われた。光輝く場所に立つふたつの声だけが、空間を満た
していた。

（圭 …！）

この瞬間を、私より強く、願っていたでしょう？

（…よかったね）

並んで唄う2人に目をやるといつのまにかひーちゃんより圭のほ
うが背が高い。そんなことが馬鹿みたいに楽しい。私は笑ったはず
なのに、涙が溢れてとまらなかった。

「…小林？」

名前を呼ばれたけど、喉が詰まりそれに答えることはできなかつ
た。

「おい、どうした」

隣の相方が慌てたように覗き込んでくる。私は涙を流し続けてい
る顔で、にかつと豪快に笑ってみせた。

「なんでもないよ」

…この胸を突く幸福感を、今はまだ、言わないでおこう。
もう少しだけ付き合いを重ねて、小憎らしい従弟を紹介するまで
は。

番外編 K a n o n

夢を見たあの日を忘れない

はじめて誓った日

空を向いて風を受け止めて

明日へと翔る

誰にでもあるだろ。

若気の至り、やさぐれているときに出会った歌。

反抗期と世間では言うけれど、あの頃感じていたのは寄り辺の無い不安と苛立ちばかり、己の言動への嫌悪、この生に価値を見いだせず意固地になる気持ち それを溶かしたもの。

耳を通り過ぎるだけでなく、琴線に触れ、泣き出してしまった自分。それは共感だったり、共有だったり、未来を夢見せてくれたりする。支えとなり、孤独を埋めるもの。

誰にでもあるだろう。

俺にとってのそれがB・R・（ビーアール）だったように。

1

「へえ、B・R・なんて聴くんじゃあ、意外」

俺のポータブルプレイヤーを覗き込んだ隣の席の女子が話しかけてきた。5限開始まであと10分、もう一眠りできるというのに。普通、イヤホンして寝てる人間に声かけるか？ 空気の読めない女だ。

「…意外ってなんだよ」

相手は俺が起きてると判っていて声をかけているのだ。恥をかかせないために返事をしてやる。しかしそんな俺の気遣いにはきつと気付いてない、この女は馴れ馴れしい口調で失礼なことを言った。

「だってあんた、インテリぶってて歌謡曲なんて聴きませんってカ
ンジするもん」

「偏見だな」

「休み時間は大抵なんか聴いてるけど、それ、あからさまな人除け
だよ」

「悪いかよ」

判ってるなら話しかけるな、と言いたい。

「うっん、ただ聴いてるのがB・R・ってというのが意外だっただけ。
MHK講座でも聞いているのかと思ったから」

その台詞は可笑しくて、思わず吹き出してしまった。

「なんだ、それ」

「私も好きなんだ、B・R・」

「あ、俺、B・R・について誰かと語り合おうって気ないから」

「孤高のファンを気取ってるわけだ」

「おまえ、俺に喧嘩売ってる？」

そこで初めて顔を上げる。女は肘をついた手のひらに形の良い顎
を乗せてにつこり笑っていた。

「売ってる」

その、最悪な印象を与えた隣の席の女とは、何の因果か高校生活

3年間、同じクラスだった。

「だからって、何で大学まで同じなの？ 信じらんない、マネしないでくれる？」

この3年の間に「彼女」という肩書きがついた女は、模試の判定結果を右手に握りしめ、やっぱり机に伏して寝ていた俺の頭の上から遠慮無く声をかける。

「あんた、静岡って言ってなかったっけ？ 遠恋ってシチュが体験できると思ったのに何なの！？」

がたん、と派手な音をたてて前の席の椅子に勝手に腰掛ける。いつまで経っても煩い女だ。

「…いつとくけどな」

「なによ」

「俺ははじめから、第一志望は地元なの。マネした云々はこっちの台詞だボケ」

「私がマネしたって言うの？ 寒いこと言わないでくれる？ な、ん、で、私が好きこのんで大学行ってまであんたと顔合わせようとすると思うわけ？ よしんば、あんたとの腐れ縁が続いても、青春を謳歌する自由はあるべきでしょ？」

あーもー煩い。イチ言えばジユウ返ってくるんだから、下手に言い返すんじゃないかった。…なんて、思っていたら、

「2人ともうつさい！！」

と、同列視されてしまった。心外だ、それは。

「これだから倦怠期も過ぎてる夫婦は…」

外野の声に、煩い女は静まるどころか逆に胸をそらし声を高めた。「そうよ、旦那が単身赴任中に遊ばーって思ってたんだよ？ それなのに地元？ 同じ大学？ 私の青春を返せっつーの」

「…」

付き合ってられん。俺はまた机に伏した。イヤホンを片耳だけはめる。今は眠い。

髪をつんとひっぱられた。無理に起こす気はないらしく、力は入

つてない。伏したまま、問答の続きを返してやった。

「…おまえは、浮氣したいなら俺がいてもするだろ、勝手にやつてろ」

「しないよ」

その声も小さい。夫婦漫才にも飽きたのか。

「ともかく、まずは2人とも受からなきゃね」

「だな」

イヤホンの片割れを取られた。

「最近は何聴いてんの？…またB・R・？」

「ああ」

「そりゃ、私も好きだけどさ。あんたほど重症じゃないよね」

半分、寝かけている俺の髪をいじりながら囁く。それが思いのほか気持ち良く、日差しが暖かいのも手伝ってさらに深く微睡んでいく。

「B・R・の、何が好き？」

そう訊かれたので、

「…好きっていうか…」

そのとき初めて、俺はB・R・に関して他人に語った。B・R・の歌、その曲について思うところを。

B・R・の歌はジャンル分けすると、「ロック調J・POP」と言われている。夏にのみリリースされるためか夏の歌ばかりだし、曲も明るく賑やか。だけど。

俺は夏になるとB・R・の歌を楽しみにしている。けれど、それを聴いた後は悲しくなることを、聴く前からわかっていた。なぜなら。

淋しい、と叫んでいる。いつも。その歌は。

世評を聞いている限りじゃ、んなことは勿論言っていない。歌詞なんでものはどれも端的に書かれているから、描写は曖昧で、受け取りようによってはいくらでも解釈できる。

俺は、B・R・の歌はどうしようもない孤独を叫んでいるように

聴こえた。

B・Rの作詞作曲担当は、Kanon。

その人物が世間受けの良い詞曲を狙って書いているかは知らないが、ならば何故、そんな心情を埋め込む必要がある？ 俺のB・Rの詞の解釈が、大いに間違っているかともいうことは十分考えられる。けれど。

ぼん、とさほど大きくない手が俺の頭を軽く叩いた。

「あんたが気に掛けてるのはB・Rじゃないんだね」
予鈴が鳴った。

「Kanonなんだね」

2

ぴんぽん

と、ヤツの家のチャイムを鳴らしても、誰も出てこなかった。迎えに来させておいて、一体どういう見だろう。まったく。

割と古めの平屋に今は人の気配が無い。いつもなら、やたら元気な爺さんとやたら若いお婆さんがいるはずなのにそれもいないようだ。こんなことなら駐車場に車を置いてくるんじゃないか。徒歩1分でも徒労は徒労だ。この辺りは駐車禁止なのではないものはないのだけど。

夕飯は奢らせようと決めて、文句を言おうと携帯電話を取り出そうとした、そのとき、

「いらつしゃい。待たせてごめんなさいね」

と、背後からやたら若いお婆さん（もちろん、ヤツではない）が

現れた。近所に出かけていたというような軽装だった。

「こんにちは。今日、お爺さんもないんですか？」

「そうなの。それとあの子もね、ちよっとお買い物頼んじやったの。ちよっと待っててくれる？」

4年も付き合ってれば家族と気安くもなる。おばさんは玄関の鍵だけを開けると、扉を開けずに、庭先のほうへ行ってしまった。勝手に入ってる、ということだろう。

三和土を上がると微かに線香の匂い。いつもの癖で、奥のヤツの部屋へ進みそうになったが、ヤツは自分がないとき部屋に侵入されるのを大層嫌がるので（何を隠してるんだ？）、途中の居間へ入らせてもらうことにする。

ガラスが埋め込まれた引き戸を開け、敷居を跨いだあと、

「…あ？」

ぎよっとした。

床敷き（フローリングとはニュアンスが違う）の部屋に不釣り合いな黒革のソファ、応接間　　いや、それは見知った部屋なのだけど　そのソファの上で子供が寝ていたのだ。

（だれっ）

ツツコミにも似た驚きを心の内で思う（俺はあまり感情を表に出さない人間なのだ）。

おばさんが来るより前は玄関に鍵がかかっていたし、そうだ、おばさんは家に誰もいないと言っではいなかったか？

（居眠り強盗？）

そんな阿呆なことを想像してる暇はないというのに。

そっと近寄ってみる。中学生くらいだろうか、少年が四肢を投げだし毛布一枚で寝ている。どこかで見た顔だが気のせいだろう。起こすべきだろうか？　いや、でも気持ちよさそうに寝ているのでそれも忍びない。おばさんと呼んでこよう、とようやく思い立ったとき、へくち、と小さなくしゃみが聞こえた。寒いのだろうか、毛布にくるまったらまま、むくりと少年が起きあがった。

少年は寝ぼけているのか首を振って室内を見回す。その視線は壁掛け時計で一旦止まった。次にカレンダー、テレビ、新聞ときて、その視線は俺にぶち当たる。

「…だれ？」

おまえこそ誰だ。

まだ寝ぼけている少年と5秒ばかり対峙した。

気のせいと思っていたが、やっぱり知ってる顔だった。

そのとき、

「あらケイクン、来てたの？」

俺の背後からおばさんがやって来た。どうやら少年は強盗では無いらしい。

「うん」少年は目をこすりながら答える。「…じいちゃん？ 本返しにきたのに、いねーんだもん」

おばさんは奥のふすまを開け、台所で自分の仕事を始めた。声だけが返る。

「おじいちゃんは一昨日から旅行」

「どこ？」

「長崎」

「電話あつたら、カステラ食いたいつて言っておいて。抹茶の」

「はいはい。ところで今日は？ ご飯食べてく？」

「食べる。 香子は？」

「すぐ帰ってくるわ。でも出かけるみたいよ、彼氏が来てるから」

少年の視線が突つ立ったままの俺のほうへ戻った。ぽん、と手を叩く。

「あー、あんたが香子のカレシ？」

と指先を向けてくる。失礼なヤツだ。

おばさんが、やれやれと溜息を吐いた。

「ケイクンは初対面の人への態度を学びなさい」

「よく言われる」

「修さん、厳しいもんね」

「いや、親父じゃなくて、浩太とか…あ、ギターのやつ」

そこでやっと、俺は声を出すタイミングを得た。愕然とするあまり喋れなかったのだ、珍しいことに。

「小林圭？」

その見たことのある顔の人物の名前を呼んでみると、

「ん？」

と、頓着なく反応する。どうやら本人らしい。

「Blue Roseの？」

そう訊いた声は少し強くなってしまった。少年はぽりぽりと頭を搔く。

「あれ、まずった？」

一方、おばさんも意外そうに、

「聞いてなかったの？」

と言っ始末。

「何を」

誰から。

そして恐らくその張本人であろう人物が玄関からやって来た。

「ただいまーっ」

おばさんの娘　　なんて遠回しな言い方しなくてもヤツだ

が、ぱたぱたと駆けてくる。ヤツは居間の入り口で突っ立っていた俺をみとめた。「おっと」そのまま駆けてきた勢いで俺の横腹に体当たりする。とりあえずそれを受けとめた。

「ごめん、待った？」

「いや」

「すぐ支度するから。あ、母さん、はいコレ。　　っと、あれ、

圭、来てたんだ」

「よお」

ソファの上の少年が手を上げて返す。

「そっだ、おじさんから連絡あったよ、ひーちゃんがこっちにいる間に3人でひーちゃんの実家に行こうって。休める日、連絡しとき

なよ」

「わーった」

ヤツは伝言を終えてそのまま踵を返してしまう。あのなあ。とりあえず呼び止めるしかないだろう。

「小林」

「なに？」「ん？」

と、ヤツと少年が同時に振り返る。…確かに2人とも小林姓だ。不自然な沈黙の後、ようやく気付いたらしく、

「……あ」

と、顔を歪めたヤツの呟きが聞こえた。

*

「えっと」

と、かしこまってソファに座る小林（香子のほう）。俺も隣に座って、何故かBlueRoseのボーカル・小林圭と向かい合うことになった。

「私の従弟の圭。…圭、こっちは私の彼氏」

圭は興味深そうにこちらを覗き込んでくる。

「BlueRoseファンの？」

「そう」

そんなことまで話してたのか、おまえは。

「ども、小林圭です。香子のイトコ」

「…はじめまして」

一通りの紹介だけ済ませて、小林（香子）は支度があるから、と自室へ行ってしまった。

「えっと、今日は休みなんだ？」

「そう、先週ライブだったから、その息抜き」

「あ、それ行った。小林：香子と」

苗字が同じというのは不便なものだ。あいつのことを名前で呼んだことなんか無いのに。

圭はあぐらをかいた姿勢でにかっと笑った。

「ども。いつもの休みなら、みんなと遊びに行ったりするんだけど、今日は都合合わなくてさ」

「他のメンバーと一緒に遊びに行ったりする？」

「よく行くぜ」

そこで気になったことを訊いてみた。

「Kanonも？」

「……」

圭は表情を固めて黙ってしまった。

BlueRoseの作詞作曲担当、Kanon。この人物について衆目には一切明かにされてない。その歌を唄っている圭がKanonを知らないはずはないだろうから、口を噤んだということはやはり意識的に隠されている存在なのかも。

そもそもKanonという人物は存在しない、という説もある。

BlueRose（5人いる）のメンバーらが持ち寄っているとか作り込んでいるとか、複数のライターを起用しているとか。

でもKanonは一人の人間だと思う。統一された視点があるから。

圭が返答に迷っていたので、先ほどの質問は取り下げた。

「ごめん、実を言うと、俺はKanonに興味あるから」

「どっちの？」

「は？」

「っと、何でもない。どして？」

「どうしてって訊かれても…。あー、答えられる範囲だったら教えて欲しいんだけど」

「ん、いいよ」

「Kanonって子供じゃない？俺よりは下だと思っ」

「子供」

圭は目を丸くした。「なんで」

「なんでだろ。たまに、表現がストレート過ぎるっていうか、本音を隠しきれてないというか」

「あんた、面白いのな。売ってる歌は所詮、商品じゃん。本音も何も、作ってるやつは仕事だ」

「君が言つと重みがあるなー。でも、本心じゃないんだろ」

「ばれた？」

「文字による自己実現は人生の切り売りだと思ってるんだよね、基本的に。そういう観点で聴くと、子供なのかな、って　あ、悪い意味じゃない」

「ということは、俺がKanonだという可能性も有りか」

面白そうに笑う。

「それは違うみたいだ」

「はつきり言っなあ」

「なんとなく」

そこで横やりを入れてきた声があった。

「こいつはKanonに傾倒してんのよ、昔っから」

着替えを済ませて戻ってきた小林（香子…ってあーもう面倒くさい）が俺の隣に座る。

「それにあんたの勘は当てにならないじゃん、B・R・のボーカルも結局男だったわけだし」

「それを言っな」

それは俺の人生の黒歴史。

出かける時間だったので、その場を後にする。圭は「またな」と手を振った。殺人的に忙しいと聞く芸能人である圭とまた会うこと

があるかは、ちょっと疑問。でも手を振り返しておく。

「最初の質問だけど」

と、圭が声をかける。

「なんだっけ？」

「Kannonは俺達と遊びに行くことはないよ」

「…そうか」

「俺らが押しかけることはあるけどな」

「そうか」

よかった。そう思えた。

どこかでKannonの心配をしていた俺は、もしかしたら自惚れていたのかもしれない。

Kannonの歌を唄う圭が、Kannonの気持ちを解ってないはずなのに。

*
*
*

赤い赤い西へ走っていく雲に

黒さえ ついていったから

君は白い壁の向こうへ

僕だけ 青い空を夢見た

外へ出ると夕暮れ時だった。秋らしい赤い空が広がっている。ふと、Blue Roseの歌の一節を思い出して苦笑した。なんだかんだ言っても、やはりBlue Roseの歌が好きなんだろな、俺は。

ブーツを履くのに手間取っている小林（香）を待つ。先に外に出て門柱に背をかけると、そこに「小林」と書かれた表札を見つけた。いや、ここへ来る度に見ていたはずのものが。

小林香子と小林圭の関連については少しも、想像さえしなかった。よくある苗字だし。芸能人なんて所詮、メディアの中の存在だし。実際に会ってみれば、意外とフツーで。まあ、それを芸能人一般に当てはめるのはどうかと思うが。

「Kanonは孤独だ、ってやつ？」

やっと外に出てきた小林が言う。

「ん？」

とりあえず時間が迫っているの、駐車場に向かって歩き出した。少し遅れて小林がついてくる。

「圭に言いかけてたでしょ？ さっき」

「…ああ。そうだな。やっぱり今でも、俺が受け取るKanonの歌は“淋しい”って言うてるように聴こえるよ。それと」

「それと？」

「世界はきれいだって、言ってる」

「…なにそれ」

おそらく茶化そうとしただろう小林は、俺の笑わない顔を見て、そう言うに留めた。いい判断だ。

手を差し伸べると小林は珍しく素直にそれを取った。駐車場まではあと2ブロック。並んで歩くために歩幅を合わせてやる。

Kanonは独りだ。孤独を感じてる。でもそれ以上に己を囲む

世界が愛しい、それは歌詞の端々から感じられる。その美しさに慰められているのだろう。

この、赤い空と町と、流れていく雲を、どこかで眺めているのだろう。

「でも、ま、今はそれほど淋しいってわけじゃないかもな」

「どうして？」

小さく呟いた俺の言葉を耳ざとく拾って、小林は俺を見上げる。

それに視線で答えてやって、

「圭たちがいるからさ」

背後に目をやると、夜の空が迫ってきていた。目眩を覚えるようなコントラスト。

きっとK a n o n も、この空を見上げているだろう。

番外編 Blue Rose

それはむかし

さけぶ声も言葉もまだ無く

両手を広げることさえ知らない

幼い 月のきれいな夜でした

その時間だけはいつも希玖の世界だった。

夜3時。

暗い闇が続く病院の廊下を希玖は歩いている。自分の影と足音を従えて。

目的があるわけじゃない。ただ歩き回るだけ。最近、希玖はいつもこの時間に目が覚める。昼間はほとんど起きていられないのに、この時間だけは自然と目と頭が冴えて、一日の中で最も身体が活動的になる。 当たり前のことだが、人間は起きているときしか歩き回れない。何故歩いているのかなど愚問である。

そつと足を止めると、足音がやんだ。そうすれば世界が無音になることを希玖は知っている。ここでは自分ひとり、他には何も、誰も存在しないから。

希玖は笑った。

希玖にとって、その「足音を止めた瞬間に無音になる」ことが楽しい。だから少し歩いてはわざと足を止める。また歩き出して、また足を止める。その繰り返し。

昼間に起きるとすぐに検査に回される。そのときの機械の音がうるさく耳障りで、希玖は検査が嫌いだった。それに比べたら、この

夜の世界は、この無音そのものが心地良い。

それなのに、

「！」

この無音を打ち破る音が、窓の外、遠い闇から近づいてきた。背筋が寒くなり、立ちつくす。無駄だと判つていても逃げられる場所があるか探してしまふ。

耳を瞑れないのは何故？ 目を瞑つたら何も見えなくなるのに、耳を塞いでもその音が聴覚に届いてしまふのは何故？ その音から逃れることより、先生から逃げるほうがどんなに簡単だろう。

希玖は独り廊下で、硬く目を瞑り、無駄だと判つていてもやつぱり耳を塞いだ。

（壊さないで）

苦しい胸を押さえたかった。けれど両手は耳を塞いでいるのでそれはできない。仮に胸を押さえられたとしても、ちつとも楽にならないと判つていた。

（その音は苦しいんだ）

そのまま独り廊下にうずくまっていると、その音はまた闇へと遠ざかっていく。それを聴覚の限界まで聞き届けてから、希玖は自分を奮い立たせるように立ち上がった。

今日はこれ以上出歩く気にはなれなかった。病室に戻ろうと、希玖は歩き始める。今度は足音を止める遊びはしなかった。

階段を降り、昇降口を通り過ぎようとしたとき、希玖はぎよつとした。

そこに、椅子に座る人影を見た。

「だれ？」

希玖が呟くと、それが届いたのか人影はぴくりと動いた。ぎこちない動きで、何故か、椅子ごと振り返る。希玖は一瞬、驚いたがすぐに理解した。人影が座っていたのは車椅子だった。

希玖よりいくつか上だろう。12、3歳の少年は、立ちつくしている希玖をみとめると歯を見せて苦笑する、本当は禁止されている夜間徘徊を共有する仲間へと。一方、希玖は、この夜の世界ではじめて遭遇した他人に驚き、見開いた両眼で少年をじっと見つめた。

「こんばんは」

先に声を発したのは少年のほうで、「どうした？　こんな遅くに慣れない動作で車椅子を操る。」

夜の廊下で人の声がある、すべてが凍り付いたように眠る空気の中、そのやわらかい笑顔は酷い違和感があり、希玖は戸惑いを覚えた。

「お、おにいちちゃんこそ。どうしたの？」

「僕は月を見てた」

「月？」

ほら、と希玖を促して窓の外に目を向ける。それに倣い、見ると棟の高みに満月が浮かんでいた。

希玖は息を飲む。それは思わず目を細めるくらい、眩しいものだった。夜空の雲さえ、鮮やかに染めるほどに。さらに窓に近づいて下を覗けば、中庭の樹木がくつきりと、影を芝に映している。振り返ると、自分の影が廊下に伸びていた。ずっとそこにあっただはずなのに、まるで突然黒いおぼけが現れたように希玖は驚いた。本当に自分の影なのか確かめようと手足を動かしてみる。やっぱりその影は希玖と同じように踊る。

病室を出たときに影が落ちているのは気付いていた。それなのに希玖は、たった今、月が夜空に浮かんでいることに気付いた。

「僕の部屋からじゃ、ちやうど見えないんだ」と、少年は言う。

「見えないのに月が出てるってわかったの？」

「だってこんなに明るい」

月そのものが見えずとも、その光はいたるところに降り注いでいる。

「おかげではじめて一人でコレに乗れたよ」

と、苦笑しながら車椅子の肘掛けを叩いた。「そっちは？」

「ぼくは…サイレンが聞こえたから」

希玖が答えると少年は首を傾げた。

「救急車？　そういえばさっき鳴ってたね」

「ぼく、あの音、嫌いだ」

（だって、あの音を聞くのは苦しい）

（どうしてあんなサイレンを、わざわざ鳴らすのだろう）

「ねえ、名前は？」

「キク」

「いくつ？」

「8さい」

「キクは救急車が走ってるのみたことある？」

「…ない。だって、ぼく、ほとんど外に出ないもん」

言い訳するような希玖に、了解したように少年は頷いた。

「知ってる？　救急車が走るとね、他の車が全部道を空けてくれるんだよ」

「え？」

子供でも知っている一般常識である。しかし希玖にはそれがどういうことなのか解らなかった。救急車はもちろん知ってる。ここは救急病院では無いのでサイレンを鳴らした救急車が乗り込んでくることは無いが、知識としてその役割は解っているつもりだった。

「他の車がよけるの？　どうして？」

「もちろん、早く病院へ行かせるため」

「え？　それでみんなだいてくれるの？」

「そう。救急車のために、みんな道を譲るの」

「うそだあ」

「ほんと。はじめて見たときびっくりした。きれーに車がよけてくんだ。これってすごいと思わない？ 救急車で運ばれていく人のために、みんなが協力してるってことだね。見知らぬ他人がだよ？」

「うん、…すごい！」

「たくさんの車が、救急車にがんばれ〜って言ってるみたいだった。普段はたまたま同じ道を並んで走ってるだけの他人の車だけど、そのときだけは一緒になって助けようとしてるみたいで、ほんとにびっくり」

その様子を想像して希玖は呆然とした。

実は希玖も一度、救急車で運ばれたことがある。いつもの発作だ。そのときもやっぱり、たくさんの人の協力があつたのだろうか。それを思うと胸が熱くなった。

「キクは救急車の音が嫌いなんだ？」

「う、うん」

ついさっき言ったことだったので希玖は頷く。けれど、今の話を聞いたら、嫌いと言ってしまうのは何だか善くないことのように思えた。

「なんで、嫌い？」

「すごく、嫌な気持ちになるから」

「どうして？」

「えっと…」

少年のやわらかい追求に希玖は言葉に迷う。

「だって…」サイレンの音を思い出した、それを振り払うように頭を振る。（ほら、やっぱり嫌な気持ちになった）

「あれが聞こえたら、ぜつたい、誰かが苦しんでるってことでしょう？ ぜつたい、誰かが痛がつてるんだ、そんなの聞きたくないよ」

「あのサイレンが聞こえたから、救急車が来るのが判って、みんな協力してくれるんだよ」

「……そうなんだ」

希玖は釈然としない。けれど、あのサイレンはただ鳴らしてるだけではないことを理解する。それじゃあ、仕方無いんだと思う。

「キクは、嫌な気持ちになるだけ？」

「だけ、って？」

「苦しんでる誰かに、他に何か思う？」

「……」

そのサイレンは苦しんでいる人を運ぶ音だ。

胸を痛めているであろう家族。助けようと、車の中でも動き回る人たち。それに協力する人たち。遠くその音を聞いて　　その状況を想像して、耳を塞ぐ自分。

希玖は目を閉じた。

それはとても優しい世界に思えた。

「キク？」

「うん　　：早く、よくなればいいな、って」

希玖は前を向いたまま呟く。少年は破顔する。

「救急車の音を聞いた人たちがみんなそう祈ってるとしたら、それってすごい力だ。ねえ、その音にキクが苦しむことない。いつも通り、辛い思いをしてる人が早くよくなりますように、心配してる人が早く安心できますようにって祈ればいいんじゃない？」

「おにいちゃんも？」

「もちろん、僕も。それからもっとたくさんの人たちも。　：すごいだろ？」

どこか得意げに言う少年に、希玖は力強く頷いた。

「すごい」

見えない力を確かに感じた。希玖はこの小さな病院のなかしかほとんど知らないけれど、もっと広い世界ではたくさんの人がいて

そのほとんどは他人だけど、それでもたくさんの想いが見知らぬ他人にも向けられている。

「こんなにいっぱいの人が祈ってるんだから、苦しんでる人も、きつとよくなる」

「すごいね！…ぼくはここから出られないけど、外はとっても、たくさんの人たちが思い合ってるんだね。外はそんなんだね」

少年の顔が歪んだ。

「キクはどんな病気？」

そう問われて、希玖は頓着無く答える。まるで他人事のように。

「ぼくもよくわかんない。でも、すごく疲れやすくて、起きてられない病気なんだって」

実際、希玖は生まれて8年経っても自分の病気をうまく理解できないでいた。両親や医師は大仰に言う。確かに、時々、意識を失い倒れることもあるけど（これを発作と言うらしい）、他の病気の子のように苦しむことも無いし、身体が痛いと感じることも無い。

「起きてられない？」

「他のヒトより、たくさん寝てるみたい」

そう、ただそれだけのことだ。

「みたい、って」

「だってぼくはぼく以外の身体を知らないもん。自分が他人とどう違うか、なんてわかんないよ」

少年の声に非難が含まれたのを敏感に聞き取って希玖はむきになった。

「ガクって、からだの力が抜けることがなくて、お外が明るいうちずっと起きてるなんて、そっちのほうがおかしい」

黙って聞いている少年にさらに言葉をぶつける。

「そういう人たちは、ぼくが発作を起こしたらびっくりするし、慌てたり、心配するんでしょ？ だから、ぼくはここから出ないほうがいいんだ」

「キクさあ」

「ん？」

「救急車の音を聞いて、早くよくなればいいなって、思うだろ？ さっき言ったよね」

「うん」

「運ばれていく人は、ひどい怪我なのかもしれない、事故に遭ったのかもしれない。痛く苦しいかもしれない。…心配だよな」
「うん」

素直に頷く希玖に少年は優しく笑ってみせた。

「キクが見もしない外の人たちを心配してるんだ。外の人たちがキクを心配してもいいだろ？」

「」

希玖は息を止め瞠目する。

「キクが発作を起こして倒れたら、まわりの人はびっくりして、慌てたり、心配すると思うよ。なにか病気なのかもしれない、大丈夫だろうか、…早くよくなればいいな、って」

希玖は泣きそうに顔を歪ませた。

「でも」

「このこと、外は、違わないんだ。キクも同じなんだ、助け合ってる大勢の人たちのうちのひとり」

「…」

「どうしてだろう、キクはまるで自分が違う世界に住んでるような物言いをするね」

「だって、…違うもん」

「何が違う？」

「…このこと外は違うよ、ここは ぼくは、ぼくの身体は不自由だもん」

「何と比べてるの？ キクはキク以外の身体を知らないんだろ？」

「！」

痛いところを突かれてかカツとなった。そのまましばらく、笑っているのか怒っているのか計れない表情の少年と向き合う。気まづくなつて希玖は目を逸らす、その瞬間、希玖は少年の笑顔に目を奪われた。

「願ったことは叶う。キクはキクの好きなことを、やりたいことをやっていいんだ」

「……」

希玖は、さも不思議なことを言われたというような表情を見せる。
「願ったことって？」

「そんなことも他人に訊いてるようじゃあ、まだまだなあ」

「願うって、なにを？」

「例えば、毎週月曜に裏のコンビニに立ち読みに行くとか、毎日1時間、外を散歩するとか」

「は？」

「大人になったら学者になるとか宇宙飛行士になるとか」

希玖は呆れた。次に馬鹿にしているのかとそっぽを向く。

「…そんなの、ぜったい無いよ」

少年はくすりと笑った。

「ブルーローズ、というやつだね」

言葉が聞き取れなくて、希玖は訊き返した。

「…なに？」

「ブルーローズ。そのまま日本語にすると　青いバラ」

「青いバラなんて見たことないよ？」

「うん、無い。だから、あり得ないっていう意味があるんだって」

「アリエナイ、って？」

「さっきキクが言った、ぜったい無いってこと」

青いバラ　ぜったい無い？

希玖は首を傾げた。想像してみると、なんとなく有りそうな気がしたから。

そんな希玖の心中を察したのか少年が言う。「実は見つけてないだけで、どこかにあるかもしれないよね」

「あり得ないものなんて無い。できないことなんて、無い。…だって、そんな未来は無いって、どうやって証明すればいい？　今、できなくても10年後にはできるかもしれない。その未来のために今何か始めることは無駄じゃない。　無いことより、有ることを証明するほうがずっと容易いんだから」

迷いの無い目が、ついと希玖へ向く。

「…僕にそう教えてくれた人は、生まれつき病気で、キクみたいにずっと病院にいる人だった」

「病気だったの？」

「うん、今も病院にいる。…その人は、幼い頃の願い事はぜんぶ叶ったって言ってた。いろんな人と出会えたから頑張れたし、諦めずにいられたって」

「ぼくは、…誰かと知り合うってこともあんまりないし」

「それはキクの気持ち次第じゃない？ この病院の中にだって、数十人はいるだろ？」

希玖は首を横に振った。

「昼間はほとんど寝てるもん。起きても検査ばっかし」

「…僕はキクの病気のこと知らないから勝手なことを言うけど、同じ病室の子と話す時間もないの？ それ、先生に相談できない？」

「なんて相談するの？」

「そうだな。今、こうやって夜中に起きてる代わりに、昼間に起きるにはどうしたらいいの？ とか」

「そんなの、どうもできないよ」

希玖が言くと少年は吹き出した。呆れ半分、感心半分で眉を顰める。

「卑屈だなー、キクは」

悪く言われたのがわかったので、希玖は頬を膨らませた。

「どうにかできる、できないは、先生に訊いてみれば判る。そうだろう？」

そんな簡単なことさえやらなくてどうするの？ 言外にそう問われて希玖は軽く自己嫌悪した。さらに少年は笑いながら言う。

「この病院だけでも数十人もいるんだ。おじいちゃんおばあちゃんから、キクくらいの子まで。それだけの人と出会う機会がある」

「…そうしたら、おにいちゃんの友達みたいに、お願いが全部叶うのかなあ」

「叶うよ」

「……」

希玖は窓の外を見た。そこには月がある。この夜の、希玖の世界に当然のように存在し、世界を照らす。それは手を伸ばしても届かない、それは解ってる。

（もしかしたら、こんなひとりの世界を楽しんでる場合じゃないのかな）

手を伸ばせば届くものは沢山あるのかもしれない。例えば、いつか聞いた女の子だって。

「……ぼくね、同じ歳のイトコがいるんだ」

「うん？」

「会えるかな」

「会ってみよう」

「うん……」

それが何へ繋がるかは、まだ判らないけれど。

今、確かに、少しだけ未来が見えた。何でもできる気がした。未来は自由だ。けれど自由とは、足場が無いこととも同義である。

「でも、わかんない……、なにができるのかもわかんないし、なにがしたいのかも、わかんない」

「じゃあ、キクはこれからブルューローズを見つけるんだ」

「……なに？」

「花を見つけたら、それを摘むことはできる。……ぜったい無いって思われてるその花を探し出すことのほうが、きっとずっと難しい」

少年は重ねて言った。

「夢を叶えることより、夢を見つけることのほうがよっぽど難しいのかもしれないね」そして微笑む。「キクもその花を早く見つけられればいいけど」

「ブルューローズ？」

「そう」

青い薔薇。

「……ブルーローズ」

希玖はもう一度、呟く。それは小さく、力強い声だった。

月はもう見えない

東の空から、まばゆい光が世界を照らし出したので

* * *

「おにいちゃん、なまえ、なんていうの？」

希玖がそう尋ねると少年は、ああ、と何気なく応えた。

「僕は今、名前が無いんだ」

「なまえが無い人なんているの!？」

「実は、おばけなんだ」

「えっ」

「だから名前も無いんだよね」

うんうんと神妙に頷く少年に、希玖は恐る恐る訊く。

「死んじゃったの？」

「そう」

「ほんとに？　ぼく、はじめておばけの人と話した!」

「僕も、こんなに喋ったのは本当に久しぶり」

「じゃあ、死ぬ前はなんて名前だったの？」

しつこく名前を訊く希玖に、少年は困ったように笑った。

「……じやい亨」

番外編 夏の日の

1 日辻篠歩

冷房の効いた部屋の中にも、体から吹き出るような熱は残っていた。蒸し暑い炎天下をここまで歩いてきたのだ、冷めるまでには時間がかかるのだらう。テーブルの上に出されたグラスからは水滴が落ち、コースターを濡らしていた。それにしても暑い。

季節は夏だった。

日辻篠歩ひつじさほは、とある事務所に来ていた。訪れたとき、そこにいたのは一人。ショートヘアのあいだから見える赤いイヤリングが印象的な女性だ。冷房対策なのか、ゆったりとしたスカーフを首に巻いていた。

「あの、本当にあなたが、所長さん……ですか？」

「ええ」

目の前に座る女性は書類から目を離さずに答える。難しい表情をしているが、それは篠歩の質問が気に障ったからではなく、書類の内容に対してのものだ。その証拠に、彼女は篠歩が持ち込んだその書類を見るなり表情を曇らせ、大きく溜め息を吐いたところだった。「私が所長です。それがなにか？」

「あつ……え、いえ。お若い方だなと思って」

おっと失礼だったかな、と口を塞いでも、当の本人は「よく言われます」と、涼しい顔だ。

おだてられたわけではないことは本人も解っているらしい。それくらい、所長という肩書きを持つには若い。目の前の女性は篠歩よりずっと若かった。まだ20歳そこそこだろう。

先ほど受け取った名刺には「A・C・O・所長 阿達史緒あたしお」とある。

篠歩は職場の上司にこの事務所を紹介された。上司が世話になったというのは3年前だというので、少なくとも3年前からこの事務所はあるはずだ。ああ、そうか。もしかしたら、この若い所長は2代目なのかもしれない。ところがどっこい。

「私は4年前からここの所長をしています」

「は？」

「この業界の中ではまだまだ駆け出しですが、少しは実績があるつもりです。けど、もし、若い所長がご不満ならどうぞお帰りください」

「いえ、…そんな」

「どちらにしろ今回はお役に立てませんから」

「え？」

ばさつ、と書類がテーブルに流れた。それはついさっきまで阿達が読んでいた依頼書である。

「去年から時々いますよ、あなたと同じ依頼に訪れる人」

「やっぱり!？」

「うちだけでも、あなたで6人目です」

6人。

それが多いのか少ないのか、篠歩には判らない。

「うちだけ、というのは？」

「ひと月に一度、30社くらい集まって情報交換をするんですけど、やはりどこもこの依頼を一度は聞いているようです」

「それって、すごく。多い、ですよね？」

「ええ。私を知るなかでも、ここまで過熱状態な案件は初めてですね」

「わあ…。やっぱり、どこも捜してるんだ」

「もう3年目、でしたか。これまで多くの調査機関やマスコミが動いてきているはずですが実のある報告を噂でも聞きません。わかります? それだけの組織が動いているのにもかかわらず、すべて無駄足で終わっているんです。ですから、私たちのあいだでも

不文律に」

阿達は睨み付けるような視線を篠歩に向けた。

「『B・R・』には手を出すな」

2 日阪慎也

「え？ 祐輔、行かないの？ 来週の鎌倉」

日阪慎也は目の前の旧友に向かって声を強くした。

目の前の旧友

やまだゆうすけ

山田祐輔は、このクソ暑い日にコーヒートをホ
ットで飲んでいる。貧弱な冷房の店の中、見ているほうが暑くなる
ハタ迷惑な注文だった。それなのに本人はいつもと変わらず涼しい
顔で、視線だけで頷く。

「幹事には最初から断りを入れてありますよ」

「てつきり、行くもんだと思いこんでた。なにか用事でもあるのか
？」

「もちろん仕事です」

音大時代に同級生だった祐輔は今ではピアノ教室を営んでいる。こ
の性悪に子供の相手が務まるのか甚だ疑問だったが、性悪であるこ
とと同じくらい器用でもあるので結構上手くやっているらしい。

それから同じく同級生だった男が留学先から帰国し、地元の鎌倉
で小さな演奏会を開くという。それが来週の日曜日。同窓会もかね
て集まるうという話になっていた。

「土日は教室も休みだろーが」

「あれ。鎌倉の話も週末だったんですか？」

「おまえ、まともにメール読んでないだろ」

「安心しました。集まる十数人全員が平日の昼間から仕事もしてなかったら、同級生として気が滅入りますからね」

「おい……」

笑顔でキツイ物言いはいつものこと。慣れているつもりでも慎也は絶句してしまった。

「ていうか話を逸らすな。最初から行く気が無かったんだな？ただでさえ付き合い悪いんだから、こういうときくらい顔出せよ」

「すみません。夏場は出掛けるのが億劫なので」

「年寄りみたいなこと言うな」

「さすが年寄りが言うのと重みが違いますね」

同級生といっても慎也のほづが3つ年上である。またも返答に窮したのは慎也のほうだった。

「……沙耶と予定があるとか？」

「だから、用事は無いと言ってるじゃないですか。……まだ、ね」

「じゃあ」

「暑いのは苦手なもので」

「だったらホットなんか飲んでんじゃねー！」

どこまで本気が判ったもんじゃない。なにひとつ本音など喋っていないのかもしれない。もしかしたら、慎也を相手に遊んでいるだけなのかもしれない。山田祐輔はそういう人間なのだ。

（俺、なんでこいつの友達やってんだろう……）

そう思うこともしばしば。

「大声出さないでください。閉め出されますよ」

誰のせいだ、と言いかけると、祐輔は窓の外を指で示した。「我らがお姫様たちの登場です」

店の外の通りを見知った2人が並んで歩いてくるのが見えた。元^{もと}村沙耶^{むらさや}と三高祥子^{みたかしよこ}。2人ともこちらには気付いていない。なにを話しているのか、楽しそうに笑い合っていた。と、思ったら、やはり祥子がこちらに気付いて手を振る。慎也はそれに応えた。

沙耶は慎也の実妹で、祐輔の恋人だ。そして祥子は慎也の恋人だった。沙耶と祥子を引き合わせたのは慎也だが、2人とも「社交能力」に関してはある意味欠陥があったので、こうして並ぶ姿を見るのは不思議な感じがした。

「あの2人があそこまで仲良くなるとは思わなかったな。とくに、沙耶は人見知りするほうだし」

「沙耶は他人に興味がないだけです。どちらかといえば、人見知りは祥子さんのほうでしょう」

「容赦ねえな」

「違いましたか？」

「いや、合ってる」

やはり余所目にもそう見えるのか、と慎也は確認した。

祥子の人見知りは、彼女が持つ特殊な能力が一因となっていることは間違いない。2年にわたる付き合いのなかで、その能力が少なからず原因となったすれ違いや喧嘩もあった。それでも今もそばにいられるのは、お互いが寄り合おうと意識した結果だ。そしてそれはお互いの根幹にいる共通の人物のおかげでもある。それらの幸運に、慎也は感謝していた。

軽い挨拶のあと2人は席に着いて、そろってアイステイーを注文した。

「山田くん、早かったのね」

「私たちより遅いだろうって、話してたんですよ」

沙耶と祥子が笑い合う。沙耶の喋る速度は遅い。祥子と比べるとその異様さが余計目立つが、本人同士はウマが合っているようだ。

「来たのはついさっきです」祐輔はすまなそうな顔をして言う。「祥子さん、今朝は突然電話してすみませんでした」

「いえ、私も午前中は買い物する予定だったから。沙耶さんと色々回れて楽しかったです」

今日は昼食を4人でと、12時に集合予定だった。祐輔と沙耶は早くに落ち合う予定だったが、祐輔に急用が入ったのだという。

「私、慎也と会うのは久しぶりな、気がする」

沙耶が言った。

「そうだった？」

「お母さんがたまに訊いてくるの。慎也は相変わらずか、って」

沙耶は実妹だが両親が離婚したために籍は離れている。沙耶を連れて出て行った母親とも、そういえば久しく会っていない。

「そう、慎也は相変わらずの巡業生活ですね」

「うるせーな。…あ、三高まで」

祐輔の冷やかさに祥子までも笑っている。

慎也の主な収入はピアノ弾きのバイトだ。バーやレストラン、大きなところではショッピングモールのホール、遊園地のイベントなどもある。都内だけでなく近隣の県も回って慎也は仕事をこなしている。つまり、巡業だ。

「それにしても、圈内とは言え、そんな転々とする仕事では、付き合ってる祥子さんも大変ですね」

さつさと見捨てても構いませんよ、という響きで祐輔が冷やかす。

祥子は軽く笑って返した。

「そうでもないですよ。私のほうは時間に融通が利く仕事だから」

「でも、このあいだは休み取れなかったじゃん」

「あのときは長期の仕事が入ってたの」

その会話を聞いていた祐輔が口を開いた。

「祥子さんって、なんの仕事をしてるんですか？」

「確か、本屋のバイトはやめた…って」

「うん、本屋は辞めました。本業のほうが忙しくなったから」

「本業？」

祐輔が訊くと、祥子は少し迷った様子を見せた。

「調査事務所、のようなところです。説明が難しいんですけど」

「リサーチ会社？」

「ええと、研究というよりは、代行とか仲介に近いかな。7人しかない、小さな事務所ですよ」

沙耶も初耳だったのか、その話を聞いて首を傾げた。

「私、うまくイメージできないんだけど、所長さんとかいるの？」

「うん。最近はちょっと不機嫌なのが」

そう言っただけで祥子は何故だか楽しそうに見えた。犬猿の仲である「所長」が珍しく不調なことが小気味よいのだろう。

「阿達さん、なにかあったんだ？」

これは祐輔と沙耶はまったく知らない話になるので、慎也小さく尋ねた。

「最近、同じ依頼がいくつもくるって、イラついてるの」

「依頼って？」

「それは言えません」

祥子はやわらかい仕草で人差し指を立てた。これも仕事柄なのだろう、一線以上は喋らない、そういうところはしっかりしている。

その祥子がぴくりと反応して、ちらりと慎也を見た。そのような挙動はもう日常のこと。なので、いつもなら2人とも流すところだが、目が合ったので慎也は読まれた(、)、(、)ことを素直に白状した。

「もうこういう季節だなあ、と思って」

天井に指を向ける。

祥子は慎也の示すものに気付いたようで、ああ、と相槌を打った。

「『B・R・』？」

店内のBGMに、ちょうど一年前に発売された曲が流れていた。

『B・R・』はすでに夏の風物詩、多くの人がある存在を知る人気バンドだ。

「よくリクエストされるから、全部覚えちゃった」

慎也もCDを買っているし、耳コピで弾いたりもする。指が自然に、曲に合わせてテーブルを叩いていた。

「うちの生徒にもいますよ。これ弾きたいって言うてくるコが」

と、祐輔。

「うちのオケでも、たまに話題になる。やっぱり今年も出てくるのかな」

『B・R』は多方面に影響を及ぼしている。年に一度しか曲を出さないというのに世間での話題は尽きない。バンドメンバーが一切顔を出さないこともその一因だろう。

ふむ、と息を吐いて慎也は祐輔の顔を覗き込んだ。

「『B・R』ってさあ、実はおまえだったりしない？」

「違いますよ」

冷ややかに馬鹿にするような表情を向けられ、慎也は怒鳴り返した。「冗談だつて！」

「え？」

と、その場に針を落とすような、小さく呟く声。

祥子は大きく目を開き、祐輔を見た。その視線に気付いた祐輔と目が合う。

「……ッ」

すぐに視線を外す。けれど遅かった。たとえ一瞬でも、目は口ほどにものを言う。

顔を逸らしても、祐輔の目がこちらを向いていることが判った。

(しまった)

と思っただのは、このときは祥子だった。

「どうした？」

「え……あ、……ううん。えーと」

慎也が声をかけると、祥子はあわてて言葉を探す。またなにか見つけたか、と慎也はとくに気に留めなかった。それ以上は疑問に思わなかった。

「そ、そう。雨が降りそうだな、と、思って」

「あ、本当。私、傘持ってきて、ない」

祥子の言うとおり、外は怪しい空模様になっている。祥子は不自然な挙動でその空を見上げていた。

まるで他のなにかから、目を逸らすように。

食事を済ませて席を立ったときのこと。

「祥子さん」

祐輔の低い呼びかけに祥子は飛び上がった。「…な」

「なに？ 山田さん」

一対一ではさすがに顔を背けるわけにはいかない。祥子はおそろおそろ祐輔に向き直った。

「さっきの、冗談ですよ？」

苦笑混じりの表情。ただ声はそれと判るほど慎重な響きだった。

祐輔の科白は予測していたもので、祥子は胸を撫で下ろす。この場合の対応も用意していた。

「え？ さっきの、って…なんでしたっけ？」

軽く笑って返すと、まるで表情が伝染したように祐輔の表情が動く。

笑顔で対峙する2人。しかしその場には言い知れない緊張感があった。

「どうかしたか？ 2人とも」

慎也が振り返ると、

「な、なにも」

「なんでもありません」

祥子は祐輔を避けるように視線を落とし、祐輔はそんな祥子に射るような視線を向けていた。

3 三高祥子

「……ばか？」

頼杖について上目遣い。史緒は呆れ切った様子で深い溜め息を吐いた。

事務所へ帰るなり、テンパリながら、しどろもどろに説明した後のことだ。

沙耶たちと別れた後、祥子は慎也と出掛けたけれど最初から最後まで上の空だった。送ると言ってくれた慎也の申し出を断り急いで戻ってきた。

「何年、それ（、）、持つてるのよ」

「だ、だって」

「あとね、その話を私に聞かせてどうしろっていうわけ？ そのネタを売れとでも？ 特別手当でも出しましょうか？ かつてないくらいイイお金になるのは確実だし」

「それはダメ！！」

山田は知られては困るだろうし、沙耶も慎也も知らないようだし、友達の隠し事を暴露するようなマネできない。

史緒は肩をすくめる。

「でしょう？ ひとりで秘密を抱えてるのが苦しいからって、こっちに片棒担がせないで欲しいわ」

「ごめん……。でも、信用して言ったんだから」

信用？、と史緒は滑舌良く復唱し、きれいに笑って、芝居がかって言った。「その科白、私の目を見てもう一度言って」

それは無理。祥子は素直に視線を逸らした。

確かに、興奮のあまり史緒に漏らしてしまったのは自分の落ち度だろう。けれど、ここ数年、日本中を騒がせているものの正体、その糸口。大きな秘密ほど、抱えるのは苦しい。

「まさか本当に売る気じゃ……ないよね？」

「あのねえ」史緒の声に怒気が灯る。「私は、B・R・の話なんか聞きたくないの。知りたくもないし、扱いたくもない」

「え……？ あれ……？」

史緒の反応は予想外だった。祥子は途端に弱腰になる。

「どうして？ 売ればイイお金になるんでしょう？ だからって売られても困るけど」

「B・R・はもう、私たちが想像できないくらい大きな案件^{ヤマ}なの。おおよそ情報屋と名のつくところは、どこも一度はトライしてるでしょうよ。それこそエサに群がるピラニア状態。そんなところで本物のエサを出してごらんさい、喰われるのはこちらのほうだわ。目を付けられて、その後が遣りにくくなるだけ」

史緒は机に八つ当たりする勢いで吐き捨てる。

「B・R・の依頼の数にはうんざり。なにがイヤって、“できまん”って答えなきやいけないこと。腹立たしいのよ。さつさどここがカタをつけてくれればいいのに　って、思ってた矢先にコレ」

じろり、と睨まれる。史緒の苛立ちが伝わって祥子は一步退いた。

「で？ どうするの？」

「どうするって……」

そうだ、山田は勘付いている。確信まではなくても疑惑は生まれていた。今日、B・R・の話題が出てから別れるまで、山田はこちらを注視していた。

（次に会うとき、どんな顔で会えばいいの！？）

「どうしよう……？」

期待の目を向けてみるが、史緒は笑いながら拒否を口にした。

「さっきの話は聞かなかったことにするわ。あなたの友人関係は知ったことじゃないし、ともかく私を巻き込むのはやめてね」

「薄情もの……」

「なにを今更」

ふと、祥子は振り返る。

「なに？」

「誰か来た。お客さん？」

「今日はもう予定はないはずだけど」

史緒が言い終わらないうちにノックが鳴った。祥子が知覚してからドアが鳴るまでが予想以上に短かった。対象者は走ってきたのかもしれない。

コンコン

しばらく目を合わせた後、史緒は顎をしゃくってドアを示した。

この場にあつては史緒は祥子の上司だ。既に染みついている役回りで、祥子はドアを開けた。

「はい」

と、^{ビジネス}仕事用の声と表情で客を確認

：すると、心臓が飛び跳

ねた。「き」

「キヤーっ!!」

「祥子さん」

腕を掴まれる。

「や…山」

そこにいたのは山田。山田祐輔だった。

「どうしたのツ？」

祥子の悲鳴を聞いて史緒は腰を上げる。ドアに隠れた来訪者が不審人物かと危機感を持ったのだろ。祥子は誤解を解くために、首を振ってみせた。

「ち、ちがうちがう。この人は慎也さんの友達」

「なんだ」

史緒はほつと息を吐いて椅子に座り直した。（「なんだ、つまりない」と聞こえたのは祥子の気のせいのはずだ）

山田は一步進んで事務所に足を踏み入れた。後ろ手でドアを閉める。祥子の腕は掴まれたままだった。

「あの、ど、どうしたんですか？ 山田さん」

平静を保とうとしたが声が裏返ってしまった。山田が射るような視線を向けてくる。祥子は5秒と保たず目を落とした。これでは後ろめたいことがあると言っているようなものだ。

「ああ、さつき（、、）の…」

状況を察した史緒が言う。山田に緊張が走る。祥子は史緒を睨みつけた。けれど史緒は知ったこっちゃないと言わんばかりに肩を竦める。

山田が深く息を吸った音が聞こえた。おそろおそろ顔を上げると、山田は祥子に文庫本を差し出した。

「これ、沙耶から」

「え？」

意気を削がれて力が抜けた。

そういえば今日、沙耶と約束した。次に会うときに貸してくれる予定だった本。山田に渡された文庫本はそのタイトルのものだった。わざわざ持ってきてくれたのだろうか。

「あ、ありがとう」

史緒が盛大な溜め息を吐いた。

「…祥子。いい加減、懲りたら？」

「え？」

「文庫本はカモフラージュ。もしくは間を埋めるための小道具。あなたの反応を見に来たのよ」

「えっ！？」

山田はそれと判るほど表情を歪めて史緒を見た。

本来、山田は人の良さそうな表情を崩さず、余裕が有り、取り乱すことがない人間だ。わざと刺々しい言葉を選んだり、挑発的な物言いもするが、それだって己を崩さず相手をコントロールしているに過ぎない。だから、祥子の能力に触れることなど今まで無かったのに。

今日、B・R・の話題が出るまでは。

だからこそ分かってしまう。山田にとってのB・R・の重要性。

危険を冒してA・C・O・（ここ）まで来た理由も。

「とりあえずその手を放してください」

史緒に言われて気付いたのか、山田はやっと祥子の手を放した。血流が再開されたような開放感があつた。すみません、と小さく山田が言った。

「……」

やりにくいな、と祥子は手を撫でながら思う。

これが知人ではなく、慎也の友人ではなく、沙耶の恋人ではなかったら、もつと気楽でいられた。史緒に任せておけば程なくして来訪者を退場させただろう。でも山田は祥子にとって仲の良い知人で、この先も付き合っていく友人でもある。禍根を残したくない相手だ。（そのへんのところ、考慮してくれてるかな）

史緒のほうを窺^{うかが}うと、その横顔はやりあう（、、、、）気満々だ。

期待できないかもしれない。

窓を背にする机と、廊下側のドア。部屋を二分^{にぶん}する位置で、史緒と山田はお互いの目から意図を吸い出そうとする。しかし優劣は明らかだ。

「なにを知っているんですか」

山田は慎重な声で言った。

「あなたが知られたくないことを」史緒は口端に冷笑を浮かべる。

「苦しいですね。何を知られたか見当はついてるのに、確証はないから自分からは迂闊に口にできない。かといって真偽を確かめずに弱みを握られるのも滑稽な話です」

「史緒」

「なによ。もともとは祥子のせいじゃない」

「だって、B・R・よ！？　びつくりしちゃって……」

あ

失言に気付いたが既に遅い。

「馬鹿」

史緒は額に手を添えて天井を仰ぐ。今度は疑問形ではなく確定、

しかも漢字だった。

「度し難いとはこのことね…。その軽率さは査定に響くわよ」

「そんな」

仕事とは関係無いじゃない、と言いつつしようとしたが、現状において重要なのはそんなことではない。

「どうして…」

困惑の表情で山田は史緒と祥子を見比べた。

どうして分かったのか、と。

「あ、あの…」

祥子はなにかを言い掛けるがその後が続かない。その代わり、祥子の科白を埋めるように、かたん、と音がした。

史緒が椅子から立ち上がる音だった。

机を回り込んで、その端に浅く腰を掛ける。

「遅ればせながら…私は阿達といいます。ええと、山田さん？…運が悪かったですね。このコは、少しかり勘がいいんです。Y / N回答の真偽ならエラーはありません」

山田は疑惑の目で祥子を見た。それ以上の説明はしたくないし、史緒にしてもらいたくもない。だから問われる前に祥子は降参を示した。

「あの、心配しないで…ください。なにがあっても、ばらさないから」

史緒がぼそつと横槍を入れる。「私に喋ったくせに」

「どっちの味方なのっ!？」山田さんの前で余計なこと言わないで、と泣きそうになる。

「祥子の味方って、決まってるわけじゃないでしょ？」

史緒は相変わらず知らん顔だ。

「それで？ 山田さん。A・C・O・(ここ)へは何しにきたんですか？」

史緒は鷹揚に尋ねた。

答えは判りきっている。要は山田が、それを認めるか認めないかだ。

「…ここは、興信所かなにかですか？ 祥子さんからは調査事務所のようなもの、と聞いてますが」

「ええ、そんなようなものです。最近の流行^{はや}りは“B・R”の正体について”。どんな些細な情報でも、こちらの言い値で買い手に不自由しません」

「参考のために聞いておきたいんですが、相場はどれくらいですか」

山田が何故そんな質問をするのか祥子にはわからない。けれど史緒は「そうきたか」と言うように薄く笑う。

「取引します？」

「そうは言つてません。相場を訊いただけです」

「…そうですね。警察が情報提供者に出す報奨金額と似たようなものかしら。でもこの場合は相場なんてアテになりませんよ。世間を騒がせたい職業の人間は、金額なんてどうでもいいんです」

「それは困りますね」

山田は自嘲気味で、答え方に迷っているようでもあった。

「そういえばまだ答えてもらっていませんが。山田さんがなににきたのか」

「そう。僕は…口止めに来ました」

「山田さんが困るんですか？ それとも他の？ やっぱり所属事務所の偉い人に怒られたりするんですか？」

「気になります？」

「少しは」

皮肉のつもりだったのだろう、けれど史緒は楽しそうに笑ってそれをかわした。

「僕も困りますが、それ以上に戸惑う仲間がいます。まあ、事務所も少しは慌てるでしょう」

「あら。じゃあ、私たちに口止めするつもりなら事務所の人間を連れて来たほうが話が早いのでは？ 口を塞ぐ対価を支払うのに山田

さんでは役者が不足だと思えますけど」

「……っ」

「またと無い書き入れですから、売り先は慎重に選ばせてもらいます。そちらがどう出るかは、それまでゆつくり待ちま」

「いいかげんにしてッ！」

我慢ならずには祥子は飛び出す。祐輔を庇^{かば}うように立ちはだかった。

史緒は眉一つ動かさず、祥子に視線を転じた。

「A・C・O・（うち）はゴシップ屋じゃないはずよ。人の弱みに付け込んで脅すなんてサイテー、情報^{ネタ}を巡って取引なんて、らしくないじゃない。お金がよくても、同業から注目されるようなことはしたくないってばやいてたのは誰？」

史緒は止めようとも言い返そうともしないので祥子はさらに続けた。

「大体、B・R・には興味ない、扱いたくないって言ってたのはついさっきよ？ 舌の根も乾かないうちになにを……」そこまで言って祥子は我に返った。「……って、アレ？」

そうだ、史緒は最初に言った。B・R・のネタは扱いたくない。

どこかがカタをつけてくれればいいのに、と。

山田が現れたからといって史緒が意見を翻す理由はない。

（……まさか）

改めて史緒を見るとその表情は数分前から少しも変わっていない。しかし祥子と目が合うと史緒はくしゃりと歯を見せて笑った。

「ま、そういうわけなんです。山田さん」降参を表すように両手を上げる。「いじわる言って、すみませんでした」

「は？」

祥子の背後から、山田の気の抜けた声が聞こえた。体勢を整えたのは祥子のほうが早かった。

「史緒、あなたねえ！」

最初から言っていたとおり、史緒はB・R・の情報を売るつもりなんて無かった。

おそらく八つ当たりも兼ねているのだろう、腹いせに山田を、そして祥子をからかっただけだ。挑発するような態度も、脅すような物言いも、ぜんぶ。

「性格悪いにもほどがあるよっ」

「それは祥子が一番良く知ってると思つてたけど」

悪い冗談をやらかした後なのに史緒は涼しい顔だ。

「　　ということは、黙っていただけるんですか」

まだ少し緊張が残る声の山田。

けれど流れを無視して史緒はあっさりと否定した。

「いいえ。私は見返りなく口止めされるのは不愉快です」

「史緒」

「だから今日ここで聞いたことは忘れることにします。　　私は

山田さんに、この約束を保証することはできません。そう言う私を信じられるかは山田さん次第ですけど」

史緒は山田を見て不敵に笑う。

「私が約束するのは私のことだけです。祥子のほうへは個別に口止めするなり交渉するなりしてくださいね」

* * *

祥子と山田は駅までの道を歩いていた。

一連の出来事に祥子は足にくる疲労を感じていたが、山田もどこか疲れた顔をしている。2人が事務所を出るときに見送っていた史緒の涼しい顔が恨めしい。

「なんだか久しぶりに一方的にやられた（、、、）という感じがす」

と、山田は苦笑する。

「本当にごめんなさい、失礼なことして」

「いいんですよ。僕も首が繋がりました」笑うのをやめて、山田は少し考え込む仕草をする。「ところで祥子さん」

「はい？」

「阿達さんと僕がやりあつてるとき、庇ってくれたじゃないですか」「庇つたつていうか？ あれは、史緒があまりにひどいこと言うから」「でも、あれが無かつたら、例え同じ結果になつても、僕は祥子さんに対して疑念が残つたと思います」

「えっ」

「約束してくれても、僕の知らないところで祥子さんたちがなにを画策するか判らないし、慎也たちと4人で会つていても祥子さんの言動にヒヤヒヤしていたと思います。でもあのとき怒ってくれたことで祥子さんの本質は見られましたし」

「そう、…ですか？」

「そういう禍根を僕らに残させないためにわざと、阿達さんは祥子さんを怒らせるようなことを言つたのかもしれないね」

「……」

「あれ？ そういう気遣いをする人物じゃないんですか？」

「違いますっ。あれは単に性格が悪いだけですっ」

むきになる祥子を見て、山田は声をたてて笑う。

「そういえば祥子さんの口止めもしなきゃいけないんですけど」

「あ。それはもちろん、ご心配なく。本当に、口外しません」

「それを聞いて安心しました。祥子さんと気まづくなると、沙耶や慎也のほうにも影響ありますし」

「やだ、それを言つたら私のほうが影響大ですよ。付き合いの長さを考えれば断然不利です」

「そうでもないでしょう。慎也とはなにか因縁があるそうじゃないですか」

「そういえばそれも、この季節のお話。」

祥子は笑って返した。

「それはまた、別の話です」

見上げれば、梅雨明けを示す高く青い空。
こんな夏の日の匂いには、B・R・の歌がよく似合うだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5295z/>

BlueRose

2011年12月17日22時50分発行